

令和5年度補正予算「不登校児童生徒等の早期発見・早期支援事業」

不登校・いじめ対策等の
効果的な活用の推進に向けた調査研究

報告書

有限責任監査法人トーマツ

目 次

第Ⅰ部 調査の概要	1
第1章 調査の目的と方法	1
(1) 調査の目的	1
(2) 調査方法・調査事項	1
(3) 調査の対象と標本抽出の方法	2
(4) 調査の時期	2
(5) 本報告書における凡例	2
(6) 本報告書の構成	3
(7) 各調査の回答状況	4
第Ⅱ部 基礎集計編	5
第2章 中学校卒業までの状況	8
(1) 欠席状況	8
(2) 不登校のきっかけ・休みはじめた学年	11
(3) 不登校の継続の理由	22
(4) 不登校当時に相談した機関や人	28
(5) 不登校当時の支援のニーズ	33
(6) 不登校経験に関する振り返り	35
(7) 第2章のまとめ	38
第3章 中学校卒業から現在までの状況	40
(1) 中学卒業後の進路	40
(2) 最終学歴	43
(3) 中学卒業後の経験	45
(4) 第3章のまとめ	46
第4章 現在の状況と今後の課題	47
(1) 現在の就業状況と進学状況	47
(2) 現在の生活の満足度	48
(3) 中学卒業以降において励ましや支えになった人	49
(4) 不登校経験と中学校卒業後の経験との関連について	51
(5) 第4章のまとめ	55
第Ⅲ部 分析編	57

第5章 性別から見た不登校状況	57
(1) 学校を休みはじめたきっかけ (Q2)	57
(2) 不登校の継続の理由 (Q4)	59
(3) 不登校当時の施設の利用状況・相談した人 (Q5)	61
(4) 不登校当時の支援のニーズ (Q6)	63
(5) 不登校経験に関する振り返り (Q7)	64
(6) 中学卒業以降において支えとなるアドバイスをしてくれた人 (Q12)	65
(7) 不登校経験と中学卒業後の経験との関連について (Q13)	67
(8) 第5章のまとめ	71
第6章 年代別に見た不登校状況	74
(1) 学校を休みはじめたきっかけ (Q2)	74
(2) 不登校の継続の理由 (Q4)	78
(3) 不登校当時に相談した機関や人 (Q5)	81
(4) 不登校当時の支援のニーズ (Q6)	83
(5) 不登校経験に関する振り返り (Q7)	85
(6) 中学校卒業後の進路状況 (Q8)	86
(7) 最終学歴 (Q9)	90
(8) 現在の就業状況と進学状況 (Q11-a)	92
(9) 現在の満足度 (Q11-b)	94
(10) 支えとなるアドバイスをしてくれた人 (Q12)	95
(11) 不登校経験と中学卒業後の経験との関連について (Q13)	98
(12) 第6章のまとめ	106
第7章 不登校の継続理由・不登校の態様	110
(1) 単純集計結果	110
(2) 不登校の「きっかけ」(Q2)と「継続理由」(Q4)との関係	113
(3) 第7章のまとめ	125
第8章 欠席状況の推移パターン	127
(1) 欠席状況の推移パターン (Q1)	127
(2) 学校を休みはじめた時期 (Q3)	128
(3) 欠席状況と学校を休みはじめた時期	130
(4) 第8章のまとめ	133
第9章 不登校の「きっかけ」と他項目の関連	134
(1) 学校を休みはじめた時期との関連 (Q3)	134
(2) 不登校当時に相談した機関や人との関連 (Q5)	137

(3) 不登校当時の支援ニーズとの関連 (Q6)	145
(4) 中学卒業後の経験との関連 (Q13)	150
(5) 第9章のまとめ	166
第10章 不登校当時に相談した機関や人と他項目の関連	168
(1) 不登校当時に相談した機関や人について (Q5)	168
(2) 不登校の継続理由・不登校の態様との関連 (Q4)	172
(3) 不登校当時の支援のニーズとの関連 (Q6)	175
(4) 第10章のまとめ	178
第11章 不登校経験に関する振り返りと他項目との関連	180
(1) 不登校のきっかけとの関連 (Q2)	180
(2) 不登校当時の支援のニーズとの関連 (Q6)	183
(3) 現在の生活の満足度との関連 (Q11)	187
(4) 中学卒業以降において励ましや支えになった人との関連 (Q12)	189
(5) 不登校経験と中学卒業後の経験との関連 (Q13)	191
(6) 第11章のまとめ	199
第12章 最終学歴とその他設問についての分析	201
(1) 不登校期間との関係 (Q1)	201
(2) 不登校当時の支援との関係 (Q5)	204
(3) 不登校当時の支援のニーズとの関係 (Q6)	206
(4) 現在の生活の満足度との関連 (Q11)	207
(5) 第12章のまとめ	209
第IV部 インタビュー調査編	211
第13章 不登校を経験者へのインタビューのまとめ	212
(1) インタビュー対象者	212
(2) インタビュー項目	213
(3) 対象者の不登校経験等	213
(4) 各項目のポイント	220
(5) 第13章のまとめ	231
第14章 支援団体へのインタビューのまとめ	232
(1) インタビュー対象団体	232
(2) インタビュー項目	232
(3) 各支援団体の活動状況等	232
(4) 第14章のまとめ	236
第IV部 まとめ	238

第 15 章 調査のまとめ	238
第 V 部 資料編	239
アンケート調査票	239
集計表	242
不登校を経験した方へのインタビュー結果	260
支援団体へのインタビュー結果	295
有識者名簿	308

第Ⅰ部 調査の概要

第1章 調査の目的と方法

(1) 調査の目的

不登校児童生徒への支援については、関係者において様々な努力がなされ、児童生徒の社会的自立に向けた支援が行われてきたところだが、「令和5年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果」では、小・中学校の不登校児童生徒の総数は34万人を超えていることが確認できている。これは過去最多の数字である。このような状況は教育現場における喫緊の課題であり、社会情勢に合わせた対応が求められている。

文部科学省が令和5年3月に取りまとめた「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策『COCOLO プラン』」には、不登校対策の実効性を高める取組として、「不登校の児童生徒やその保護者が将来に見通しを持てるよう、不登校の児童生徒本人に対する継続的な実態調査の実施」が示されており、また、これまでも、不登校の未然防止や不登校児童生徒への必要な支援の在り方等を検討する上での基礎資料とするために不登校に関する実態調査が実施されたが、その後10年が経過している。

こうした状況等を踏まえ、改めて支援の充実や社会情勢の変化など、近年の状況を踏まえた状況把握を行うため、不登校当時や中学卒業後、そして現在までの状況について、様々な観点から調査を行った。

(2) 調査方法・調査事項

この調査では、次の三つの方法によって行った。

① パネルを活用したインターネットリサーチ

この調査は、マーケティングリサーチ会社が有するパネルに登録しているウェブモニターに対して事前にスクリーニング調査を実施した上で、条件に当てはまる対象者にインターネット調査を実施した。

② オンラインによる調査

この調査は、不登校児童生徒の支援団体や自治体などに協力を依頼し、小学生もしくは中学生の時に不登校経験(年度間に30日以上登校しなかった経験)がある方に対して調査を案内した。案内を受けた対象者には、オンラインによる調査への回答を求めた。

③ インタビューによる調査

この調査は、支援団体等とつながりのある不登校経験者等の中から対象者を選定し、インタビュー調査への協力を依頼した。インタビューはオンラインで行い、予め用意した質問項目に沿ってインタビューを進めながらも、

臨機応変に質問を変えたり順序を変えたりする半構造化面接技法を用いて実施した。

(3) 調査の対象と標本抽出の方法

① パネルを活用したインターネットリサーチ

マーケティングリサーチ会社が有するパネルに登録している 18 歳～59 歳までの、小・中学校において不登校を経験したことがあると回答した者¹

	男性	女性	その他	合計
調査回答数	10,401 人	10,352 人	247 人	21,000 人
集計対象数	8,822 人	9,180 人	205 人	18,207 人

② オンラインによる調査

支援団体や自治体などから協力依頼に応諾した 18 歳～59 歳までの、小・中学校において不登校を経験した者²

	男性	女性	その他	合計
調査回答数	161 人	153 人	14 人	328 人
集計対象数	155 人	152 人	14 人	321 人

③ インタビューによる調査

上記オンライン調査において、インタビューの協力に応諾した者

インタビュー調査実施数

不登校経験者：男性 6 人、女性 7 人、不登校者支援団体：4 団体

(4) 調査の時期

パネル調査 : 令和 7 年 2 月～令和 7 年 3 月

オンラインによる調査 : 令和 7 年 3 月

インタビューによる調査 : 令和 7 年 3 月

(5) 本報告書における凡例

① 本書におけるクロス集計では、すべて統計的に有意な差について「差が見られる」と記載しているが、表中や文中には統計的な検定値等は省略している。

¹ スクリーニング調査では不登校に該当する回答がなされたものの、本調査における Q1-a、Q1-b、Q2、Q4 において不登校に該当する回答がなされていない回答者については、集計対象から除外した。以降の「回答数」については、すべて「集計対象者数」の数値である。

² 注釈 1 と同様の処理を実施した。

② 複数選択肢を認めた質問では、合計の比率は 100%を超える。また、各回答選択肢の比率は、そのときの対象となる母集団の総数で除した値を記載し、図表の欄外にその旨記載している。

③ 本書では、クロス集計において設問の選択肢毎の群間の差が統計的に有意であるかを残差分析によって実施している。資料における「群間差」は標準化残差を意味し、群間の差が偶然に得られたかどうかを示す指標であり、値が大きいほど群間の差が大きい。統計学的に、5%の有意水準において標準化残差の値の絶対値が 1.96 以上であれば、項目間に相関関係があることを示している。本書図表においては 2.0 以上の値に下線を引き、本文で「差が見られる」などと記載している。

④ 検定の尺度として、本書では p 値を一部掲載し、0.05 以下の場合は*、0.01 以下の場合は**として記載している。なお、有意差検定における p 値とは、2 つの群間の差が偶然に得られたかどうかを表す指標であり、値が小さいほど偶然に得られる確率は小さい。本書では、p 値が 0.05 以下の場合、本文で「差が見られる」などと記載している。

（6）本報告書の構成

本報告書の分析はインターネット調査、オンライン調査、インタビュー調査の結果をまとめたものであり、6 部のパートから構成されている。

第Ⅰ部「調査の概要」（第 1 章）では、今回実施したインターネット調査、オンライン調査、インタビュー調査の調査方法等の調査の概要を説明している。

第Ⅱ部「基礎集計編」（第 2 章～第 4 章）では、インターネット調査、オンライン調査で得られた単純集計結果について概観している。

第Ⅲ部「分析編」（第 5 章～第 12 章）では、インターネット調査、オンライン調査の結果の中で、基本的な分析変数となっている項目を中心としてクロス集計分析等を行った結果及びその分析をまとめている。

第Ⅳ部「インタビュー調査編」（第 13 章～第 14 章）では、インタビュー調査結果について、不登校経験者及び支援団体の代表者に実施したインタビュー調査結果についてまとめている。

第Ⅵ部「資料編」は、調査票、集計表、インタビュー結果、助言をいただいた有識者の名簿を掲載している。

(7) 各調査の回答状況

各調査における性別毎の回答数は下記のとおりである。なお、インタビュー調査においては不登校経験者のほか、支援団体に対するインタビューを実施した。

		男	女	その他	合計
インターネット調査	回答数	8,822	9,180	205	18,207
	構成比	48.5%	50.4%	1.1%	100%
オンライン調査	回答数	155	152	14	321
	構成比	48.3%	47.4%	4.4%	100%
インタビュー調査 (不登校経験者)	回答数	6	7	0	13
	構成比	46.2%	53.8%	0.0%	100%
インタビュー調査 (支援団体)	回答数	—	—	—	4
	構成比	—	—	—	100%

第Ⅱ部 基礎集計編

本調査における調査対象者は、18 歳～59 歳であり、小学生/中学生のときに不登校経験（病気や経済的理由以外の何らかの理由で、年度間に 30 日以上学校を欠席した経験）があると回答した者等である。以下では、インターネット調査、オンライン調査の結果をまとめている。

インターネット調査における回答者は 18,207 人であり、オンライン調査における回答者は 321 人である。集計結果については回答数だけでなく、全体に対する割合も記載している。

■ インターネット調査・オンライン調査における調査対象の性質の違い

	インターネット調査	オンライン調査
年齢	・母集団の大きさが十分にあり、年代毎に一定数の標本を得られる	・若年層が多く含まれる ・クロス集計等に十分なサンプルサイズが得られない場合がある
支援団体等から支援を受けた経験の有無	・支援を受けた不登校経験者、支援を受けていない不登校経験者のいずれも含まれる	・支援を受けた不登校経験者が多く含まれる

インターネット調査・オンライン調査は調査対象の性質が異なるため、回答傾向が異なる。インターネット調査の母集団はパネルに登録された不登校経験があると回答した者が対象であり、18 歳から 59 歳まで幅広く分布している。また、当時、支援を受けていない者も多く含まれている。一方で、オンライン調査の調査対象は主に支援団体などから調査協力を依頼された不登校経験者が対象であり、若年層が多く含まれている。

■ H26 調査と本調査との関連について

平成 26 年度に公開された「不登校に関する実態調査」（以下、「前回調査」という）との比較が可能な調査項目については、参考として「H26 調査」欄に結果を示している。なお、前回調査における「比率 2」は有効回答数に占める各項目の回答の比率であり、本調査で前回調査と比較する際には「比率 2」と比べるものとする。ただし、多くの設問において、前回調査とは表現や選択肢を変えているので、比較する際には留意が必要である。

	H26 調査
年代	・平成 18 年度に公立中学校第 3 学年に在籍していた生徒のうち、児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸課題に関する調査」において、年間 30 日以上欠席していた者
年齢	・20～21 歳を対象 ³
支援団体等から支援を受けた経験の有無	・支援を受けた不登校経験者、支援を受けていない不登校経験者のいずれも調査対象に含まれる

また、H26 調査は中学校第 3 学年時（平成 18 年度）に不登校であった者の 5 年後の状況などを調査したものであり、本調査におけるインターネット調査やオンライン調査とはその性質が異なる。そのため、前回調査と本調査を比較する際は、調査対象の性質が異なることに留意が必要である。

なお、本調査の回答者の性別及び年齢の分布は、次のとおりである。

SC1 あなたの性別を教えてください。

（インターネット調査）

	回答数	割合	H26 調査
男性	8,822	48.5%	41.6%
女性	9,180	50.4%	57.0%
その他	205	1.1%	1.4%
総数	18,207	100%	100%

（オンライン調査）

	回答数	割合	H26 調査
男性	155	48.3%	41.6%
女性	152	47.4%	57.0%
その他	14	4.4%	1.4%
総数	321	100%	100%

³ 「平成 26 年度に中学校 3 年生に在籍し、かつ「問題行動等調査」において「不登校」として計上された者（年間 30 日以上欠席した者）」

SC2 あなたの年齢を教えてください。※令和7年1月末時点

(インターネット調査)

	回答数	割合
18～19 歳	211	1.2%
20～24 歳	1,037	5.7%
25～29 歳	2,087	11.5%
30～34 歳	2,258	12.4%
35～40 歳	2,925	16.1%
40～44 歳	2,517	13.8%
45～49 歳	2,496	13.7%
50～54 歳	2,721	14.9%
54～59 歳	1,955	10.7%
総計	18,207	100%

(オンライン調査)

	回答数	割合
18～19 歳	75	23.4%
20～24 歳	95	29.6%
25～29 歳	36	11.2%
30～34 歳	41	12.8%
35～40 歳	17	5.3%
40～44 歳	29	9.0%
45～49 歳	16	5.0%
50～54 歳	9	2.8%
54～59 歳	3	0.9%
総計	321	100%

第2章 中学校卒業までの状況

(1) 欠席状況

以下は、小学校時、中学校時の欠席状況を集計したものである。なお、これは、不登校だった当時を思い出してもらい回答を求めたものであり、正確な日数についての確認は困難であるため、選択肢に記載した目安を参考に、回答者の主観により回答を求めている。

Q1 小学校と中学校の出席状況についてお聞きします。それぞれについて、あなたの状況に一番近い番号を一つ選んでください。(注釈) 学年によって欠席頻度が異なる場合には、欠席日数が最も多かった学年を想定して回答してください。

Q1-a 小学校の時はどのくらい学校を休みましたか。

Q1-b 中学校の時はどのくらい学校を休みましたか。

(インターネット調査)

	Q1-a：小学校の時			Q1-b：中学校の時		
	回答数	割合	H26 調査	回答数	割合	H26 調査
1. ほとんど休まなかった（目安：週1日未満の欠席、年間30日未満の欠席）	6,170	33.9%	—	2,576	14.1%	—
2. 少し休んだ（目安：週1～2日未満の欠席）	6,768	37.2%	46.2%	6,531	35.9%	12.1%
3. 半分程度休んだ（目安：週2～3日程度の欠席）	2,285	12.6%	33.3%	3,277	18.0%	16.8%
4. かなり休んだ（目安：週3～4日未満の欠席）	1,532	8.4%	16.4%	2,397	13.2%	29.3%
5. ほとんど休んだ（目安：週5日程度の欠席）	1,452	8.0%	4.2%	3,426	18.8%	41.9%
全体	18,207	100%	99.1%	18,207	100%	100%

インターネット調査による調査対象者の欠席状況は、小学校においては、「少し休んだ（目安：週1～2日未満の欠席）」が37.2%で最も高く、次いで「ほとんど休まなかった（目安：週1日未満の欠席、年間30日未満の欠席）」が33.9%である。中学校においては、「少し休んだ（目安：週1～2日未満の欠席）」が35.9%で最も高く、次いで「ほとんど休んだ（目安：週5日程度の欠席）」が18.8%である。また、「ほとんど休んだ」「かなり休んだ」と回答している者の比率は、小学校は16.4%、中学校は32.0%である。

H26 調査について、集計の項目が異なるため単純な比較は困難であるが、小学校の時においては同様の傾向が示唆される。一方、中学校の時においては、H26 調査における中学校3年間の結果の加重平均を算出していることもあり、比較にはさらに留意が必要であるが、本調査と異なり「かなり休んだ」「ほとんど休んだ」といった回答の割合が高い。

(オンライン調査)

	Q1-a：小学校の時			Q1-b：中学校の時		
	回答数	割合	H26 調査	回答数	割合	H26 調査
1. ほとんど休まなかった（目安：週 1 日未満の欠席、年間 30 日未満の欠席）	129	40.2%	—	11	3.4 %	—
2. 少し休んだ（目安：週 1 ～ 2 日未満の欠席）	47	14.6%	46.2%	23	7.2 %	12.1%
3. 半分程度休んだ（目安：週 2 ～ 3 日程度の欠席）	23	7.2%	33.3%	23	7.2 %	16.8%
4. かなり休んだ（目安：週 3 ～ 4 日未満の欠席）	33	10.3%	16.4%	55	17.1 %	29.3%
5. ほとんど休んだ（目安：週 5 日程度の欠席）	89	27.7%	4.2%	209	65.1 %	41.9%
全体	321	100%	99.1%	321	100%	100%

オンライン調査による調査対象者の欠席状況については、小学校においては、「ほとんど休まなかった（目安：週 1 日未満の欠席、年間 30 日未満の欠席）」が 40.2%で最も高く、次いで「ほとんど休んだ（目安：週 5 日程度の欠席）」が 27.7%である。

中学校においては、「ほとんど休んだ（目安：週 5 日程度の欠席）」が 65.1%で最も高く、次いで「かなり休んだ（目安：週 3 ～ 4 日未満の欠席）」が 17.1%である。

また、「ほとんど休んだ」「かなり休んだ」と回答している者の比率は、小学校は 38.0%、中学校は 82.2%である。

なお、欠席状況については前回は調査しており、Q1-a、Q1-b と比較は可能であるが、以下（参考）のように選択項目を変えているため、比較にあたっては留意が必要である。また、Q1-b については H26 調査における中学校 3 年間の結果の加重平均を算出しているのに対し、本調査では中学生時に対象範囲を広げているため、比較にあたってはさらに留意が必要である。

(参考) 休みはじめたきっかけに関する本調査と H26 調査の相違点

本調査 (Q1-a, Q1-b)	H26 調査
小学校及び中学校の時は不登校でしたか。	小学校の時はどのくらい学校を休みましたか。中学校 1 年生の時、中学校 2 年生の時、中学校 3 年生の時はどのくらい学校を休みましたか。
1. ほとんど休まなかった (目安: 週 1 日未満の欠席、年間 30 日未満の欠席)	—
2. 少し休んだ (目安: 週 1 ～ 2 日未満の欠席)	ほとんど休まなかった
3. 半分程度休んだ (目安: 週 2 ～ 3 日程度の欠席)	少し休んだ
4. かなり休んだ (目安: 週 3 ～ 4 日未満の欠席)	かなり休んだ
5. ほとんど休んだ (目安: 週 5 日程度の欠席)	ほとんど休んだ

※H26 調査における調査対象の定義は「年間 30 日以上欠席」であることから、本調査における「ほとんど休まなかった (週 1 日未満の欠席、年間 30 日未満の欠席)」は空白となっている。

※H26 調査における選択肢では本人の認識を尋ねており、不登校による欠席期間とは一致しないことに留意する必要がある。

Q1-c 中学校 3 年生の時は不登校でしたか。

(インターネット調査)

	回答数	割合
はい	11,024	60.5%
いいえ	7,183	39.5%
全体	18,207	100%

(オンライン調査)

	回答数	割合
はい	274	85.4%
いいえ	47	14.6%
全体	321	100%

インターネット調査による、中学校 3 年生時に不登校であった者は 60.5%である。

オンライン調査による、中学校 3 年生時に不登校であった者は 85.4%である。

(2) 不登校のきっかけ・休みはじめた学年

Q2 あなたが学校を休みはじめた時のきっかけは何ですか。

※作表の関係上、Q2 の選択肢を以下のとおり略称する。

選択肢	略称
1. 友人との関係 (いやがらせやいじめ)	1. 友人(いやがらせやいじめ)
2. 友人との関係 (いやがらせやいじめを除く)	2. 友人(いやがらせやいじめを除く)
3. 先生との関係 (先生が怒る、注意がうるさい、体罰など)	3. 先生(怒る、うるさい、体罰)
4. 先生との関係 (先生と合わなかったなど)	4. 先生(相性)
5. 勉強が分からなかった (授業についていけなかった、成績が良くなかったなど)	5. 勉強
6. 授業が面白くなかった ⁴	6. 授業
7. 学校のきまりなどの問題 (学校の校則がきびしいなど)	7. きまり
8. 学校生活に対してやる気が出なかった	8. やる気
9. 入学、転校、進級した先の学校や学級が自分に合わなかった	9. 合わなかった
10. 家族の生活環境の変化 (父親や母親の単身赴任、家族の別居、親の転職や失業などの経済的な問題など)	10. 環境の変化
11. 親との関係 (親が怒る、親の言葉や態度への反発、親との会話がほとんどないなど)	11. 親
12. 家庭環境に起因するもの (両親の不和、祖父母と父母の不和など)	12. 家庭環境
13. 精神的な不調 (漠然とした不安や気持ちの落ち込みなど)	13. 精神的な不調
14. 身体的な不調 (学校に行こうとすると腹痛や頭痛に襲われたなど)	14. 身体的な不調
15. 障害による学習上・生活上の困難	15. 障害
16. 生活リズムの乱れ (朝起きられないなど)	16. 生活リズム
17. インターネットやメール、ゲームなどの影響 (一度始めると止められない、学校より楽しいなど)	17. ネット等
18. その他 (具体的にご記入ください)	18. その他
19. わからない	19. わからない

⁴ 集計に先立ち、「18. その他」を自由回答の内容に基づいて既存の選択肢に振り分けをした。その際、「6. 授業が面白くなかった」の選択肢には、「授業が面白くなかった・嫌いだった・嫌だった」という内容の回答も含めて振り分けた。

Q2-a 思い当たるものをすべて選択してください。

Q2-b 最もあてはまるものを一つ選択してください。

(インターネット調査)

	Q2-a				Q2-b		
	総数	回答数	割合	H26 調査	総数 ⁵	回答数	割合
1. 友人(いやがらせやいじめ) ⁶	18, 207	8, 644	47. 5%	53. 7%	18, 132	6, 594	36. 4%
2. 友人(いやがらせやいじめを除く)	18, 207	3, 634	20. 0%	—	18, 132	1, 386	7. 6%
3. 先生(怒る、うるさい、体罰) ⁷	18, 207	2, 940	16. 1%	26. 6%	18, 132	918	5. 1%
4. 先生(相性)	18, 207	3, 719	20. 4%	—	18, 132	861	4. 7%
5. 勉強 ⁸	18, 207	2, 684	14. 7%	31. 6%	18, 132	632	3. 5%
6. 授業	18, 207	3, 066	16. 8%	—	18, 132	582	3. 2%
7. きまり	18, 207	1, 503	8. 3%	10. 2%	18, 132	299	1. 6%
8. やる気	18, 207	4, 461	24. 5%	—	18, 132	1, 396	7. 7%
9. 合わなかった	18, 207	1, 588	8. 7%	17. 3%	18, 132	481	2. 7%
10. 環境の変化	18, 207	1, 352	7. 4%	9. 8%	18, 132	331	1. 8%
11. 親	18, 207	1, 714	9. 4%	14. 4%	18, 132	294	1. 6%
12. 家庭環境	18, 207	1, 756	9. 6%	10. 1%	18, 132	389	2. 1%
13. 精神的不調	18, 207	4, 547	25. 0%	—	18, 132	1, 496	8. 3%
14. 身体的不調	18, 207	2, 991	16. 4%	—	18, 132	809	4. 5%

⁵ 集計に先立ち、「18. その他」を自由回答の内容に基づいて振り分けをした。その結果、Q2-b の設問において「18. その他」が選択されていた際には、「18. その他」にさまざまな概念が書き込まれている回答があることから以下のように場合分けして集計した。

i) 「18. その他」に回答が残らない場合

振り分け先が他の一つの選択肢であれば、「18. その他」の「回答数」は減るが、「総数」は減らない（当該振り分け先の回答となるため無回答扱いとした）

振り分け先が他の複数の選択肢であれば、「18. その他」の「回答数」及び「総数」が減る（複数の振り分け先のいずれの回答になるか不明のため）

ii) 「18. その他」に回答が残る場合

「18. その他」の「回答数」は減らないが、「総数」は減る（「18. その他」と振り分け先のいずれの回答になるか不明のため無回答扱いとした）

⁶ H26 調査では「友人との関係（いやがらせやいじめ、けんかなど）」としており、今回調査における選択肢 2 の内容も含まれる。

⁷ H26 調査では「先生との関係（先生が怒る、注意がうるさい、体罰など）」としており、今回調査における選択肢 4 の内容も含まれる。

⁸ H26 調査では「勉強が分からない（授業が面白くない、成績が良くない、テストがきらいなど）」としており、今回調査の選択肢 6 の内容も含まれる。

15. 障害	18,207	550	3.0%	—	18,132	153	0.8%
16. 生活リズム	18,207	1,879	10.3%	34.7%	18,132	426	2.3%
17. ネット等	18,207	577	3.2%	15.6%	18,132	149	0.8%
18. その他 ⁹	18,207	248	1.4%	16.3%	18,132	198	1.1%
19. わからない	18,207	738	4.1%	5.6%	18,132	738	4.1%

上記は、インターネット調査による、学校を休みはじめた時のきっかけを尋ねた結果である。

学校を休みはじめたきっかけとして思い当たるものは、「友人との関係（いやがらせやいじめ）」が 47.5%、「精神的な不調（漠然とした不安や気持ちの落ち込みなど）」が 25.0%、「学校生活に対してやる気が出なかった」が 24.5%、「先生との関係（先生と合わなかったなど）」が 20.4%、「友人との関係（いやがらせやいじめを除く）」が 20.0%の順となっており、学校生活やその影響に関する項目の比率が高い。

また、学校を休みはじめたきっかけとして最も思い当たるものは、「友人との関係（いやがらせやいじめ）」が 36.4%で比率が最も高い。とりわけ友人との関係（1. と 2. の合計）は計 44.0%、精神的・身体的不調（13. と 14. の合計）は計 12.8%となっている。

なお、「その他」を選択した者の自由記述回答としては、「給食が嫌い」「学校に行く意義が見いだせない」「部活がきびしかった」などといった内容が含まれている。

⁹ 「18. その他」を自由回答の内容に基づいて振り分けをした際、複数の選択肢に振り分けたり、「18. その他」は無回答扱いとしたりしたケースもある。具体例としては、「友達がいない、授業もついていけなかった」という自由回答は、「2. 友人との関係（いやがらせやいじめを除く）」と「5. 勉強が分からなかった（授業についていけなかった、成績が良くなかったなど）」に振り分け、「18. その他」には回答されていないものとみなした。

(オンライン調査)

	Q2-a				Q2-b		
	総数	回答数	割合	H26 調査	総数 ¹⁰	回答数	割合
1. 友人(いやがらせやいじめ) ¹¹	321	113	35.2%	53.7%	320	56	17.5%
2. 友人(いやがらせやいじめを除く)	321	91	28.3%	—	320	17	5.3%
3. 先生(怒る、うるさい、体罰) ¹²	321	66	20.6%	26.6%	320	18	5.6%
4. 先生(相性)	321	102	31.8%	—	320	21	6.6%
5. 勉強 ¹³	321	66	20.6%	31.6%	320	11	3.4%
6. 授業	321	67	20.9%	—	320	12	3.8%
7. きまり	321	69	21.5%	10.2%	320	10	3.1%
8. やる気	321	106	33.0%	—	320	30	9.4%
9. 合わなかった	321	53	16.5%	17.3%	320	15	4.7%
10. 環境の変化	321	32	10.0%	9.8%	320	5	1.6%
11. 親	321	58	18.1%	14.4%	320	6	1.9%
12. 家庭環境	321	49	15.3%	10.1%	320	11	3.4%
13. 精神的不調	321	149	46.4%	—	320	37	11.6%
14. 身体的不調	321	118	36.8%	—	320	27	8.4%
15. 障害	321	29	9.0%	—	320	6	1.9%
16. 生活リズム	321	65	20.2%	34.7%	320	6	1.9%
17. ネット等	321	41	12.8%	15.6%	320	5	1.6%
18. その他 ¹⁴	321	14	4.4%	16.3%	320	9	2.8%
19. わからない	321	18	5.6%	5.6%	320	18	5.6%

上記は、オンライン調査による、学校を休みはじめた時のきっかけを示した結果である。

学校を休みはじめたきっかけとして思い当たるものは、「精神的な不調（漠然とした不安や気持ちの落ち込みなど）」が 46.4%、「身体的な不調（学校に行こうとすると腹痛や頭痛に襲われたなど）」が 36.8%、「友人との関係（いやがらせやいじめ）」が 35.2%、「学校生活に対してやる気が出なかった」が 33.0%、「先生との関係（先生と合わなかったなど）」が 31.8%の順となっており、精神的な不調や身体的な不調などの健康をめぐる問題や学校での

¹⁰ 注釈 5 に同じ。

¹¹ 注釈 6 に同じ。

¹² 注釈 7 に同じ。

¹³ 注釈 8 に同じ。

¹⁴ 注釈 9 に同じ。

人間関係から派生する問題をきっかけとする場合が目立っている。

また、学校を休みはじめたきっかけとして最も思い当たるものは、「友人との関係（いやがらせやいじめ）」が 17.5% で最も比率が高い。

なお、「その他」を選択した者の自由記述回答としては、「学校が嫌い」「集団行動に対する抵抗感」などといった内容が含まれる。

なお、休みはじめたきっかけについては、前回は調査しており、Q2-a と比較は可能であるが、以下（参考）のように、選択項目を変えているため、比較にあたっては留意が必要である。また、Q2-b については今回設定した項目であるため、比較はできない。

（参考）休みはじめたきっかけに関する本調査と H26 調査の相違点

本調査（Q2-a）	H26 調査
あなたが学校を休みはじめた時のきっかけは何ですか。a. 思いあたるものをすべて選択してください。	あなたが学校を休みはじめた時のきっかけは何ですか。思いあたるものすべてに○をつけてください。
1. 友人との関係（いやがらせやいじめ） ¹⁵	1. 友人との関係（いやがらせやいじめ、けんかなど）
2. 友人との関係（いやがらせやいじめを除く）	—
3. 先生との関係（先生が怒る、注意がうるさい、体罰など） ¹⁶	2. 先生との関係（先生がおこる、注意がうるさい、体罰など）
4. 先生との関係（先生と合わなかったなど）	—
5. 勉強が分からなかった（授業についていけなかった、成績が良くなかったなど） ¹⁷	3. 勉強が分からない（授業がおもしろくない、成績がよくない、テストがきらいなど）
6. 授業が面白くなかった	—
7. 学校のきまりなどの問題（学校の校則がきびしいなど）	5. 学校のきまりなどの問題（学校の校則がきびしいなど）
8. 学校生活に対してやる気が出なかった	（項目なし）
9. 入学、転校、進級した先の学校や学級が自分に合わなかった	6. 入学、転校、進級して学校や学級になじめなかった（転校、進級したときの不適応など）
10. 家族の生活環境の変化（父親や母親の単身赴任、家族の別居、親の転職や失業などの経済的な問題など）	7. 家族の生活環境の急激な変化（父親や母親の単身赴任、家族の別居、親の転職や失業など経済的な問題など）
11. 親との関係（親が怒る、親の言葉や態度への反発、親との会話がほとんどないなど）	8. 親との関係（親がおこる、親の言葉や態度への反発、親との会話がほとんどないなど）

¹⁵ 注釈 6 に同じ。

¹⁶ 注釈 7 に同じ。

¹⁷ 注釈 8 に同じ。

本調査 (Q2-a)	H26 調査
あなたが学校を休みはじめた時のきっかけは何ですか。a. 思いあたるものをすべて選択してください。	あなたが学校を休みはじめた時のきっかけは何ですか。思いあたるものすべてに○をつけてください。
12. 家庭環境に起因するもの（両親の不和、祖父母と父母の不和など）	9. 家族の不和（両親の不和、祖父母と父母の不和など）
13. 精神的な不調（漠然とした不安や気持ちの落ち込みなど）	—
14. 身体的な不調（学校に行こうとすると腹痛や頭痛に襲われたなど）	—
15. 障害による学習上・生活上の困難	—
16. 生活リズムの乱れ（朝起きられないなど）	11. 生活リズムの乱れ（朝起きられないなど）
17. インターネットやメール、ゲームなどの影響（一度始めると止められない、学校より楽しいなど）	12. インターネットやメール、ゲームなどの影響（一度始めると止められない、学校より楽しいなど）
18. その他（具体的にご記入ください）	13. その他（具体的にご記入ください）
19. わからない	—
—	14. とくに思いあたることはない

Q3 あなたが最初に学校を休みはじめたのは、何年生の何月頃ですか。学校と時期のそれぞれ一つずつ選択してください。覚えていない場合は、最も近いと思われる回答を選択ください

(インターネット調査)

Q3-a：学年	回答数	割合	H26 調査
1. 小学校 1 年生	1, 173	6. 4%	4. 2%
2. 小学校 2 年生	756	4. 2%	3. 0%
3. 小学校 3 年生	1, 562	8. 6%	4. 8%
4. 小学校 4 年生	1, 945	10. 7%	6. 0%
5. 小学校 5 年生	2, 554	14. 0%	7. 6%
6. 小学校 6 年生	1, 667	9. 2%	6. 1%
7. 中学校 1 年生	3, 013	16. 5%	29. 1%
8. 中学校 2 年生	3, 578	19. 7%	25. 8%
9. 中学校 3 年生	1, 959	10. 8%	10. 1%
全体	18, 207	100%	96. 5%

Q3-b：時期	回答数	割合
1. 4 月～7 月	7, 877	43. 3%
2. 8 月～12 月	8, 396	46. 1%
3. 1 月～3 月	1, 934	10. 6%
全体	18, 207	100%

(参考) H26 調査	割合
1. 4 月～6 月	22. 0%
2. 7 月～9 月	29. 1%
3. 10 月～12 月	19. 3%
4. 1 月～3 月	10. 0%
全体	80. 3%

上記はインターネット調査による、休みはじめた学年及び時期の結果である。

休みはじめた学年は、「中学校 2 年生」が 19. 7%と最も高く、次いで「中学校 1 年生」が 16. 5%、「小学校 5 年生」が 14. 0%、「中学校 3 年生」が 10. 8%である。調査対象者の 36. 2%が「中学校 1 年生」又は「中学校 2 年生」時に休みはじめたと回答している。

休みはじめた時期については、「8 月～12 月」が最も多く、「4 月～7 月」、「1 月～3 月」の順に高い比率である。

H26 調査について、集計の項目が異なるため単純な比較は困難であるが、「7～9月」をピークに「4月～6月」から「10月～12月」まで休みはじめた時期の割合が高く、長期休暇明けの「1月～3月」は 10.0%と減少するなど、インターネット調査と同様の傾向が示唆される。

(オンライン調査)

Q3-a：学年	回答数	割合	H26 調査
1. 小学校 1 年生	19	5.9%	4.2%
2. 小学校 2 年生	22	6.9%	3.0%
3. 小学校 3 年生	37	11.5%	4.8%
4. 小学校 4 年生	33	10.3%	6.0%
5. 小学校 5 年生	54	16.8%	7.6%
6. 小学校 6 年生	20	6.2%	6.1%
7. 中学校 1 年生	74	23.1%	29.1%
8. 中学校 2 年生	43	13.4%	25.8%
9. 中学校 3 年生	19	5.9%	10.1%
全体	321	100%	96.5%

Q3-b：時期	回答数	割合
1. 4月～7月	134	41.7%
2. 8月～12月	149	46.4%
3. 1月～3月	38	11.8%
全体	321	100%

上記はオンライン調査による、休みはじめた学年及び時期の結果である。

休みはじめた学年についてみると、「中学校 1 年生」が 23.1%と最も高く、次いで「小学校 5 年生」が 16.8%、「中学校 2 年生」が 13.4%、「小学校 3 年生」が 11.5%の順であった。調査対象者の 38.6%が「小学校 3 年生」又は「小学校 4 年生」又は「小学校 5 年生」時に休みはじめ、また調査対象者の 36.5%が「中学校 1 年生」又は「中学校 2 年生」時に休みはじめたと回答している。

休みはじめた時期については、「8月～12月」が最も多く、「4月～7月」、「1月～3月」の順に高い比率である。

学校を休みはじめた学年と時期の度数は下記の結果になる。

(インターネット調査)

回答数 割合	4月～7 月	8月～12 月	1月～3 月	行合計
小学校1年生	867	255	51	1,173
	4.8%	1.4%	0.3%	6.4%
小学校2年生	463	258	35	756
	2.5%	1.4%	0.2%	4.2%
小学校3年生	857	614	91	1,562
	4.7%	3.4%	0.5%	8.6%
小学校4年生	842	966	137	1,945
	4.6%	5.3%	0.8%	10.7%
小学校5年生	989	1,350	215	2,554
	5.4%	7.4%	1.2%	14.0%
小学校6年生	552	852	263	1,667
	3.0%	4.7%	1.4%	9.2%
中学校1年生	1,259	1,399	355	3,013
	6.9%	7.7%	1.9%	16.5%
中学校2年生	1,365	1,852	361	3,578
	7.5%	10.2%	2.0%	19.7%
中学校3年生	683	850	426	1,959
	3.8%	4.7%	2.3%	10.8%
列合計	7,877	8,396	1,934	18,207
	43.3%	46.1%	10.6%	100%

(参考) H26 調査	4月～ 6月	7月～ 9月	10月～ 12月	1月～ 3月	わからな い	行合計
小学校1年生	32	10	8	5	10	65
	2.05%	0.64%	0.51%	0.32%	0.64%	4.2%
小学校2年生	9	9	8	5	14	45
	0.58%	0.58%	0.51%	0.32%	0.90%	2.9%
小学校3年生	14	23	7	1	29	74
	0.90%	1.47%	0.45%	0.06%	1.86%	4.7%
小学校4年生	20	20	10	11	33	94
	1.28%	1.28%	0.64%	0.70%	2.11%	6.0%
小学校5年生	13	33	19	8	45	118
	0.83%	2.11%	1.22%	0.51%	2.88%	7.5%
小学校6年生	15	12	19	17	32	95
	0.96%	0.77%	1.22%	1.09%	2.05%	6.1%
中学校1年生	106	160	102	57	30	455
	6.78%	10.24%	6.53%	3.65%	1.92%	29.1%
中学校2年生	79	132	102	42	48	403
	5.05%	8.45%	6.53%	2.69%	3.07%	25.8%
中学校3年生	54	55	27	9	14	159
	3.45%	3.52%	1.73%	0.58%	0.90%	10.2%
わからない	2	0	0	0	53	55
	0.13%	0.00%	0.00%	0.00%	3.39%	3.5%
列合計	344	454	302	155	308	1,563
	22.0%	29.0%	19.3%	9.9%	19.7%	100.0%

インターネット調査においては、最も多くの方が休みはじめたのは中学校2年生時の8月～12月（1,852人）であり、それに中学校1年生時の8月～12月（1,399人）が次ぐ状況であった。

H26調査について、集計の項目が異なるため単純な比較は困難であるが、最も多くの方が休みはじめたのは中学校1年生時の7月～9月（160人）であり、それに中学校2年生時の7月～9月（132人）が次いでおり、インターネット調査と概ね似た傾向を示している。

(オンライン調査)

回答数 割合	4月～7月	8月～12 月	1月～3月	行合計
小学校1年生	15	4	0	19
	4.7%	1.2%	0.0%	5.9%
小学校2年生	15	5	2	22
	4.7%	1.6%	0.6%	6.9%
小学校3年生	12	23	2	37
	3.7%	7.2%	0.6%	11.5%
小学校4年生	11	20	2	33
	3.4%	6.2%	0.6%	10.3%
小学校5年生	18	23	13	54
	5.6%	7.2%	4.0%	16.8%
小学校6年生	6	11	3	20
	1.9%	3.4%	0.9%	6.2%
中学校1年生	31	36	7	74
	9.7%	11.2%	2.2%	23.1%
中学校2年生	18	18	7	43
	5.6%	5.6%	2.2%	13.4%
中学校3年生	8	9	2	19
	2.5%	2.8%	0.6%	5.9%
列合計	134	149	38	321
	41.7%	46.4%	11.8%	100%

オンライン調査においては、最も多くの人々が休みはじめたのは中学校1年生時の8月～12月（36人）であった。

(3) 不登校の継続の理由

Q4 不登校が継続した要因について、今、ふりかえってみて、あなたにあてはまると思うものすべてを選択してください。

※作表の関係上、Q4 の選択肢を以下のように略称する。

選択肢	略称
1. 友人との関係（いやがらせやいじめ）	1. 友人(いやがらせやいじめ)
2. 友人との関係（いやがらせやいじめを除く）	2. 友人(いやがらせやいじめを除く)
3. 先生との関係（先生が怒る、注意がうるさい、体罰など）	3. 先生(怒る、うるさい、体罰)
4. 先生との関係（先生と合わなかったなど）	4. 先生(相性)
5. 勉強が分からなかった（授業についていけなかった、成績が良くなかったなど）	5. 勉強
6. 授業が面白くなかった ¹⁸	6. 授業
7. 周囲の友人の影響（学校に行かないグループと近かった、友人に遊びに誘われたなど）	7. 友人(影響)
8. 学校生活に対するやる気が出なかったため	8. やる気
9. 学校へ行かないことをあまり悪く思わなかったため	9. 悪気なし
10. だれかが迎えに来たり強く催促されたりすると学校へ行くが、長続きしなかったため	10. 断続的な登校
11. 精神的な不調（漠然とした不安や気持ちの落ち込みなど）	11. 精神的な不調
12. 身体的な不調（学校に行こうとすると腹痛や頭痛に襲われたなど）	12. 身体的な不調
13. 生活リズムの乱れ	13. 生活リズム
14. なぜ学校に行かなくてはならないのかが理解できなかったため	14. 登校への疑問
15. 自分の好きな方向を選んだため	15. 好みの選択
16. 親から登校するようすすめられず、家にも親から注意されなかったため	16. 親からの注意不足
17. 学校から登校するように働きかけがなかったため	17. 学校からの注意不足
18. 保護者やまわりの人に学校を休んでもいいと助言されたため	18. 助言
19. 障害による学習上・生活上の困難	19. 障害
20. その他（具体的にご記入ください）	20. その他
21. わからない	21. わからない

¹⁸ 注釈 4 に記載のとおり、「6. 授業が面白くなかった」の選択肢には、「授業が面白くなかった・嫌いだった・嫌だった」という内容の回答も含めて振り分けた。

Q4-a あてはまると思うものすべてを選択してください。

Q4-b 最もあてはまるものを一つ選択してください。

(インターネット調査)

	Q4-a				Q4-b		
	総数	回答数	割合	H26調査	総数 ¹⁹	回答数	割合
1. 友人(いやがらせやいじめ) ²⁰	18,207	8,086	44.4%	41.4%	18,151	6,260	34.5%
2. 友人(いやがらせやいじめを除く)	18,207	3,433	18.9%	—	18,151	1,151	6.3%
3. 先生(怒る、うるさい、体罰) ²¹	18,207	2,893	15.9%	16.6%	18,151	907	5.0%
4. 先生(相性)	18,207	3,965	21.8%	—	18,151	982	5.4%
5. 勉強	18,207	2,701	14.8%	27.4%	18,151	679	3.7%
6. 授業	18,207	2,835	15.6%	—	18,151	609	3.4%
7. 友人(影響)	18,207	1,250	6.9%	—	18,151	415	2.3%
8. やる気	18,207	4,390	24.1%	44.4%	18,151	1,385	7.6%
9. 悪気なし	18,207	1,935	10.6%	25.6%	18,151	391	2.2%
10. 断続的な登校	18,207	925	5.1%	12.8%	18,151	116	0.6%
11. 精神的不調 ²²	18,207	4,843	26.6%	43.7%	18,151	1,915	10.6%
12. 身体的不調	18,207	2,958	16.2%	—	18,151	838	4.6%
13. 生活リズム	18,207	1,823	10.0%	34.1%	18,151	385	2.1%
14. 登校への疑問	18,207	1,645	9.0%	—	18,151	358	2.0%
15. 好みの選択 ²³	18,207	665	3.7%	19.9%	18,151	142	0.8%
16. 親からの注意不足	18,207	643	3.5%	6.6%	18,151	103	0.6%
17. 学校からの注意不足	18,207	502	2.8%	4.7%	18,151	51	0.3%
18. 助言	18,207	624	3.4%	8.5%	18,151	119	0.7%

¹⁹ Q4-a で「18. その他」を自由回答の内容に基づいて振り分けをした結果、「18. その他」を無回答扱いとしたケースがあり、その場合、Q4-b で「18. その他」が選択されていても無回答扱いとなるため、Q4-a よりも回答総数が少なくなっている。

²⁰ H26 調査では「いやがらせやいじめをする生徒の存在や、友人との人間関係のため」としており、今回調査における選択肢 2 の内容も含まれる。

²¹ H26 調査では「先生との関係（先生が怒る、注意が嫌い、体罰など）のため」としており、今回調査における選択肢 4 の内容も含まれる。

²² H26 調査では「学校へ行こうという気持ちはあるが、身体の調子が悪いと感じたり、ぼんやりとした不安があったりしたため」としており、今回調査における選択肢 12 の内容も含まれる。

²³ H26 調査では「なぜ学校に行かなくてはならないのかが理解できず、自分の好きな方向を選んだため」としており、今回調査における選択肢 14 の内容も含まれる。

19. 障害	18, 207	473	2. 6%	—	18, 151	184	1. 0%
20. その他 ²⁴	18, 207	250	1. 4%	14. 3%	18, 151	209	1. 2%
21. わからない	18, 207	952	5. 2%	3. 0%	18, 151	952	5. 2%

上記は、インターネット調査による、不登校が継続した理由を調査した結果である。

不登校の継続理由としては、「友人との関係（いやがらせやいじめ）」が 44.4%、「精神的な不調（漠然とした不安や気持ちの落ち込みなど）」が 26.6%、「学校生活に対するやる気が出なかったため」が 24.1%、「先生との関係（先生と合わなかったなど）」が 21.8%である。

不登校の継続理由として最もあてはまるものは、「友人との関係（いやがらせやいじめ）」が 34.5%で最も比率が高い。

なお、「その他」を選択した者の自由記述回答としては、「親と関係悪化」「家庭環境の乱れ」などといった内容が含まれる。

²⁴ 集計に先立ち、「20. その他」を自由回答の内容に基づいて振り分けをした。その結果、Q4-b の設問において「20. その他」が選択されていた際には、「20. その他」にさまざまな概念が書き込まれている回答があることから以下のように場合分けして集計した。

i) 「20. その他」に回答が残らない場合

振り分け先が他の一つの選択肢であれば、「20. その他」の「回答数」は減るが、「総数」は減らない（当該振り分け先の回答となるため）

振り分け先が他の複数の選択肢であれば、「20. その他」の「回答数」及び「総数」が減る（複数の振り分け先のいずれの回答になるか不明のため無回答扱いとした）

ii) 「20. その他」に回答が残る場合

「20. その他」の「回答数」は減らないが、「総数」は減る（「20. その他」と振り分け先のいずれの回答になるか不明のため無回答扱いとした）

(オンライン調査)

	Q4-a				Q4-b		
	総数	回答数	割合	H26 調査	総数 ²⁵	回答数	割合
1. 友人(いやがらせやいじめ) ²⁶	321	84	26.2%	41.4%	318	42	13.2%
2. 友人(いやがらせやいじめを除く)	321	83	25.9%	—	318	15	4.7%
3. 先生(怒る、うるさい、体罰) ²⁷	321	55	17.1%	16.6%	318	13	4.1%
4. 先生(相性)	321	94	29.3%	—	318	17	5.3%
5. 勉強	321	76	23.7%	27.4%	318	14	4.4%
6. 授業	321	59	18.4%	—	318	5	1.6%
7. 友人(影響)	321	13	4.0%	—	318	0	0.0%
8. やる気	321	122	38.0%	44.4%	318	34	10.7%
9. 悪気なし	321	49	15.3%	25.6%	318	6	1.9%
10. 断続的な登校	321	38	11.8%	12.8%	318	7	2.2%
11. 精神的な不調 ²⁸	321	178	55.5%	43.7%	318	67	21.1%
12. 身体的な不調	321	120	37.4%	—	318	25	7.9%
13. 生活リズム	321	80	24.9%	34.1%	318	8	2.5%
14. 登校への疑問	321	60	18.7%	—	318	12	3.8%
15. 好みの選択 ²⁹	321	32	10.0%	19.9%	318	6	1.9%
16. 親からの注意不足	321	29	9.0%	6.6%	318	5	1.6%
17. 学校からの注意不足	321	9	2.8%	4.7%	318	1	0.3%
18. 助言	321	55	17.1%	8.5%	318	9	2.8%
19. 障害	321	26	8.1%	—	318	8	2.5%
20. その他	321	14	4.4%	14.3%	318	10	3.1%
21. わからない	321	14	4.4%	—	318	14	4.4%

上記は、オンライン調査による、不登校が継続した理由を示した結果である。

不登校の継続理由としては、「精神的な不調（漠然とした不安や気持ちの落ち込みなど）」が 55.5%、「学校生活に対するやる気が出なかったため」が 38.0%、「身体的な不調（学校に行こうとすると腹痛や頭痛に襲われたなど）」が 37.4%、「先生との関係（先生と合わない）」が 19.9%、

²⁵ 注釈 20 に同じ。

²⁶ 注釈 21 に同じ。

²⁷ 注釈 22 に同じ。

²⁸ 注釈 23 に同じ。

²⁹ 注釈 24 に同じ。

かったなど)」が 29.3%、「友人との関係（いやがらせやいじめ）」が 26.2%である。

不登校の継続理由として最もあてはまるものは、「精神的な不調（漠然とした不安や気持ちの落ち込みなど）」が 21.1%で最も比率が高い。

なお、「その他」を選択した者の自由記述回答としては、「学校が合わない」「自分に自信が持てなかった」などといった内容が含まれる。

なお、この不登校継続理由については、前回も調査しており、Q4-a と比較は可能であるが、以下（参考）のように、選択項目を変えているため、比較にあたっては留意が必要である。また、Q4-b は今回設定した項目であるため、比較はできない。

（参考）不登校の継続理由に関する本調査と H26 調査の比較

本調査（Q4-a）	H26 調査選択肢
不登校が継続した要因について、今、ふりかえってみて、あなたにあてはまると思うものすべてを選択してください。	不登校が続く理由は、次の 1 から 13 のようなものが考えられます。今、ふりかえってみて中学校 3 年生の時のあなたにあてはまると思うものすべてに○をつけてください。
1. 友人との関係（いやがらせやいじめ） ³⁰	1. いやがらせやいじめをする生徒の存在や、友人との人間関係のため
2. 友人との関係（いやがらせやいじめを除く）	—
3. 先生との関係（先生が怒る、注意がうるさい、体罰など） ³¹	2. 先生との関係（先生がおこる、注意がきらい、体罰など）のため
4. 先生との関係（先生と合わなかったなど）	—
5. 勉強が分からなかった（授業についていけなかった、成績が良くなかったなど）	11. 勉強についていけなかったため
6. 授業が面白くなかった	—
7. 周囲の友人の影響（学校に行かないグループと近かった、友人に遊びに誘われたなど）	—
8. 学校生活に対するやる気が出なかったため	4. 無気力でなんとなく学校へ行かなかったため
9. 学校へ行かないことをあまり悪く思わなかったため	5. 学校へ行かないことをあまり悪く思わなかったため
10. だれかが迎えに来たり強く催促されたりすると学校へ行くが、長続きしなかったため	6. だれかが迎えに来たり強く催促されたりすると学校へ行くが、長続きしなかったため

³⁰ 注釈 21 に同じ。

³¹ 注釈 22 に同じ。

本調査 (Q4-a)	H26 調査選択肢
不登校が継続した要因について、今、ふりかえってみて、あなたにあてはまると思うものすべてを選択してください。	不登校が続く理由は、次の 1 から 13 のようなものが考えられます。今、ふりかえってみて中学校 3 年生の時のあなたにあてはまると思うものすべてに○をつけてください。
11. 精神的な不調（漠然とした不安や気持ちの落ち込みなど） ³²	7. 学校へ行こうという気持ちはあるが、身体の調子が悪いと感じたり、ぼんやりとした不安があったりしたため
12. 身体的な不調（学校に行こうとすると腹痛や頭痛に襲われたなど）	—
13. 生活リズムの乱れ	10. 朝起きられないなど生活リズムが乱れていたため
14. なぜ学校に行かなくてはならないのかが理解できなかったため	—
15. 自分の好きな方向を選んだため ³³	8. なぜ学校に行かなくてはならないのかが理解できず、自分の好きな方向を選んだため
16. 親から登校するようすすめられず、家にいても親から注意されなかったため	9. 親から登校するようすすめられず、家にいても親から注意されなかったため
17. 学校から登校するように働きかけがなかったため	12. 学校から登校するように働きかけがなかったため
18. 保護者やまわりの人に学校を休んでもいいと助言されたため	13. 保健室やまわりの人に学校を休んでもよいと言われたため
19. 障害による学習上・生活上の困難	—
20. その他（具体的にご記入ください）	14. その他
21. わからない	15. わからない

³² 注釈 23 に同じ。

³³ 注釈 24 に同じ。

(4) 不登校当時に相談した機関や人

Q5 不登校だった当時、次のような場所や人に相談したことはありますか。

Q5-a 相談したことがあるものをすべて選択してください。※作表の関係上、Q5 の選択肢を以下のとおり略称する。

選択肢	略称
1. 教育支援センター（適応指導教室）・教育相談所	1. 教育支援センター
2. 児童相談所、福祉事務所	2. 児相
3. 保健所・保健センター	3. 保健所
4. 病院・診療所	4. 病院
5. 民間施設（「フリースクール」と呼ばれる場所など）	5. 民間施設
6. 1～5.以外で当時の在籍校以外の心理相談・カウンセリングなどをする機関	6. その他機関
7. 学校の先生（担任の先生や保健室の先生など）	7. 先生
8. 学校にいる相談員（スクールカウンセラーなど）	8. 学校の相談員
9. SNS や電話相談	9. SNS
10. その他（具体的にご記入ください） ³⁴	10. その他
11. 何も利用しなかった	11. なし

（インターネット調査）

	回答数	割合	H26 調査
1. 教育支援センター	1,762	9.7%	20.2%
2. 児相	1,255	6.9%	5.3%
3. 保健所	734	4.0%	1.2%
4. 病院	2,190	12.0%	24.7%
5. 民間施設	1,338	7.3%	9.0%
6. その他機関	938	5.2%	8.1%
7. 先生	3,842	21.1%	30.2%
8. 学校の相談員	2,003	11.0%	34.9%
9. SNS	557	3.1%	—

³⁴ 集計に先立ち、「10. その他」～「12. その他」として記入された内容に基づいて「1. 教育支援センター（適応指導教室）・教育相談所」～「9. SNS や電話相談」に振り分けをした際、本人だけではなく、その親が相談した場合についても該当する内容に振り分けた。また、「その他」の複数の回答が残る場合には、「10. その他」一つにのみ回答内容をまとめた。

10. その他 ³⁵	334	1.8%	7.1%
11. なし	9,307	51.1%	23.1%

上記は、インターネット調査による、不登校当時の施設の利用状況や相談した人を調査した結果である。

不登校当時の機関の利用や相談した人について、「何も利用しなかった」が 51.1%で最も比率が高い。機関利用の状況としては、「病院・診療所」が 12.0%で最も多く、次いで「教育支援センター（適応指導教室）」が 9.7%、「民間施設（「フリースクール」と呼ばれる場所など）」が 7.3%である。

また、学校内で相談した教員等については、「学校の先生（担任の先生や保健室の先生など）」が 21.1%、「学校にいる相談員など（スクールカウンセラーなど）」が 11.0%である。

なお、「その他」を選択した者の自由記述回答としては、「親」「家族」「友人」といった内容が含まれる。

（オンライン調査）

	回答数	割合	H26 調査
1. 教育支援センター	105	32.7%	20.2%
2. 児相	22	6.9%	5.3%
3. 保健所	11	3.4%	1.2%
4. 病院	107	33.3%	24.7%
5. 民間施設	95	29.6%	9.0%
6. その他機関	30	9.3%	8.1%
7. 先生	136	42.4%	30.2%
8. 学校の相談員	97	30.2%	34.9%
9. SNS	10	3.1%	—
10. その他 ³⁶	19	5.9%	7.1%
11. なし	65	20.2%	23.1%

³⁵ 集計に先立ち、「10. その他」～「12. その他」を記入内容に基づいて既存の選択肢に振り分けをした。その際、本人だけではなく、その親が相談した場合についても該当する内容に振り分けた。また、複数の選択肢に振り分けたり、「その他」は無回答扱いとしたりしたケースや、「その他」が複数残る場合には、「10. その他」一つにのみ回答内容をまとめたりした。具体例としては、「校長先生」という自由回答は、「7. 学校の先生（担任の先生や保健室の先生など）」に振り分け、「10. その他」には回答されていないものとみなした。

³⁶ 注釈 36 に同じ。

上記は、オンライン調査による、不登校当時の施設の利用状況や相談した人を調査した結果である。

不登校当時の機関利用の状況としては、「病院・診療所」が 33.3%で最も多く、次いで「教育支援センター（適応指導教室）」が 32.7%、「民間施設（「フリースクール」と呼ばれる場所など）」が 29.6%である。

また、学校内で相談した教員等については、「学校の先生（担任の先生や保健室の先生など）」が 42.4%、「学校にいる相談員など（スクールカウンセラーなど）」が 30.2%である。

なお、「その他」を選択した者の自由記述回答としては、「親」「塾の先生」「親の会」といった内容が含まれる。

なお、この相談したことがあるものについては、前回は調査しており、Q5-a と比較は可能であるが、以下（参考）のように、選択項目を変えているため、比較にあたっては留意が必要である。また、Q5-b は今回設定した項目であるため、比較はできない。

（参考）不登校だった当時、相談したことがあるものに関する本調査と H26 調査の比較

本調査（Q5-a）	H26 調査選択肢
不登校だった当時、次のような場所や人に相談したことはありますか。相談したことがあるものをすべて選択してください。	中学校3年生の時、1～7のような場所を利用したり、8～10のような人に相談したりしたことがありますか。利用したり相談したりしたものすべてに○を付けてください。
1. 教育支援センター	1. 教育支援センター（適応指導教室）
2. 児相	3. 児童相談所、福祉事務所
3. 保健所	4. 保健所・保健センター
4. 病院	5. 病院・診療所
5. 民間施設	6. 民間施設（「フリースクール」と呼ばれる場所など）
6. その他機関	7. 6. 以外の心理相談・カウンセリングなどをする民間の機関
7. 先生	9. 学校の先生（担任の先生など）
8. 学校の相談員	10. 学校にいる相談員など（スクールカウンセラーなど）
9. SNS	—
10. その他	11. その他
11. なし	12. 何も利用しなかった
21. わからない	15. わからない

Q5-b. 相談した結果、どれくらい手助けになりましたか。次の 1. ～3. の中からいちばん近いものをひとつ選択してください。

1. かなり手助けになった 2. 少し手助けになった 3. あまり手助けにならなかった

(インターネット調査)

	回答数	かなり手助けになった		少し手助けになった		「かなり手助けになった」と「少し手助けになった」の計		あまり手助けにならなかった	
		回答数	割合	回答数	割合	回答数	割合	回答数	割合
Q5-a で「なし」以外を回答した者	8,900	-	-	-	-	-	-	-	-
1. 教育支援センター	1,762	498	5.6%	697	7.8%	1,195	13.4%	567	6.4%
2. 児相	1,255	294	3.3%	516	5.8%	810	9.1%	445	5.0%
3. 保健所	734	201	2.3%	369	4.1%	570	6.4%	164	1.8%
4. 病院	2,190	459	5.2%	890	10.0%	1,349	15.2%	841	9.4%
5. 民間施設	1,338	402	4.5%	614	6.9%	1,016	11.4%	322	3.6%
6. その他機関	938	218	2.4%	462	5.2%	680	7.6%	258	2.9%
7. 先生	3,842	738	8.3%	1,544	17.3%	2,282	25.6%	1,560	17.5%
8. 学校の相談員	2,003	404	4.5%	878	9.9%	1,282	14.4%	721	8.1%
9. SNS	557	137	1.5%	252	2.8%	389	4.4%	168	1.9%
10. その他	334	163	1.8%	112	1.3%	275	3.1%	59	0.7%

上記は、インターネット調査による、相談した先別のどの程度手助けになったかをクロス集計した結果である。

「かなり手助けになった」「少し手助けになった」という肯定的な選択肢を合算すると、「学校の先生（担任の先生や保健室の先生など）」が 25.6%で最も多く、次いで「病院・診療所」が 15.2%、「学校にいる相談員（スクールカウンセラーなど）」が 14.4%である。なお、「その他」の詳細は第 2 章（4）を参照されたい。

(オンライン調査)

	回答数	かなり手助けになった		少し手助けになった		「かなり手助けになった」と「少し手助けになった」の計		あまり手助けにならなかった	
		回答数	割合	回答数	割合	回答数	割合	回答数	割合
Q5-aで「なし」以外を回答した者	256	-	-	-	-	-	-	-	-
1. 教育支援センター	105	47	18.4%	30	11.7%	77	30.1%	28	10.9%
2. 児相	22	7	2.7%	7	2.7%	14	5.5%	8	3.1%
3. 保健所	11	0	0.0%	3	1.2%	3	1.2%	8	3.1%
4. 病院	107	27	10.5%	42	16.4%	69	27.0%	38	14.8%
5. 民間施設	95	61	23.8%	24	9.4%	85	33.2%	10	3.9%
6. その他機関	30	5	2.0%	12	4.7%	17	6.6%	13	5.1%
7. 先生	136	31	12.1%	58	22.7%	89	34.8%	47	18.4%
8. 学校の相談員	97	27	10.5%	30	11.7%	57	22.3%	40	15.6%
9. SNS	10	0	0.0%	5	2.0%	5	2.0%	5	2.0%
10. その他	17	11	4.3%	3	1.2%	14	5.5%	3	1.2%

上記は、オンライン調査による、相談した先別のどの程度手助けになったかを示した結果である。

「かなり手助けになった」「少し手助けになった」という肯定的な選択肢を合算すると、「学校の先生（担任の先生や保健室の先生など）」が 34.8%で最も多く、次いで「民間施設（「フリースクール」と呼ばれる場所など）」が 33.2%、「教育支援センター（適応指導教室）・教育相談所」が 30.1%である。ただし、オンライン調査における対象者は、支援団体等から案内を受けた方であることから「民間施設（「フリースクール」と呼ばれる場所など）」の割合が高くなった可能性があること、及びサンプルサイズが十分に得られていない項目もあることから、解釈には留意が必要である。なお、「その他」の詳細は第2章（4）を参照されたい。

(5) 不登校当時の支援のニーズ

Q6 不登校だったときに欲しかった相談や手助けについて、あてはまるものすべてを選択してください。

(インターネット調査)

	回答数	割合	H26 調査
1. 進学するための相談や手助け	3,309	18.2%	23.0%
2. 仕事につくための相談や手助け	1,788	9.8%	11.6%
3. 学校の勉強についての相談や手助け	4,063	22.3%	25.2%
4. 自分の気持ちをはっきり表現したり、人とうまくつきあったりするための方法についての相談や手助け	6,068	33.3%	31.6%
5. 友人と知り合えたり、仲間と過ごせたりする居場所についての情報提供	3,792	20.8%	25.2%
6. 精神的・身体的な不調についての相談や手助け	5,645	31.0%	—
7. 規則正しい生活習慣についての相談や手助け	1,369	7.5%	9.2%
8. その他 ³⁷	362	2.0%	5.3%
9. とくにない	5,705	31.3%	32.9%

上記は、インターネット調査による、支援ニーズ（不登校だったときにどのような支援を求めているか）を示した結果である。

支援ニーズとしては、「自分の気持ちをはっきり表現したり、人とうまくつきあったりするための方法についての相談や手助け」と回答した者が 33.3%で最も比率が高い。次いで、「とくにない」が 31.3%、「精神的・身体的な不調についての相談や手助け」が 31.0%、「学校の勉強についての相談や手助け」が 22.3%である。

なお、「その他」を選択した者の自由記述回答としては、「いじめに対する相談や支援」「親の理解」「学校の環境改善」などといった内容が含まれる。

³⁷ 集計に先立ち、「8. その他」を自由回答の内容に基づいて既存の選択肢に振り分けをした。その際、複数の選択肢に振り分けたり、「8. その他」は無回答扱いとしたりしたケースもある。具体例としては、「場面緘黙症や発達障害の知識がある大人がいて欲しかった」という自由回答は、「6. 精神的・身体的な不調についての相談や手助け」に振り分け、「8. その他」には回答されていないものとみなした。

(オンライン調査)

	回答数	割合	H26 調査
1. 進学するための相談や手助け	111	34.6%	23.0%
2. 仕事につくための相談や手助け	46	14.3%	11.6%
3. 学校の勉強についての相談や手助け	115	35.8%	25.2%
4. 自分の気持ちをはっきり表現したり、人とうまくつきあったりするための方法についての相談や手助け	151	47.0%	31.6%
5. 友人と知り合えたり、仲間と過ごせたりする居場所についての情報提供	133	41.4%	25.2%
6. 精神的・身体的な不調についての相談や手助け	141	43.9%	—
7. 規則正しい生活習慣についての相談や手助け	43	13.4%	9.2%
8. その他 ³⁸	18	5.6%	5.3%
9. とくにない	61	19.0%	32.9%

上記は、オンライン調査による、支援ニーズ（不登校だったときにどのような支援を求めているか）を示した結果である。

支援ニーズとしては、「自分の気持ちをはっきり表現したり、人とうまくつきあったりするための方法についての相談や手助け」が 47.0%で最も高く、「精神的・身体的な不調についての相談や手助け」が 43.9%、「友人と知り合えたり、仲間と過ごせたりする居場所についての情報提供」が 41.4%である。

なお、「その他」を選択した者の自由記述回答としては、「学校側の理解」「普通に接してくれる人間関係」などといった回答が含まれる。

なお、この相談したことがあるものについては、前回は調査しているが、以下（参考）のように、選択項目を変えているため、比較にあたっては留意が必要である。

³⁸ 注釈 38 に同じ。

(参考) 不登校だった当時欲しかった相談や手助けに関する本調査と H26 調査の比較

本調査 (Q6)	H26 調査選択肢
不登校だった当時に欲しかった相談や手助けについて、あてはまるものすべてを選択してください。	中学校 3 年生の時、次のような相談や手助けなどがあればいいのと思ったことがありますか。あてはまるものすべてに○をつけてください。
1. 進学するための相談や手助け	1. 進学するための相談や手助け
2. 仕事につくための相談や手助け	2. 仕事につくための相談や手助け
3. 学校の勉強についての相談や手助け	3. 学校の勉強についての相談や手助け
4. 自分の気持ちをはっきり表現したり、人とうまくつきあったりするための方法についての相談や手助け	5. 自分の気持ちをはっきり表現したり、人とうまくつきあったりするための方法についての指標
5. 友人と知り合えたり、仲間と過ごせたりする居場所についての情報提供	6. 友人と知り合えたり、仲間と過ごせたりする居場所
6. 精神的・身体的な不調についての相談や手助け	—
7. 規則正しい生活習慣についての相談や手助け	8. 規則正しい生活習慣についての指導
8. その他 (具体的にご記入ください)	9. その他
9. とくにない	10. とくにない

(6) 不登校経験に関する振り返り

Q7 今、考えると、小・中学生の頃、不登校で学校に行かなかったことをどう思いますか。

次の 1. ～5. の中からいちばん近いものをひとつ選択してください。

(インターネット調査)

	回答数	割合	H26 調査
1. 行けばよかった	3, 013	16. 5%	38. 9%
2. しかたがなかった	6, 028	33. 1%	31. 7%
3. 行かなくてよかった	4, 739	26. 0%	11. 8%
4. 何とも思わない	4, 278	23. 5%	17. 5%
5. その他 ³⁹	149	0. 8%	—
全体	18, 207	100%	0%

上記は、インターネット調査による、不登校経験に関する振り返りを示した結果である。

³⁹ 集計に先立ち、「5. その他」を自由回答の内容に基づいて既存の選択肢に振り分けをした。その際、「5. その他」は無回答扱いとしたケースもある。具体例としては、「不登校がそこまで長くなかったので今となっては良い経験だったと思う」という自由回答は、「3. 行かなくてよかった」に振り分け、「5. その他」には回答されていないものとみなした。

不登校であったことに対して、「しかたがなかった」とする回答が 33.1%で最も比率が高い。次いで、「行かなくてよかった」が 26.0%、「何とも思わない」が 23.5%、「行けばよかった」が 16.5%であった。

なお、「その他」を選択した者の自由記述回答としては、「学校以外に学べる場所が欲しかった」「保健室登校があれば通えたかもしれない」「勉強はするべきだった」などといった内容が含まれる。

(オンライン調査)

	回答数	割合	H26 調査
1. 行けばよかった	50	15.6%	38.9%
2. しかたがなかった	118	36.8%	31.7%
3. 行かなくてよかった	94	29.3%	11.8%
4. 何とも思わない	39	12.1%	17.5%
5. その他 ⁴⁰	20	6.2%	—
全体	321	100%	0%

上記は、オンライン調査による、不登校経験に関する振り返りを示した結果である。

不登校であったことに対して、「しかたがなかった」とする回答が 36.8%で最も比率が高い。次いで、「行かなくてよかった」が 29.3%、「行けばよかった」が 15.6%、「何とも思わない」が 12.1%であった。

なお、「その他」を選択した者の自由記述回答としては、「学校に行っていた人生に興味がある」「勉強面では、学校に行かなかったことがいつまでも付きまとう」などといった内容が含まれる。

なお、不登校の振り返りについては、前回調査においても調査している。以下（参考）のように、設問を変更している。H26 調査においては、1 から 4 までの択一選択肢に自由記述欄があり、本調査の構成と異なる。

⁴⁰ 注釈 40 に同じ。

(参考) 不登校の振り返りに関する本調査と H26 調査の相違点

本調査 (Q7)	H26 調査
今、考えると、小・中学生の頃、不登校で学校に行かなかったことをどう思いますか。次の 1. ～5. の中からいちばん近いものをひとつ選択してください。	今、考えると、小中学生の頃、不登校で学校に行かなかったことをどう思いますか。次の 1. ～4. の中からいちばん近いものをひとつ選んで○をつけてください。
1. 行けばよかった	1. 行けばよかった
2. しかたがなかった	2. しかたがなかった
3. 行かなくてよかった	3. 行かなくてよかった
4. 何とも思わない	4. 何とも思わない
5. その他 (具体的にご記入ください)	その他 (自由記述欄)

（７）第２章のまとめ

第２章では中学校卒業までの状況として、欠席状況、不登校のきっかけ・休みはじめた学年、不登校の継続の理由、不登校当時に相談した機関や人、不登校当時の支援ニーズ、不登校に関する振り返りについて整理した。

欠席状況として、インターネット調査では小学校時点で不登校状態（週１～２日未満の欠席以上）であった方は 66.1%であり、中学校時点で不登校状態であった方は 85.9%であった。また、中学３年生時点で不登校であった回答者は 60.5%に上る。一方、オンライン調査では、中学校時点で不登校状況であった方の方が多かった。小学校時点で不登校状態であった方は 59.8%であり、中学校時点で不登校状態であった方は 96.6%であった。また、中学３年生時点で不登校であった回答者は 85.4%に上る。

不登校のきっかけ・休みはじめた学年として、インターネット調査では不登校のきっかけは学校での人間関係をはじめとする学校の環境や、精神的・身体的不調がきっかけとなる場合が多い。オンライン調査についても同様の結果が得られた。学校を休みはじめた学年及び時期は、インターネット調査では「中学２年生」が最も多く、時期としては「８月～１２月」が最も多かった。一方、オンライン調査では、「中学校１年生」時の「８月～１２月」が最も多かった。

不登校の継続の理由として、インターネット調査ではきっかけと同様、不登校の継続の理由は学校での人間関係をはじめとする学校の環境や、精神的・身体的不調が継続理由となる場合が多い。オンライン調査でも同様の結果が得られた。

不登校当時に相談した機関や人として、インターネット調査では不登校時に「何も利用しなかった」人が半数を超えている。相談した回答者の中では、「学校の先生（担任の先生や保健室の先生など）」や「学校にいる相談員（スクールカウンセラーなど）」など学校内の資源を利用する人が多く、外部機関であれば「病院・診療所」や「教育支援センター（適応指導教室）・教育相談所」の利用が多かった。また、手助けになった項目は「学校の先生（担任の先生など）」「病院・診療所」「学校にいる相談員（スクールカウンセラーなど）」の数が多かった。オンライン調査では「何も利用しなかった」人が 20.2%と比較的少なくなっている。相談した機関や人についてはインターネット調査と同様の結果が得られた。手助けになった項目の数は「学校の先生（担任の先生など）」「民間施設（「フリースクール」と呼ばれる場所など）」「教育支援センター（適応指導教室）・教育相談所」などが多く、相談実績と概ね同じ傾向が見られた。

不登校当時の支援ニーズとして、インターネット調査では「とくにない」と回答した回答者も一定数いるものの、「自分の気持ちをはっきり表現したり、人とうまくつきあったりするための方法についての相談や手助け」といった人間関係に関するニーズや「精神的・身体的な不調についての相談や手助け」の回答割合が上位であった。オンライン調査でも同様の傾向が見られたが、「とくにない」という回答が少なく、代わりに「友人と知り合えたり、仲間と過ごせたりする居場所についての情報提供」の回答割合が上位であっ

た。

不登校に関する振り返りとして、インターネット調査では「しかたがなかった」「行かなくてよかった」といった回答が多かった。オンライン調査においても同様の傾向が見られた。

第3章 中学校卒業から現在までの状況

(1) 中学卒業後の進路

Q8-a 中学校を卒業してすぐの時点（4月時点）で、あなたの進路状況についてあてはまるものをひとつ選択してください。

（インターネット調査）

	回答数	割合	H26 調査
1. 就職せずに高等学校等に進学した	14,132	77.6%	81.4%
2. 高等学校等に進学せずに就職した	1,667	9.2%	6.0%
3. 就職して働きながら、高等学校等に進学もした	1,213	6.7%	4.2%
4. 高等学校等に進学もせず、就職もしなかった	1,117	6.1%	8.4%
5. その他（具体的にご記入ください） ⁴¹	78	0.4%	—

本設問では、中学校卒業時点での進路状況を、「就職せずに高等学校等に進学した（進学のみ）」「高等学校等に進学せずに就職した（就業のみ）」「就職して働きながら、高等学校等に進学もした（進学＋就業）」「高等学校等に進学もせず、就職もしなかった（進学・就業せず）」という就業と進学との組み合わせからなる4つのパターンにより尋ねている。

インターネット調査では、中学校卒業時点での進路状況としては、「進学のみ」が77.6%と高く、「就業のみ」が9.2%、「進学＋就業」が6.7%、「進学・就業せず」が6.1%と続いている。

「進学のみ」と「進学＋就業」を合わせた回答者の比率は84.3%、「就業のみ」と「進学＋就業」を合わせた回答者の比率は15.9%である。

H26 調査について、集計の項目が異なるため単純な比較は困難であるが、インターネット調査と同様に「進学のみ」の割合が高い。

⁴¹ 集計に先立ち、「5. その他」を自由回答の内容に基づいて既存の選択肢に振り分けをした。その際、「5. その他」は無回答扱いとしたケースもある。具体例としては、「就職しながら専門学校に通った」という自由回答は、「3. 就職して働きながら、高等学校等に進学もした」に振り分け、「5. その他」には回答されていないものとみなした。

(オンライン調査)

	回答数	割合	H26 調査
1. 就職せずに高等学校等に進学した	285	88.8%	81.4%
2. 高等学校等に進学せずに就職した	3	0.9%	6.0%
3. 就職して働きながら、高等学校等に進学もした	5	1.6%	4.2%
4. 高等学校等に進学もせず、就職もしなかった	20	6.2%	8.4%
5. その他 ⁴²	8	2.5%	—

オンライン調査では、中学校卒業時点での進路状況としては、「進学のみ」が 88.8%と高く、「進学・就業せず」が 6.2%、「進学+就業」が 1.6%、「就業のみ」が 0.9%と続いている。

「進学のみ」と「進学+就業」を合わせて何らかの形で「進学」していたという回答者は 90.4%、「就業のみ」と「進学+就業」を合わせて何らかの形で「就業」していた者の比率は 2.5%である。

なお、「その他」を選択した者の自由記述回答としては、「フリースクールに通った」などといった内容が含まれる。

なお、中学校卒業後の進路状況については前回も調査しており、Q8-a と比較は可能であるが、以下（参考）のように本調査では選択項目として「その他」を設定している。

(参考) 中学校卒業後の進路状況に関する本調査と H26 調査の相違点

本調査 (Q8-a)	H26 調査
中学校を卒業してすぐの時点 (4 月時点) で、あなたの進路状況についてあてはまるものをひとつ選択してください。	中学校を卒業してすぐの時点 (4 月時点) で、あなたの進路状況についてあてはまるものをひとつ選んで○をつけてください。
就職せずに高等学校等に進学した	就職せずに高等学校等に進学した
高等学校等に進学せずに就職した	高等学校等に進学せずに就職した
就職して働きながら、高等学校等に進学もした	就職して働きながら、高等学校等に進学もした
高等学校等に進学もせず、就職もしなかった	高等学校等に進学もせず、就職もしなかった
その他 (具体的にご記入ください)	—

⁴² 注釈 42 に同じ。

Q8-b どの高等学校等に進学しましたか。ひとつ選んでください。

(インターネット調査)

	回答数	割合
1. 全日制高校	10,990	73.1%
2. 定時制高校	1,180	7.8%
3. 通信制高校	1,522	10.1%
4. 中等教育学校後期課程	244	1.6%
5. 高等専門学校	710	4.7%
6. 専修学校（一般課程・高等課程）・各種学校	294	2.0%
7. 特別支援学校高等部	104	0.7%
全体 ⁴³	15,044	100%

インターネット調査による高等学校等の進学状況としては、「全日制高校」が 73.1%で最も高く、次いで「通信制高校」が 10.1%、「定時制高校」が 7.8%である。

(オンライン調査)

	回答数	割合
1. 全日制高校	109	38.9%
2. 定時制高校	46	16.4%
3. 通信制高校	118	42.1%
4. 中等教育学校後期課程	0	0.0%
5. 高等専門学校	3	1.1%
6. 専修学校（一般課程・高等課程）・各種学校	2	0.7%
7. 特別支援学校高等部	2	0.7%
全体 ⁴⁴	280	100%

オンライン調査による高等学校等の進学状況としては、「通信制高校」が 42.1%で最も高く、次いで「全日制高校」が 38.9%、「定時制高校」が 16.4%である。なお、回答者数が少ないことから、解釈には留意が必要である。

⁴³ Q8-a で自由回答の内容に基づいて振り分けをした結果、「1. 就職せずに高等学校等に進学した」または「3. 就職して働きながら、高等学校等に進学もした」と進学した場合でも、Q8-b で具体的な進学先は不明で無回答扱いとなるため、回答総数は、Q8-a の「1. 就職せずに高等学校等に進学した」及び「3. 就職して働きながら、高等学校等に進学もした」の合計数よりも回答総数が少なくなっている。

⁴⁴ 注釈 44 に同じ。

(2) 最終学歴

Q9 あなたの最終学歴は次のどれにあたりますか。

(インターネット調査)

	回答数	割合
1. 中学校卒業	2,323	12.8%
2. 高等学校卒業（中等教育学校後期課程、専修学校の高等課程、特別支援学校高等部を含む） ⁴⁵	5,733	31.5%
3. 専修学校（専門課程）卒業・高等専門学校卒業・短期大学卒業	2,765	15.2%
4. 専修学校（一般課程）卒業・各種学校卒業	1,279	7.0%
5. 大学卒業	5,277	29.0%
6. 大学院修士課程卒業・大学院博士後期課程修了（満期退学含む）	812	4.5%
7. その他 ⁴⁶	18	0.1%
全体	18,207	100%

インターネット調査による最終学歴の状況としては、「高等学校卒業（中等教育学校後期課程・専修学校の高等課程・特別支援学校高等部）」が 31.5%で最も高く、次いで「大学卒業」が 29.0%、「専修学校（専門課程）卒業・高等専門学校卒業・短期大学卒業」が 15.2%である。

なお、「その他」を選択した者の自由記述回答としては、「職業訓練校」「専修学校中退」などといった回答が含まれる。

⁴⁵ 高等学校卒業程度認定試験（旧大学入学資格検定）の合格を含む。

⁴⁶ 集計に先立ち、「7. その他」を自由回答の内容に基づいて既存の選択肢に振り分けをした。その際、「7. その他」は無回答扱いとしたケースもある。具体例としては、「高等学校卒業(通信制高校)」という自由回答は、「2. 高等学校卒業（中等教育学校後期課程、専修学校の高等課程、特別支援学校高等部を含む）」に振り分け、「7. その他」には回答されていないものとみなした。

(オンライン調査)

	回答数	割合
1. 中学校卒業	40	12.5%
2. 高等学校卒業（中等教育学校後期課程、専修学校の高等課程、特別支援学校高等部を含む） ⁴⁷	130	40.5%
3. 専修学校（専門課程）卒業・高等専門学校卒業・短期大学卒業	32	10.0%
4. 専修学校（一般課程）卒業・各種学校卒業	8	2.5%
5. 大学卒業	72	22.4%
6. 大学院修士課程卒業・大学院博士後期課程修了（満期退学含む）	13	4.0%
7. その他 ⁴⁸	26	8.1%
全体	321	100%

オンライン調査による最終学歴の状況としては、「高等学校卒業（中等教育学校後期課程、専修学校の高等課程、特別支援学校高等部を含む）」が 40.5%で最も高く、次いで「大学卒業」が 22.4%、「中学校卒業」が 12.5%である。なお、回答者数が少ないことから、解釈には留意が必要である。

なお、「その他」を選択した者の自由記述回答としては、「専門学校卒業予定」「短大中退」などといった内容が含まれる。

⁴⁷ 注釈 46 に同じ。

⁴⁸ 注釈 47 に同じ。

(3) 中学卒業後の経験

Q10 あなたは、これまでに次のような経験はありますか。あてはまるものすべてを選択してください。

(インターネット調査)

	回答数	割合
1. 高等学校等での不登校	3,585	19.7%
2. 高等学校等での留年	862	4.7%
3. 高等学校等の中退	2,138	11.7%
4. 高等学校等への転編入学	1,274	7.0%
5. 高等学校卒業程度認定試験（旧大学入学資格検定）の受験	916	5.0%
6. 大学・短大・専門学校での留年	1,034	5.7%
7. 大学・短大・専門学校での中退	1,183	6.5%
8. 大学・短大・専門学校への転編入学	497	2.7%
9. 休職	2,725	15.0%
10. 無職	5,159	28.3%
11. いずれも該当しない	6,013	33.0%

インターネット調査による中学卒業後の進学先における経験として、「高等学校等での不登校」が 19.7%、「高等学校等の中退」が 11.7%、「高等学校等への転編入学」が 7.0%と続いた。また、同様に、中学校卒業後の就職に関する経験として、「無職」は 28.3%、「休職」は 15.0%であった。

なお、選択肢のいずれも該当しないと回答した者は 33.0%を占めた。

(オンライン調査)

	回答数	割合
1. 高等学校等での不登校	85	26.5%
2. 高等学校等での留年	28	8.7%
3. 高等学校等の中退	46	14.3%
4. 高等学校等への転編入学	40	12.5%
5. 高等学校卒業程度認定試験（旧大学入学資格検定）の受験	34	10.6%
6. 大学・短大・専門学校での留年	19	5.9%
7. 大学・短大・専門学校での中退	20	6.2%
8. 大学・短大・専門学校への転編入学	7	2.2%
9. 休職	34	10.6%
10. 無職	98	30.5%
11. いずれも該当しない	135	42.1%

オンライン調査による中学卒業後の進学先における経験として、「高等学校等での不登校」が 26.5%、「高等学校等の中退」が 14.3%、「高等学校等への転編入学」が 12.5%と続いた。また、同様に、中学卒業後の就職に関する経験として「無職」は 30.5%、「休職」は 10.6%であった。

なお、選択肢のいずれも該当しないと回答した者は 42.1%を占めた。

(4) 第3章のまとめ

第3章では中学校卒業から現在までの状況として、中学校卒業後の進路、最終学歴、中学校卒業後の経験についての調査結果をまとめた。

中学卒業後の進路として、インターネット調査では、「就職せずに高等学校等に進学した」方が 77.6%と大多数であったが、何等かの形で就業していた回答者も 15.9%と一定数いた。進学した方の進学先としては、「全日制高校」が最も多く 73.1%であった。オンライン調査でも中学校を卒業してすぐの時点での進路状況は同様の傾向が見られたが、進学先の高等学校等については、「通信制高校」が最も多く 42.1%であった。

最終学歴として、インターネット調査では、「高等学校卒業（中等教育学校後期課程、専修学校の高等課程、特別支援学校高等部を含む）」「大学卒業」の割合が最も多かった。オンライン調査でも同様の傾向が見られた。

中学卒業後の経験として、インターネット調査では、1～2割程度の方が進学先において「高等学校等での不登校」「高等学校等の中退」などの経験があると回答した。就業関連については「無職」が 28.3%、「休職」が 15.0%など、一部の方は進学・就職後においても苦労している様子がうかがえる。オンライン調査でも同様の傾向が見られた。

第4章 現在の状況と今後の課題

(1) 現在の就業状況と進学状況

Q11-a 現在の就業状況や進学状況について、あてはまるものすべてを選択してください。

(インターネット調査)

	回答数	割合
1. 正規社員・職員として民間企業や官公庁などに勤めている	6,955	38.2%
2. 労働者派遣事業者の派遣社員	922	5.1%
3. パート、アルバイトとして民間企業や官公庁などに勤めている	3,862	21.2%
4. 会社などの役員	813	4.5%
5. 家業を手伝っている	815	4.5%
6. 自分で会社などを経営している	1,247	6.8%
7. 主婦、主夫	1,845	10.1%
8. 学生など	618	3.4%
9. その他 ⁴⁹	162	0.9%
10. とくに仕事についたり、学校に通ったりなどはしていない	2,362	13.0%

インターネット調査による現在の就業状況としては、「正規社員・職員として民間企業や官公庁などに勤めている」が38.2%で最も高く、次いで「パート、アルバイトとして民間企業や官公庁などに勤めている」が21.2%、「とくに仕事についたり、学校に通ったりなどはしていない」が13.0%である。

なお、「その他」を選択した者の自由記述回答としては、「自由業」「内職」「休職中」などといった内容が含まれる。

(オンライン調査)

	回答数	割合
1. 正規社員・職員として民間企業や官公庁などに勤めている	67	20.9%
2. 労働者派遣事業者の派遣社員	2	0.6%
3. パート、アルバイトとして民間企業や官公庁などに勤めている	76	23.7%
4. 会社などの役員	7	2.2%
5. 家業を手伝っている	15	4.7%

⁴⁹ 集計に先立ち、「9. その他」を自由回答の内容に基づいて既存の選択肢に振り分けをした。その際、「9. その他」は無回答扱いとしたケースもある。具体例としては、「自営業」という自由回答は、「6. 自分で会社などを経営している」に振り分け、「9. その他」には回答されていないものとみなした。

6. 自分で会社などを経営している	25	7.8%
7. 主婦、主夫	17	5.3%
8. 学生など	115	35.8%
9. その他 ⁵⁰	12	3.7%
10. とくに仕事についたり、学校に通ったりなどはしていない	35	10.9%

オンライン調査による現在の就業状況としては、「学生など」が 35.8%で最も高く、次いで「パート、アルバイトとして民間企業や官公庁などに勤めている」が 23.7%、「正規社員・職員として民間企業や官公庁などに勤めている」が 20.9%である。なお、オンライン調査においては、支援団体等から案内を受けた者が対象となっており、若年層が多く含まれることから、一部選択肢の割合が高くなった可能性があること、及び回答者数が少ないことから、解釈には留意が必要である。

なお、「その他」を選択した者の自由記述回答としては、フリースクールスタッフ、休学中などといった内容が含まれる。

(2) 現在の生活の満足度

Q11-b あなたは、全体として見ると、現在の生活にどの程度満足していますか。あてはまるものを1つ選んでください。

(インターネット調査)

	回答数	割合
1. 満足している	3,048	16.7%
2. まあ満足している	8,013	44.0%
3. やや不満だ	4,127	22.7%
4. 不満だ	3,019	16.6%

インターネット調査による現在の生活への満足度としては、「まあ満足している」が 44.0%で最も高く、次いで「やや不満だ」が 22.7%、「満足している」が 16.7%である。現在の生活に満足している人（「1. 満足している」と「2. まあ満足している」の合計）は 60.7%である。

⁵⁰ 注釈 50 に同じ。

(オンライン調査)

	回答数	割合
1. 満足している	111	34.6%
2. まあ満足している	150	46.7%
3. やや不満だ	40	12.5%
4. 不満だ	20	6.2%

オンライン調査による現在の生活への満足度としては、「まあ満足している」が 46.7%で最も高く、次いで「満足している」が 34.6%、「やや不満だ」が 12.5%である。現在の生活に満足している人（「1. 満足している」と「2. まあ満足している」の合計）は 81.3%である。

(3) 中学卒業以降において励ましや支えになった人

Q12 中学を卒業して以降の生活において、どのような人のアドバイスやはげましが支えになりましたか。

Q12-a あてはまると思うものをすべて選択してください。

Q12-b 最もあてはまるものを一つ選択してください。

(インターネット調査)

	Q12-a		Q12-b	
	回答数	割合	回答数	割合
1. 家族 ⁵¹	7,693	42.3%	6,027	33.1%
2. 友人 ⁵²	6,583	36.2%	3,198	17.6%
3. 職場の上司・同僚	2,611	14.3%	957	5.3%
4. 先生	2,454	13.5%	780	4.3%
5. 学校の相談員（スクールカウンセラーなど）	1,102	6.1%	405	2.2%
6. 自治体の相談員 ⁵³	648	3.6%	220	1.2%
7. 医師 ⁵⁴	1,263	6.9%	385	2.1%

⁵¹ 集計に先立ち、「8. その他」を自由回答の内容に基づいて既存の選択肢に振り分けをした際、「1. 家族」の選択肢には、「家族・親戚」という内容の回答も含めて振り分けた。

⁵² 集計に先立ち、「8. その他」を自由回答の内容に基づいて既存の選択肢に振り分けをした際、「2. 友人」の選択肢には、「友人・知人」という内容の回答も含めて振り分けた。

⁵³ 集計に先立ち、「8. その他」を自由回答の内容に基づいて既存の選択肢に振り分けをした際、「6. 自治体の相談員」の選択肢には、「自治体などの職員（相談員を含む）」という内容の回答も含めて振り分けた。

⁵⁴ 集計に先立ち、「8. その他」を自由回答の内容に基づいて既存の選択肢に振り分けをした際、「7. 医師」の選択肢には、「医療機関の職員（医師、看護師など）」という内容の回答も含めて振り分けた。

8. その他 ⁵⁵	261	1.4%	214	1.2%
9. とくにない	5,997	32.9%	5,997	33.0%

インターネット調査による中学卒業以降において励ましや支えになった人としては、「家族」が42.3%で最も高く、次いで「友人」が36.2%、「とくにない」が32.9%である。
また、中学卒業以降において励ましや支えになった人として最もあてはまるものは、「家族」が33.1%である。

なお、「その他」を選択した者の自由記述回答としては、「フリースクールの先生」「心理カウンセラー」「塾講師」などといった内容が含まれる。

(オンライン調査)

	Q12-a		Q12-b	
	回答数	割合	回答数	割合
1. 家族 ⁵⁶	203	63.2%	131	40.8%
2. 友人 ⁵⁷	154	48.0%	47	14.6%
3. 職場の上司・同僚	41	12.8%	12	3.7%
4. 先生	100	31.2%	25	7.8%
5. 学校の相談員（スクールカウンセラーなど）	39	12.1%	14	4.4%
6. 自治体の相談員 ⁵⁸	34	10.6%	15	4.7%
7. 医師 ⁵⁹	52	16.2%	9	2.8%
8. その他 ⁶⁰	49	15.3%	28	8.7%
9. とくにない	40	12.5%	40	12.5%

オンライン調査による中学卒業以降において励ましや支えになった人としては、「家族」が63.2%で最も高く、次いで「友人」が48.0%、「学校の先生」が31.2%である。

また、中学卒業以降において励ましや支えになった人として最もあてはまるものは、「家族」が40.8%である。

なお、「その他」を選択した者の自由記述回答としては、「フリースクールの職員」「塾

⁵⁵ 集計に先立ち、「8. その他」を自由回答の内容に基づいて既存の選択肢に振り分けをした。その際、「8. その他」は無回答扱いとしたケースもある。具体例としては、「姉」という自由回答は、「1. 家族」に振り分け、「8. その他」には回答されていないものとみなした。

⁵⁶ 注釈 52 に同じ。

⁵⁷ 注釈 53 に同じ。

⁵⁸ 注釈 54 に同じ。

⁵⁹ 注釈 55 に同じ。

⁶⁰ 注釈 56 に同じ。

の先生」「ひきこもりの居場所のスタッフ」などといった内容が含まれる。

(4) 不登校経験と中学校卒業後の経験との関連について

Q13 小・中学生の頃に不登校を経験したことで、中学校卒業後今までに、次のようなことがありましたか。a. ～g. のそれぞれのことであてはまるものをひとつずつ選んでください。

Q13-a 学業（受験、資格試験など）で苦勞した

Q13-b 仕事（就職活動を含む）で苦勞した

Q13-c 体力が低下したり不足したりして苦勞した

Q13-d 生活リズムが乱れ苦勞した

Q13-e 人との関わりに不安を感じたり、人と関わりをもつことに苦勞した

Q13-f 成長した、視野が広がった

Q13-g 人に優しくなった、人の痛みが分かるようになった

(インターネット調査)

	おおいにあった		ある程度あった		あまりなかった		ほとんどなかった	
	回答数	割合	回答数	割合	回答数	割合	回答数	割合
a. 学業（受験、資格試験など）で苦勞した	3,399	18.7%	6,113	33.6%	4,840	26.6%	3,855	21.2%
b. 仕事（就職活動を含む）で苦勞した	3,940	21.6%	5,698	31.3%	4,640	25.5%	3,929	21.6%
c. 体力が低下したり不足したりして苦勞した	3,071	16.9%	5,388	29.6%	5,291	29.1%	4,457	24.5%
d. 生活リズムが乱れ苦勞した	3,908	21.5%	6,191	34.0%	4,571	25.1%	3,537	19.4%
e. 人との関わりに不安を感じたり、人と関わりをもつことに苦勞した	6,361	34.9%	6,382	35.1%	3,308	18.2%	2,156	11.8%
f. 成長した、視野が広がった	2,978	16.4%	6,815	37.4%	5,432	29.8%	2,982	16.4%
g. 人に優しくなった、人の痛みが分かるようになった	4,381	24.1%	7,911	43.5%	3,851	21.2%	2,064	11.3%

	「おおいにあった」と「ある程度あった」の計		「あまりなかった」と「ほとんどなかった」の計	
	回答数	割合	回答数	割合
a. 学業（受験、資格試験など）で苦労した	9,512	52.2%	8,695	47.8%
b. 仕事（就職活動を含む）で苦労した	9,638	52.9%	8,569	47.1%
c. 体力が低下したり不足したりして苦労した	8,459	46.5%	9,748	53.5%
d. 生活リズムが乱れ苦労した	10,099	55.5%	8,108	44.5%
e. 人との関わりに不安を感じたり、人と関わりをもつことに苦労した	12,743	70.0%	5,464	30.0%
f. 成長した、視野が広がった	9,793	53.8%	8,414	46.2%
g. 人に優しくなった、人の痛みが分かるようになった	12,292	67.5%	5,915	32.5%

	おおいにあった		ある程度あった		あまりなかった		ほとんどなかった	
	回答数	割合	回答数	割合	回答数	割合	回答数	割合
(参考) H26 調査								
a. 学業（受験、資格試験など）で苦労した	328	21.3%	476	30.9%	—	—	738	47.9%
b. 仕事（就職活動を含む）で苦労した	328	21.3%	476	30.9%	—	—	738	47.9%
c. 体力が低下したり不足したりして苦労した	436	28.1%	527	33.9%	—	—	590	38.0%
d. 生活リズムが乱れ苦労した	525	33.8%	528	34.0%	—	—	501	32.2%
e. 人との関わりに不安を感じたり、人と関わりをもつことに苦労した	684	43.7%	496	31.7%	—	—	384	24.6%
f. 成長した、視野が広がった	—	—	—	—	—	—	—	—
g. 人に優しくなった、人の痛みが分かるようになった	—	—	—	—	—	—	—	—

インターネット調査による、不登校経験と中学校卒業後の経験との関連として中学校卒業後に「おおいにあった」「ある程度あった」回答を合算すると、「人との関わりに不安を感じたり、人と関わりをもつことに苦労した」が最も比率が高く 70.0%、次いで「人に優

しくなった、人の痛みが分かるようになった」が 67.5%、「生活リズムが乱れ苦勞した」が 55.5%である。

H26 調査について、集計の項目が異なるため単純な比較は困難であるが、インターネット調査と同様の傾向が見られた。

(オンライン調査)

	おおいにあった		ある程度あった		あまりなかった		ほとんどなかった	
	回答数	割合	回答数	割合	回答数	割合	回答数	割合
a. 学業（受験、資格試験など）で苦労した	93	29.0%	95	29.6%	80	24.9%	53	16.5%
b. 仕事（就職活動を含む）で苦労した	80	24.9%	78	24.3%	63	19.6%	100	31.2%
c. 体力が低下したり不足したりして苦労した	95	29.6%	96	29.9%	65	20.2%	65	20.2%
d. 生活リズムが乱れ苦労した	103	32.1%	79	24.6%	77	24.0%	62	19.3%
e. 人との関わりに不安を感じたり、人と関わりをもつことに苦労した	133	41.4%	108	33.6%	41	12.8%	39	12.1%
f. 成長した、視野が広がった	143	44.5%	110	34.3%	48	15.0%	20	6.2%
g. 人に優しくなった、人の痛みが分かるようになった	146	45.5%	119	37.1%	33	10.3%	23	7.2%

	「おおいにあった」と「ある程度あった」の計		「あまりなかった」と「ほとんどなかった」の計	
	回答数	割合	回答数	割合
a. 学業（受験、資格試験など）で苦労した	188	58.6%	133	41.4%
b. 仕事（就職活動を含む）で苦労した	158	49.2%	163	50.8%
c. 体力が低下したり不足したりして苦労した	191	59.5%	130	40.5%
d. 生活リズムが乱れ苦労した	182	56.7%	139	43.3%
e. 人との関わりに不安を感じたり、人と関わりをもつことに苦労した	241	75.1%	80	24.9%
f. 成長した、視野が広がった	253	78.8%	68	21.2%
g. 人に優しくなった、人の痛みが分かるようになった	265	82.6%	56	17.4%

オンライン調査による不登校経験と中学校卒業後の経験との関連としての中学校卒業後に「おおいにあった」「ある程度あった」回答を合算すると、「人に優しくなった、人の痛みが分かるようになった」が最も比率が高く 82.6%、次いで「成長した、視野が広がった」

が 78.8%、「人との関わりに不安を感じたり、人と関わりをもつことに苦労した」が 75.1%である。

なお、不登校によるその後の経験については前回も調査しており、Q13 と比較は可能であるが、以下（参考）のように選択項目を変えているため、比較にあたっては留意が必要である。

（参考）不登校によるその後の経験に関する本調査と H26 調査の相違点（設問文）

本調査（Q13）	H26 調査
小・中学生の頃に不登校を経験したことで、中学校卒業後今までに、次のようなことがありましたか。	小中学生の頃に不登校だったために、中学校卒業後今までに、次のようなことがありましたか。
学業（受験、資格試験など）で苦労した	受験（資格試験、就職試験を含む）や仕事などで苦労した
仕事（就職活動を含む）で苦労した	受験（資格試験、就職試験を含む）や仕事などで苦労した
体力が低下したり不足したりして苦労した	体力が低下したり不足したりして苦労した
生活リズムが乱れ苦労した	生活リズムが乱れ苦労した
人との関わりに不安を感じたり、人と関わりをもつことに苦労した	他人との関わりに不安を感じるがあった
成長した、視野が広がった	—
人に優しくなった、人の痛みが分かるようになった	—

※H26 調査において、「受験（資格試験、就職試験を含む）や仕事などで苦労した」は本調査の 2 項目に該当するため、比較にあたり同じ値を記載している。

（参考）不登校によるその後の経験に関する本調査と H26 調査の相違点（選択肢）

本調査（Q13）	H26 調査
小・中学生の頃に不登校を経験したことで、中学校卒業後今までに、次のようなことがありましたか。	小中学生の頃に不登校だったために、中学校卒業後今までに、次のようなことがありましたか。
おおいにあった	おおいにあった
ある程度あった	少しあった
あまりなかった	—
ほとんどなかった	まったくなかった

（５）第４章のまとめ

第４章では現在の状況と今後の課題として、現在の就業状況と進学状況、現在の生活の満足度、中学卒業以降に励ましや支えになった人、不登校経験と中学校卒業後の経験との関連について調査結果をまとめた。

現在の就業状況と進学状況として、インターネット調査では、「正規社員・職員として民間企業や官公庁などに勤めている」方が 38.2%と最も多く、「パート、アルバイトとして民間企業や官公庁などに勤めている」方が 21.2%であった一方、「とくに仕事についたり、学校に通ったりなどはしていない」方も 13.0%いた。オンライン調査では、「正規社員・職員として民間企業や官公庁などに勤めている」「パート、アルバイトとして民間企業や官公庁などに勤めている」方に先立ち、「学生など」が最も多く 35.8%であったが、オンライン調査では若年層が多く調査対象に含まれることが影響している可能性が高い。

現在の生活の満足度として、インターネット調査では、現在の生活に満足している方は 60.7%と過半数を超えていた。オンライン調査でも同様の傾向が見られた。

中学卒業以降において励ましや支えになった人として、インターネット調査では、「家族」「友人」といった周囲の人が励ましや支えになったと回答していた方が多かったが、「とくにない」という回答も一定数存在した。一方、オンライン調査ではインターネット調査と同様「家族」や「友人」といった回答が多かった一方、「学校の先生」も上位の回答として挙がっていた。最も励ましや支えになった人は、いずれの調査においても「家族」が最も回答割合が高かった。ただし、不登校のきっかけや継続の理由に親や家庭環境を挙げている方も一定数いるため、回答割合のみの分析には留意が必要である。

不登校経験と中学校卒業後の経験との関連についてとして、インターネット調査及びオンライン調査において、「おおいにあった」「ある程度あった」回答の比率が高かったのは「人との関わりに不安を感じたり、人と関わりをもつことに苦労した」「成長した、視野が広がった」「人に優しくなった、人の痛みが分かるようになった」（順不同）であった。

第Ⅲ部 分析編

第5章 性別から見た不登校状況

性別の違いによる不登校状況の違いを調査するため、性別を軸にクロス集計を実施した。クロス集計を実施する際、「その他」の回答については除外の上、検定を実施している。

(1) 学校を休みはじめたきっかけ (Q2)

■ 男女別の各項目の選択率と p 値⁶¹

※設問及び選択肢については、P. 11 を参照する。

(インターネット調査)

	回答数	男性	女性	p 値	p 値 (有意差)
1. 友人(いやがらせやいじめ)	8,644	44.4 %	50.5 %	0.00	**
2. 友人(いやがらせやいじめを除く)	3,634	18.2 %	21.7 %	0.00	**
3. 先生(怒る、うるさい、体罰)	2,940	17.7 %	14.6 %	0.00	**
4. 先生(相性)	3,719	18.7 %	22.1 %	0.00	**
5. 勉強	2,684	15.3 %	14.2 %	0.04	*
6. 授業	3,066	19.7 %	14.1 %	0.00	**
7. きまり	1,503	8.6 %	7.9 %	0.07	
8. やる気	4,461	23.6 %	25.4 %	0.01	**
9. 合わなかった	1,588	7.6 %	9.7 %	0.00	**
10. 環境の変化	1,352	6.4 %	8.4 %	0.00	**
11. 親	1,714	7.6 %	11.1 %	0.00	**
12. 家庭環境	1,756	7.2 %	12.0 %	0.00	**
13. 精神的不調	4,547	18.9 %	30.6 %	0.00	**
14. 身体的不調	2,991	11.7 %	20.9 %	0.00	**
15. 障害	550	3.0 %	3.0 %	0.95	
16. 生活リズム	1,879	9.3 %	11.2 %	0.00	**
17. ネット等	577	3.9 %	2.5 %	0.00	**
18. その他	248	1.1 %	1.6 %	0.01	**
19. わからない	738	4.6 %	3.5 %	0.00	**

*p<0.05、**p<0.01

インターネット調査において、以下の項目では、男女間でその選択率に有意な差がある。女性に比べて男性の選択率が有意に高い項目は、男性と女性の選択率の乖離が大きかつ

⁶¹ p 値については、p. 3(5)④を参照。

た順に「勉強が分からなかった（授業についていけなかった、成績が良くなかったなど）」
「先生との関係（先生が怒る、注意がうるさい、体罰など）」「インターネットやメール、
ゲームなどの影響（一度始めると止められない、学校より楽しいなど）」であった。一方、
男性に比べて女性の選択率が有意に高い項目は、女性と男性の選択率の乖離が大きかった
順に「精神的な不調（漠然とした不安や気持ちの落ち込みなど）」「身体的な不調（学校に
行こうとすると腹痛や頭痛に襲われたなど）」「友人との関係（いやがらせやいじめ）」で
あった。

（オンライン調査）

	回答数	男性	女性	p 値	p 値（有 意差）
1. 友人(いやがらせやいじめ)	113	36.8%	34.2%	0.64	
2. 友人(いやがらせやいじめを除く)	91	23.9%	32.9%	0.08	
3. 先生(怒る、うるさい、体罰)	66	21.9%	19.1%	0.54	
4. 先生(相性)	102	24.5%	38.2%	0.01	**
5. 勉強	66	22.6%	19.1%	0.45	
6. 授業	67	24.5%	16.4%	0.08	
7. きまり	69	21.3%	17.8%	0.44	
8. やる気	106	40.0%	25.7%	0.01	**
9. 合わなかった	53	18.7%	14.5%	0.32	
10. 環境の変化	32	8.4%	11.8%	0.32	
11. 親	58	13.5%	22.4%	0.04	*
12. 家庭環境	49	11.6%	18.4%	0.09	
13. 精神的な不調	149	43.9%	48.7%	0.40	
14. 身体的な不調	118	32.3%	42.1%	0.07	
15. 障害	29	9.0%	7.2%	0.57	
16. 生活リズム	65	19.4%	22.4%	0.52	
17. ネット等	41	19.4%	6.6%	0.00	**
18. その他	14	4.5%	3.9%	0.80	
19. わからない	18	7.1%	3.9%	0.23	

*p<0.05、**p<0.01

オンライン調査において、以下の項目では、男女間でその選択率に有意な差がある。

女性に比べて男性の選択率が有意に高い項目は、男性と女性の選択率の乖離が大きかった順に「学校生活に対してやる気が出なかった」「インターネットやメール、ゲームなどの影響（一度始めると止められない、学校より楽しいなど）」であった。一方、男性に比べて女性の選択率が有意に高い項目は、女性と男性の選択率の乖離が大きかった順に「先

生との関係（先生と合わなかったなど）」「親との関係（親が怒る、親の言葉や態度への反発、親との会話がほとんどないなど）」であった。

（２）不登校の継続の理由（Q4）

■ 男女別の各項目の選択率と p 値

※設問及び選択肢については、P. 22 を参照する。

（インターネット調査）

	回答数	男性	女性	p 値	p 値（有意差）
1. 友人(いやがらせやいじめ)	8,086	41.2%	47.5%	0.00	**
2. 友人(いやがらせやいじめを除く)	3,433	16.0%	21.6%	0.00	**
3. 先生(怒る、うるさい、体罰)	2,893	16.6%	15.2%	0.01	**
4. 先生(相性)	3,965	19.0%	24.3%	0.00	**
5. 勉強	2,701	15.1%	14.6%	0.34	
6. 授業	2,835	18.1%	13.2%	0.00	**
7. 友人(影響)	1,250	8.1%	5.7%	0.00	**
8. やる気	4,390	22.8%	25.4%	0.00	**
9. 悪気なし	1,935	11.1%	10.2%	0.06	
10. 断続的な登校	925	5.3%	4.7%	0.06	
11. 精神的不調	4,843	19.7%	33.1%	0.00	**
12. 身体的不調	2,958	11.0%	21.2%	0.00	**
13. 生活リズム	1,823	9.3%	10.6%	0.00	**
14. 登校への疑問	1,645	8.2%	9.7%	0.00	**
15. 好みの選択	665	4.0%	3.3%	0.02	*
16. 親からの注意不足	643	2.9%	4.1%	0.00	**
17. 学校からの支援不足	502	2.8%	2.7%	0.59	
18. 助言	624	2.5%	4.2%	0.00	**
19. 障害	473	2.5%	2.5%	0.96	
20. その他	250	1.1%	1.7%	0.00	**
21. わからない	952	5.8%	4.6%	0.00	**

*p<0.05、**p<0.01

インターネット調査において、以下の項目では、男女間でその選択率に有意な差がある。

女性に比べて男性の選択率が有意に高い項目は、男性と女性の選択率の乖離が大きかった順に「授業が面白くなかった」「周囲の友人の影響（学校に行かないグループと近かった、友人に遊びに誘われたなど）」「先生との関係（先生が怒る、注意がうるさい、体罰な

ど)」であった。一方、男性に比べて女性の選択率が有意に高い項目は、女性と男性の選択率の乖離が大きかった順に「精神的な不調（漠然とした不安や気持ちの落ち込みなど）」「身体的な不調（学校に行こうとすると腹痛や頭痛に襲われたなど）」「友人との関係（いやがらせやいじめ）」であった。

（オンライン調査）

	回答数	男性	女性	p 値	p 値（有意差）
1. 友人(いやがらせやいじめ)	84	23. 2%	29. 6%	0. 20	
2. 友人(いやがらせやいじめを除く)	83	23. 9%	27. 6%	0. 45	
3. 先生(怒る、うるさい、体罰)	55	16. 1%	18. 4%	0. 60	
4. 先生(相性)	94	25. 2%	33. 6%	0. 11	
5. 勉強	76	21. 9%	27. 0%	0. 30	
6. 授業	59	20. 6%	15. 8%	0. 27	
7. 友人(影響)	13	5. 2%	3. 3%	0. 42	
8. やる気	122	43. 2%	32. 9%	0. 06	
9. 悪気なし	49	17. 4%	14. 5%	0. 48	
10. 断続的な登校	38	11. 0%	12. 5%	0. 68	
11. 精神的な不調	178	51. 0%	62. 5%	0. 04	*
12. 身体的な不調	120	32. 3%	43. 4%	0. 04	*
13. 生活リズム	80	25. 2%	25. 0%	0. 97	
14. 登校への疑問	60	16. 1%	19. 7%	0. 41	
15. 好みの選択	32	11. 0%	9. 2%	0. 61	
16. 親からの注意不足	29	7. 7%	11. 2%	0. 30	
17. 学校からの支援不足	9	0. 6%	5. 3%	0. 02	*
18. 助言	55	18. 1%	17. 1%	0. 83	
19. 障害	26	8. 4%	6. 6%	0. 55	
20. その他	14	2. 6%	6. 6%	0. 09	
21. わからない	14	5. 2%	3. 3%	0. 42	

*p<0. 05、**p<0. 01

オンライン調査において、以下の項目では、男女間でその選択率に有意な差がある。

男性に比べて女性の選択率が有意に高い項目は、女性と男性の選択率の乖離が大きかった順に「精神的な不調（漠然とした不安や気持ちの落ち込みなど）」「身体的な不調（学校に行こうとすると腹痛や頭痛に襲われたなど）」「学校から登校するように働きかけがなかったため」であった。

(3) 不登校当時の施設の利用状況・相談した人 (Q5)

■ 男女別の各項目の選択率と p 値

※設問及び選択肢については、P. 28 を参照する。

(インターネット調査)

	回答数	男性	女性	p 値	p 値 (有意差)
1. 教育支援センター	1,762	10.9%	8.4%	0.00	**
2. 児相	1,255	8.6%	5.3%	0.00	**
3. 保健所	734	5.5%	2.6%	0.00	**
4. 病院	2,190	10.8%	13.1%	0.00	**
5. 民間施設	1,338	8.6%	6.2%	0.00	**
6. その他機関	938	6.0%	4.4%	0.00	**
7. 先生	3,842	18.7%	23.5%	0.00	**
8. 学校の相談員	2,003	9.5%	12.5%	0.00	**
9. SNS	557	3.3%	2.9%	0.09	
10. その他	334	1.3%	2.4%	0.00	**
11. なし	9,307	50.3%	51.9%	0.03	*

*p<0.05、**p<0.01

インターネット調査において、以下の項目では、男女間でその選択率に有意な差がある。

女性に比べて男性の選択率が有意に高い項目は、男性と女性の選択率の乖離が大きかった順に「児童相談所、福祉事務所」「保健所・保健センター」「教育支援センター（適応指導教室）・教育相談所」であった。一方、男性に比べて女性の選択率が有意に高い項目は、女性と男性の選択率の乖離が大きかった順に「学校の先生（担任の先生や保健室の先生など）」「学校にいる相談員（スクールカウンセラーなど）」「病院・診療所」であった。

(オンライン調査)

	回答数	男性	女性	p 値	p 値 (有意差)
1. 教育支援センター	105	38.1%	27.0%	0.04	*
2. 児相	22	11.0%	2.6%	0.00	**
3. 保健所	11	4.5%	2.6%	0.37	
4. 病院	107	34.8%	33.6%	0.81	
5. 民間施設	95	29.0%	30.3%	0.81	
6. その他機関	30	9.7%	9.2%	0.89	
7. 先生	136	43.2%	41.4%	0.75	
8. 学校の相談員	97	28.4%	30.3%	0.72	
9. SNS	10	1.9%	3.9%	0.30	
10. その他	19	5.2%	6.6%	0.60	
11. なし	65	18.1%	22.4%	0.35	

*p<0.05、**p<0.01

オンライン調査において、以下の項目では、男女間でその選択率に有意な差がある。

女性に比べて男性の選択率が有意に高い項目は、男性と女性の選択率の乖離が大きかった順に「教育支援センター（適応指導教室）・教育相談所」「児童相談所、福祉事務所」であった。

(4) 不登校当時の支援のニーズ (Q6)

■ 男女別の各項目の選択率と p 値

※設問及び選択肢については、P. 33 を参照する。

(インターネット調査)

	回答数	男性	女性	p 値	p 値 (有意差)
1. 進学するための相談や手助け	3,309	18.3%	18.1%	0.77	
2. 仕事につくための相談や手助け	1,788	11.0%	8.6%	0.00	**
3. 学校の勉強についての相談や手助け	4,063	22.4%	22.3%	0.86	
4. 自分の気持ちをはっきり表現したり、人とうまくつきあったりするための方法についての相談や手助け	6,068	30.8%	35.8%	0.00	**
5. 友人と知り合えたり、仲間と過ごせたりする居場所についての情報提供	3,792	19.9%	21.7%	0.00	**
6. 精神的・身体的な不調についての相談や手助け	5,645	26.0%	35.7%	0.00	**
7. 規則正しい生活習慣についての相談や手助け	1,369	7.9%	7.2%	0.05	
8. その他	362	1.6%	2.3%	0.00	**
9. とくにない	5,705	31.4%	31.3%	0.88	

*p<0.05、**p<0.01

インターネット調査において、以下の項目では、男女間でその選択率に有意な差がある。

女性に比べて男性の選択率が有意に高い項目は、「仕事につくための相談や手助け」であった。一方、男性に比べて女性の選択率が有意に高い項目は、女性と男性の選択率の乖離が大きかった順に「精神的・身体的な不調についての相談や手助け」「自分の気持ちをはっきり表現したり、人とうまくつきあったりするための方法についての相談や手助け」「友人と知り合えたり、仲間と過ごせたりする居場所についての情報提供」であった。

(オンライン調査)

	回答数	男性	女性	p 値	p 値 (有意差)
1. 進学するための相談や手助け	111	26.5%	42.1%	0.00	**
2. 仕事につくための相談や手助け	46	16.1%	11.8%	0.28	
3. 学校の勉強についての相談や手助け	115	31.0%	38.8%	0.15	
4. 自分の気持ちをはっきり表現したり、人とうまくつきあったりする方法についての相談や手助け	151	45.8%	48.7%	0.61	
5. 友人と知り合えたり、仲間と過ごせたりする居場所についての情報提供	133	43.2%	41.4%	0.75	
6. 精神的・身体的な不調についての相談や手助け	141	37.4%	52.0%	0.01	*
7. 規則正しい生活習慣についての相談や手助け	43	12.9%	13.8%	0.81	
8. その他	18	7.1%	4.6%	0.35	
9. とくにない	61	20.6%	15.8%	0.27	

*p<0.05、**p<0.01

オンライン調査において、以下の項目では、男女間でその選択率に有意な差がある。

男性に比べて女性の選択率が有意に高い項目は、女性と男性の選択率の乖離が大きかった順に「進学するための相談や手助け」「精神的・身体的な不調についての相談や手助け」であった。

(5) 不登校経験に関する振り返り (Q7)

■ 男女別の各項目の選択率と p 値

※設問及び選択肢については、P. 35 を参照する。

(インターネット調査)

	回答数	男性	女性	p 値	p 値 (有意差)
1. 行けばよかった	3,013	19.4%	14.0%	0.00	**
2. しかたがなかった	6,028	32.2%	34.1%	0.01	**
3. 行かなくてよかった	4,739	24.6%	27.3%	0.00	**
4. 何とも思わない	4,278	23.2%	23.6%	0.44	
5. その他	149	0.6%	1.0%	0.01	**

*p<0.05、**p<0.01

インターネット調査において、以下の項目では、男女間でその選択率に有意な差がある。女性に比べて男性の選択率が有意に高い項目は、「行けばよかった」であった。一方、

男性に比べて女性の選択率が有意に高い項目は、女性と男性の選択率の乖離が大きかった順に「行かなくてよかった」「しかたがなかった」「その他」であった。

(オンライン調査)

	回答数	男性	女性	p 値	p 値 (有意差)
1. 行けばよかった	50	18.1%	14.5%	0.39	
2. しかたがなかった	118	36.8%	37.5%	0.90	
3. 行かなくてよかった	94	26.5%	32.2%	0.27	
4. 何とも思わない	39	12.9%	9.9%	0.40	
5. その他	20	5.8%	5.9%	0.97	

*p<0.05、**p<0.01

オンライン調査において、統計的な有意差が見られた項目はなかった。

(6) 中学卒業以降において支えとなるアドバイスをしてくれた人 (Q12)

■ 男女別の各項目の選択率と p 値

※設問及び選択肢については、P. 49 を参照する。

(インターネット調査)

	回答数	男性	女性	p 値	p 値 (有意差)
1. 家族	7,693	40.3%	44.3%	0.00	**
2. 友人	6,583	34.0%	38.3%	0.00	**
3. 職場の上司・同僚	2,611	16.3%	12.5%	0.00	**
4. 先生	2,454	13.2%	13.8%	0.26	
5. 学校の相談員 (スクールカウンセラーなど)	1,102	6.8%	5.3%	0.00	**
6. 自治体の相談員	648	4.6%	2.6%	0.00	**
7. 医師	1,263	6.1%	7.7%	0.00	**
8. その他	261	1.1%	1.7%	0.00	**
9. とくにない	5,997	32.6%	33.1%	0.52	

*p<0.05、**p<0.01

インターネット調査において、以下の項目では、男女間でその選択率に有意な差がある。

女性に比べて男性の選択率が有意に高い項目は、男性と女性の選択率の乖離が大きかった順に「職場の上司・同僚」「自治体の相談員」「学校の相談員 (スクールカウンセラーなど)」であった。一方、男性に比べて女性の選択率が有意に高い項目は、「友人」「家族」

「医師」であった。

(オンライン調査)

	回答数	男性	女性	p 値	p 値 (有意差)
1. 家族	203	65. 2%	60. 5%	0. 40	
2. 友人	154	45. 8%	48. 0%	0. 70	
3. 職場の上司・同僚	41	14. 2%	10. 5%	0. 33	
4. 先生	100	32. 9%	28. 9%	0. 45	
5. 学校の相談員 (スクールカウンセラーなど)	39	17. 4%	6. 6%	0. 00	**
6. 自治体の相談員	34	11. 6%	9. 2%	0. 49	
7. 医師	52	16. 8%	16. 4%	0. 94	
8. その他	49	14. 2%	17. 1%	0. 48	
9. とくにない	40	11. 6%	14. 5%	0. 46	

*p<0. 05、**p<0. 01

オンライン調査において、以下の項目では、男女間でその選択率に有意な差がある。

女性に比べて男性の選択率が有意に高い項目は、「学校の相談員 (スクールカウンセラーなど)」であった。

(7) 不登校経験と中学卒業後の経験との関連について (Q13)

■ 男女別の各項目の選択率と p 値

※設問及び選択肢については、P. 51 を参照する。

(インターネット調査)

	おおいにあった				
	回答数	男性	女性	p 値	p 値 (有意差)
a. 学業 (受験、資格試験など) で苦労した	3, 399	19. 0%	18. 4%	0. 34	
b. 仕事 (就職活動を含む) で苦労した	3, 940	22. 9%	20. 4%	0. 00	**
c. 体力が低下したり不足したりして苦労した	3, 071	15. 3%	18. 3%	0. 00	**
d. 生活リズムが乱れ苦労した	3, 908	21. 7%	21. 2%	0. 38	
e. 人との関わりに不安を感じたり、人と関わりをもつことに苦労した	6, 361	31. 0%	38. 5%	0. 00	**
f. 成長した、視野が広がった	2, 978	15. 6%	17. 0%	0. 01	*
g. 人に優しくなった、人の痛みが分かるようになった	4, 381	21. 4%	26. 5%	0. 00	**

*p<0. 05、**p<0. 01

	ある程度あった				
	回答数	男性	女性	p 値	p 値 (有意差)
a. 学業 (受験、資格試験など) で苦労した	6, 113	36. 2%	31. 2%	0. 00	**
b. 仕事 (就職活動を含む) で苦労した	5, 698	33. 9%	28. 9%	0. 00	**
c. 体力が低下したり不足したりして苦労した	5, 388	31. 2%	28. 1%	0. 00	**
d. 生活リズムが乱れ苦労した	6, 191	36. 3%	31. 8%	0. 00	**
e. 人との関わりに不安を感じたり、人と関わりをもつことに苦労した	6, 382	36. 6%	33. 7%	0. 00	**
f. 成長した、視野が広がった	6, 815	37. 3%	37. 6%	0. 63	
g. 人に優しくなった、人の痛みが分かるようになった	7, 911	43. 7%	43. 3%	0. 56	

*p<0. 05、**p<0. 01

	あまりなかった				
	回答数	男性	女性	p 値	p 値 (有意差)
a. 学業（受験、資格試験など）で苦労した	4,840	25.7%	27.4%	0.01	*
b. 仕事（就職活動を含む）で苦労した	4,640	24.2%	26.8%	0.00	**
c. 体力が低下したり不足したりして苦労した	5,291	29.7%	28.5%	0.08	
d. 生活リズムが乱れ苦労した	4,571	24.3%	25.9%	0.02	*
e. 人との関わりに不安を感じたり、人に関わりをもつことに苦労した	3,308	20.2%	16.3%	0.00	**
f. 成長した、視野が広がった	5,432	30.2%	29.6%	0.43	
g. 人に優しくなった、人の痛みが分かるようになった	3,851	22.3%	20.1%	0.00	**

*p<0.05、**p<0.01

	ほとんどなかった				
	回答数	男性	女性	p 値	p 値 (有意差)
a. 学業（受験、資格試験など）で苦労した	3,855	19.1%	23.0%	0.00	**
b. 仕事（就職活動を含む）で苦労した	3,929	19.1%	23.9%	0.00	**
c. 体力が低下したり不足したりして苦労した	4,457	23.8%	25.1%	0.05	*
d. 生活リズムが乱れ苦労した	3,537	17.6%	21.1%	0.00	**
e. 人との関わりに不安を感じたり、人に関わりをもつことに苦労した	2,156	12.2%	11.4%	0.12	
f. 成長した、視野が広がった	2,982	17.0%	15.8%	0.03	*
g. 人に優しくなった、人の痛みが分かるようになった	2,064	12.5%	10.1%	0.00	**

*p<0.05、**p<0.01

インターネット調査において、以下の項目では、男女間でその選択率に有意な差がある。

「おおいにあった」について、女性に比べて男性の選択率が有意に高い項目は、「仕事（就職活動を含む）で苦労した」であった。一方、男性に比べて女性の選択率が有意に高い項目は、女性と男性の選択率の乖離が大きかった順に「人との関わりに不安を感じたり、人に関わりをもつことに苦労した」「人に優しくなった、人の痛みが分かるようになった」「体力が低下したり不足したりして苦労した」であった。

「ある程度あった」について、女性に比べて男性の選択率が有意に高い項目は、男性と女性の選択率の乖離が大きかった順に「学業（受験、資格試験など）で苦労した」「仕事（就職活動を含む）で苦労した」「生活リズムが乱れ苦労した」、であった。

「あまりなかった」について、女性に比べて男性の選択率が有意に高い項目は、男性と女性の選択率の乖離が大きかった順に「人との関わりに不安を感じたり、人と関わりをもつことに苦労した」「人に優しくなった、人の痛みが分かるようになった」であった。一方、男性に比べて女性の選択率が有意に高い項目は、女性と男性の選択率の乖離が大きかった順に「仕事（就職活動を含む）で苦労した」「学業（受験、資格試験など）で苦労した」「生活リズムが乱れ苦労した」であった。

「ほとんどなかった」について、女性に比べて男性の選択率が有意に高い項目は、男性と女性の選択率の乖離が大きかった順に「人に優しくなった、人の痛みが分かるようになった」「成長した、視野が広がった」であった。一方、男性に比べて女性の選択率が有意に高い項目は、女性と男性の選択率の乖離が大きかった順に「仕事（就職活動を含む）で苦労した」「学業（受験、資格試験など）で苦労した」「生活リズムが乱れ苦労した」であった。

（オンライン調査）

	おおいにあった				
	回答数	男性	女性	p 値	p 値（有意差）
a. 学業（受験、資格試験など）で苦労した	93	32.30%	28.30%	0.449	
b. 仕事（就職活動を含む）で苦労した	80	28.40%	21.70%	0.177	
c. 体力が低下したり不足したりして苦労した	95	32.90%	27.60%	0.315	
d. 生活リズムが乱れ苦労した	103	34.20%	30.90%	0.541	
e. 人との関わりに不安を感じたり、人と関わりをもつことに苦労した	133	38.70%	44.10%	0.340	
f. 成長した、視野が広がった	143	43.90%	45.40%	0.788	
g. 人に優しくなった、人の痛みが分かるようになった	146	45.20%	46.70%	0.785	

*p<0.05、**p<0.01

	ある程度あった				
	回答数	男性	女性	p 値	p 値（有意差）
a. 学業（受験、資格試験など）で苦労した	95	29.70%	27.60%	0.692	
b. 仕事（就職活動を含む）で苦労した	78	24.50%	24.30%	0.972	
c. 体力が低下したり不足したりして苦労した	96	27.70%	31.60%	0.462	
d. 生活リズムが乱れ苦労した	79	23.20%	25.00%	0.716	
e. 人との関わりに不安を感じたり、人と関わりをもつことに苦労した	108	35.50%	32.90%	0.633	

f. 成長した、視野が広がった	110	35.50%	31.60%	0.469	
g. 人に優しくなった、人の痛みが分かるようになった	119	36.80%	36.80%	0.990	

*p<0.05、**p<0.01

	あまりなかった				
	回答数	男性	女性	p 値	p 値 (有意差)
a. 学業（受験、資格試験など）で苦労した	80	22.60%	27.00%	0.373	
b. 仕事（就職活動を含む）で苦労した	63	16.10%	21.70%	0.212	
c. 体力が低下したり不足したりして苦労した	65	20.00%	20.40%	0.931	
d. 生活リズムが乱れ苦労した	77	23.20%	25.70%	0.620	
e. 人との関わりに不安を感じたり、人と関わりをもつことに苦労した	41	12.90%	12.50%	0.916	
f. 成長した、視野が広がった	48	14.20%	16.40%	0.583	
g. 人に優しくなった、人の痛みが分かるようになった	33	10.30%	9.90%	0.895	

*p<0.05、**p<0.01

	ほとんどなかった				
	回答数	男性	女性	p 値	p 値 (有意差)
a. 学業（受験、資格試験など）で苦勞した	53	15.50%	17.10%	0.700	
b. 仕事（就職活動を含む）で苦勞した	100	31.00%	32.20%	0.811	
c. 体力が低下したり不足したりして苦勞した	65	19.40%	20.40%	0.819	
d. 生活リズムが乱れ苦勞した	62	19.40%	18.40%	0.834	
e. 人との関わりに不安を感じたり、人と関わりをもつことに苦勞した	39	12.90%	10.50%	0.518	
f. 成長した、視野が広がった	20	6.50%	6.60%	0.964	
g. 人に優しくなった、人の痛みが分かるようになった	23	7.70%	6.60%	0.693	

*p<0.05、**p<0.01

オンライン調査において、男女間でその選択率に統計的な有意な差が見られた項目はなかった。

（８）第５章のまとめ

第５章では性別から見た不登校状況として、学校を休みはじめたきっかけ、不登校の継続の理由、不登校当時の施設の利用状況・相談した人、不登校当時の支援のニーズ、不登校経験に関する振り返り、中学卒業以降において支えとなるアドバイスをしてくれた人、不登校経験と中学卒業後の経験との関連について整理した。統計的に有意差があった回答を中心に記載した。

学校を休みはじめたきっかけについて、インターネット調査では、男性の方が選択率が高い項目は「勉強が分からなかった（授業についていけなかった、成績が良くなかったなど）」「先生との関係（先生が怒る、注意がうるさい、体罰など）」といった、学校生活への適応に関する困難である可能性を示唆している一方、女性の方が選択率が高い項目は「精神的な不調（漠然とした不安や気持ちの落ち込みなど）」「身体的な不調（学校に行こうとすると腹痛や頭痛に襲われたなど）」「友人との関係（いやがらせやいじめ）」といった、精神的・身体的な不調や人間関係による困難である可能性を示唆している。オンライン調査では、男性が学校生活への適応に関する困難である可能性、女性が精神的・身体的な不調や人間関係による困難である可能性であることは同様であるが、男性においては「学校生活に対してやる気が出なかった」、女性においては「先生との関係（先生と合わなかったなど）」「親との関係（親が怒る、親の言葉や態度への反発、親との会話がほとんどないなど）」など、異なるきっかけによるものも高いことが示唆される。

不登校の継続の理由について、インターネット調査では、男性の方が選択率が高い項目は学校を休みはじめたきっかけと同様、学校生活への適応に関する困難である可能性が示

唆されるとともに、「周囲の友人の影響（学校に行かないグループと近かった、友人に遊びに誘われたなど）」なども継続の理由になっている可能性が示唆される。女性の方が選択率が高い項目は、休みはじめたきっかけと同様、精神的・身体的な不調や人間関係による困難である可能性を示唆している。オンライン調査では、男性の方が選択率が高い項目はなかった。女性の方が選択率が高い項目は、インターネット調査と同様の傾向が見られた。

不登校当時の施設の利用状況・相談した人について、インターネット調査では、男性の方が選択率が高い項目は「児童相談所、福祉事務所」「保健所・保健センター」「教育支援センター（適応指導教室）・教育相談所」といった、学校外の公的機関を利用する傾向が見られた一方、女性の方が選択率が高い項目は「学校の先生（担任の先生や保健室の先生など）」「学校にいる相談員（スクールカウンセラーなど）」「病院・診療所」といった学校内の資源や医療機関を利用しており、きっかけや継続の理由に対応した相談先となっている。オンライン調査では、男性の方が選択率が高い項目はインターネット調査と同様の傾向が見られた。女性の方が選択率が高い項目はなかった。

不登校当時の支援のニーズについて、インターネット調査では、男性の方が選択率が高い項目は「仕事につくための相談や手助け」といった卒業後を視野に入れた支援ニーズである可能性を示唆していた一方、女性の方が選択率が高い項目は「精神的・身体的な不調についての相談や手助け」「自分の気持ちをはっきり表現したり、人とうまくつきあったりするための方法についての相談や手助け」「友人と知り合えたり、仲間と過ごせたりする居場所についての情報提供」といった人間関係による困難の解決方法に関する支援ニーズである可能性を示唆している。オンライン調査では、男性の方が選択率が高い項目はなかった。女性の方が選択率が高い項目は「進学するための相談や手助け」「精神的・身体的な不調についての相談や手助け」であった。

不登校経験に関する振り返りについて、インターネット調査では、男性の方が選択率が高い項目は「行けばよかった」と、学校に通わない期間があることに対して女性より後悔を感じている可能性が示唆される一方、女性の方が選択率が高い項目は「行かなくてよかった」「しかたがなかった」「その他」であった。オンライン調査では、統計的な有意差が見られた項目はなかった。

中学卒業以降において支えとなるアドバイスをしてくれた人について、インターネット調査では、男性の方が選択率が高い項目は「職場の上司・同僚」「自治体の相談員」「学校の相談員（スクールカウンセラーなど）」など、中学卒業以降の新しい人間関係や相談支援を行う方において、支えとなるアドバイスをしてくれたと感じている可能性が示唆される。女性の方が選択率が高い項目は「友人」「家族」「医師」など、男性に比べ、身近な人間関係において、支えとなるアドバイスをしてくれたと感じている可能性が示唆される。オンライン調査では、男性の方が選択率が高い項目はインターネット調査と同様の傾向が見られた。女性の方が選択率が高い項目はなかった。

不登校経験と中学卒業後の経験との関連について、インターネット調査では、「おおいにあった」「ある程度あった」の回答において、男性の方が選択率が高い項目は「仕事（就職活動を含む）で苦労した」「学業（受験、資格試験など）で苦労した」「生活リズムが乱れ苦労した」（順不同）など、自身のキャリアや生活における苦労が女性より多い可能性が示唆される。一方、「おおいにあった」「ある程度あった」の回答において、女性の方が選択率が高い項目は「人との関わりに不安を感じたり、人と関わりをもつことに苦労した」「人に優しくなった、人の痛みが分かるようになった」「体力が低下したり不足したりして苦労した」など、人間関係に関する苦労や成長に加え、体力の低下等について、男性より関連を感じている可能性が示唆される。「ある程度あった」「ほとんどなかった」の回答においては、男女の差が逆転している傾向が見られた。オンライン調査では、男女間でその選択率に統計的な有意な差が見られた項目はなかった。

全体的に、上記の性差は女性、男性のみに限定したものではなく、あくまで統計的に男女差が見られた結果であり、男性においても人間関係や精神的・身体的不調に困難を抱えている者もいれば、学校生活への適応、中学校卒業後のキャリアなどに困難を抱えている女性もいることには留意が必要である。

第6章 年代別に見た不登校状況

(1) 学校を休みはじめたきっかけ (Q2)

■ 年代別の各項目の選択率

※設問及び選択肢については、P. 11 を参照する。なお、以降のクロス集計表において、表中の数値は、クロス表から求めた標準化残差⁶²の値を示したものである。なお、標準化残差の値の結果が 1.96 以上であれば、項目間で有意な（偶然でない可能性が高い）関連があることを示している。以下の表では、この残差が 2 以上の箇所（有意な正の相関が認められる箇所）を斜体下線で表示している。

(インターネット調査)

Q2											
年代		1. 友人 (いやがらせ やいじめ)	2. 友人 (いやがらせ やいじめを除く)	3. 先生 (怒る、うるさい、体罰)	4. 先生 (相性)	5. 勉強	6. 授業	7. きまり	8. やる気	9. 合わなかった	10. 環境の変化
	10 代後半	-4.9	<u>2.2</u>	1.7	1.7	0.6	-0.7	-1.1	0.9	0.4	0.4
	20 代前半	-4.9	<u>4.4</u>	0.0	1.4	-1.3	-2.4	0.7	-0.3	-1.0	0.0
	20 代後半	-2.9	<u>3.5</u>	-2.2	-0.4	-1.6	-5.3	1.3	0.3	-0.7	1.3
	30 代前半	-1.4	<u>4.1</u>	-0.8	-1.0	0.5	-2.4	<u>2.8</u>	0.5	<u>2.1</u>	0.5
	30 代後半	-1.3	<u>5.4</u>	1.5	-1.1	1.5	0.8	<u>2.2</u>	0.6	-0.2	-0.1
	40 代前半	-0.2	-0.5	-0.6	1.0	1.9	<u>2.4</u>	-1.4	1.8	0.6	0.2
	40 代後半	<u>4.3</u>	-2.4	1.4	0.3	-0.1	<u>2.3</u>	-0.6	0.1	-0.4	-1.4
	50 代前半	<u>4.3</u>	-7.8	-0.5	0.2	-2.1	-0.5	-3.3	-0.6	-1.6	-1.2
	50 代後半	<u>2.0</u>	-6.4	0.5	-0.6	0.7	<u>4.3</u>	-1.3	-3.0	0.9	0.9

Q2										
年代		11. 親	12. 家庭環境	13. 精神的不調	14. 身体的不調	15. 障害	16. 生活リズム	17. ネット等	18. その他	19. わからない
	10 代後半	0.7	-0.8	<u>8.4</u>	<u>5.3</u>	<u>3.9</u>	<u>3.5</u>	0.9	-0.5	1.6
	20 代前半	-0.8	-2.1	<u>6.7</u>	<u>4.2</u>	<u>5.0</u>	<u>5.8</u>	<u>7.1</u>	-2.2	-0.7
	20 代後半	-1.7	-0.5	<u>2.2</u>	-0.1	<u>2.0</u>	<u>2.8</u>	<u>3.0</u>	-1.3	0.0
	30 代前半	-0.7	1.2	<u>4.9</u>	<u>2.9</u>	<u>2.3</u>	0.7	<u>3.4</u>	-0.9	-0.7
	30 代後半	-0.9	0.9	0.8	-2.1	<u>2.1</u>	0.9	<u>3.4</u>	-0.5	-1.2
	40 代前半	1.4	1.3	1.6	0.5	-0.8	-1.3	-0.6	1.6	0.7
	40 代後半	<u>2.9</u>	0.7	-2.8	-2.1	-2.2	-2.5	-3.2	0.2	0.1
	50 代前半	-1.3	-2.0	-6.4	-1.7	-4.5	-2.7	-6.4	<u>2.3</u>	0.4

⁶² 標準化残差については、p3 を参照。

50 代後半	0.6	-0.1	-7.8	-1.8	-3.6	-2.9	-4.8	0.1	0.8
--------	-----	------	------	------	------	------	------	-----	-----

インターネット調査においては、10 代後半において統計的に差のある項目のうち、上位 3 項目として、「精神的な不調（漠然とした不安や気持ちの落ち込みなど）」「身体的な不調（学校に行こうとすると腹痛や頭痛に襲われたなど）」「障害による学習上・生活上の困難」がある。20 代前半において統計的に差のある項目のうち、上位 3 項目として、「インターネットやメール、ゲームなどの影響（一度始めると止められない、学校より楽しいなど）」「精神的な不調（漠然とした不安や気持ちの落ち込みなど）」「生活リズムの乱れ（朝起きられないなど）」がある。20 代後半において統計的に差のある項目のうち、上位 3 項目として、「友人との関係（いやがらせやいじめを除く）」「インターネットやメール、ゲームなどの影響（一度始めると止められない、学校より楽しいなど）」「生活リズムの乱れ（朝起きられないなど）」がある。30 代前半において統計的に差のある項目のうち、上位 3 項目として、「精神的な不調（漠然とした不安や気持ちの落ち込みなど）」「友人との関係（いやがらせやいじめを除く）」「インターネットやメール、ゲームなどの影響（一度始めると止められない、学校より楽しいなど）」がある。30 代後半において統計的に差のある項目のうち、上位 3 項目として、「友人との関係（いやがらせやいじめを除く）」「インターネットやメール、ゲームなどの影響（一度始めると止められない、学校より楽しいなど）」「学校のきまりなどの問題（学校の校則がきびしいなど）」がある。40 代前半において統計的に差のある項目として、「授業が面白くなかった」がある。40 代後半において統計的に差のある項目として、「友人との関係（いやがらせやいじめ）」「親との関係（親が怒る、親の言葉や態度への反発、親との会話がほとんどないなど）」「授業が面白くなかった」がある。50 代前半において統計的に差のある項目として、「友人との関係（いやがらせやいじめ）」「その他」がある。50 代後半において統計的に差のある項目として、「授業が面白くなかった」「友人との関係（いやがらせやいじめ）」がある。

例えば、40 代後半から 50 代後半にかけては「友人との関係（いやがらせやいじめ）」「授業が面白くなかった」といったきっかけが上位にあるのに対し、20 代前半から 30 代後半にかけては「インターネットやメール、ゲームなどの影響（一度始めると止められない、学校より楽しいなど）」に代表されるオンライン上の居場所へのアクセスのしやすさなど、子供を取り巻く環境の変化等により、学校を休みはじめたきっかけは時代とともに変わりつつあることが示唆される。

(オンライン調査)

Q2											
年代		1. 友人 (いやがらせやいじめ)	2. 友人 (いやがらせやいじめを除く)	3. 先生 (怒る、うるさい、体罰)	4. 先生 (相性)	5. 勉強	6. 授業	7. きまり	8. やる気	9. 合わなかった	10. 環境の変化
	10 代後半	-1.5	0.8	-1.4	-0.2	-0.5	-1.2	0.0	0.9	-0.8	-1.1
	20 代前半	0.4	0.3	1.7	<u>2.1</u>	0.7	1.3	-0.7	-0.9	1.8	-0.2
	20 代後半	-1.0	-0.9	-2.4	-1.3	-0.6	-1.5	-0.7	0.0	-0.4	-0.3
	30 代前半	-1.9	0.5	-0.6	-0.4	-0.2	0.6	0.9	1.6	0.1	<u>2.7</u>
	30 代後半	-0.5	-1.0	-1.5	-0.8	0.3	-0.3	0.2	-0.9	-0.5	0.3
	40 代前半	<u>2.8</u>	0.3	1.0	-0.5	1.0	1.4	0.4	-0.7	0.1	-0.6
	40 代後半	1.3	-0.3	<u>3.6</u>	0.5	-1.5	-0.8	-0.3	0.9	0.2	-0.5
	50 代前半	1.3	-0.4	1.0	0.1	-0.7	0.1	1.7	-1.4	-1.4	-1.0
	50 代後半	<u>2.4</u>	-1.1	-0.9	-1.2	2.0	0.5	-0.9	-1.2	-0.8	1.4

Q2										
年代		11. 親	12. 家庭環境	13. 精神的不調	14. 身体的不調	15. 障害	16. 生活リズム	17. ネット等	18. その他	19. わからない
	10 代後半	-0.9	-2.4	1.1	-0.4	1.0	0.3	<u>2.9</u>	-0.2	-0.1
	20 代前半	-0.1	-0.2	1.0	-1.2	0.6	-0.4	1.0	0.5	-1.2
	20 代後半	-1.2	0.2	1.2	0.6	-0.2	0.8	-0.8	-0.5	<u>2.3</u>
	30 代前半	2.0	0.8	0.0	0.7	0.2	1.5	-0.1	0.2	0.5
	30 代後半	-1.3	1.0	0.1	0.4	-0.5	0.3	-1.6	-0.9	0.1
	40 代前半	0.4	0.9	-2.9	-1.1	-1.1	-0.9	-2.2	-0.3	-0.5
	40 代後半	0.7	-0.3	-1.2	1.1	-1.3	-1.4	-0.8	1.6	-1.0
	50 代前半	-0.6	0.6	-0.8	1.2	0.2	-0.7	-1.2	-0.6	0.7
	50 代後半	<u>2.2</u>	<u>2.5</u>	-0.5	1.1	-0.5	-0.9	-0.7	-0.4	-0.4

オンライン調査においては、10 代後半において統計的に差のある項目として、「インターネットやメール、ゲームなどの影響（一度始めると止められない、学校より楽しいなど）」がある。20 代前半において統計的に差のある項目として、「先生との関係（先生と合わなかったなど）」がある。20 代後半において統計的に差のある項目として、「わからない」がある。30 代前半において統計的に差のある項目として、「家族の生活環境の変化（父親や母親の単身赴任、家族の別居、親の転職や失業などの経済的な問題など）」がある。30 代後半において統計的に差のある項目はなかった。40 代前半において統計的に差のある項目として、「友人との関係（いやがらせやいじめ）」がある。40 代後半において統計的に差のある項目として、「先生との関係（先生が怒る、注意がうるさい、体罰など）」がある。

50代前半において統計的に差のある項目はなかった。50代後半において統計的に差のある項目として、「家族の生活環境の変化（父親や母親の単身赴任、家族の別居、親の転職や失業などの経済的な問題など）」「友人との関係（いやがらせやいじめ）」「親との関係（親が怒る、親の言葉や態度への反発、親との会話がほとんどないなど）」がある。

インターネット調査と比較して統計的に有意な項目は少ないが、40代前半から50代後半にかけて「友人との関係（いやがらせやいじめ）」との関連が示唆されているのに対し、10代前半では全年代のうち唯一「インターネットやメール、ゲームなどの影響（一度始めると止められない、学校より楽しいなど）」が期待値を上回っているなど、インターネット調査と同様、時代とともにきっかけも変化している可能性が示唆される。

(2) 不登校の継続の理由 (Q4)

(インターネット調査)

Q4											
年代		1. 友人 (いやがらせ やいじめ)	2. 友人 (いやがらせやい じめを除く)	3. 先生 (怒る、うるさ い、体罰)	4. 先生 (相性)	5. 勉 強	6. 授 業	7. 友 人(影 響)	8. や る気	9. 悪 気なし	10. 断 続的な 登校
	10 代後半	-4.7	0.4	1.2	0.3	0.1	-0.2	-1.8	0.3	-0.5	0.7
	20 代前半	-5.0	1.5	-0.1	-0.2	-0.6	-3.5	2.0	-0.2	-0.9	1.9
	20 代後半	-3.6	<u>2.3</u>	-1.9	0.8	-1.3	-4.1	<u>2.1</u>	-1.8	-0.8	<u>3.2</u>
	30 代前半	-2.8	<u>3.8</u>	0.5	-1.3	1.7	-3.2	<u>3.0</u>	0.4	0.7	1.7
	30 代後半	-2.2	<u>5.5</u>	1.3	-0.2	<u>2.2</u>	1.8	<u>2.5</u>	0.4	1.1	1.2
	40 代前半	0.2	0.4	-1.3	1.7	1.1	<u>2.6</u>	-1.9	<u>3.3</u>	0.2	-0.6
	40 代後半	<u>5.7</u>	-1.5	<u>2.4</u>	0.3	0.2	1.9	0.5	0.3	1.0	-0.1
	50 代前半	<u>4.8</u>	-6.5	-1.1	-0.6	-2.6	-0.1	-3.4	-0.7	-0.1	-3.0
	50 代後半	<u>2.7</u>	-5.5	-0.4	-0.6	-1.3	<u>3.3</u>	-3.8	-2.3	-1.5	-4.1

Q4												
年代		11. 精 神的 不 調	12. 身 体 的 不 調	13. 生 活 リ ズ ム	14. 登 校 へ の 疑 問	15. 好 み の 選 択	16. 親 か ら の 注 意 不 足	17. 学 校 か ら の 支 援 不 足	18. 助 言	19. 障 害	20. そ の 他	21. わ か ら な い
	10 代後半	<u>6.4</u>	<u>3.9</u>	<u>2.3</u>	1.7	2.0	1.3	-1.2	<u>2.6</u>	<u>4.6</u>	-0.5	1.2
	20 代前半	<u>4.1</u>	<u>2.8</u>	<u>5.3</u>	0.7	<u>4.1</u>	<u>2.1</u>	-0.7	<u>5.4</u>	<u>5.2</u>	-2.0	1.1
	20 代後半	<u>2.2</u>	0.8	1.6	-0.9	-0.5	1.2	1.1	<u>6.1</u>	<u>3.0</u>	-2.3	-0.7
	30 代前半	<u>4.4</u>	<u>3.1</u>	0.9	1.4	0.9	0.5	0.9	<u>4.4</u>	1.9	-0.4	-0.8
	30 代後半	1.0	-1.0	1.1	<u>2.5</u>	1.7	1.2	<u>2.1</u>	0.7	1.4	-0.7	-0.2
	40 代前半	<u>2.6</u>	1.1	-1.6	<u>3.6</u>	0.2	1.3	0.1	-2.6	-1.5	0.8	0.7
	40 代後半	-3.3	-2.2	-1.8	-0.6	-1.7	-2.7	-1.4	-2.9	-2.8	1.1	1.3
	50 代前半	-5.9	-1.8	-1.7	-2.3	-2.3	-1.5	-1.3	-5.4	-3.5	0.6	-1.1
	50 代後半	-5.9	-3.0	-3.0	-5.3	-2.0	-2.0	-0.7	-4.3	-3.4	<u>2.5</u>	-0.5

インターネット調査においては、10 代後半において統計的に差のある項目のうち、上位 3 項目として、「精神的な不調（漠然とした不安や気持ちの落ち込みなど）」「障害による学習上・生活上の困難」「身体的な不調（学校に行こうとすると腹痛や頭痛に襲われたなど）」がある。20 代前半において統計的に差のある項目のうち、上位 3 項目として、「保護者やまわりの人に学校を休んでもいいと助言されたため」「生活リズムの乱れ」「障害によ

る学習上・生活上の困難」がある。20 代後半において統計的に差のある項目のうち、上位 3 項目として、「保護者やまわりの人に学校を休んでもいいと助言されたため」「だれかが迎えに来たり強く催促されたりすると学校へ行くが、長続きしなかったため」「障害による学習上・生活上の困難」がある。30 代前半において統計的に差のある項目のうち、上位 3 項目として、「精神的な不調（漠然とした不安や気持ちの落ち込みなど）」「保護者やまわりの人に学校を休んでもいいと助言されたため」「友人との関係（いやがらせやいじめを除く）」がある。30 代後半において統計的に差のある項目のうち、上位 3 項目として、「友人との関係（いやがらせやいじめを除く）」「周囲の友人の影響（学校に行かないグループと近かった、友人に遊びに誘われたなど）」「なぜ学校に行かなくてはならないのかが理解できなかったため」がある。40 代前半において統計的に差のある項目のうち、上位 4 項目として、「なぜ学校に行かなくてはならないのかが理解できなかったため」「学校生活に対するやる気が出なかったため」「授業が面白くなかった」「精神的な不調（漠然とした不安や気持ちの落ち込みなど）」がある。40 代後半において統計的に差のある項目として、「友人との関係（いやがらせやいじめ）」「先生との関係（先生が怒る、注意がうるさい、体罰など）」がある。50 代前半において統計的に差のある項目として、「友人との関係（いやがらせやいじめ）」がある。50 代後半において統計的に差のある項目として、「授業が面白くなかった」「友人との関係（いやがらせやいじめ）」「その他」がある。

友人に関する項目について、40 代後半から 50 代後半まではいやがらせやいじめが不登校継続と関連があるが、20 代後半から 30 代後半にかけてはいやがらせやいじめ以外の要因が関連するという転換が起きている。

授業に関する項目について、20 代前半から 30 代後半では関連が見られないが、「友人との関係（いやがらせやいじめを除く）」「周囲の友人の影響（学校に行かないグループと近かった、友人に遊びに誘われたなど）」「保護者やまわりの人に学校を休んでもいいと助言されたため」といった項目との関連から、周囲の人間関係等の影響で不登校が継続している可能性が示唆される。

全体的な傾向としては、30 代後半や 40 代前半を境に、不登校の継続理由の傾向が変化していることが分かる。10 代後半から 30 代後半では、継続理由として、「精神的な不調（漠然とした不安や気持ちの落ち込みなど）」「身体的な不調（学校に行こうとすると腹痛や頭痛に襲われたなど）」「障害による学習上・生活上の困難」などの値が大きい。また、「保護者やまわりの人に学校を休んでもいいと助言されたため」との関連も示唆されており、家族や周囲の大人による不登校に対する認識の変化が進んだ可能性がある。

(オンライン調査)

Q4											
年代		1. 友人 (いやが らせや いじめ)	2. 友人 (いやが らせや いじめ を除く)	3. 先生 (怒る、 うるさ い、体 罰)	4. 先生 (相性)	5. 勉強	6. 授業	7. 友人 (影響)	8. やる 気	9. 悪気 なし	10. 断 続的な 登校
	10 代後半	-2.6	0.2	-3.1	-1.7	-0.9	-1.3	0.0	1.2	0.2	0.9
	20 代前半	0.0	-0.4	0.9	<u>2.5</u>	1.3	1.4	0.7	-0.5	0.2	0.7
	20 代後半	-0.6	-0.9	-0.1	-0.6	0.2	-0.7	-0.4	-0.2	1.2	-0.1
	30 代前半	-1.0	0.5	0.4	-0.4	-1.9	0.2	1.1	-0.2	-1.1	-0.4
	30 代後半	-0.8	0.9	-1.3	0.6	1.2	-0.1	0.4	-0.8	1.7	-0.8
	40 代前半	<u>3.3</u>	0.7	0.5	-0.6	1.0	0.3	-1.2	-0.4	-1.9	-1.5
	40 代後半	1.1	-0.7	<u>2.9</u>	-0.4	-1.1	-1.3	-0.8	1.0	-0.3	-0.7
	50 代前半	<u>2.0</u>	0.5	1.3	0.3	-0.1	1.2	-0.6	0.4	0.6	1.0
	50 代後半	<u>2.9</u>	-1.0	0.7	0.2	0.4	0.7	-0.4	-1.4	-0.7	1.2

Q4												
年代		11. 精 神的な 不調	12. 身 体的な 不調	13. 生 活リズ ム	14. 登 校への 疑問	15. 好 みの選 択	16. 親 からの 注意不 足	17. 学 校から の支援 不足	18. 助 言	19. 障 害	20. そ の他	21. わ からな い
	10 代後半	0.1	-0.8	0.4	0.7	0.2	-0.8	-0.9	1.1	0.0	-0.2	-0.8
	20 代前半	1.8	-1.1	0.7	-0.6	-1.0	-2.0	-0.5	0.6	1.5	-0.1	-0.7
	20 代後半	0.4	0.9	0.0	0.1	1.4	1.7	1.1	0.9	0.1	-1.4	<u>2.1</u>
	30 代前半	-0.2	-0.1	-0.1	0.1	0.0	0.2	-0.2	-1.8	-0.2	<u>2.6</u>	1.8
	30 代後半	0.8	-0.2	<u>2.2</u>	1.8	1.1	<u>2.1</u>	-0.7	0.1	-0.3	-0.9	-0.9
	40 代前半	-2.4	-0.3	-1.0	-0.7	0.7	0.9	<u>2.6</u>	0.5	-0.2	-0.3	-1.2
	40 代後半	-0.5	1.6	-1.8	-1.3	-1.4	-0.4	-0.7	-1.2	-1.2	0.4	-0.9
	50 代前半	-1.4	1.8	-1.0	0.3	-1.0	-1.0	-0.5	-1.4	-0.9	-0.6	1.0
	50 代後半	-0.8	1.1	-1.0	-0.8	-0.6	1.5	-0.3	-0.8	-0.5	-0.4	-0.4

オンライン調査においては、10 代後半において統計的に差のある項目はなかった。20 代前半において統計的に差のある項目として、「先生との関係（先生と合わなかったなど）」がある。20 代後半において統計的に差のある項目として、「わからない」がある。30 代前半において統計的に差のある項目として、「その他」がある。30 代後半において統計的に差のある項目として、「生活リズムの乱れ」「親から登校するようすすめられず、家にいても親から注意されなかったため」がある。40 代前半において統計的に差のある項目として、「友人との関係（いやがらせやいじめ）」「学校から登校するよう働きかけがなかったため」がある。40 代後半において統計的に差のある項目として、「先生との関係（先生が怒る、注意がうるさい、体罰など）」がある。50 代前半において統計的に差のある項目とし

て、「友人との関係（いやがらせやいじめ）」がある。50 代後半において統計的に差のある項目として、「友人との関係（いやがらせやいじめ）」がある。

40 代前半以降において「友人との関係（いやがらせやいじめ）」との関連が示唆されており、インターネット調査と共通した傾向を持つ。一方で、20 代後半から 30 代後半において「友人との関係（いやがらせやいじめを除く）」との有意差が見られないなど、インターネット調査とは異なる傾向もみられる。

（3）不登校当時に相談した機関や人（Q5）

（インターネット調査）

Q5												
年代		1. 教育支援センター	2. 児相	3. 保健所	4. 病院	5. 民間施設	6. その他機関	7. 先生	8. 学校の相談員	9. SNS	10. その他	11. なし
	10 代後半	1.8	-0.1	-0.9	<u>7.6</u>	1.7	0.0	<u>4.5</u>	<u>7.0</u>	<u>3.0</u>	-1.5	-5.4
	20 代前半	<u>5.3</u>	-0.4	<u>3.0</u>	<u>8.9</u>	<u>5.0</u>	<u>8.0</u>	<u>8.3</u>	<u>17.7</u>	<u>10.3</u>	-0.2	-14.0
	20 代後半	<u>5.5</u>	0.4	<u>4.7</u>	<u>6.2</u>	<u>7.7</u>	<u>7.4</u>	<u>8.9</u>	<u>16.8</u>	<u>8.4</u>	-2.5	-16.6
	30 代前半	<u>4.1</u>	0.7	<u>4.3</u>	<u>3.6</u>	<u>7.2</u>	<u>5.7</u>	<u>4.1</u>	<u>11.0</u>	<u>5.0</u>	-1.9	-11.4
	30 代後半	<u>4.8</u>	<u>2.5</u>	<u>4.3</u>	1.3	<u>7.6</u>	<u>3.3</u>	-0.3	<u>3.4</u>	0.9	-1.0	-5.5
	40 代前半	0.5	0.0	-2.5	-1.4	-3.6	-3.2	-2.3	-7.8	-3.6	1.4	<u>4.9</u>
	40 代後半	-1.6	1.1	-2.6	-4.5	-3.9	-4.2	-3.6	-11.1	-5.6	1.0	<u>8.5</u>
	50 代前半	-8.7	-3.2	-5.1	-8.1	-10.1	-6.9	-6.8	-13.4	-6.7	<u>2.0</u>	<u>16.2</u>
	50 代後半	-9.0	-1.2	-5.0	-5.3	-8.9	-7.4	-6.7	-12.2	-5.8	1.5	<u>14.6</u>

インターネット調査において、10 代後半において統計的に差のある項目のうち、上位 3 項目として、「病院・診療所」「学校にいる相談員（スクールカウンセラーなど）」「学校の先生（担任の先生や保健室の先生など）」がある。20 代前半において統計的に差のある項目のうち、上位 3 項目として、「学校にいる相談員（スクールカウンセラーなど）」「SNS や電話相談」「病院・診療所」がある。20 代後半において統計的に差のある項目のうち、上位 3 項目として、「学校にいる相談員（スクールカウンセラーなど）」「学校の先生（担任の先生や保健室の先生など）」「SNS や電話相談」がある。30 代前半において統計的に差のある項目のうち、上位 3 項目として、「学校にいる相談員（スクールカウンセラーなど）」「民間施設（「フリースクール」と呼ばれる場所など）」「1～5. 以外で当時の在籍校以外の心理相談・カウンセリングなどをする機関」がある。30 代後半において統計的に差のあ

る項目のうち、上位3項目として、「民間施設（「フリースクール」と呼ばれる場所など）」「教育支援センター（適応指導教室）・教育相談所」「保健所・福祉事務所」がある。40代前半において統計的に差のある項目として、「何も利用しなかった」がある。40代後半において統計的に差のある項目として、「何も利用しなかった」がある。50代前半において統計的に差のある項目として、「何も利用しなかった」「その他」がある。50代後半において統計的に差のある項目として、「何も利用しなかった」がある。

40代前半以降においては「何も利用しなかった」との有意差があり、30代後半以前の不登校経験者と比べると相談する機会が少なかった可能性が示唆される。一方で、30代後半以前の不登校経験者は、学校内外でカウンセラー等に相談をしていることが示唆される。

（オンライン調査）

Q5												
年代		1. 教育支援センター	2. 児相	3. 保健所	4. 病院	5. 民間施設	6. その他機関	7. 先生	8. 学校の相談員	9. SNS	10. その他	11. なし
	10代後半	1.5	-1.1	0.3	1.4	2.0	-0.9	<u>2.7</u>	<u>2.1</u>	0.5	1.4	-2.7
	20代前半	1.0	1.2	0.5	1.6	-0.3	1.7	1.9	<u>2.2</u>	0.7	-0.3	-2.2
	20代後半	-1.4	1.1	-1.2	0.0	-1.0	0.4	-2.2	-1.1	-1.1	-0.1	1.2
	30代前半	-0.5	-1.2	-1.3	-1.3	1.0	0.7	-0.8	1.3	0.7	-1.7	0.3
	30代後半	-0.3	-0.2	-0.8	1.2	0.0	-0.5	-1.6	-1.2	0.7	-1.1	-0.3
	40代前半	-0.6	0.0	<u>2.1</u>	-2.8	-1.1	-1.1	-1.3	-2.9	-1.0	1.1	<u>3.0</u>
	40代後半	0.4	0.9	-0.8	-1.3	-1.0	-0.4	-2.0	-2.7	-0.7	1.1	1.8
	50代前半	-1.4	-0.8	1.3	0.0	-0.5	-1.0	0.1	-1.3	-0.5	-0.8	<u>2.7</u>
	50代後半	-1.2	-0.5	-0.3	-1.2	-1.1	-0.6	0.9	-1.1	-0.3	-0.4	0.6

オンライン調査において、10代後半において統計的に差のある項目として、「学校の先生（担任の先生や保健室の先生など）」「学校にいる相談員（スクールカウンセラーなど）」がある。20代前半において統計的に差のある項目として、「学校にいる相談員（スクールカウンセラーなど）」がある。40代前半において統計的に差のある項目として、「保健所・福祉事務所」「何も利用しなかった」がある。50代前半において統計的に差のある項目として、「何も利用しなかった」がある。なお、20代後半、30代前半、30代後半、40代後半、50代後半において統計的に差のある項目はなかった。

(4) 不登校当時の支援のニーズ(Q6)

(インターネット調査)

Q6										
年代		1. 進学	2. 仕事	3. 勉強	4. 表現	5. 居場所	6. 悩み	7. 生活	8. その他	9. なし
	10代後半	<u>2.1</u>	0.5	<u>2.5</u>	0.2	0.9	<u>2.9</u>	1.3	-2.1	-0.9
	20代前半	<u>5.4</u>	<u>2.3</u>	<u>5.0</u>	1.9	1.3	<u>3.1</u>	<u>3.8</u>	-3.1	-5.5
	20代後半	1.1	<u>2.4</u>	<u>2.4</u>	<u>3.5</u>	<u>4.0</u>	<u>3.1</u>	<u>3.4</u>	-4.2	-6.1
	30代前半	0.8	<u>3.9</u>	<u>3.2</u>	<u>2.3</u>	1.5	1.0	1.8	-0.3	-4.2
	30代後半	<u>3.7</u>	<u>8.6</u>	<u>4.3</u>	<u>3.3</u>	<u>2.8</u>	0.8	<u>2.6</u>	1.1	-4.3
	40代前半	<u>4.3</u>	1.6	<u>2.5</u>	0.3	1.4	1.9	-0.8	0.3	-0.1
	40代後半	0.2	-1.5	-1.3	-1.7	-1.2	-1.4	-3.2	0.4	<u>2.5</u>
	50代前半	-6.7	-8.7	-7.5	-4.6	-4.6	-3.7	-3.8	<u>2.2</u>	<u>8.0</u>
	50代後半	-8.5	-8.8	-8.2	-4.6	-5.3	-4.8	-3.0	<u>3.1</u>	<u>8.4</u>

インターネット調査においては、10代後半において統計的に差のある項目のうち、上位3項目として、「精神的・身体的な不調についての相談や手助け」「学校の勉強についての相談や手助け」「進学するための相談や手助け」がある。20代前半において統計的に差のある項目のうち、上位3項目として、「進学するための相談や手助け」「学校の勉強についての相談や手助け」「規則正しい生活習慣についての相談や手助け」がある。20代後半において統計的に差のある項目のうち、上位3項目として、「友人と知り合えたり、仲間と過ごせたりする居場所についての情報提供」「自分の気持ちをはっきり表現したり、人とうまくつきあったりするための方法についての相談や手助け」「規則正しい生活習慣についての相談や手助け」がある。30代前半において統計的に差のある項目のうち、上位3項目として、「仕事につくための相談や手助け」「学校の勉強についての相談や手助け」「自分の気持ちをはっきり表現したり、人とうまくつきあったりするための方法についての相談や手助け」がある。30代後半において統計的に差のある項目のうち、上位3項目として、「仕事につくための相談や手助け」「学校の勉強についての相談や手助け」「進学するための相談や手助け」がある。40代前半において統計的に差のある項目のうち、上位2項目として、「進学するための相談や手助け」「学校の勉強についての相談や手助け」がある。40代後半において統計的に差のある項目として、「とくにない」がある。50代前半において統計的に差のある項目として、「とくにない」「その他」がある。50代後半において統計的に差のある項目として、「とくにない」「その他」がある。

40代後半以上において、「とくにない」との有意差が認められ、40代前半以下の不登校経験者と比べると相談する機会が少なかった可能性が考えられる。一方で、40代前半以下の不登校経験者は、「学校の勉強についての相談や手助け」「進学するための相談や手助け」「仕事につくための相談や手助け」を中心に支援ニーズがあったことが示唆される。

(オンライン調査)

Q6										
年代		1. 進学	2. 仕事	3. 勉強	4. 表現	5. 居場所	6. 悩み	7. 生活	8. その他	9. なし
	10代後半	-1.1	0.1	-0.2	-0.1	-0.8	0.0	1.5	-0.1	-0.1
	20代前半	1.1	-0.2	<u>2.3</u>	-0.2	1.2	0.8	0.5	-1.8	-1.0
	20代後半	-0.5	0.4	-0.7	0.0	-0.3	1.1	0.6	0.0	0.5
	30代前半	0.3	1.5	0.5	1.6	0.0	0.0	0.2	1.2	-1.6
	30代後半	-0.5	-1.0	1.0	0.5	-0.5	0.3	-1.7	0.1	0.5
	40代前半	-0.4	-1.2	-1.8	-0.6	1.2	-1.5	-1.1	<u>2.0</u>	1.2
	40代後半	1.9	0.5	-0.9	-1.3	0.2	-1.0	-1.6	-1.0	0.6
	50代前半	-0.8	-0.3	-1.6	-1.5	-1.2	-0.6	-0.2	0.7	2.0
	50代後半	0.0	-0.7	-1.3	1.8	-1.5	-0.4	-0.7	-0.4	-0.8

オンライン調査においては20代後半において統計的に差のある項目として「学校の勉強についての相談や手助け」があり、40代前半において統計的に差のある項目として「その他」がある。その他の年代においては有意差が見られなかった。

(5) 不登校経験に関する振り返り (Q7)

(インターネット調査)

Q7						
年代		1. 行けばよかった	2. しかたがなかった	3. 行かなくてよかった	4. 何とも思わない	5. その他
	10 代後半	0.8	-2.0	0.5	1.2	-0.6
	20 代前半	0.4	-0.5	1.3	-0.7	-1.9
	20 代後半	-1.8	0.4	1.5	-0.2	-1.1
	30 代前半	-0.3	-1.8	<u>2.4</u>	0.0	-1.1
	30 代後半	<u>5.4</u>	-1.2	-1.7	-1.4	-1.3
	40 代前半	0.4	0.3	-0.3	-0.4	-0.4
	40 代後半	1.1	0.5	0.0	-1.6	0.4
	50 代前半	-3.9	1.5	-0.7	<u>2.2</u>	1.1
	50 代後半	-2.0	1.2	-2.0	1.6	<u>4.3</u>

インターネット調査においては、10 代後半、20 代前半、20 代後半、40 代前半、40 代後半において、統計的な有意差は見られなかった。30 代前半においては、「行かなくてよかった」の項目において有意差が見られた。30 代後半においては、「行けばよかった」の項目において有意差が見られた。50 代前半においては、「何とも思わない」の項目において有意差が見られた。50 代後半においては、「その他」の項目において有意差が見られた。

10 代後半から 30 代前半までは、「行かなくてよかった」の回答が統計的な差は見られないものの期待値⁶³より多く観測されている。また、統計的な差は見られないものの、30 代後半から 40 代前半にかけては「行けばよかった」、20 代前半から 30 代前半にかけては「行かなくてよかった」といった項目が期待値より多く観測された。一方で、50 代は統計的な差は見られないものの、「しかたがなかった」「何とも思わない」のような見方をしている状況も見える。

⁶³ 期待値とは、2つの項目が独立していると仮定した上で、各セルに記載されうる数値を指し、観測値は本調査の回答を指す。

(オンライン調査)

Q7						
年代		1. 行けばよかった	2. しかたがなかった	3. 行かなくてよかった	4. 何とも思わない	5. その他
	10 代後半	0.8	0.1	-1.4	0.4	0.7
	20 代前半	0.7	-0.2	0.0	-1.3	1.1
	20 代後半	-0.8	1.0	-0.2	0.3	-0.9
	30 代前半	0.3	-0.4	-0.7	1.0	0.3
	30 代後半	-1.1	0.9	-0.5	1.5	-1.1
	40 代前半	-0.8	-0.3	1.5	-0.3	-0.6
	40 代後半	0.4	-1.0	1.9	-0.7	-1.1
	50 代前半	-1.3	0.5	0.3	-0.1	0.6
	50 代後半	0.9	-1.3	1.4	-0.6	-0.4

オンライン調査においては、統計的な有意差は見られなかった。世代間の傾向として、10 代後半、20 代前半においては「行けばよかった」、20 代後半から 30 代後半においては「何とも思わない」、40 代前半から 50 代後半においては「行かなくてよかった」といった項目において期待値より多く回答があり、インターネット調査と異なる結果を得た。

(6) 中学校卒業後の進路状況 (Q8)

Q8-a 中学校を卒業してすぐの時点（4 月時点）で、あなたの進路状況についてあてはまるものをひとつ選択してください。

(インターネット調査)

Q8-a						
年代		1. 就職せずに高等学校等に進学した	2. 高等学校等に進学せずに就職した	3. 就職して働きながら、高等学校等に進学もした	4. 高等学校等に進学もせず、就職もしなかった	5. その他
	10 代後半	<u>4.2</u>	-2.7	-3.1	-0.6	-1.0
	20 代前半	1.1	0.3	-0.7	-1.0	-2.2
	20 代後半	-3.7	<u>3.5</u>	<u>3.4</u>	-0.7	-2.1
	30 代前半	-1.6	1.0	<u>2.0</u>	-0.2	-1.3
	30 代後半	-2.6	-1.2	<u>2.7</u>	<u>3.4</u>	-0.8
	40 代前半	<u>2.1</u>	-1.8	-2.9	1.8	-0.6
	40 代後半	0.8	-0.6	-0.5	-0.6	<u>2.4</u>
	50 代前半	1.3	-1.0	-1.1	-1.0	<u>4.2</u>
	50 代後半	1.7	1.4	-2.2	-2.2	-0.5

インターネット調査においては、20 代前半、50 代後半において、統計的な有意差は見られなかった。10 代後半においては、「就職せずに高等学校等に進学した」の項目において有意差が見られた。20 代後半においては、「高等学校等に進学せずに就職した」「就職して働きながら、高等学校等に進学もした」の項目において有意差が見られた。30 代前半においては、「就職して働きながら、高等学校等に進学もした」の項目において有意差が見られた。30 代後半においては、「高等学校等に進学もせず、就職もしなかった」「就職して働きながら、高等学校等に進学もした」の項目において有意差が見られた。40 代前半においては、「就職せずに高等学校等に進学した」の項目において有意差が見られた。40 代後半、50 代前半においては、「その他」の項目において有意差が見られた。

20 代後半から 30 代後半までは就職関連の回答に有意差が見られており、特に就職と進学を両立している者が多い傾向が見られた。

(オンライン調査)

Q8-a						
年代		1. 就職せずに高等学校等に進学した	2. 高等学校等に進学せずに就職した	3. 就職して働きながら、高等学校等に進学もした	4. 高等学校等に進学もせず、就職もしなかった	5. その他
	10 代後半	0.2	0.4	0.9	-0.9	0.1
	20 代前半	1.8	-1.1	-1.5	-0.5	-1.1
	20 代後半	0.0	-0.6	0.6	-0.9	1.3
	30 代前半	1.4	1.1	-0.9	-1.1	-1.1
	30 代後半	-1.7	-0.4	-0.5	1.0	<u>2.5</u>
	40 代前半	-1.7	-0.5	-0.7	<u>2.6</u>	0.3
	40 代後半	-1.8	<u>2.3</u>	<u>3.6</u>	0.0	-0.7
	50 代前半	1.1	-0.3	-0.4	-0.8	-0.5
	50 代後半	-3.1	-0.2	-0.2	<u>4.4</u>	-0.3

オンライン調査においては、10 代後半から 30 代前半、50 代前半において、統計的な有意差は見られなかった。30 代後半においては、「その他」の項目において有意差が見られた。40 代前半においては、「高等学校等に進学もせず、就職もしなかった」の項目において有意差が見られた。40 代後半においては、「就職して働きながら、高等学校等に進学もした」「高等学校等に進学もせず、就職もしなかった」の項目において有意差が見られた。50 代後半においては、「高等学校等に進学もせず、就職もしなかった」の項目において有意差が見られた。

Q8-b どの高等学校等に進学しましたか。ひとつ選んでください。

(インターネット調査)

Q8-b								
年代		1. 全日制高校	2. 定時制高校	3. 通信制高校	4. 中等教育学校後期課程	5. 高等専門学校	6. 専修学校(一般課程・高等課程)・各種学校	7. 特別支援学校高等部
	10代後半	-4.0	-2.2	<u>15.1</u>	-1.7	-1.9	-1.3	<u>2.6</u>
	20代前半	-8.2	0.0	<u>14.8</u>	<u>4.5</u>	-1.4	-0.2	1.7
	20代後半	-8.3	0.5	<u>10.2</u>	<u>2.8</u>	0.9	-0.5	<u>3.1</u>
	30代前半	-5.5	<u>3.2</u>	<u>4.2</u>	<u>2.7</u>	<u>2.5</u>	0.8	0.9
	30代後半	-4.6	<u>3.7</u>	1.3	<u>2.1</u>	1.5	0.9	<u>2.8</u>
	40代前半	1.5	0.9	-2.9	-2.0	-0.9	0.6	-1.2
	40代後半	<u>4.8</u>	-1.6	-6.4	-2.7	2.0	0.1	-1.8
	50代前半	<u>9.4</u>	-3.2	-10.3	-2.4	-1.5	-1.0	-3.5
	50代後半	<u>9.4</u>	-3.2	-10.7	-3.0	-3.1	-0.5	-2.3

インターネット調査において、10代後半においては、「通信制高校」「特別支援学校高等部」の項目において有意差が見られた。20代前半においては、「通信制高校」「中等教育学校後期課程」の項目において有意差が見られた。20代後半においては、「通信制高校」「特別支援学校高等部」「中等教育学校後期課程」の項目において有意差が見られた。30代前半においては、「通信制高校」「定時制高校」「中等教育学校後期課程」「高等専門学校」の項目において有意差が見られた。30代後半においては、「定時制高校」「特別支援学校高等部」「中等教育学校後期課程」の項目において有意差が見られた。40代前半においては、統計的な有意差は見られなかった。40代後半から50代後半においては、「全日制高校」の項目において有意差が見られた。

40代後半から50代後半にかけて「全日制高校」に有意差が見られているのに対し、10代後半から30代後半にかけては通信制高校への進学等、進学先の多様化が見られた。

(オンライン調査)

Q8-b								
年代		1. 全日制 高校	2. 定時制高 校	3. 通信制高 校	4. 中等教育 学校後期課程	5. 高等専門 学校	6. 専修学校 (一般課程・ 高等課程)・ 各種学校	7. 特別支援 学校高等部
	10 代 後半	-2.9	-1.4	<u>4.2</u>	—	0.4	-0.8	0.9
	20 代 前半	-0.3	0.8	0.5	—	-1.1	-0.9	0.6
	20 代 後半	0.3	0.4	0.3	—	-0.6	-0.5	-0.5
	30 代 前半	1.8	0.5	-2.1	—	<u>2.8</u>	-0.5	-0.5
	30 代 後半	1.2	-0.3	-1.7	—	-0.4	-0.3	-0.3
	40 代 前半	0.1	-0.1	-1.1	—	-0.5	<u>2.0</u>	-0.4
	40 代 後半	0.3	0.5	-1.5	—	-0.4	<u>2.9</u>	-0.3
	50 代 前半	<u>2.8</u>	-0.3	-1.6	—	-0.3	-0.2	-0.2
	50 代 後半	-1.2	-0.7	-1.3	—	-0.2	-0.1	-0.1

オンライン調査においては、20 代前半、20 代後半、30 代後半、50 代後半において、統計的な有意差は見られなかった。10 代後半においては、「通信制高校」の項目において有意差が見られた。30 代前半においては、「高等専門学校」の項目において有意差が見られた。40 代前半、40 代後半においては、「専修学校（一般課程・高等課程）・各種学校」の項目において有意差が見られた。50 代前半においては、「全日制高校」の項目において有意差が見られた。

インターネット調査に対し、40 代において「専修学校（一般課程・高等課程）・各種学校」が期待値を有意に上回っているなど、多少の違いは認められたが、50 代前半において「全日制高校」に有意差が見られているなど、一部同様の傾向も確認できた。

(7) 最終学歴(Q9)

(インターネット調査)

Q9								
年代		1. 中学校卒業	2. 高等学校卒業（中等教育学校後期課程、専修学校の高等課程、特別支援学校高等部を含む）	3. 専修学校（専門課程）卒業・高等専門学校卒業・短期大学卒業	4. 専修学校（一般課程）卒業・各種学校卒業	5. 大学卒業	6. 大学院修士課程卒業・大学院博士後期課程修了（満期退学含む）	7. その他
	10代後半	<u>5.8</u>	<u>8.9</u>	-4.6	-2.1	-7.5	-2.5	1.7
	20代前半	-4.9	<u>6.9</u>	-2.1	-0.5	-0.9	-2.2	<u>5.1</u>
	20代後半	-6.4	-3.2	-2.3	<u>5.5</u>	<u>6.4</u>	0.9	-0.8
	30代前半	-5.3	-3.2	-1.1	0.2	<u>8.4</u>	-1.3	1.3
	30代後半	0.1	-5.0	0.0	0.4	<u>4.0</u>	<u>2.1</u>	-1.2
	40代前半	1.9	-1.3	1.3	-1.2	-1.0	1.6	-1.0
	40代後半	<u>2.0</u>	-0.8	<u>2.6</u>	0.2	-2.8	0.0	-1.0
	50代前半	<u>4.9</u>	<u>2.2</u>	<u>2.9</u>	-2.9	-6.7	0.3	-0.5
	50代後半	<u>3.7</u>	<u>4.2</u>	-1.1	-0.8	-5.0	-1.6	-0.7

インターネット調査において、10代後半においては、「高等学校卒業（中等教育学校後期課程、専修学校の高等課程、特別支援学校高等部を含む）」「中学校卒業」の項目において有意差が見られた。20代前半においては、「高等学校卒業（中等教育学校後期課程、専修学校の高等課程、特別支援学校高等部を含む）」「その他」の項目において有意差が見られた。20代後半においては、「大学卒業」「専修学校（一般課程）卒業・各種学校卒業」の項目において有意差が見られた。30代前半においては、「大学卒業」の項目において有意差が見られた。30代後半においては、「大学卒業」「大学院修士課程卒業・大学院博士後期課程修了（満期退学含む）」の項目において有意差が見られた。40代前半においては、統計的な有意差は見られなかった。40代後半においては、「専修学校（専門課程）卒業・高等専門学校卒業・短期大学卒業」「中学校卒業」の項目において有意差が見られた。50代前半においては、「中学校卒業」「専修学校（専門課程）卒業・高等専門学校卒業・短期大学卒業」「高等学校卒業（中等教育学校後期課程、専修学校の高等課程、特別支援学校高等部を含む）」の項目において有意差が見られた。50代後半においては、「高等学校卒業（中等教育学校後期課程、専修学校の高等課程、特別支援学校高等部を含む）」「中学校卒業」の項目において有意差が見られた。

10 代後半から 20 代前半においては、年齢的に大学や大学院卒業まで至っていないことが考えられ、「中学校卒業」「高等学校卒業（中等教育学校後期課程、専修学校の高等課程、特別支援学校高等部を含む）」に有意差が認められるのは不自然ではない。20 代後半から 30 代後半にかけては「大学卒業」が最終学歴と回答する者が期待値を上回っている一方、40 代後半から 50 代後半にかけては「中学校卒業」「高等学校卒業（中等教育学校後期課程、専修学校の高等課程、特別支援学校高等部を含む）」「専修学校（専門課程）卒業・高等専門学校卒業・短期大学卒業」が期待値を上回っており、高等教育への進学が世代間で異なることが示唆される。

（オンライン調査）

Q9								
年代		1. 中学校卒業	2. 高等学校卒業（中等教育学校後期課程、専修学校の高等課程、特別支援学校高等部を含む）	3. 専修学校（専門課程）卒業・高等専門学校卒業・短期大学卒業	4. 専修学校（一般課程）卒業・各種学校卒業	5. 大学卒業	6. 大学院修士課程卒業・大学院博士後期課程修了（満期退学含む）	7. その他
	10 代後半	1.5	<u>3.1</u>	-1.5	-0.7	-4.7	-2.0	<u>3.3</u>
	20 代前半	-2.2	<u>2.1</u>	1.0	-1.1	-1.8	-0.5	1.5
	20 代後半	0.8	-1.3	-0.9	0.1	<u>2.9</u>	-0.4	-1.9
	30 代前半	-0.6	-1.9	-0.6	<u>2.1</u>	<u>3.5</u>	-0.6	-1.4
	30 代後半	0.7	-1.5	0.3	-0.7	0.7	<u>2.9</u>	-1.3
	40 代前半	-0.4	-1.1	0.1	0.3	<u>2.1</u>	0.8	-1.7
	40 代後半	0.8	-1.3	1.2	-0.7	0.9	0.5	-1.2
	50 代前半	-0.1	-1.8	1.2	1.7	-0.8	<u>2.8</u>	0.3
	50 代後半	1.1	-0.3	1.4	-0.3	-0.9	-0.4	-0.5

オンライン調査において、10 代後半においては、「その他」「高等学校卒業（中等教育学校後期課程、専修学校の高等課程、特別支援学校高等部を含む）」の項目において有意差が見られた。20 代前半においては、「高等学校卒業（中等教育学校後期課程、専修学校の高等課程、特別支援学校高等部を含む）」の項目において有意差が見られた。20 代後半においては、「大学卒業」の項目において有意差が見られた。30 代前半においては、「大学卒業」「専修学校（一般課程）卒業・各種学校卒業」の項目において有意差が見られた。30 代後半においては、「大学院修士課程卒業・大学院博士後期課程修了（満期退学含む）」の項目において有意差が見られた。40 代前半においては、「大学卒業」の項目において有意

差が見られた。40 代後半においては、統計的な有意差は見られなかった。50 代前半においては、「大学院修士課程卒業・大学院博士後期課程修了（満期退学含む）」の項目において有意差が見られた。50 代後半においては、統計的な有意差は見られなかった。

インターネット調査と同様に、10 代後半や 20 代前半、50 代以降においては高等教育への進学が期待値を下回っていた一方、50 代前半においては大学院の卒業が期待値を上回っているなど、一部異なる結果も得られた。

（８）現在の就業状況と進学状況（Q11-a）

（インターネット調査）

Q11-a											
年代		1. 正 規 社・職 員	2. 派 遣社員	3. パ ート、 アルバ イト	4. 役 員	5. 家 業	6. 会 社経営	7. 主 婦、主 夫	8. 学 生	9. そ の他	10. 無 職
	10 代後半	-10.3	-2.4	0.0	-1.8	-0.5	-3.4	-4.0	<u>47.7</u>	-0.6	0.3
	20 代前半	-9.6	-2.0	0.2	0.9	<u>2.1</u>	-2.7	-5.9	<u>42.0</u>	-2.8	1.8
	20 代後半	1.6	-0.2	<u>3.9</u>	<u>3.7</u>	<u>2.9</u>	-1.5	-3.2	-1.9	-1.1	-2.1
	30 代前半	<u>2.1</u>	0.2	-0.8	<u>3.2</u>	<u>2.7</u>	-3.4	0.3	-5.5	0.5	1.0
	30 代後半	<u>3.8</u>	1.6	1.0	1.0	1.6	0.3	-1.4	-5.5	-1.9	-0.1
	40 代前半	<u>2.3</u>	1.1	-1.0	-1.6	-1.3	-1.2	1.4	-7.5	<u>2.4</u>	0.8
	40 代後半	<u>5.3</u>	-0.4	-2.4	-2.1	-1.6	-0.3	0.6	-7.7	-1.7	-0.2
	50 代前半	-2.3	0.9	-0.3	-2.1	-1.3	<u>3.8</u>	<u>3.0</u>	-8.5	<u>3.3</u>	-1.0
	50 代後半	-3.5	-1.3	-0.3	-1.9	-4.3	<u>5.2</u>	<u>4.7</u>	-6.8	0.7	0.3

インターネット調査においては、10 代後半において統計的に差のある項目として、「学生など」がある。20 代前半において統計的に差のある項目として、「学生など」「家業を手伝っている」、がある。20 代後半において統計的に差のある項目として、「パート、アルバイトとして民間企業や官公庁などに勤めている」「会社などの役員」「家業を手伝っている」がある。30 代前半において統計的に差のある項目として、「会社などの役員」「家業を手伝っている」「正規社員・職員として民間企業や官公庁などに勤めている」がある。30 代後半において統計的に差のある項目として、「正規社員・職員として民間企業や官公庁などに勤めている」がある。40 代前半において統計的に差のある項目として、「その他」「正規社員・職員として民間企業や官公庁などに勤めている」がある。40 代後半において統計的に差のある項目として、「正規社員・職員として民間企業や官公庁などに勤めている」がある。50 代前半において統計的に差のある項目として、「自分で会社などを経営している」「その他」「主婦、主夫」がある。50 代後半において統計的に差のある項目として、「自分で会社などを経営している」「主婦、主夫」がある。

10代前半から20代前半においては、「学生など」の項目に有意差が見られ、20代後半から30代後半においては、「家業を手伝っている」「パート、アルバイトとして民間企業や官公庁などに勤めている」「会社などの役員」との関連が示唆される。また、30代前半から40代後半にかけては「正規社員・職員として民間企業や官公庁などに勤めている」との関連が見られ、50代においては「自分で会社などを経営している」か「主婦、主夫」の二極化が見られた。

(オンライン調査)

Q11-a											
年代		1. 正規社員・職員	2. 派遣社員	3. パート、アルバイト	4. 役員	5. 家業	6. 会社経営	7. 主婦、主夫	8. 学生	9. その他	10. 無職
	10代後半	-3.1	-0.8	-1.2	-1.5	-2.2	-2.9	-2.3	<u>7.5</u>	-0.6	-0.5
	20代前半	-2.1	0.6	-0.1	-1.7	0.3	-2.0	-1.7	<u>3.6</u>	0.3	1.0
	20代後半	<u>2.4</u>	1.7	-1.0	0.3	0.3	-1.2	0.1	-2.9	1.5	0.0
	30代前半	1.4	-0.5	1.3	1.3	1.7	1.8	0.6	-4.1	-0.5	-0.3
	30代後半	0.9	-0.3	1.2	1.1	-0.9	-0.3	1.2	-2.6	-0.8	0.9
	40代前半	1.9	-0.4	-0.4	0.5	1.5	<u>6.4</u>	-0.5	-3.8	-0.1	-0.7
	40代後半	1.7	-0.3	1.3	1.1	-0.9	-0.2	<u>4.8</u>	-2.5	0.5	-1.4
	50代前半	0.1	-0.2	0.7	1.9	0.9	1.6	0.8	-1.6	-0.6	0.0
	50代後半	-0.9	-0.1	-1.0	-0.3	-0.4	-0.5	<u>2.2</u>	-0.1	-0.3	1.3

オンライン調査においては、10代後半において統計的に差のある項目として、「学生など」がある。20代前半において統計的に差のある項目として、「学生など」がある。20代後半において統計的に差のある項目として、「正規社員・職員として民間企業や官公庁などに勤めている」がある。30代前半と30代後半において統計的に差のある項目はなかった。40代前半において統計的に差のある項目として、「自分で会社などを経営している」がある。40代後半において統計的に差のある項目として、「主婦、主夫」がある。50代前半において統計的に差のある項目はなかった。50代後半において統計的に差のある項目として、「主婦、主夫」がある。

10代前半から20代前半においては、「学生など」の項目に有意差が見られ、30代後半になるにかけて、一部有意差は見られないものの、「正規社員・職員として民間企業や官公

庁などに勤めている」との関連が示唆される。また、40 代後半から 50 代後半にかけて、一部有意差は見られないものの、「主婦、主夫」という特徴も見られた。

(9) 現在の満足度 (Q11-b)

(インターネット調査)

		Q11-b			
		1. 満足している	2. まあ満足している	3. やや不満だ	4. 不満だ
年代	10 代後半	<u>3.1</u>	-0.7	-1.6	-0.4
	20 代前半	<u>3.1</u>	0.5	-1.2	-2.5
	20 代後半	<u>2.4</u>	<u>2.1</u>	-2.8	-2.1
	30 代前半	<u>2.5</u>	0.1	-0.5	-2.2
	30 代後半	-0.4	-0.3	1.1	-0.4
	40 代前半	0.6	-1.5	0.3	1.1
	40 代後半	-1.5	-2.4	1.0	<u>3.6</u>
	50 代前半	-3.0	1.0	1.1	0.5
	50 代後半	-3.5	1.1	0.8	1.2

インターネット調査においては、10 代後半から 30 代前半にかけて「満足している」という項目が統計的に有意である。20 代後半においては、「まあ満足している」という項目においても有意な差が見られた。また、40 代後半においては、「不満だ」という項目において有意な差が見られた。30 代後半、40 代前半、50 代前半、50 代後半において、統計的な有意差は見られなかった。

現在の生活に関する満足度に関しては、10 代後半から 30 代前半にかけては「満足している」回答が期待値を上回っている一方、40 代前半から 50 代後半にかけては統計的な有意差は見られないものの、「やや不満だ」「不満だ」といった回答と正の関連が見られており、現在の満足度は時代とともに変わりつつあることが示唆される。

(オンライン調査)

Q11-b					
		1. 満足している	2. まあ満足している	3. やや不満だ	4. 不満だ
年代	10 代後半	-0.5	1.3	-0.5	-0.9
	20 代前半	0.0	0.1	0.1	-0.5
	20 代後半	0.6	-1.4	0.3	1.3
	30 代前半	-1.5	-0.1	1.0	1.7
	30 代後半	0.1	0.5	-0.8	-0.1
	40 代前半	<u>3.3</u>	-2.6	-0.4	-0.6
	40 代後半	-0.3	0.8	0.0	-1.1
	50 代前半	-1.5	1.2	-0.1	0.6
	50 代後半	-1.3	0.7	1.1	-0.4

オンライン調査においては、40 代前半において「満足している」の項目において統計的に有意な差が見られた他は、統計的な有意差は見られなかった。

現在の生活に関する満足度に関しては、インターネット調査とは異なり、世代間において大きな差は見られなかった。

(10) 支えとなるアドバイスをしてくれた人(Q12)

(インターネット調査)

Q12										
年代		1. 家族	2. 友人	3. 職場 の上司・ 同僚	4. 先生	5. 学校 の相談員 (スクール カウンセ セラーな ど)	6. 自治 体の相談 員	7. 医師	8. その他	9. とく にない
	10 代 後半	<u>2.6</u>	-2.2	-4.0	<u>4.6</u>	<u>3.0</u>	-0.9	<u>4.7</u>	1.7	-1.8
	20 代 前半	<u>6.0</u>	-1.3	-2.0	<u>9.4</u>	<u>9.0</u>	<u>2.1</u>	<u>3.8</u>	0.0	-7.3
	20 代 後半	<u>6.0</u>	<u>2.0</u>	1.4	<u>6.8</u>	<u>8.8</u>	<u>4.0</u>	<u>4.1</u>	-1.4	-9.9
	30 代 前半	<u>4.5</u>	1.2	-0.2	<u>2.3</u>	<u>3.9</u>	0.3	-0.1	0.3	-3.3
	30 代 後半	<u>4.3</u>	1.7	1.6	0.5	<u>2.8</u>	<u>4.9</u>	-1.0	1.0	-2.6
	40 代 前半	1.2	0.5	0.6	-3.6	-2.5	-0.8	1.6	-0.4	1.6
	40 代 後半	-4.7	0.8	-0.1	-3.1	-3.9	-2.1	-2.5	-1.0	<u>5.4</u>
	50 代 前半	-7.5	-2.4	0.3	-5.9	-8.1	-4.4	-3.8	0.9	<u>7.2</u>

	50代後半	-9.0	-2.4	-1.3	-4.5	-8.0	-3.3	-2.0	-0.2	<u>6.8</u>
--	-------	------	------	------	------	------	------	------	------	------------

インターネット調査においては、10代後半において統計的に差のある項目のうち、上位3項目として、「医師」「学校の先生」「学校の相談員（スクールカウンセラーなど）」がある。20代前半において統計的に差のある項目のうち、上位3項目として、「学校の先生」「学校の相談員（スクールカウンセラーなど）」「家族」がある。20代後半において統計的に差のある項目のうち、上位3項目として、「学校の相談員（スクールカウンセラーなど）」「学校の先生」「家族」がある。30代前半において統計的に差のある項目として、「家族」「学校の相談員（スクールカウンセラーなど）」「学校の先生」がある。30代後半において統計的に差のある項目として、「自治体の相談員」「家族」「学校の相談員（スクールカウンセラーなど）」がある。40代前半において統計的に差のある項目はなかった。40代後半から50代後半において統計的に差のある項目として、「とくにない」がある。

30代後半以前と40代前半以降の2グループにおいて回答傾向が異なることが分かる。30代後半以前においては様々な支えを受けていることが分かり、不登校への周りの理解促進、支援体制の充実等、社会的な変化が影響している可能性が示唆される。一方で、40代前半以降においては、「とくにない」の項目に有意な差が見られ、十分な支えを受けてこなかった、あるいは受けたくても受けられる環境が整備されていなかったことが示唆される。

（オンライン調査）

Q12										
年代		1. 家族	2. 友人	3. 職場の上司・同僚	4. 先生	5. 学校の相談員（スクールカウンセラーなど）	6. 自治体の相談員	7. 医師	8. その他	9. とくにない
	10代後半	1.5	0.8	-2.6	<u>2.7</u>	0.0	0.0	-1.1	0.6	-0.9
	20代前半	0.7	-0.1	-0.8	<u>2.2</u>	<u>2.4</u>	-0.4	0.5	-1.5	0.1
	20代後半	-1.7	-0.8	0.7	-2.4	-0.7	0.1	0.1	0.2	0.8
	30代前半	0.0	0.1	0.9	-1.4	1.0	0.9	-0.3	-1.1	1.0
	30代後半	-0.9	0.9	0.6	-1.2	-1.6	0.2	-0.5	-0.4	-0.8
	40代前半	1.1	-0.7	<u>2.5</u>	-0.9	-0.9	0.0	0.7	0.9	-1.0
	40代後半	-1.1	-0.3	0.7	-1.7	-1.5	-0.6	1.0	1.1	0.8
	50代前半	-0.5	1.1	-0.2	-0.6	-1.1	-1.0	-0.4	<u>2.5</u>	-0.1
	50代後半	-2.3	-1.7	-0.7	0.1	-0.6	1.3	0.8	-0.7	1.1

オンライン調査においては、20 代後半から 30 代後半、40 代後半、50 代後半の各グループに統計的な差は見られなかった。一方で、10 代後半において、「学校の先生」の項目に統計的な差があった。20 代前半では、「学校の相談員（スクールカウンセラーなど）」「学校の先生」の項目に統計的な差があった。40 代前半においては、「職場の上司・同僚」の項目に統計的に差があった。50 代前半においては、「その他」の項目に統計的に差があった。

(11) 不登校経験と中学卒業後の経験との関連について (Q13)

(インターネット調査)

Q13-a : 学業 (受験、資格試験など) で苦労した					
年代		1. おおいにあった	2. ある程度あった	3. あまりなかった	4. ほとんどなかった
	10 代後半	0.6	-0.3	-1.1	0.9
	20 代前半	-0.1	<u>2.5</u>	-0.6	-2.1
	20 代後半	-1.8	<u>2.8</u>	0.7	-2.3
	30 代前半	0.7	1.9	-0.5	-2.3
	30 代後半	<u>3.4</u>	<u>2.5</u>	-1.7	-4.2
	40 代前半	0.9	-0.4	-0.2	-0.2
	40 代後半	<u>3.2</u>	-1.5	0.4	-1.7
	50 代前半	-1.9	-3.7	0.5	<u>5.5</u>
	50 代後半	-5.3	-3.2	2.0	<u>6.7</u>

インターネット調査においては、10 代後半、30 代前半、40 代前半において、統計的な差はみられなかった。20 代前半、20 代後半においては、「ある程度あった」の項目に統計的に差があった。30 代後半においては、「おおいにあった」「ある程度あった」の項目に統計的に差があった。40 代後半においては、「おおいにあった」の項目に統計的に差があった。50 代前半、50 代後半においては、「ほとんどなかった」の項目に統計的に差があった。

50 代においては、学業においてほとんど苦労しなかったという傾向が見られた。一方で、20 代前半から 40 代後半の不登校経験者はある程度苦労した、又は、おおいに苦労したといった回答が多く見られた。

(オンライン調査)

Q13-a : 学業 (受験、資格試験など) で苦労した					
年代		1. おおいにあった	2. ある程度あった	3. あまりなかった	4. ほとんどなかった
	10 代後半	1.0	-0.6	-0.2	-0.1
	20 代前半	-2.0	1.6	0.7	-0.2
	20 代後半	0.6	0.5	-0.8	-0.4
	30 代前半	-0.7	-0.4	<u>2.2</u>	-1.2
	30 代後半	<u>2.2</u>	0.0	-2.4	0.1
	40 代前半	0.3	-1.1	-0.6	1.7
	40 代後半	0.2	-0.4	0.0	0.2
	50 代前半	0.3	-1.2	0.6	0.5
	50 代後半	-1.1	1.4	-1.0	0.8

オンライン調査においては、30 代前半において、「あまりなかった」の項目に統計的な差があった。30 代後半においては、「おおいにあった」の項目に統計的な差があった。

(インターネット調査)

Q13-b : 仕事（就職活動を含む）で苦勞した					
年代		1. おおいにあった	2. ある程度あった	3. あまりなかった	4. ほとんどなかった
	10 代後半	-3.5	-1.9	-0.4	<u>6.1</u>
	20 代前半	-0.6	1.0	-0.1	-0.4
	20 代後半	-0.5	<u>3.4</u>	0.1	-3.4
	30 代前半	<u>3.8</u>	0.7	-1.9	-2.6
	30 代後半	<u>4.7</u>	<u>3.7</u>	-3.3	-5.4
	40 代前半	<u>2.7</u>	-0.7	-1.3	-0.6
	40 代後半	<u>2.2</u>	0.4	-0.7	-1.9
	50 代前半	-4.5	-2.8	<u>2.2</u>	<u>5.3</u>
	50 代後半	-7.9	-5.1	<u>5.7</u>	<u>7.6</u>

インターネット調査においては、10 代後半においては、「ほとんどなかった」の項目に統計的に差があった。20 代前半において、統計的な差はみられなかった。20 代後半においては、「ある程度あった」の項目に統計的に差があった。30 代前半においては、「おおいにあった」の項目に統計的に差があった。30 代後半においては、「おおいにあった」「ある程度あった」の項目に統計的に差があった。40 代前半、40 代後半においては、「おおいにあった」の項目に統計的に差があった。50 代前半、50 代後半においては、「ほとんどなかった」「あまりなかった」の項目に統計的に差があった。

30 代前半から 40 代後半までにおいては、「おおいにあった」との間に統計的に有意な関連が見られ、働き盛りの年代において仕事や就職活動に苦勞したことがうかがえる。一方で、50 代以降の世代は「あまりなかった」や「ほとんどなかった」といった回答において、統計的に有意な差が見られた。

(オンライン調査)

Q13-b : 仕事（就職活動を含む）で苦勞した					
年代		1. おおいにあった	2. ある程度あった	3. あまりなかった	4. ほとんどなかった
	10 代後半	-1.1	-1.3	0.4	1.9
	20 代前半	-1.0	0.0	1.3	-0.2
	20 代後半	0.0	0.9	-0.9	-0.1
	30 代前半	1.1	0.8	0.0	-1.7
	30 代後半	<u>3.3</u>	-0.7	-1.5	-1.2
	40 代前半	0.8	-0.9	-0.8	0.8
	40 代後半	-0.6	1.3	1.2	-1.7
	50 代前半	-1.8	0.6	-0.7	1.6
	50 代後半	0.3	0.4	-0.9	0.1

オンライン調査においては、インターネット調査と同様な傾向が一部見られた。20 代後半から 30 代後半にかけて、「おおいにあった」の回答比率は増加傾向である。一方で、50 代はインターネット調査の結果と異なり、統計的な有意差は見られないものの、「ある程度あった」の回答が期待値を上回っていることが分かる。

(インターネット調査)

Q13-c : 体力が低下したり不足したりして苦勞した					
年代		1. おおいにあった	2. ある程度あった	3. あまりなかった	4. ほとんどなかった
	10 代後半	<u>7.8</u>	1.3	-4.5	-3.5
	20 代前半	<u>8.5</u>	<u>4.3</u>	-3.6	-8.2
	20 代後半	<u>4.2</u>	<u>4.4</u>	-1.5	-6.7
	30 代前半	<u>3.0</u>	<u>3.7</u>	-2.6	-3.8
	30 代後半	<u>3.3</u>	<u>3.2</u>	-1.6	-4.6
	40 代前半	-0.5	-2.6	0.7	<u>2.5</u>
	40 代後半	-1.3	-1.6	0.9	1.9
	50 代前半	-7.4	-5.3	<u>3.1</u>	<u>8.8</u>
	50 代後半	-10.0	-5.1	<u>5.1</u>	<u>8.7</u>

インターネット調査においては、10 代後半においては、「おおいにあった」の項目に統計的に差があった。20 代前半、20 代後半、30 代前半、30 代後半においては、「おおいにあった」「ある程度あった」の項目に統計的に差があった。40 代前半においては、「ほとんどなかった」の項目に統計的に差があった。40 代後半において、統計的な差は見られな

った。50代前半、50代後半においては、「ほとんどなかった」「あまりなかった」の項目に統計的に差があった。

10代後半から30代後半まで、「おおいにあった」又は「ある程度あった」との間に統計的に有意な関連が見られた。特に、10代後半から30代後半においては、期待値より多くの回答者が体力の低下や不足に苦勞を感じていることが分かる。

(オンライン調査)

Q13-c：体力が低下したり不足したりして苦勞した					
年代		1. おおいにあった	2. ある程度あった	3. あまりなかった	4. ほとんどなかった
	10代後半	1.4	0.2	-0.4	-1.4
	20代前半	1.6	0.4	-0.1	-2.2
	20代後半	-1.8	-0.3	0.8	1.6
	30代前半	-1.1	0.6	0.3	0.3
	30代後半	<u>2.7</u>	-1.1	-0.9	-0.9
	40代前半	-1.1	-0.7	-0.4	<u>2.5</u>
	40代後半	-1.0	-0.4	0.5	1.1
	50代前半	-2.0	-0.5	1.0	1.8
	50代後半	-1.1	<u>2.7</u>	-0.9	-0.9

オンライン調査においては、インターネット調査と異なり、10代後半から30代前半までで「おおいにあった」「ある程度あった」の項目との間に統計的な有意差は見られなかった。

(インターネット調査)

Q13-d：生活リズムが乱れ苦勞した					
年代		1. おおいにあった	2. ある程度あった	3. あまりなかった	4. ほとんどなかった
	10代後半	<u>4.3</u>	<u>2.7</u>	-5.1	-2.1
	20代前半	<u>8.6</u>	0.8	-3.3	-6.3
	20代後半	<u>3.9</u>	<u>2.1</u>	-1.3	-5.1
	30代前半	<u>4.2</u>	1.9	-2.3	-4.1
	30代後半	<u>2.9</u>	1.8	0.1	-5.3
	40代前半	-0.7	-1.7	1.3	1.4
	40代後半	-0.7	-2.1	0.5	<u>2.8</u>
	50代前半	-7.4	-2.2	<u>2.5</u>	<u>7.6</u>
	50代後半	-9.8	-1.0	<u>3.1</u>	<u>8.0</u>

10 代後半から 30 代後半までにおいては、「おおいにあった」の項目に統計的に差があり、「ある程度あった」の項目においても一部統計的な差が見られた。一方、40 代後半から 50 代後半にかけては、「ほとんどなかった」「あまりなかった」の項目において統計的な差が見られた。

(オンライン調査)

Q13-d：生活リズムが乱れ苦労した					
年代		1. おおいにあった	2. ある程度あった	3. あまりなかった	4. ほとんどなかった
	10 代後半	0.5	1.7	-0.6	-1.8
	20 代前半	<u>2.2</u>	-1.0	-1.4	-0.1
	20 代後半	-0.6	-1.2	0.6	1.4
	30 代前半	-1.1	1.1	0.8	-0.8
	30 代後半	0.8	1.1	-0.6	-1.4
	40 代前半	-1.4	-1.4	0.5	<u>2.7</u>
	40 代後半	-0.6	0.0	0.7	-0.1
	50 代前半	-1.4	-1.7	<u>2.2</u>	1.1
	50 代後半	-1.2	1.7	-1.0	0.6

オンライン調査においては、インターネット調査と比較すると、世代間の傾向の違いは統計的な有意差に表れていない。

(インターネット調査)

Q13-e：人との関わりに不安を感じたり、人と関わりをもつことに苦労した					
年代		1. おおいにあった	2. ある程度あった	3. あまりなかった	4. ほとんどなかった
	10 代後半	<u>4.5</u>	-2.6	-1.7	-0.9
	20 代前半	<u>2.9</u>	-0.5	-0.2	-3.3
	20 代後半	<u>3.1</u>	-1.1	-0.9	-2.0
	30 代前半	<u>3.7</u>	-1.2	0.2	-3.8
	30 代後半	<u>3.0</u>	-0.7	0.7	-4.1
	40 代前半	<u>2.3</u>	0.2	-3.2	0.3
	40 代後半	0.9	-0.6	-0.6	0.4
	50 代前半	-6.7	1.6	1.7	<u>5.6</u>
	50 代後半	-10.1	<u>3.2</u>	<u>3.0</u>	<u>6.5</u>

インターネット調査においては、10 代後半から 40 代前半までにおいては、「おおいにあった」の項目に統計的に差があった。40 代後半において、項目に統計的な差はなかった。50 代前半においては、「ほとんどなかった」の項目に統計的に差があった。50 代後半においては、「ほとんどなかった」「ある程度あった」「あまりなかった」の項目に統計的に差があった。

10 代後半から 40 代後半にかけて、「おおいにあった」の項目において、期待値より多く回答されていることが分かる。

(オンライン調査)

Q13-e：人との関わりに不安を感じたり、人と関わりをもつことに苦労した					
年代		1. おおいにあった	2. ある程度あった	3. あまりなかった	4. ほとんどなかった
	10 代後半	0.8	-0.3	0.6	-1.3
	20 代前半	0.2	-0.5	0.7	-0.2
	20 代後半	-1.0	1.1	-0.8	0.9
	30 代前半	-0.7	1.1	-1.6	1.0
	30 代後半	0.5	0.1	-0.9	0.0
	40 代前半	0.8	-1.5	1.3	-0.3
	40 代後半	-0.3	0.9	0.0	-0.7
	50 代前半	-1.9	0.0	0.9	2.0
	50 代後半	<u>2.1</u>	-1.2	-0.7	-0.6

オンライン調査においては、10 代後半から 50 代前半までにおいて、統計的な差は見られなかった。50 代後半においては、「おおいにあった」の項目において統計的な差があり、インターネット調査の傾向とは異なる結果となった。

(インターネット調査)

Q13-f：成長した、視野が広がった					
年代		1. おおいにあった	2. ある程度あった	3. あまりなかった	4. ほとんどなかった
	10 代後半	1.8	0.6	-2.3	0.3
	20 代前半	<u>3.1</u>	1.2	-1.2	-3.1
	20 代後半	<u>2.6</u>	1.9	-2.4	-2.1
	30 代前半	1.1	-0.2	0.1	-0.9
	30 代後半	0.0	-1.4	1.3	0.2
	40 代前半	-0.8	-0.1	-1.3	<u>2.5</u>
	40 代後半	-0.1	-1.6	0.3	1.8
	50 代前半	-3.2	-0.2	2.0	1.0

	50 代後半	-2.2	1.0	1.5	-0.9
--	--------	------	-----	-----	------

インターネット調査においては、10 代後半において統計的な差はなかった。20 代前半、20 代後半においては、「おおいにあった」の項目に統計的に差があった。30 代前半、30 代後半において、統計的な差はなかった。40 代前半においては、「ほとんどなかった」の項目に統計的に差があった。40 代後半から 50 代後半にかけては、統計的な差はなかった。

20 代においては「おおいにあった」の項目と統計的に有意な差が見られ、統計的な差はないものの、10 代後半から 30 代前半までは、期待値より多くの回答を得た。一方で、30 代後半から 50 代後半にかけては統計的な差はほとんど見られないものの、「あまりなかった」「ほとんどなかった」の項目が期待値より多く回答を得ていた。

(オンライン調査)

Q13-f：成長した、視野が広がった					
年代		1. おおいにあった	2. ある程度あった	3. あまりなかった	4. ほとんどなかった
	10 代後半	-1.4	1.5	-0.4	0.7
	20 代前半	0.7	-0.4	1.3	-2.5
	20 代後半	-0.7	0.6	-0.7	1.3
	30 代前半	-0.4	0.0	-0.5	1.7
	30 代後半	-0.8	0.1	1.7	-1.1
	40 代前半	<u>2.4</u>	-2.0	-0.7	0.2
	40 代後半	0.5	-0.3	-0.3	0.0
	50 代前半	0.0	-0.1	-0.3	0.6
	50 代後半	0.8	0.0	-0.7	-0.4

オンライン調査においては、40 代前半の「おおいにあった」を除き、統計的な差は見られなかった。インターネット調査と異なり、世代間の傾向の違いも見られなかった。

(インターネット調査)

Q13-g：人に優しくなった、人の痛みが分かるようになった					
年代		1. おおいにあった	2. ある程度あった	3. あまりなかった	4. ほとんどなかった
	10 代後半	1. 7	-1. 2	-0. 8	0. 7
	20 代前半	<u>2. 7</u>	-0. 6	-0. 4	-2. 3
	20 代後半	<u>2. 8</u>	-0. 1	-0. 8	-2. 6
	30 代前半	<u>2. 0</u>	-1. 5	0. 5	-1. 0
	30 代後半	-1. 4	-0. 7	1. 5	1. 1
	40 代前半	0. 1	-0. 6	-0. 3	1. 3
	40 代後半	-0. 7	1. 0	-0. 8	0. 4
	50 代前半	-3. 1	1. 2	1. 3	0. 6
	50 代後半	-1. 7	1. 7	-1. 3	1. 3

インターネット調査においては、10 代後半及び、30 代後半から 50 代後半において、項目に統計的な差はなかった。20 代前半から 30 代前半までにおいては、「おおいにあった」の項目に統計的に差があった。

一方で、30 代後半から 50 代後半にかけて、統計的な差が見られないものの、「ほとんどなかった」の項目において、期待値より多くの回答を得た。

(オンライン調査)

Q13-g：人に優しくなった、人の痛みが分かるようになった					
年代		1. おおいにあった	2. ある程度あった	3. あまりなかった	4. ほとんどなかった
	10 代後半	-2. 7	1. 4	1. 4	0. 8
	20 代前半	1. 2	-0. 3	0. 5	-2. 3
	20 代後半	0. 6	-0. 1	-1. 6	1. 0
	30 代前半	0. 1	-0. 4	-0. 1	0. 7
	30 代後半	0. 1	-0. 2	-0. 6	0. 8
	40 代前半	0. 7	-1. 1	0. 0	0. 7
	40 代後半	1. 9	-1. 6	-0. 5	-0. 1
	50 代前半	-1. 4	1. 9	0. 1	-0. 8
	50 代後半	-0. 4	1. 1	-0. 6	-0. 5

オンライン調査においては、統計的に有意な差は見られなかった。また、インターネット調査と同様な世代間の違いも見られなかった。

(12) 第6章のまとめ

第6章では年代別から見た不登校状況として、学校を休みはじめたきっかけ、不登校の継続の理由、不登校当時に相談した機関や人、不登校当時の支援のニーズ、不登校経験に関する振り返り、中学校卒業後の進路状況、最終学歴、現在の就業状況と進学状況、現在の満足度、支えとなるアドバイスをしてくれた人、不登校経験と中学校卒業後の経験との関連についてとの関連について整理した。統計的に有意差があった回答を中心に記載した。

学校を休みはじめたきっかけについて、インターネット調査では、10代後半から30代後半にかけて、及び40代前半から50代後半にかけて世代間に差があるという傾向が見られた。友人関係について、10代後半から30代後半にかけては「友人との関係（いやがらせやいじめを除く）」といった関係性に関するきっかけが有意に多いのに対し、40代前半から50代後半にかけては「友人との関係（いやがらせやいじめ）」といった特定の原因がきっかけである方が有意に多い。学校の環境について、40代前半から50代後半にかけては「授業が面白くなかった」といったきっかけが有意に多かった。また、10代後半から30代後半にかけては「精神的な不調（漠然とした不安や気持ちの落ち込みなど）」「身体的な不調（学校に行こうとすると腹痛や頭痛に襲われたなど）」といったきっかけが有意に多く、自身の不調に気づきやすくなった、あるいは共有することが許容されやすい社会に変革されつつある可能性が示唆される。同様に、「障害による学習上・生活上の困難」についても障害に対する社会の認識も背景にある可能性が示唆される。また、10代後半から30代後半にかけては「生活リズムの乱れ（朝起きられないなど）」「インターネットやメール、ゲームなどの影響（一度始めると止められない、学校より楽しいなど）」といった新たなきっかけの傾向も見られており、子供を取り巻く環境の変化等の可能性が示唆される。オンライン調査では、インターネット調査と比較して統計的に有意な項目は少ないが、同様の傾向が見られた。

不登校の継続の理由について、インターネット調査では、10代後半から30代後半にかけて、及び40代前半から50代後半にかけて世代間に差があるという傾向が見られた。友人関係、学校の環境、精神的・身体的不調、障害等については、きっかけと同様の傾向が見られた。上記に加え、30代後半から40代前半にかけては「なぜ学校に行かなくてはならないのかが理解できなかったため」、10代後半から30代後半にかけては「周囲の友人の影響（学校に行かないグループと近かった、友人に遊びに誘われたなど）」「保護者やまわりの人に学校を休んでもいいと助言されたため」などの継続の理由が有意に多く、学校に対する意識の変化や、社会における学校以外の居場所へのアクセスが向上したことが継続の理由の一因になりつつある可能性を示唆している。オンライン調査では、インターネット調査と比較して統計的に有意な項目は少ないが、同様の傾向が見られた。

不登校当時に相談した機関や人について、インターネット調査では、10代後半から30代後半にかけて、及び40代前半から50代後半にかけて世代間に差があるという傾向が見られた。特に、10代後半から30代後半にかけては学校内外でカウンセラー等に相談をして

いることが示唆される一方、40 代前半から 50 代後半にかけては「何も利用しなかった」が有意に多く、他の年代と比較して相談する機会が少なかった可能性が示唆される。オンライン調査では、インターネット調査と比較して統計的に有意な項目は少ないが、40 代前半から 50 代後半にかけては「何も利用しなかった」が有意に多いという点でインターネット調査と同様の傾向が見られた一方、40 代前半において「保健所・福祉事務所」に有意差が見られるなど、一部においてインターネット調査と異なる結果が得られた。

不登校当時の支援のニーズについて、インターネット調査では、10 代後半から 40 代前半にかけて、及び 40 代後半から 50 代後半にかけて世代間に差があるという傾向が見られた。特に、10 代後半から 40 代前半にかけては提供されるサービスも増えたことで様々な支援ニーズを認識していたことが示唆される一方、40 代後半から 50 代後半にかけては「なし」が有意に多く、他の年代と比較して支援ニーズに向き合う機会が十分に得られていなかった可能性が示唆される。オンライン調査では、インターネット調査と比較して統計的に有意な項目が少ないため、比較が困難である。

不登校経験に関する振り返りについて、インターネット調査では、統計的な有意差は少ないものの、世代間に差があるという傾向が見られた。20 代後半から 30 代前半にかけては学校に「行かなくてよかった」という回答が有意に多かった。30 代後半から 40 代前半にかけては、「行けばよかった」という回答が多かった。50 代前半から 50 代後半にかけては「しかたがなかった」「何とも思わない」のような回答の状況も見られた。オンライン調査では、統計的に有意な項目がなかったため、比較が困難である。

中学校卒業後の進路状況について、インターネット調査では、20 代後半から 30 代後半にかけて世代間に差があるという傾向が見られた。特に、「就職して働きながら、高等学校等に進学もした」という回答が有意に多かった。オンライン調査では、30 代後半から 50 代後半にかけてのみ有意差が見られ、40 代前半においては「高等学校等に進学もせず、就職もしなかった」、40 代後半においては、「就職して働きながら、高等学校等に進学もした」「高等学校等に進学もせず、就職もしなかった」、50 代後半においては「高等学校等に進学もせず、就職もしなかった」など、インターネット調査とは異なる傾向が見られた。

また、高等学校等への進学状況について、インターネット調査では、10 代後半から 30 代後半にかけて、及び 40 代後半から 50 代後半にかけて世代間に差があるという傾向が見られた。40 代後半から 50 代後半にかけては「全日制高校」が有意に多いのに対し、10 代後半から 30 代後半にかけては通信制高校などが進学先として選択されるようになった可能性が示唆される。オンライン調査では、40 代前半から 40 代後半にかけて「専修学校（一般課程・高等課程）・各種学校」が有意に多いなど、多少の違いは認められたが、概ねインターネット調査と同様の傾向が見られた。

最終学歴について、インターネット調査では、10 代後半から 20 代前半にかけて、20 代後半から 30 代後半にかけて、及び 40 代後半から 50 代後半にかけて世代間に差があるという傾向が見られた。10 代後半から 20 代前半においては年齢的にも大学や大学院卒業まで

至っていない場合が多いことから「中学校卒業」「高等学校卒業（中等教育学校後期課程、専修学校の高等課程、特別支援学校高等部を含む）」が有意に多い。20代後半から30代後半においては「大学卒業」に加え、一部において「専修学校（一般課程）卒業・各種学校卒業」「大学院修士課程卒業・大学院博士後期課程修了（満期退学含む）」が有意に多い一方、40代後半から50代後半においては「中学校卒業」「高等学校卒業（中等教育学校後期課程、専修学校の高等課程、特別支援学校高等部を含む）」「専修学校（専門課程）卒業・高等専門学校卒業・短期大学卒業」が有意に多かった。オンライン調査では、10代後半から20代前半にかけて、及び20代後半から30代後半にかけてはインターネット調査と同様の傾向が見られたが、40代後半から50代後半にかけて「中学校卒業」「高等学校卒業（中等教育学校後期課程、専修学校の高等課程、特別支援学校高等部を含む）」「専修学校（専門課程）卒業・高等専門学校卒業・短期大学卒業」などの有意差が見られなくなるなど、一部異なる傾向も見られた。

現在の就業状況と進学状況について、インターネット調査では、10代後半から20代後半にかけて、20代後半から30代後半にかけて、30代前半から40代後半にかけて、及び50代前半から50代後半にかけて世代間に差があるという傾向が見られた。10代後半から20代前半においては「学生など」、30代前半から40代後半においては「正規社員・職員として民間企業や官公庁などに勤めている」、50代前半から50代後半においては「主婦、主夫」が有意に多く、通常の年代における傾向と同様の結果である可能性が示唆される。一方、20代後半から30代後半においては「家業を手伝っている」「会社などの役員」、50代前半から50代後半においては「自分で会社などを経営している」が有意に多かった。オンライン調査では、インターネット調査と比較して統計的に有意な項目は少ないが、同様の傾向が見られた。

現在の満足度について、インターネット調査では、10代後半から30代前半にかけて世代間に差があるという傾向が見られた。特に、10代後半から30代前半においては「満足している」という回答が有意に多かった。オンライン調査では、インターネット調査と比較して統計的に有意な項目が少ないため、比較が困難である。

支えとなるアドバイスをしてくれた人について、インターネット調査では、10代後半から30代後半にかけて、及び40代後半から50代後半にかけて世代間に差があるという傾向が見られた。10代後半から30代後半においては様々な支えを受けているのに対し、40代後半から50代後半においては「とくにない」という回答が有意に多く、不登校時に相談した機関や人、不登校当時の支援のニーズ等と同様、十分な支えを受けてこなかった、あるいは受けたくても受けられる環境が整備されていなかった時代から、不登校への周りの理解促進、支援体制の充実等に代表される、社会的な変化が影響している可能性が示唆される。オンライン調査では、インターネット調査と比較して統計的に有意な項目が少ないため、比較が困難である。

不登校経験と中学校卒業後の経験との関連について、インターネット調査では、「学業

（受験、資格試験など）で苦勞した」「仕事（就職活動を含む）で苦勞した」経験に対して、20代前半から40代後半においては「おおいにあった」「ある程度あった」という回答が有意に多いが、50代前半から50代後半においては「あまりなかった」「ほとんどなかった」といった回答が有意に多い。一方、「体力が低下したり不足したりして苦勞した」「生活リズムが乱れ苦勞した」経験に対して、10代後半から30代後半においては「おおいにあった」「ある程度あった」という回答が有意に多いが、40代前半から50代後半においては「あまりなかった」「ほとんどなかった」といった回答が有意に多い。「人との関わりに不安を感じたり、人との関わりをもつことに苦勞した」経験に対して、10代後半から40代前半において「おおいにあった」という回答が有意に多かった。不登校を経て「成長した、視野が広がった」「人に優しくなった、人の痛みが分かるようになった」などの結果は統計的な有意差があまり見られなかった。オンライン調査では、インターネット調査と比較して統計的に有意な項目が少ないため、比較が困難である。

全体的に、30代後半から50代前半頃を境に、回答における世代間の差が見られた。これらの結果は不登校の性質が時代とともに変化してきたことを示唆している。具体的な要因は本研究で特定することは困難であるが、例えば40代以降できっかけや継続の理由として挙げられたいやがらせやいじめを認知・解消する体制が整ってきたことや、不登校に対する世間の認識が変容してきたこと、不登校を経験した方も中学校以降も継続して学べるようになってきたことなどの可能性が示唆される。また、不登校に対する支援機関や人が充実してきたことで、より支援ニーズを認識し、求めることができるようになったことが、現在の満足度にもつながっている可能性も示唆されるが、別の要因も考えられるため、解釈には留意が必要である。

第7章 不登校の継続理由・不登校の態様

(1) 単純集計結果

Q4 は多肢選択形式設問であり、回答数の多い順に並び変えると、以下のような結果になる。

※設問及び選択肢については、P. 22 を参照する。

(インターネット調査)

Q4-a	回答数	割合	H26 調査
1. 友人(いやがらせやいじめ) ⁶⁴	8,086	44.4%	41.4%
11. 精神的不調 ⁶⁵	4,843	26.6%	43.7%
8. やる気	4,390	24.1%	44.4%
4. 先生(相性)	3,965	21.8%	—
2. 友人(いやがらせやいじめを除く)	3,433	18.9%	—
12. 身体的不調	2,958	16.2%	—
3. 先生(怒る、うるさい、体罰) ⁶⁶	2,893	15.9%	16.6%
6. 授業	2,835	15.6%	—
5. 勉強	2,701	14.8%	27.4%
9. 悪気なし	1,935	10.6%	25.6%
13. 生活リズム	1,823	10.0%	34.1%
14. 登校への疑問	1,645	9.0%	—
7. 友人(影響)	1,250	6.9%	—
21. わからない	952	5.2%	3.0%
10. 断続的な登校	925	5.1%	12.8%
15. 好みの選択 ⁶⁷	665	3.7%	19.9%
16. 親からの注意不足	643	3.5%	6.6%
18. 助言	624	3.4%	8.5%
17. 学校からの支援不足	502	2.8%	4.7%
19. 障害	473	2.6%	—
20. その他	250	1.4%	14.3%

インターネット調査においては、「友人との関係 (いやがらせやいじめ)」「精神的な不調 (漠然とした不安や気持ちの落ち込みなど)」「学校生活に対するやる気が出なかったた

⁶⁴ 注釈 15 に同じ。

⁶⁵ 注釈 17 に同じ。

⁶⁶ 注釈 16 に同じ。

⁶⁷ 注釈 18 に同じ。

め」などの回答割合が高く、前回調査の結果と概ね似た傾向が得られた。一方で、上位3項目を除き、インターネット調査の回答割合よりも前回調査の回答割合が高い上位3項目は「生活リズムの乱れ（朝起きられないなど）」「勉強が分からなかった（授業についていけなかった、成績がよくなかったなど）」「学校へ行かないことをあまり悪く思わなかったため」であった。

（オンライン調査）

Q4-a	回答数	割合	H26 調査
11. 精神的不調 ⁶⁸	178	55.5%	43.7%
8. やる気	122	38.0%	44.4%
12. 身体的不調	120	37.4%	—
4. 先生(相性)	94	29.3%	—
1. 友人(いやがらせやいじめ) ⁶⁹	84	26.2%	41.4%
2. 友人(いやがらせやいじめを除く)	83	25.9%	—
13. 生活リズム	80	24.9%	34.1%
5. 勉強	76	23.7%	27.4%
14. 登校への疑問	60	18.7%	—
6. 授業	59	18.4%	—
3. 先生(怒る、うるさい、体罰) ⁷⁰	55	17.1%	16.6%
18. 助言	55	17.1%	8.5%
9. 悪気なし	49	15.3%	25.6%
10. 断続的な登校	38	11.8%	12.8%
15. 好みの選択 ⁷¹	32	10.0%	19.9%
16. 親からの注意不足	29	9.0%	6.6%
19. 障害	26	8.1%	—
20. その他	14	4.4%	14.3%
21. わからない	14	4.4%	—
7. 友人(影響)	13	4.0%	—
17. 学校からの支援不足	9	2.8%	4.7%

オンライン調査においては、「精神的な不調（漠然とした不安や気持ちの落ち込みなど）」
「学校生活に対するやる気が出なかったため」「身体的な不調（学校に行こうとすると腹

⁶⁸ 注釈 17 に同じ。

⁶⁹ 注釈 15 に同じ。

⁷⁰ 注釈 16 に同じ。

⁷¹ 注釈 18 に同じ。

痛や頭痛に襲われたなど)」などの回答割合が高く、前回調査の結果と近しい傾向が得られた。

上位3項目を除き、オンライン調査の回答割合よりも前回調査の回答割合が高い上位3項目は「友人との関係（いやがらせやいじめ）」「生活リズムの乱れ」「勉強が分からなかった（授業についていけなかった、成績がよくなかったなど）」であり、インターネット調査と同様の傾向が見られた。

(2) 不登校の「きっかけ」(Q2)と「継続理由」(Q4)との関係

次の表は 19 個の選択肢からなる「不登校のきっかけ」(Q2)と 21 個の選択肢からなる「不登校の継続理由」(Q4)のクロス集計結果を要約したものである。表中の数値は各クロス集計表における同時選択セル(両方の項目を選択した回答者の数)の群間差を示したものである。

※設問及び選択肢については、P. 11(Q2)、P. 22(Q4)を参照する。

(インターネット調査)

Q4. 1								
Q2. 1		1. 友人(いやがらせやいじめ)	2. 友人(いやがらせやいじめを除く)	3. 先生(いやがらせやいじめを除く)	4. 先生(相性)	5. 勉強	6. 授業	7. 友人(影響)
	1. 友人(いやがらせやいじめ)	<u>108.4</u>	0.0	<u>5.7</u>	<u>6.0</u>	0.2	-8.5	-3.7
	2. 友人(いやがらせやいじめを除く)	-10.3	<u>80.5</u>	<u>9.9</u>	<u>12.1</u>	<u>11.5</u>	<u>7.6</u>	<u>11.8</u>
	3. 先生(怒る、うるさい、体罰)	<u>2.1</u>	<u>11.9</u>	<u>78.7</u>	<u>46.1</u>	<u>14.8</u>	<u>12.2</u>	<u>15.6</u>
	4. 先生(相性)	1.6	<u>15.2</u>	<u>42.5</u>	<u>76.8</u>	<u>16.3</u>	<u>17.2</u>	<u>12.7</u>
	5. 勉強	0.0	<u>11.2</u>	<u>13.9</u>	<u>15.1</u>	<u>76.2</u>	<u>38.0</u>	<u>18.5</u>
	6. 授業	-9.8	<u>6.6</u>	<u>12.1</u>	<u>16.0</u>	<u>34.9</u>	<u>70.8</u>	<u>19.5</u>
	7. きまり	-6.5	<u>9.5</u>	<u>19.7</u>	<u>19.9</u>	<u>19.4</u>	<u>24.3</u>	<u>26.8</u>
	8. やる気	-16.4	<u>12.9</u>	<u>3.7</u>	<u>11.2</u>	<u>22.5</u>	<u>35.0</u>	<u>12.4</u>
	9. 合わなかった	-0.5	<u>10.0</u>	<u>8.0</u>	<u>12.5</u>	<u>13.7</u>	<u>9.4</u>	<u>11.8</u>
	10. 環境の変化	-3.5	<u>6.1</u>	<u>8.8</u>	<u>8.5</u>	<u>16.6</u>	<u>10.6</u>	<u>15.2</u>
	11. 親	<u>2.3</u>	<u>11.3</u>	<u>14.1</u>	<u>14.8</u>	<u>17.1</u>	<u>14.0</u>	<u>14.8</u>
	12. 家庭環境	<u>2.2</u>	<u>11.4</u>	<u>12.0</u>	<u>14.5</u>	<u>14.4</u>	<u>11.3</u>	<u>13.1</u>
	13. 精神的不調	-2.5	<u>17.0</u>	<u>4.9</u>	<u>12.9</u>	<u>14.2</u>	<u>5.6</u>	1.6
	14. 身体的不調	1.7	<u>8.4</u>	<u>8.1</u>	<u>14.3</u>	<u>9.1</u>	<u>4.7</u>	<u>2.1</u>
	15. 障害	0.4	<u>7.1</u>	<u>12.5</u>	<u>9.9</u>	<u>15.4</u>	<u>8.6</u>	<u>13.1</u>
	16. 生活リズム	-9.9	<u>8.1</u>	<u>4.7</u>	<u>8.0</u>	<u>16.5</u>	<u>15.7</u>	<u>9.5</u>
	17. ネット等	-5.7	<u>5.6</u>	<u>3.9</u>	<u>3.3</u>	<u>11.2</u>	<u>9.8</u>	<u>9.9</u>
	18. その他	-8.1	-0.6	-1.5	-2.5	-1.2	-1.2	1.5
	19. わからない	-21.6	-11.1	-10.6	-13.0	-10.2	-8.7	-6.2

Q4. 1								
Q2. 1		8. やる気	9. 悪意なし	10. 断続的な登校	11. 精神的不調	12. 身体的不調	13. 生活	14. 通学への疑問
	1. 友人(いやがらせやいじめ)	-15. 9	-11. 4	-1. 8	-1. 3	<u>3. 7</u>	-10. 0	-5. 8
	2. 友人(いやがらせやいじめを除く)	<u>10. 6</u>	<u>5. 6</u>	<u>7. 0</u>	<u>14. 2</u>	<u>5. 6</u>	<u>6. 9</u>	<u>9. 0</u>
	3. 先生(怒る、うるさい、体罰)	<u>3. 7</u>	<u>9. 1</u>	<u>11. 3</u>	<u>3. 7</u>	<u>7. 4</u>	<u>4. 6</u>	<u>8. 5</u>
	4. 先生(相性)	<u>12. 3</u>	<u>11. 9</u>	<u>11. 1</u>	<u>12. 5</u>	<u>13. 3</u>	<u>10. 1</u>	<u>16. 1</u>
	5. 勉強	<u>22. 8</u>	<u>16. 0</u>	<u>16. 3</u>	<u>11. 1</u>	<u>8. 2</u>	<u>14. 9</u>	<u>16. 4</u>
	6. 授業	<u>33. 6</u>	<u>28. 7</u>	<u>11. 3</u>	<u>3. 7</u>	<u>3. 7</u>	<u>18. 3</u>	<u>27. 4</u>
	7. きまり	<u>21. 8</u>	<u>24. 7</u>	<u>18. 8</u>	<u>7. 6</u>	<u>7. 7</u>	<u>14. 2</u>	<u>23. 8</u>
	8. やる気	<u>74. 6</u>	<u>36. 7</u>	<u>15. 1</u>	<u>22. 5</u>	<u>11. 9</u>	<u>25. 8</u>	<u>37. 9</u>
	9. 合わなかった	<u>16. 8</u>	<u>15. 3</u>	<u>19. 5</u>	<u>17. 8</u>	<u>14. 3</u>	<u>9. 1</u>	<u>13. 0</u>
	10. 環境の変化	<u>14. 9</u>	<u>17. 4</u>	<u>19. 1</u>	<u>18. 2</u>	<u>12. 4</u>	<u>15. 6</u>	<u>12. 2</u>
	11. 親	<u>19. 6</u>	<u>15. 1</u>	<u>15. 6</u>	<u>28. 4</u>	<u>19. 4</u>	<u>21. 0</u>	<u>21. 4</u>
	12. 家庭環境	<u>17. 9</u>	<u>16. 7</u>	<u>16. 4</u>	<u>30. 1</u>	<u>21. 0</u>	<u>19. 4</u>	<u>21. 6</u>
	13. 精神的不調	<u>26. 9</u>	<u>9. 9</u>	<u>13. 0</u>	<u>86. 2</u>	<u>46. 8</u>	<u>24. 7</u>	<u>24. 7</u>
	14. 身体的不調	<u>13. 9</u>	<u>5. 1</u>	<u>10. 5</u>	<u>47. 0</u>	<u>89. 9</u>	<u>19. 3</u>	<u>16. 4</u>
	15. 障害	<u>5. 8</u>	<u>10. 2</u>	<u>15. 0</u>	<u>14. 1</u>	<u>14. 2</u>	<u>16. 0</u>	<u>12. 7</u>
	16. 生活リズム	<u>26. 0</u>	<u>19. 4</u>	<u>17. 8</u>	<u>20. 4</u>	<u>20. 1</u>	<u>75. 1</u>	<u>24. 5</u>
	17. ネット等	<u>13. 9</u>	<u>12. 6</u>	<u>13. 0</u>	<u>6. 7</u>	<u>5. 1</u>	<u>25. 4</u>	<u>16. 1</u>
	18. その他	-1. 6	0. 5	-0. 5	0. 0	0. 5	<u>2. 8</u>	<u>2. 1</u>
	19. わからない	-12. 7	-7. 2	-4. 7	-12. 8	-9. 5	-6. 9	-6. 1

Q4. 1								
Q2. 1		15. 好みの選 択	16. 欠席の許 容・助言な ど	17. 支援不足	18. 助言	19. 障害	20. その他	21. 不明
	1. 友人(いや がらせやい じめ)	-5. 8	-0. 9	1. 1	1. 3	<u>2. 8</u>	-6. 7	-21. 8
	2. 友人(いや がらせやい じめを除く)	<u>5. 6</u>	<u>6. 7</u>	<u>7. 3</u>	<u>6. 8</u>	<u>5. 4</u>	0. 0	-9. 6
	3. 先生(怒 る、うるさ い、体罰)	<u>6. 6</u>	<u>7. 7</u>	<u>11. 3</u>	<u>5. 6</u>	<u>9. 6</u>	-2. 3	-10. 6
	4. 先生(相 性)	<u>9. 0</u>	<u>8. 4</u>	<u>12. 2</u>	<u>9. 7</u>	<u>9. 6</u>	-1. 4	-11. 4
	5. 勉強	<u>11. 1</u>	<u>11. 1</u>	<u>12. 9</u>	<u>7. 6</u>	<u>13. 6</u>	0. 7	-8. 1
	6. 授業	<u>19. 4</u>	<u>10. 2</u>	<u>12. 8</u>	<u>6. 0</u>	<u>7. 5</u>	0. 0	-6. 9
	7. きまり	<u>21. 1</u>	<u>13. 6</u>	<u>16. 5</u>	<u>11. 5</u>	<u>11. 2</u>	0. 8	-6. 1
	8. やる気	<u>20. 4</u>	<u>13. 3</u>	<u>12. 1</u>	<u>7. 0</u>	<u>7. 1</u>	-1. 5	-10. 5
	9. 合わなか った	<u>11. 8</u>	<u>12. 8</u>	<u>12. 1</u>	<u>11. 8</u>	<u>9. 4</u>	<u>3. 0</u>	-5. 5
	10. 環境の変 化	<u>12. 3</u>	<u>16. 0</u>	<u>16. 4</u>	<u>12. 2</u>	<u>11. 4</u>	<u>6. 4</u>	-4. 8
	11. 親	<u>12. 4</u>	<u>17. 3</u>	<u>17. 0</u>	<u>9. 9</u>	<u>14. 0</u>	<u>8. 6</u>	-4. 7
	12. 家庭環境	<u>11. 8</u>	<u>20. 5</u>	<u>17. 4</u>	<u>11. 8</u>	<u>12. 5</u>	<u>10. 3</u>	-4. 6
	13. 精神的不 調	<u>7. 9</u>	<u>11. 6</u>	<u>10. 6</u>	<u>12. 8</u>	<u>14. 3</u>	1. 3	-10. 8
	14. 身体的不 調	<u>6. 7</u>	<u>8. 9</u>	<u>9. 6</u>	<u>15. 4</u>	<u>13. 6</u>	0. 3	-8. 4
	15. 障害	<u>15. 2</u>	<u>15. 4</u>	<u>16. 1</u>	<u>17. 2</u>	<u>73. 7</u>	1. 3	-2. 7
	16. 生活リズ ム	<u>20. 2</u>	<u>16. 5</u>	<u>13. 3</u>	<u>11. 2</u>	<u>14. 3</u>	1. 5	-6. 3
	17. ネット等	<u>22. 5</u>	<u>13. 0</u>	<u>15. 5</u>	<u>12. 8</u>	<u>15. 2</u>	<u>2. 2</u>	-2. 1
	18. その他	<u>3. 7</u>	1. 1	-0. 7	<u>2. 6</u>	1. 8	<u>39. 9</u>	0. 3
	19. わからな い	-3. 4	-4. 7	-4. 2	-3. 0	-3. 6	-2. 3	<u>81. 1</u>

インターネット調査においては、上の表から、不登校のきっかけと継続理由について、多くの項目において期待値と回答の間に統計的な差が見られる。とりわけ、強調（斜体下線）部分の数値は両者に強い関連がある。例えば、Q4 において継続理由の「友人との関係（いやがらせやいじめ）」を選択した回答者においては、Q2 のきっかけとして「友人との関係（いやがらせやいじめ）」「親との関係（親が怒る、親の言葉や態度への反発、親との会話がほとんどないなど）」「家庭環境に起因するもの（両親の不和、祖父母と父母の不和など）」「先生との関係（先生が怒る、注意がうるさい、体罰など）」を選択している回答者の割合が有意に高くなっている。同様の関連がその他のきっかけと継続理由との間にもうかがえる。

基本的には、Q2 のきっかけと Q4 の継続理由の選択肢において、対応する選択肢の群間差が高くなる傾向があり、不登校になったきっかけが継続しているため、不登校も継続するという結果が得られた。一方で、「親との関係（親が怒る、親の言葉や態度への反発、

親との会話がほとんどないなど)」「家庭環境に起因するもの(両親の不和、祖父母と父母の不和など)」をきっかけとし、「精神的な不調(漠然とした不安や気持ちの落ち込みなど)」を継続理由とする群間差もやや大きく、家庭内の課題によって不登校になった際に、精神に不調を引き起こし登校ができなくなるという可能性も示唆される。

また、Q2 のきっかけとして「授業が面白くなかった」「学校のきまりなどの問題(学校の校則がきびしいなど)」「学校生活に対してやる気が出なかった」を選択した際に、Q4 の継続理由として「なぜ学校に行かなくてはならないのかが理解できなかったため」も選択する群間差もやや大きく、学校に行く意欲の低下が登校への疑問につながり、不登校になるという可能性も示唆される。

Q4. 2								
Q2. 2		1. 友人(いやがらせやいじめ)	2. 友人(いやがらせやいじめを除く)	3. 先生(いやがらせやいじめを除く)	4. 先生(相性)	5. 勉強	6. 授業	7. 友人(影響)
	1. 友人(いやがらせやいじめ)	<u>109. 8</u>	-17. 3	-16. 8	-19. 1	-15. 7	-15. 6	-10. 4
	2. 友人(いやがらせやいじめを除く)	-19. 5	<u>74. 7</u>	<u>2. 6</u>	-1. 3	0. 6	-1. 9	0. 6
	3. 先生(怒る、うるさい、体罰)	-19. 9	-3. 2	<u>65. 1</u>	<u>13. 0</u>	<u>6. 4</u>	1. 6	1. 8
	4. 先生(相性)	-20. 0	-5. 5	<u>6. 6</u>	<u>66. 5</u>	1. 8	<u>2. 4</u>	<u>2. 7</u>
	5. 勉強	-16. 5	-3. 5	0. 8	0. 1	<u>53. 0</u>	<u>8. 9</u>	<u>4. 2</u>
	6. 授業	-15. 8	-4. 8	-1. 2	-1. 4	<u>4. 7</u>	<u>50. 4</u>	<u>6. 1</u>
	7. きまり	-11. 4	-1. 9	0. 0	0. 7	1. 8	<u>5. 2</u>	<u>14. 1</u>
	8. やる気	-25. 8	-7. 0	-7. 1	-6. 0	-2. 5	1. 7	<u>2. 5</u>
	9. 合わなかった	-11. 2	1. 6	-3. 2	-0. 2	0. 3	-2. 1	0. 9
	10. 環境の変化	-10. 4	-3. 4	-1. 7	-0. 7	0. 8	-1. 3	<u>4. 3</u>
	11. 親	-10. 0	-0. 9	-2. 9	-2. 0	-0. 9	0. 1	<u>2. 5</u>
	12. 家庭環境	-11. 4	-2. 2	-2. 4	-1. 8	-2. 0	-3. 4	-0. 6
	13. 精神的な不調	-25. 2	-7. 4	-7. 5	-7. 0	-6. 4	-7. 1	-3. 1
	14. 身体的な不調	-18. 4	-5. 6	-4. 7	-5. 2	-4. 0	-3. 2	-3. 2
	15. 障害	-8. 3	-2. 6	-1. 0	-2. 3	-1. 6	-1. 0	-0. 3
	16. 生活リズム	-13. 9	-3. 2	-2. 7	-3. 2	-2. 6	-2. 0	0. 1
	17. ネット等	-7. 2	-1. 5	-1. 3	-1. 1	-1. 1	1. 4	<u>2. 5</u>
	18. その他	-8. 7	-2. 1	-2. 2	-2. 0	-2. 0	-1. 4	<u>3. 7</u>
	19. わからない	-17. 2	-6. 0	-5. 2	-5. 3	-3. 7	-2. 0	-2. 0

Q4. 2								
Q2. 2		8. やる気	9. 悪意なし	10. 断続的な登校	11. 精神的不調	12. 身体的不調	13. 生活	14. 通学への疑問
	1. 友人(いやがらせやいじめ)	-25. 5	-12. 0	-6. 0	-28. 0	-18. 0	-13. 6	-11. 4
	2. 友人(いやがらせやいじめを除く)	-6. 8	-2. 3	-2. 4	-7. 7	-6. 8	-4. 7	-1. 9
	3. 先生(怒る、うるさい、体罰)	-6. 4	-2. 3	0. 5	-8. 9	-3. 9	-3. 2	-3. 2
	4. 先生(相性)	-4. 0	-0. 4	0. 7	-7. 8	-5. 1	-2. 7	-2. 0
	5. 勉強	0. 1	-0. 2	<u>3. 5</u>	-4. 2	-4. 1	-2. 9	-1. 6
	6. 授業	1. 5	<u>6. 2</u>	1. 7	-6. 6	-3. 8	0. 2	<u>2. 6</u>
	7. きまり	<u>4. 2</u>	<u>9. 1</u>	<u>5. 9</u>	-2. 0	-3. 0	-1. 8	<u>8. 0</u>
	8. やる気	<u>65. 3</u>	<u>14. 0</u>	-0. 7	-7. 7	-6. 3	<u>2. 2</u>	<u>12. 5</u>
	9. 合わなかった	<u>4. 4</u>	<u>4. 7</u>	<u>9. 8</u>	<u>5. 3</u>	1. 9	-1. 3	<u>2. 2</u>
	10. 環境の変化	<u>2. 1</u>	<u>2. 3</u>	<u>2. 7</u>	<u>7. 8</u>	0. 7	1. 5	<u>2. 2</u>
	11. 親	1. 5	<u>2. 3</u>	<u>2. 3</u>	<u>8. 3</u>	-1. 3	1. 1	<u>3. 5</u>
	12. 家庭環境	1. 9	<u>4. 2</u>	1. 7	<u>11. 5</u>	-0. 4	0. 0	<u>4. 6</u>
	13. 精神的不調	-4. 6	-2. 4	-2. 2	<u>76. 2</u>	-1. 3	-2. 9	<u>2. 5</u>
	14. 身体的不調	-5. 9	-2. 6	-1. 0	-0. 7	<u>81. 1</u>	-2. 3	-0. 2
	15. 障害	-2. 7	-1. 3	-1. 0	-1. 4	0. 0	-0. 1	-1. 2
	16. 生活リズム	0. 3	<u>4. 4</u>	0. 8	-3. 3	-0. 4	<u>65. 1</u>	1. 6
	17. ネット等	<u>3. 0</u>	1. 6	0. 0	-2. 1	-2. 3	<u>6. 8</u>	<u>3. 0</u>
	18. その他	-0. 7	0. 4	-0. 2	-0. 3	0. 4	1. 0	0. 6
	19. わからない	-4. 9	-2. 6	0. 6	-5. 7	-2. 3	-1. 0	-2. 0

Q4. 2								
Q2. 2		15. 好みの 選択	16. 欠席の 許容・助言 など	17. 支援不 足	18. 助言	19. 障害	20. その他	21. 不明
	1. 友人(い やがらせや いじめ)	-7. 6	-6. 7	-4. 2	-4. 6	-8. 1	-10. 0	-18. 3
	2. 友人(い やがらせや いじめを除 く)	-1. 5	-0. 7	-0. 5	-0. 4	-3. 9	-2. 6	-4. 8
	3. 先生(怒 る、うるさ い、体罰)	-1. 6	-1. 4	0. 3	-1. 3	-2. 1	-2. 7	-6. 2
	4. 先生(相 性)	-0. 7	-0. 4	-0. 3	0. 6	-0. 9	-3. 2	-4. 9
	5. 勉強	-1. 8	-1. 9	-0. 6	-0. 1	-0. 2	-1. 6	-3. 5
	6. 授業	1. 6	-1. 3	0. 3	-1. 5	-1. 6	-2. 3	-0. 9
	7. きまり	0. 4	0. 2	<u>3. 5</u>	0. 0	1. 1	0. 3	-2. 5
	8. やる気	<u>5. 7</u>	-1. 1	1. 1	-1. 1	-3. 7	-3. 1	-3. 3
	9. 合わな かった	<u>2. 8</u>	<u>5. 7</u>	-1. 2	<u>2. 2</u>	-1. 3	<u>5. 0</u>	-0. 5
	10. 環境の 変化	-1. 0	<u>6. 8</u>	<u>4. 3</u>	<u>3. 3</u>	-1. 3	<u>7. 9</u>	-0. 3
	11. 親	1. 8	<u>10. 5</u>	1. 3	1. 5	-1. 2	<u>8. 6</u>	0. 4
	12. 家庭環 境	1. 2	<u>9. 5</u>	<u>3. 8</u>	<u>3. 5</u>	0. 6	<u>9. 5</u>	1. 1
	13. 精神的 不調	0. 7	-0. 2	-1. 1	-0. 6	0. 0	-2. 8	-4. 4
	14. 身体的 不調	-0. 9	1. 6	1. 2	<u>3. 9</u>	-0. 4	-1. 5	-2. 0
	15. 障害	0. 7	1. 2	-0. 7	1. 0	<u>73. 3</u>	0. 2	-0. 7
	16. 生活リ ズム	<u>5. 4</u>	1. 0	-0. 2	-0. 5	1. 3	-1. 3	-1. 2
	17. ネット 等	<u>12. 0</u>	-0. 9	<u>5. 6</u>	<u>2. 1</u>	<u>3. 7</u>	<u>4. 1</u>	1. 5
	18. その他	<u>5. 4</u>	-0. 1	-0. 7	0. 7	<u>3. 7</u>	<u>41. 5</u>	1. 3
	19. わから ない	-0. 8	-1. 6	-0. 8	<u>2. 4</u>	-1. 7	-2. 3	<u>81. 0</u>

インターネット調査において、不登校のきっかけと継続理由として、それぞれ最もあてはまるものを一つ選択した結果を見ると、あてはまるものをすべて選択した結果と同様、基本的には、Q2 のきっかけと Q4 の継続理由の選択肢において、対応する選択肢の群間差が高くなる傾向があり、不登校になったきっかけが継続しているため、不登校も継続するという結果が得られた。

また、「親との関係（親が怒る、親の言葉や態度への反発、親との会話がほとんどないなど）」「家庭環境に起因するもの（両親の不和、祖父母と父母の不和など）」をきっかけとし、「精神的な不調（漠然とした不安や気持ちの落ち込みなど）」を継続理由とする群間差もやや大きく、あてはまるものをすべて選択した結果と同様、家庭内の課題によって不登校になった際に、精神に不調を引き起こし登校ができなくなるという可能性も示唆される。

Q2 のきっかけとして「学校のきまりなどの問題（学校の校則がきびしいなど）」「学校生活に対してやる気が出なかった」を選択した際に、Q4 の継続理由として「なぜ学校に行かなくてはならないのかが理解できなかったため」も選択する群間差もやや大きく、あてはまるものをすべて選択した結果と同様、学校に行く意欲の低下が登校への疑問につながり、不登校になるという可能性も示唆される。

(オンライン調査)

Q4. 1								
Q2. 1		1. 友人(いやがらせやいじめ)	2. 友人(いやがらせやいじめを除く)	3. 先生(いやがらせやいじめを除く)	4. 先生(相性)	5. 勉強	6. 授業	7. 友人(影響)
	1. 友人(いやがらせやいじめ)	<u>13. 1</u>	-0. 1	<u>2. 4</u>	<u>2. 5</u>	0. 9	1. 0	0. 3
	2. 友人(いやがらせやいじめを除く)	-0. 2	<u>10. 3</u>	0. 5	0. 4	1. 6	0. 4	<u>2. 1</u>
	3. 先生(怒る、うるさい、体罰)	<u>3. 1</u>	1. 6	<u>11. 2</u>	<u>5. 7</u>	0. 4	1. 0	-0. 5
	4. 先生(相性)	<u>3. 6</u>	<u>2. 6</u>	<u>6. 2</u>	<u>11. 1</u>	1. 1	-0. 2	-0. 1
	5. 勉強	0. 9	0. 0	1. 0	1. 1	<u>10. 5</u>	1. 4	0. 2
	6. 授業	<u>2. 6</u>	0. 5	<u>2. 4</u>	1. 9	1. 0	<u>10. 9</u>	0. 9
	7. きまり	-0. 3	-0. 3	<u>2. 6</u>	<u>2. 0</u>	1. 5	<u>2. 9</u>	1. 5
	8. やる気	-0. 7	<u>2. 1</u>	1. 8	0. 5	1. 1	<u>3. 8</u>	<u>2. 8</u>
	9. 合わなかった	0. 7	<u>2. 2</u>	<u>2. 8</u>	<u>2. 8</u>	0. 9	0. 5	<u>2. 2</u>
	10. 環境の変化	-0. 2	-2. 2	1. 2	-0. 2	-1. 1	-0. 9	0. 7
	11. 親	0. 9	-1. 7	1. 9	1. 0	-0. 2	-0. 2	0. 5
	12. 家庭環境	0. 1	-0. 9	<u>3. 1</u>	1. 9	-0. 2	0. 8	1. 6
	13. 精神的不調	-0. 5	1. 4	1. 6	1. 8	<u>2. 6</u>	-0. 4	1. 1
	14. 身体的不調	1. 1	0. 7	<u>2. 7</u>	-0. 1	0. 6	-0. 2	1. 3
	15. 障害	1. 1	0. 2	0. 5	0. 6	<u>3. 3</u>	1. 3	1. 8
	16. 生活リズム	0. 0	0. 1	1. 4	0. 6	<u>3. 5</u>	1. 1	<u>2. 4</u>
	17. ネット等	-1. 4	-0. 2	1. 8	-0. 7	<u>3. 3</u>	1. 9	<u>2. 8</u>
	18. その他	-1. 0	1. 5	1. 2	-1. 3	-2. 1	1. 0	0. 6
	19. わからない	-2. 6	-1. 5	-2. 0	-2. 3	-1. 3	-0. 8	-0. 9

Q4. 1								
Q2. 1		8. やる気	9. 悪意なし	10. 断続的な 登校	11. 精神的不 調	12. 身体的不 調	13. 生活	14. 通学への 疑問
	1. 友人(いや がらせやい じめ)	-1. 7	-1. 1	0. 6	-0. 4	0. 4	-1. 1	0. 3
	2. 友人(いや がらせやい じめを除く)	1. 9	0. 7	0. 9	0. 9	1. 0	1. 2	0. 3
	3. 先生(怒 る、うるさ い、体罰)	0. 5	0. 4	1. 4	-1. 0	-0. 2	-0. 8	0. 2
	4. 先生(相 性)	-0. 2	0. 8	1. 1	1. 3	1. 0	0. 7	0. 6
	5. 勉強	0. 8	1. 5	<u>3. 5</u>	0. 4	-0. 5	<u>2. 7</u>	0. 6
	6. 授業	<u>4. 1</u>	<u>2. 6</u>	0. 0	-0. 9	-0. 9	<u>2. 0</u>	<u>3. 3</u>
	7. きまり	<u>2. 2</u>	<u>4. 0</u>	-0. 9	-1. 7	-0. 2	0. 3	<u>4. 2</u>
	8. やる気	<u>11. 4</u>	<u>5. 9</u>	<u>2. 0</u>	0. 3	-0. 4	<u>3. 2</u>	<u>4. 9</u>
	9. 合わなか った	0. 6	-0. 9	0. 3	1. 4	1. 3	-0. 1	0. 8
	10. 環境の変 化	-0. 4	-0. 5	1. 3	<u>3. 1</u>	1. 2	0. 4	-0. 5
	11. 親	<u>2. 4</u>	1. 7	<u>2. 3</u>	<u>2. 3</u>	0. 1	<u>2. 9</u>	1. 2
	12. 家庭環境	1. 1	0. 7	1. 5	<u>2. 4</u>	<u>2. 5</u>	0. 3	0. 7
	13. 精神的不 調	1. 9	-0. 9	<u>2. 2</u>	<u>9. 1</u>	<u>2. 6</u>	<u>3. 3</u>	0. 0
	14. 身体的不 調	-0. 4	-1. 3	1. 1	<u>4. 8</u>	<u>12. 2</u>	1. 8	-0. 6
	15. 障害	0. 8	1. 4	-0. 3	0. 4	1. 7	<u>2. 6</u>	<u>3. 8</u>
	16. 生活リズ ム	<u>2. 7</u>	2. 0	<u>3. 6</u>	<u>3. 1</u>	<u>2. 2</u>	<u>12. 1</u>	<u>2. 8</u>
	17. ネット等	<u>5. 0</u>	1. 3	<u>5. 3</u>	<u>3. 1</u>	-0. 5	<u>6. 9</u>	<u>2. 3</u>
	18. その他	-1. 9	-0. 1	-0. 6	-1. 5	-1. 3	-0. 9	1. 0
	19. わからない	-2. 9	-1. 2	-1. 6	-3. 4	-2. 4	-1. 4	-1. 5

Q4. 1								
Q2. 1		15. 好みの選 択	16. 欠席の許 容・助言な ど	17. 支援不足	18. 助言	19. 障害	20. その他	21. 不明
	1. 友人(いや がらせやい じめ)	<u>2. 2</u>	0. 7	1. 3	-0. 7	1. 6	-1. 7	-2. 8
	2. 友人(いや がらせやい じめを除く)	-0. 9	0. 3	<u>2. 6</u>	-0. 5	1. 2	-0. 6	-2. 4
	3. 先生(怒 る、うるさ い、体罰)	-0. 3	-0. 5	0. 1	0. 3	<u>2. 9</u>	0. 8	-1. 9
	4. 先生(相 性)	-0. 5	0. 3	0. 8	1. 4	1. 2	-0. 9	-2. 0
	5. 勉強	1. 1	0. 5	-0. 7	-1. 2	<u>2. 4</u>	-1. 9	-1. 9
	6. 授業	<u>2. 4</u>	1. 9	0. 9	1. 3	1. 3	0. 7	-2. 0
	7. きまり	1. 4	-0. 1	0. 9	<u>2. 6</u>	<u>2. 2</u>	1. 3	-2. 0
	8. やる気	1. 0	1. 0	1. 5	0. 6	0. 6	-0. 9	-2. 7
	9. 合わなか った	0. 4	-0. 4	1. 4	1. 6	1. 5	1. 2	-1. 7
	10. 環境の変 化	0. 5	<u>2. 0</u>	<u>3. 5</u>	1. 2	<u>2. 3</u>	<u>2. 4</u>	-1. 3
	11. 親	<u>2. 0</u>	1. 9	<u>2. 1</u>	0. 0	<u>3. 9</u>	1. 0	-1. 8
	12. 家庭環境	1. 1	<u>4. 1</u>	<u>3. 4</u>	<u>2. 3</u>	1. 7	<u>2. 2</u>	-1. 6
	13. 精神的不 調	-0. 3	1. 0	1. 9	<u>2. 8</u>	1. 2	-0. 3	-3. 0
	14. 身体的不 調	0. 9	0. 9	1. 2	0. 5	1. 9	0. 5	-2. 4
	15. 障害	1. 4	0. 3	1. 4	1. 6	<u>14. 7</u>	1. 7	-1. 2
	16. 生活リズ ム	0. 2	2. 0	1. 8	-0. 4	<u>2. 9</u>	0. 1	-1. 9
	17. ネット等	<u>2. 2</u>	1. 9	0. 9	0. 9	1. 6	0. 2	-1. 5
	18. その他	-1. 3	0. 7	1. 0	-1. 0	-0. 1	<u>5. 9</u>	-0. 8
	19. わからな い	-0. 6	0. 3	-0. 7	-0. 7	-1. 3	-0. 9	<u>13. 3</u>

オンライン調査においては、例えば、Q4 において継続理由の「友人との関係（いやがらせやいじめ）」を選択した回答者においては、Q2 のきっかけとして「友人との関係（いやがらせやいじめ）」を選択している回答者の割合が有意に高くなっている。

また、インターネット調査と同様に、Q2 のきっかけと Q4 の継続理由の選択肢において、対応する選択肢の群間差が高くなる傾向があり、不登校になったきっかけが継続しているため、不登校も継続するという結果が得られた。一方で、「家族の生活環境の変化（父親や母親の単身赴任、家族の別居、親の転職や失業などの経済的な問題など）」「家庭環境に起因するもの（両親の不和、祖父母と父母の不和など）」をきっかけとし、「学校から登校するように働きかけがなかったため」を継続理由とする群間差もやや大きく、家庭や環境の変化によって不登校になった際には、学校側からの登校への働きかけの行いにくさも示唆される。

Q4. 2								
Q2. 2		1. 友人(いやがらせやいじめ)	2. 友人(いやがらせやいじめを除く)	3. 先生(いやがらせやいじめを除く)	4. 先生(相性)	5. 勉強	6. 授業	7. 友人(影響)
	1. 友人(いやがらせやいじめ)	<u>12.9</u>	0.9	-1.0	-0.7	-1.1	-1.0	—
	2. 友人(いやがらせやいじめを除く)	-0.9	<u>6.1</u>	-0.9	-1.0	0.3	-0.5	—
	3. 先生(怒る、うるさい、体罰)	-1.0	-1.0	<u>7.7</u>	1.1	-0.9	-0.6	—
	4. 先生(相性)	-1.8	0.0	0.2	<u>7.9</u>	0.1	-0.6	—
	5. 勉強	-1.3	-0.8	-0.7	0.6	<u>9.7</u>	-0.4	—
	6. 授業	-1.4	-0.8	-0.7	-0.8	-0.8	<u>4.3</u>	—
	7. きまり	-1.2	-0.7	1.1	0.8	-0.7	-0.4	—
	8. やる気	-2.2	-1.3	-1.2	-0.5	0.6	0.8	—
	9. 合わなかった	-0.8	1.6	-0.8	0.2	-0.9	-0.5	—
	10. 環境の変化	-0.9	-0.5	-0.5	-0.5	-0.5	-0.3	—
	11. 親	-1.0	-0.6	-0.5	-0.6	-0.5	-0.3	—
	12. 家庭環境	-0.4	-0.8	0.9	-0.8	-0.7	-0.4	—
	13. 精神的不調	-2.0	-1.4	-1.3	-1.5	-1.4	-0.8	—
	14. 身体的不調	-2.1	-0.2	-0.1	-1.3	-1.1	-0.7	—
	15. 障害	-1.0	1.4	-0.5	-0.6	-0.5	-0.3	—
	16. 生活リズム	-1.0	-0.6	-0.5	-0.6	-0.5	-0.3	—
	17. ネット等	-0.9	-0.5	-0.5	-0.5	1.7	<u>3.3</u>	—
	18. その他	-1.1	-0.6	1.2	-0.7	-0.6	-0.4	—
	19. わからない	-1.7	-1.0	-0.9	-1.0	0.2	1.4	—

Q4. 2								
Q2. 2		10. 断続的な 登校	11. 精神的な 不調	10. 断続的な 登校	11. 精神的な 不調	12. 身体的な 不調	13. 生活	14. 通学への 疑問
	1. 友人(いやがらせやいじめ)	-0. 2	-2. 5	-0. 2	-2. 5	-1. 9	-1. 3	-1. 6
	2. 友人(いやがらせやいじめを除く)	-0. 6	0. 3	-0. 6	0. 3	-0. 3	0. 9	-0. 8
	3. 先生(怒る、うるさい、体罰)	1. 0	0. 1	1. 0	0. 1	-1. 3	-0. 7	-0. 9
	4. 先生(相性)	0. 8	-0. 8	0. 8	-0. 8	0. 3	-0. 8	-0. 9
	5. 勉強	1. 6	-1. 0	1. 6	-1. 0	0. 2	-0. 5	-0. 7
	6. 授業	1. 5	-0. 4	1. 5	-0. 4	-1. 0	-0. 6	<u>2. 4</u>
	7. きまり	-0. 5	-1. 6	-0. 5	-1. 6	-0. 9	-0. 5	1. 2
	8. やる気	-0. 9	-0. 2	-0. 9	-0. 2	-1. 7	0. 3	0. 9
	9. 合わなかった	-0. 6	0. 5	-0. 6	0. 5	-0. 2	-0. 6	-0. 8
	10. 環境の変化	-0. 3	-0. 1	-0. 3	-0. 1	1. 0	-0. 4	-0. 4
	11. 親	<u>2. 4</u>	0. 7	<u>2. 4</u>	0. 7	-0. 7	-0. 4	-0. 5
	12. 家庭環境	-0. 5	-0. 2	-0. 5	-0. 2	1. 3	-0. 5	-0. 7
	13. 精神的な 不調	0. 2	<u>5. 7</u>	0. 2	<u>5. 7</u>	-1. 9	1. 2	1. 5
	14. 身体的な 不調	-0. 8	-0. 7	-0. 8	-0. 7	<u>9. 9</u>	0. 5	0. 0
	15. 障害	-0. 4	-0. 3	-0. 4	-0. 3	-0. 7	-0. 4	1. 7
	16. 生活リズム	-0. 4	-0. 3	-0. 4	-0. 3	0. 8	<u>4. 9</u>	-0. 5
	17. ネット等	-0. 3	-0. 1	-0. 3	-0. 1	-0. 7	<u>2. 5</u>	-0. 4
	18. その他	-0. 4	0. 3	-0. 4	0. 3	-0. 8	-0. 5	1. 3
	19. わからない	-0. 7	-0. 5	-0. 7	-0. 5	-1. 3	-0. 7	0. 4

Q4. 2								
Q2. 2		15. 好みの選 択	16. 欠席の許 容・助言な ど	17. 支援不足	18. 助言	19. 障害	20. その他	21. 不明
	1. 友人(いや がらせやい じめ)	-1. 1	0. 1	-0. 5	-0. 5	-1. 3	-0. 6	-1. 8
	2. 友人(いや がらせやい じめを除く)	-0. 6	1. 5	-0. 2	-0. 7	-0. 7	-0. 8	-0. 9
	3. 先生(怒 る、うるさ い、体罰)	-0. 6	-0. 6	-0. 2	-0. 7	-0. 7	0. 6	-0. 9
	4. 先生(相 性)	1. 0	-0. 6	-0. 3	-0. 8	-0. 8	-0. 9	-1. 0
	5. 勉強	-0. 5	-0. 4	-0. 2	-0. 6	-0. 5	-0. 6	-0. 7
	6. 授業	-0. 5	-0. 4	-0. 2	1. 2	1. 3	1. 0	-0. 8
	7. きまり	<u>4. 5</u>	-0. 4	-0. 2	1. 5	-0. 5	1. 4	-0. 7
	8. やる気	-0. 8	0. 8	-0. 3	1. 3	-0. 9	-1. 0	-1. 2
	9. 合わなか った	-0. 6	-0. 5	-0. 2	-0. 7	-0. 6	0. 8	-0. 9
	10. 環境の変 化	-0. 3	-0. 3	<u>7. 9</u>	<u>2. 3</u>	<u>2. 5</u>	-0. 4	-0. 5
	11. 親	<u>2. 7</u>	<u>3. 0</u>	-0. 1	-0. 4	-0. 4	-0. 4	-0. 5
	12. 家庭環境	<u>4. 0</u>	-0. 4	-0. 2	<u>3. 1</u>	-0. 5	-0. 6	-0. 7
	13. 精神的不 調	-0. 9	-0. 8	-0. 4	-1. 1	1. 2	-0. 2	-0. 5
	14. 身体的不 調	-0. 7	-0. 7	-0. 3	0. 3	-0. 9	-1. 0	-0. 1
	15. 障害	-0. 3	-0. 3	-0. 1	-0. 4	<u>7. 5</u>	-0. 4	-0. 5
	16. 生活リズ ム	-0. 3	<u>3. 0</u>	-0. 1	-0. 4	-0. 4	-0. 4	-0. 5
	17. ネット等	-0. 3	-0. 3	-0. 1	-0. 4	-0. 4	-0. 4	-0. 5
	18. その他	-0. 4	-0. 4	-0. 2	-0. 5	1. 8	<u>5. 6</u>	-0. 6
	19. わからな い	-0. 6	-0. 6	-0. 2	-0. 7	-0. 7	-0. 8	<u>13. 3</u>

オンライン調査においては、不登校のきっかけと継続理由として、それぞれ最もあてはまるものを一つ選択した結果を見ると、あてはまるものをすべて選択した結果と同様、Q2のきっかけとQ4の継続理由の選択肢において、対応する選択肢の群間差が高くなる傾向があり、不登校になったきっかけが継続しているため、不登校も継続するという結果が得られた。

一方で、「家族の生活環境の変化（父親や母親の単身赴任、家族の別居、親の転職や失業などの経済的な問題など）」をきっかけとし、「学校から登校するように働きかけがなかったため」を継続理由とする群間差もやや大きく、あてはまるものをすべて選択した結果と同様、家庭や環境の変化によって不登校になった際に、学校側からの登校への働きかけの行いにくさも示唆される。

(3) 第7章のまとめ

第7章では不登校の継続理由や不登校の態様として、不登校の継続理由や不登校のきっかけと継続理由との関係について整理した。統計的に有意差があった回答から示唆を抽出するため、きっかけと継続理由はいずれも最もあてはまる回答について記載した。

単純集計結果について、インターネット調査では、「友人との関係（いやがらせやいじめ）」「精神的な不調（漠然とした不安や気持ちの落ち込みなど）」「学校生活に対するやる気が出なかったため」といった項目が上位の不登校の継続理由であった。オンライン調査では、「精神的な不調（漠然とした不安や気持ちの落ち込みなど）」「学校生活に対するやる気が出なかったため」「身体的な不調（学校に行こうとすると腹痛や頭痛に襲われたなど）」といった項目が上位の不登校の継続理由であった。

不登校のきっかけと継続理由との関係について、インターネット調査では、類似した項目間に強い関連が示されており、基本的に不登校のきっかけが解消されていないため、不登校が継続している傾向が示唆される。類似していない項目間の関連についても、いくつかの可能性が挙げられる。例えば、「先生との関係（先生と合わなかったなど）」「勉強が分からなかった（授業についていけなかった、成績が良くなかったなど）」「授業が面白くなかった」「学校のきまりなどの問題（学校の校則がきびしいなど）」「家族の生活環境の変化（父親や母親の単身赴任、家族の別居、親の転職や失業などの経済的な問題など）」「親との関係（親が怒る、親の言葉や態度への反発、親との会話がほとんどないなど）」など、本人を取り巻く環境がきっかけとなっている場合、「周囲の友人の影響（学校に行かないグループと近かった、友人に遊びに誘われたなど）」が継続理由の一つになっていることから、学校や家庭ではない身近な友人が機能している可能性が示唆される。「学校のきまりなどの問題（学校の校則がきびしいなど）」「家族の生活環境の変化（父親や母親の単身赴任、家族の別居、親の転職や失業などの経済的な問題など）」「家庭環境に起因するもの（両親の不和、祖父母と父母の不和など）」など、学校や支援者から認識されづらいきっかけに関しては「学校から登校するように働きかけがなかったため」を継続理由に挙げていることから、学校側からの働きかけにくさが示唆される。又は、「家庭環境に起因するもの（両親の不和、祖父母と父母の不和など）」によって不登校になった際に、「精神的な不調（漠然とした不安や気持ちの落ち込みなど）」を引き起こし登校ができなくなるという可能性や、「学校生活に対するやる気が出なかったため」が「なぜ学校に行かなくてはならないのかが理解できなかったため」につながり、不登校になるという可能性なども示唆される。また、「インターネットやメール、ゲームなどの影響（一度始めると止められない、学校より楽しいなど）」を最もあてはまるきっかけに挙げている回答者においては、「周囲の友人の影響（学校に行かないグループと近かった、友人に遊びに誘われたなど）」「自分の好きな方向を選んだため」「保護者やまわりの人に学校を休んでもいいと助言されたため」「生活リズムの乱れ（朝起きられないなど）」など、継続理由が多様であった。オンライン調査では、インターネット調査と比較して統計的に有意な項目は少な

いが、例えば「家族の生活環境の変化（父親や母親の単身赴任、家族の別居、親の転職や失業などの経済的な問題など）」をきっかけとし、「学校から登校するように働きかけがなかったため」を継続理由とする群間差もやや大きく、家庭や環境の変化によって不登校になった際に、学校側から登校への働きかけの行いにくさも示唆される。

第8章 欠席状況の推移パターン

(1) 欠席状況の推移パターン (Q1)

Q1 では「(a)小学校」時と「(b)中学校」時の2時点での「出席状況」を聞いており、回答選択肢は以下のとおりである。

- 「1. ほとんど休まなかった（目安：週1日未満の欠席、年間30日未満の欠席）」
- 「2. 少し休んだ（目安：週1～2日未満の欠席）」
- 「3. 半分程度休んだ（目安：週2～3日程度の欠席）」
- 「4. かなり休んだ（目安：週3～4日未満の欠席）」
- 「5. ほとんど休んだ（目安：週5日程度の欠席）」

そこで、「(a)小学校」時を「小」、「(b)中学校」時を「中」とし、また、「1. ほとんど休まなかった」を「ほぼ出席」、「2. 少し休んだ」「3. 半分程度休んだ」を「少し欠席」、「4. かなり休んだ」「5. ほとんど休んだ」を「ほぼ欠席」とリコードして、その組み合わせによる欠席状況毎の人数及び割合は以下のようになる。なお、リコード後のパターンが「小：ほぼ出席・中：ほぼ出席」となる回答者は、不登校の定義に該当しないため分析対象から除外した。

(インターネット調査)

	中学校から不登校		中学校で不登校が改善		中学校で不登校が継続			
状況	小：ほぼ出席 中：少し欠席	小：ほぼ出席 中：ほぼ欠席	小：少し欠席 中：ほぼ出席	小：ほぼ欠席 中：ほぼ出席	小：少し欠席 中：少し欠席	小：少し欠席 中：ほぼ欠席	小：ほぼ欠席 中：少し欠席	小：ほぼ欠席 中：ほぼ欠席
人数	3,656	2,514	1,974	602	5,528	1,551	624	1,758
割合	20.1%	13.8%	10.8%	3.3%	30.4%	8.5%	3.4%	9.7%

インターネット調査においては、上の表から、回答者の欠席状況の推移としては、中学校から不登校になった回答者は計33.9%、中学校で不登校が改善した回答者は計14.1%、中学校で不登校が継続した回答者は計52.0%であった。

中学校時に不登校になる回答者も一定数いる一方、小学校から不登校であった回答者においては、不登校が継続する回答者が多く、不登校は長期化する可能性が示唆される。

(オンライン調査)

	中学校から不登校		中学校で不登校が改善		中学校で不登校が継続			
状況	小：ほぼ出席 中：少し欠席	小：ほぼ出席 中：ほぼ欠席	小：少し欠席 中：ほぼ出席	小：ほぼ欠席 中：ほぼ出席	小：少し欠席 中：少し欠席	小：少し欠席 中：ほぼ欠席	小：ほぼ欠席 中：少し欠席	小：ほぼ欠席 中：ほぼ欠席
人数	27	102	2	9	16	52	3	110
割合	8.4%	31.8%	0.6%	2.8%	5.0%	16.2%	0.9%	34.3%

オンライン調査においては、上の表から、回答者の欠席状況の推移としては、中学校から不登校になった回答者は計 40.2%、中学校で不登校が改善した回答者は計 3.4%、中学校で不登校が継続した回答者は計 56.4%であった。

インターネット調査と同様、中学校時に不登校になる回答者も一定数いる一方、小学校から不登校であった回答者においては、不登校が継続する者が多く、不登校は長期化する可能性が示唆される。

(2) 学校を休みはじめた時期 (Q3)

学校を休みはじめた学年と時期の度数は下記の結果になる。

(インターネット調査)

	4月～7月	8月～12月	1月～3月
小学校1年生	867	255	51
小学校2年生	463	258	35
小学校3年生	857	614	91
小学校4年生	842	966	137
小学校5年生	989	1,350	215
小学校6年生	552	852	263
中学校1年生	1,259	1,399	355
中学校2年生	1,365	1,852	361
中学校3年生	683	850	426

インターネット調査においては、最も多くの人が休みはじめたのは「中学校2年生」時の「8月～12月」(1,852人)であった。

(オンライン調査)

	4月～7月	8月～12月	1月～3月
小学校1年生	15	4	0
小学校2年生	15	5	2
小学校3年生	12	23	2
小学校4年生	11	20	2
小学校5年生	18	23	13
小学校6年生	6	11	3
中学校1年生	31	36	7
中学校2年生	18	18	7
中学校3年生	8	9	2

オンライン調査においては、最も多くの方が休みはじめたのは「中学校1年生」時の「8月～12月」(36人)であった。

(3) 欠席状況と学校を休みはじめた時期

■ 【欠席状況(Q1)】と【学校を休みはじめた時期 (Q3)】とのクロス集計

(インターネット調査)

Q1	Q3													
	小1 4～7 月	小1 8～ 12 月	小1 1～3 月	小2 4～7 月	小2 8～ 12 月	小2 1～3 月	小3 4～7 月	小3 8～ 12 月	小3 1～3 月	小4 4～7 月	小4 8～ 12 月	小4 1～3 月	小5 4～7 月	小5 8～ 12 月
小：ほぼ出席 中：少し欠席	-13.6	-6.8	-2.5	-8.7	-5.6	-2.5	-12.6	-10.0	-4.5	-11.5	-11.9	-4.6	-12.1	-15.1
小：ほぼ出席 中：ほぼ欠席	-11.6	-6.1	-2.5	-8.2	-5.6	-1.9	-11.7	-9.5	-3.8	-11.0	-12.2	-4.5	-11.7	-14.3
小：少し欠席 中：ほぼ出席	<u>14.4</u>	<u>8.2</u>	<u>3.8</u>	<u>10.6</u>	<u>6.3</u>	<u>2.8</u>	<u>12.2</u>	<u>7.5</u>	<u>3.1</u>	<u>8.6</u>	<u>8.6</u>	<u>4.2</u>	<u>5.8</u>	<u>4.1</u>
小：少し欠席 中：少し欠席	1.2	1.7	-0.8	0.2	1.7	-1.3	<u>3.3</u>	<u>5.2</u>	0.5	<u>7.9</u>	<u>8.5</u>	0.1	<u>7.7</u>	<u>15.7</u>
小：少し欠席 中：ほぼ欠席	-0.1	-1.5	-1.2	-1.6	-2.5	-1.2	-2.3	-1.2	0.1	-3.0	-1.2	-0.2	-0.5	0.9
小：ほぼ欠席 中：ほぼ出席	<u>6.3</u>	<u>4.1</u>	1.8	<u>7.6</u>	<u>4.4</u>	<u>2.7</u>	<u>8.2</u>	<u>6.1</u>	<u>2.9</u>	<u>3.6</u>	<u>6.7</u>	<u>2.1</u>	<u>2.6</u>	1.5
小：ほぼ欠席 中：少し欠席	<u>2.5</u>	<u>3.2</u>	1.0	<u>2.4</u>	<u>3.2</u>	-0.2	<u>3.2</u>	<u>3.6</u>	1.7	<u>2.9</u>	<u>3.1</u>	1.6	<u>4.9</u>	<u>3.8</u>
小：ほぼ欠席 中：ほぼ欠席	<u>9.7</u>	<u>2.0</u>	<u>2.9</u>	<u>5.3</u>	<u>2.6</u>	<u>4.4</u>	<u>8.1</u>	<u>3.9</u>	<u>3.6</u>	<u>6.1</u>	<u>3.3</u>	<u>4.9</u>	<u>7.9</u>	<u>4.4</u>

Q1	Q3												
	小5 1～3 月	小6 4～7 月	小6 8～12 月	小6 1～3 月	中1 4～7 月	中1 8～12 月	中1 1～3 月	中2 4～7 月	中2 8～12 月	中2 1～3 月	中3 4～7 月	中3 8～12 月	中3 1～3 月
小：ほぼ出席 中：少し欠席	-5.0	-8.4	-8.7	-5.2	<u>8.9</u>	<u>9.3</u>	<u>5.4</u>	<u>18.8</u>	<u>26.0</u>	<u>8.8</u>	<u>12.9</u>	<u>18.8</u>	<u>9.6</u>
小：ほぼ出席 中：ほぼ欠席	-5.1	-7.8	-10.7	-5.1	<u>16.9</u>	<u>22.5</u>	<u>10.7</u>	<u>19.8</u>	<u>17.0</u>	<u>7.3</u>	<u>10.1</u>	<u>6.5</u>	-0.3
小：少し欠席 中：ほぼ出席	<u>2.1</u>	2.0	<u>3.2</u>	<u>2.5</u>	-10.9	-11.5	-5.3	-12.0	-14.0	-5.8	-8.3	-8.7	-4.9
小：少し欠席 中：少し欠席	<u>2.2</u>	<u>6.8</u>	<u>9.3</u>	<u>3.0</u>	-7.2	-8.1	-5.3	-13.0	-12.3	-5.5	-6.3	-6.3	-1.8
小：少し欠席 中：ほぼ欠席	-0.1	1.4	<u>3.3</u>	<u>4.4</u>	<u>4.5</u>	1.9	1.5	1.3	-1.1	1.4	-1.3	-2.2	-2.9
小：ほぼ欠席 中：ほぼ出席	1.9	1.4	0.6	1.5	-6.0	-6.9	-3.2	-6.9	-8.0	-3.3	-4.7	-4.7	-3.6
小：ほぼ欠席 中：少し欠席	<u>4.0</u>	1.9	-0.4	1.4	-4.8	-4.1	-0.9	-6.6	-6.1	-1.9	-3.3	-3.7	1.2
小：ほぼ欠席 中：ほぼ欠席	<u>3.5</u>	<u>4.5</u>	<u>3.2</u>	-0.1	-6.9	-9.2	-5.0	-8.6	-11.6	-3.9	-4.7	-6.9	-0.5

インターネット調査の結果から、中学校から不登校になった回答者は時期に関わらず、中学校のどの時期においても期待値を上回る形で休みはじめていた。

中学校で不登校が改善した回答者について、「小学校5年生」の「8～12月」頃まではほとんどの時期において期待値を上回る形で休みはじめていたが、小学校で「ほぼ欠席」したものの中学校では改善したケースにおいては、「小学校5年生」の「8～12月」以降で統計的な有意差はなかった。

中学校で不登校が継続した回答者について、小学校で「少し欠席」し中学校で「少し欠席」した場合は、「小学校3年生」「4～7月」から「小学校6年生」にかけて休みはじめ

ることが期待値を上回ったが、「小学校3年生」「小学校4年生」の「1～3月」には統計的な有意差がなかった。一方、小学校で「少し欠席」し中学校で「ほぼ欠席」した場合は、「小学校6年生」及び「中学1年生」に休みはじめた場合のみ統計的な有意差が生じており、中学校入学前後の環境の変化が影響している可能性が示唆される。また、小学校で「ほぼ欠席」し中学校で「少し欠席」した場合は、「小学校1年生」から「小学校5年生」にかけて休みはじめることが期待値を上回ったが、各学年の「1～3月」には統計的な有意差がなく、上記の小学校で「少し欠席」した場合と同様、この時期から休み始める回答者にはその他の回答者と背景が異なる可能性が示唆される。一方、小学校で「ほぼ欠席」し中学校で「ほぼ欠席」した場合は、中学校での不登校の程度に関わらず、概ね小学校のどの時期に休みはじめても統計的に有意差があった。

(オンライン調査)

Q1	Q3													
	小1 4～7 月	小1 8～ 12月	小1 1～3 月	小2 4～7 月	小2 8～ 12月	小2 1～3 月	小3 4～7 月	小3 8～ 12月	小3 1～3 月	小4 4～7 月	小4 8～ 12月	小4 1～3 月	小5 4～7 月	小5 8～ 12月
小：ほぼ出席 中：少し欠席	-0.2	-0.6	—	-1.2	-0.7	-0.4	0.0	-1.5	-0.4	-1.0	-1.4	-0.4	-0.4	-1.5
小：ほぼ出席 中：ほぼ欠席	-1.6	-1.4	—	-2.7	-1.5	-1.0	-1.8	-3.4	-1.0	-1.6	-3.2	-1.0	-3.0	-3.4
小：少し欠席 中：ほぼ出席	-0.3	-0.2	—	-0.3	-0.2	-0.1	-0.3	-0.4	-0.1	-0.3	-0.4	-0.1	<u>5.8</u>	-0.4
小：少し欠席 中：少し欠席	0.3	-0.5	—	0.3	1.6	-0.3	-0.8	0.8	-0.3	-0.8	-1.1	-0.3	<u>2.3</u>	1.8
小：少し欠席 中：ほぼ欠席	-1.0	-0.9	—	0.4	0.2	1.3	-0.8	0.2	1.3	-0.7	1.7	<u>3.2</u>	-1.3	<u>3.1</u>
小：ほぼ欠席 中：ほぼ出席	<u>2.5</u>	<u>2.7</u>	—	-0.7	-0.4	-0.2	1.2	<u>3.1</u>	-0.2	1.3	-0.8	-0.2	-0.7	0.5
小：ほぼ欠席 中：少し欠席	<u>5.1</u>	-0.2	—	-0.4	-0.2	-0.1	-0.3	-0.5	-0.1	<u>2.9</u>	-0.4	-0.1	-0.4	-0.5
小：ほぼ欠席 中：ほぼ欠席	0.5	1.7	—	<u>3.3</u>	1.2	0.5	<u>2.4</u>	<u>2.8</u>	0.5	<u>2.1</u>	<u>3.5</u>	-1.0	<u>2.5</u>	1.0

Q1	Q3												
	小5 1～3 月	小6 4～7 月	小6 8～12 月	小6 1～3 月	中1 4～7 月	中1 8～12 月	中1 1～3 月	中2 4～7 月	中2 8～12 月	中2 1～3 月	中3 4～7 月	中3 8～ 12月	中3 1～3 月
小：ほぼ出席 中：少し欠席	-0.1	-0.7	-1.0	-0.5	0.9	0.0	-0.8	<u>3.0</u>	1.3	0.6	-0.9	<u>5.2</u>	<u>4.7</u>
小：ほぼ出席 中：ほぼ欠席	-1.3	0.1	-1.6	-1.2	<u>4.9</u>	<u>7.4</u>	<u>2.3</u>	<u>2.2</u>	<u>2.2</u>	<u>2.3</u>	<u>3.4</u>	0.1	-1.0
小：少し欠席 中：ほぼ出席	-0.3	-0.2	-0.3	-0.1	-0.5	-0.5	-0.2	-0.3	-0.3	-0.2	-0.2	-0.2	-0.1
小：少し欠席 中：少し欠席	0.5	-0.6	-0.8	-0.4	-1.3	-1.5	-0.6	-1.0	1.2	1.1	1.0	-0.7	-0.3
小：少し欠席 中：ほぼ欠席	1.5	1.1	0.2	-0.8	-0.5	-1.8	0.9	-0.6	0.1	-1.2	-1.3	-1.3	-0.6
小：ほぼ欠席 中：ほぼ出席	-0.6	-0.4	-0.6	-0.3	-1.0	-1.1	-0.5	-0.7	-0.7	-0.5	-0.5	-0.5	-0.2
小：ほぼ欠席 中：少し欠席	-0.4	-0.2	-0.3	-0.2	-0.6	-0.6	-0.3	-0.4	-0.4	-0.3	-0.3	-0.3	-0.1
小：ほぼ欠席 中：ほぼ欠席	0.3	0.0	<u>2.7</u>	<u>2.4</u>	-3.8	-4.6	-1.9	-2.6	-3.2	-1.9	-2.1	-1.5	-1.0

オンライン調査の結果から、中学校から不登校になった回答者について、「少し欠席」した場合は、「中学校2年生」「4～7月」を除くと「中学校3年生」「8～12月」「1～3月」であり、高校受験等を前にした環境の変化が影響している可能性が示唆される。一方、「ほぼ欠席」した場合は、「中学校1年生」から「中学校3年生」「4～7月」にかけて休みはじめることが期待値を上回っていた。

その他の項目においてはサンプルサイズが十分に得られておらず解釈には留意が必要であるが、インターネット調査と同様に「1～3月」の時期に休みはじめる回答者との関連はあまり見られず、この時期から休みはじめる回答者にはその他の回答者と背景が異なる可能性が示唆される。

（４）第８章のまとめ

第８章では欠席状況の推移パターンとして、学校を休みはじめた時期、欠席状況と学校を休みはじめた時期と欠席状況の推移パターンとの関係について整理した。統計的に有意差があった回答を中心に記載した。

欠席状況の推移パターンの単純集計について、インターネット調査では、解釈に留意が必要であるが、中学校時に不登校になる回答者も一定数いる一方、小学校から不登校であった回答者においては不登校が継続する回答者が多く、不登校は長期化する可能性が示唆される。オンライン調査では、インターネット調査と同様の傾向が得られた。

学校を休みはじめた時期について、人数の推移のみで傾向を導きだすことは困難であるが、インターネット調査では、「小学校５年生」の「８月～１２月」、「中学校１年生」から「中学校２年生」の「４月～７月」「８月～１２月」にかけて１,０００人を超えており、休みはじめのピークと捉えられる。オンライン調査では、サンプルサイズが少ないため比較が困難であるが、「小学校５年生」の「８月～１２月」、「中学校１年生」の「４月～７月」「８月～１２月」が休みはじめのピークという点については同様の結果が得られた。

また、小学校から不登校が始まっており中学校においても継続しているケースについて、小学校において「少し欠席」しており、中学校において「少し欠席」した方について、小学校で休みはじめた時期は「小学校３年生」以降が概ね有意に高かった。小学校において「少し欠席」しており、中学校において「ほぼ欠席」した方について、小学校で休みはじめた時期は「小学校６年生」のみが有意に高かった。「小学校６年生」では環境の変化への不安等により、中学校時の不登校に何らかの影響を及ぼす可能性も示唆される。小学校において「ほぼ欠席」しており、中学校において「少し欠席」した方について、小学校で休みはじめた時期は「小学校１年生」から「小学校５年生」までが有意に高かった。なお、「小学校１年生」から「小学校４年生」においては「１～３月」に休みはじめた方に限って有意差が見られていない。小学校において「ほぼ欠席」しており、中学校において「ほぼ欠席」した方について、小学校で休みはじめた時期は「小学校１年生」から「小学校６年生」の「８～１２月」までが有意に高かった。オンライン調査では、インターネット調査と比較して統計的に有意な項目は少ないが、同様の傾向が見られた。

第9章 不登校の「きっかけ」と他項目の関連

(1) 学校を休みはじめた時期との関連 (Q3)

■ 学校を休みはじめた「きっかけ」の各設問と学校を休みはじめた時期の各設問との関連

(インターネット調査)

Q3										
Q2		1. 小学校1年生	2. 小学校2年生	3. 小学校3年生	4. 小学校4年生	5. 小学校5年生	6. 小学校6年生	7. 中学校1年生	8. 中学校2年生	9. 中学校3年生
	1. 友人(いやがらせやいじめ)	-3.8	0.5	0.8	-1.0	-0.4	1.5	<u>2.9</u>	<u>2.1</u>	-4.1
	2. 友人(いやがらせやいじめを除く)	-1.4	0.4	0.9	-1.3	1.0	-0.9	1.1	0.6	-1.0
	3. 先生(怒る、うるさい、体罰)	<u>4.3</u>	0.1	<u>6.8</u>	<u>5.7</u>	<u>4.3</u>	1.5	-5.4	-6.3	-6.9
	4. 先生(相性)	1.4	<u>2.6</u>	<u>3.9</u>	<u>2.5</u>	<u>2.4</u>	<u>2.5</u>	-3.7	-3.3	-5.2
	5. 勉強	1.3	-0.9	1.7	<u>2.0</u>	<u>2.1</u>	0.5	1.1	-3.8	-3.3
	6. 授業	1.2	-0.7	0.7	0.4	1.8	0.7	-1.7	-0.7	-1.3
	7. きまり	0.0	-1.0	1.2	1.1	-0.4	1.0	1.3	-0.8	-2.5
	8. やる気	<u>2.0</u>	-2.4	-2.1	-2.3	-1.5	-2.2	0.3	<u>5.2</u>	0.9
	9. 合わなかった	1.9	<u>2.9</u>	1.7	0.3	0.3	-0.9	<u>3.8</u>	-3.1	-5.2
	10. 環境の変化	0.2	2.0	1.8	<u>2.8</u>	<u>3.8</u>	-1.3	-2.0	-4.1	-1.2
	11. 親	0.7	-0.9	0.9	1.7	-1.2	-0.5	-1.5	1.5	-0.7
	12. 家庭環境	<u>2.3</u>	0.9	<u>2.1</u>	1.3	0.6	-1.3	-2.4	-0.4	-1.5
	13. 精神的不調	1.1	-0.5	1.0	-2.7	-2.8	-2.8	<u>2.0</u>	<u>3.5</u>	0.2
	14. 身体的不調	<u>3.2</u>	1.5	1.4	-1.3	0.7	-0.9	1.2	0.1	-5.0
	15. 障害	<u>5.7</u>	0.9	<u>2.3</u>	0.6	-1.4	0.8	0.6	-4.6	-1.8
	16. 生活リズム	1.6	0.0	-2.3	-0.5	0.1	-1.4	-0.2	<u>2.1</u>	0.0
	17. ネット等	-1.1	-0.8	-2.8	0.5	<u>2.7</u>	1.9	-0.5	-1.2	0.8
	18. その他	<u>5.5</u>	<u>2.1</u>	-0.3	-2.6	-0.5	-3.5	-0.2	0.4	0.7
	19. わからない	<u>5.9</u>	0.8	0.0	-0.8	-4.5	-2.9	0.5	-0.9	<u>4.1</u>

インターネット調査においては、きっかけとして「友人との関係（いやがらせやいじめ）」を選択したグループは、「中学校1年生」「中学校2年生」の項目に統計的な差があった。「友人との関係（いやがらせやいじめを除く）」を選択したグループに統計的な差は見られなかった。「先生との関係（先生が怒る、注意がうるさい、体罰など）」を選択した

グループは、上位4項目として「小学校3年生」「小学校4年生」「小学校1年生」「小学校5年生」の項目に統計的な差があった。「先生との関係（先生と合わなかったなど）」を選択したグループは、上位4項目として「小学校3年生」「小学校2年生」「小学校4年生」「小学校6年生」の項目に統計的な差があった。「勉強が分からなかった（授業についていけなかった、成績が良くなかったなど）」を選択したグループは、「小学校5年生」「小学校4年生」の項目に統計的な差があった。「授業が面白くなかった」を選択したグループを選択したグループに統計的な差は見られなかった。「学校のきまりなどの問題（学校の校則がきびしいなど）」を選択したグループを選択したグループに統計的な差は見られなかった。「学校生活に対してやる気が出なかった」を選択したグループは、「中学校2年生」「小学校1年生」の項目に統計的な差があった。「入学、転校、進級した先の学校や学級が自分に合わなかった」を選択したグループは、「中学校1年生」「小学校2年生」の項目に統計的な差があった。「家族の生活環境の変化（父親や母親の単身赴任、家族の別居、親の転職や失業などの経済的な問題など）」を選択したグループは、「小学校5年生」「小学校4年生」の項目に統計的な差があった。「親との関係（親が怒る、親の言葉や態度への反発、親との会話がほとんどないなど）」を選択したグループを選択したグループに統計的な差は見られなかった。「家庭環境に起因するもの（両親の不和、祖父母と父母の不和など）」を選択したグループは、「小学校1年生」「小学校3年生」の項目に統計的な差があった。「精神的な不調（漠然とした不安や気持ちの落ち込みなど）」を選択したグループは、「中学校2年生」「中学校1年生」の項目に統計的な差があった。「身体的な不調（学校に行こうとすると腹痛や頭痛に襲われたなど）」を選択したグループは、「小学校1年生」の項目に統計的な差があった。「障害による学習上・生活上の困難」を選択したグループは、「小学校1年生」「小学校3年生」の項目に統計的な差があった。「生活リズムの乱れ（朝起きられないなど）」を選択したグループは、「中学校2年生」の項目に統計的な差があった。「インターネットやメール、ゲームなどの影響（一度始めると止められない、学校より楽しいなど）」を選択したグループは、「小学校5年生」の項目に統計的な差があった。「その他」を選択したグループは、「小学校1年生」「小学校2年生」の項目に統計的な差があった。「わからない」を選択したグループは、「小学校1年生」「中学校3年生」の項目に統計的な差があった。

小学生時に休みはじめた人のきっかけは、先生との関係が概ね期待値より有意に高くなっている。一方で、「中学校1年生」「中学校2年生」においては、友人からのいやがらせやいじめ、精神的な不調をきっかけとして休みはじめることが期待値より有意に高く、中学校になると小学校と比較し、人間関係が複雑化し、友人とのトラブル等も増えていく過程で様々なストレスを受けることで不調に陥る可能性が示唆される。

(オンライン調査)

Q3										
Q2		1. 小学校1年生	2. 小学校2年生	3. 小学校3年生	4. 小学校4年生	5. 小学校5年生	6. 小学校6年生	7. 中学校1年生	8. 中学校2年生	9. 中学校3年生
	1. 友人(いやがらせやいじめ)	-0.8	-0.8	1.5	0.9	-0.3	0.0	-1.1	1.0	-0.3
	2. 友人(いやがらせやいじめを除く)	-0.2	-0.1	-1.0	-1.0	1.2	0.7	0.9	-1.2	0.3
	3. 先生(怒る、うるさい、体罰)	1.2	-1.4	1.0	1.9	-0.8	0.5	-0.7	-1.2	0.1
	4. 先生(相性)	-1.0	-0.5	0.1	0.6	-0.1	0.3	-0.4	0.5	0.5
	5. 勉強	0.6	-1.9	-0.3	0.1	0.0	-0.6	1.6	-0.7	0.6
	6. 授業	0.6	1.3	1.4	-0.9	-0.1	-0.1	-0.5	0.0	-1.7
	7. きまり	-0.6	1.8	-1.7	0.0	0.1	-0.7	1.0	-0.1	0.0
	8. やる気	1.4	-1.5	0.3	0.8	0.7	-1.3	-1.3	1.0	-0.1
	9. 合わなかった	-1.4	-2.2	0.9	1.8	-1.2	-0.8	1.3	0.0	0.5
	10. 環境の変化	-0.7	-1.6	0.2	1.7	0.8	0.0	-1.1	0.9	-0.7
	11. 親	0.3	-2.3	-0.3	1.0	0.5	-0.4	-1.2	1.8	0.3
	12. 家庭環境	1.4	0.4	-0.8	<u>2.5</u>	0.3	0.0	-2.0	-0.3	-0.6
	13. 精神的不調	-0.9	-1.0	-0.8	-0.1	-0.9	-0.6	1.2	1.3	1.0
	14. 身体的不調	-1.0	0.0	-1.7	-0.4	1.0	-1.1	<u>2.4</u>	-0.6	0.0
	15. 障害	-0.6	-0.8	0.4	0.0	0.6	1.8	-0.3	-0.5	-0.6
	16. 生活リズム	0.1	-1.9	-1.5	1.5	0.0	0.0	1.7	-0.7	0.1
	17. ネット等	-0.3	-0.5	-0.9	1.0	0.0	-1.1	1.4	-1.2	1.1
	18. その他	0.2	0.0	0.3	-1.3	1.2	1.3	-0.1	-1.5	0.2
	19. わからない	-0.1	0.7	-0.1	0.9	-0.7	-1.1	0.5	-0.3	-0.1

オンライン調査においては、きっかけとして「家庭環境に起因するもの（両親の不和、祖父母と父母の不和など）」が「小学校4年生」、「身体的な不調（学校に行こうとすると腹痛や頭痛に襲われたなど）」が「中学校1年生」と統計的な差が見られたが、その他の項目においては統計的な差は見られなかった。

統計的な差は見られないものの、インターネット調査と同様に、「中学校1年生」「中学校2年生」においては、精神的な不調をきっかけとして休みはじめることが期待値より多く見られた。

(2) 不登校当時に相談した機関や人との関連 (Q5)

(インターネット調査)

Q5												
Q2		1. 教育支援センター	2. 児相	3. 保健所	4. 病院	5. 民間施設	6. その他機関	7. 先生	8. 学校の相談員	9. SNS	10. その他	11. なし
	1. 友人 (いやがらせやいじめ)	<u>8.9</u>	<u>3.2</u>	-1.0	-5.3	-4.6	-8.5	<u>13.8</u>	1.3	-1.3	<u>6.8</u>	-0.9
	2. 友人 (いやがらせやいじめを除く)	<u>9.4</u>	<u>9.4</u>	<u>11.8</u>	<u>6.1</u>	<u>7.8</u>	<u>6.4</u>	<u>4.1</u>	<u>8.1</u>	<u>5.6</u>	-2.3	-7.3
	3. 先生 (怒る、うるさい、体罰)	<u>7.2</u>	<u>10.2</u>	<u>15.5</u>	<u>8.2</u>	<u>12.5</u>	<u>8.3</u>	-3.8	<u>4.7</u>	<u>8.3</u>	2.0	-4.7
	4. 先生 (相性)	<u>6.2</u>	<u>6.7</u>	<u>6.9</u>	<u>5.9</u>	<u>7.9</u>	<u>5.2</u>	-2.0	<u>5.5</u>	<u>3.7</u>	1.2	0.1
	5. 勉強	<u>2.8</u>	<u>7.7</u>	<u>8.8</u>	<u>2.6</u>	<u>11.0</u>	<u>9.2</u>	-0.2	<u>4.3</u>	<u>8.4</u>	-2.1	0.3
	6. 授業	0.3	<u>5.3</u>	<u>6.9</u>	-0.8	<u>3.0</u>	<u>3.6</u>	-3.7	-1.0	<u>5.4</u>	-3.1	<u>8.5</u>
	7. きまり	<u>5.9</u>	<u>11.0</u>	<u>10.5</u>	<u>7.0</u>	<u>13.5</u>	<u>14.2</u>	<u>2.4</u>	<u>9.4</u>	<u>14.1</u>	-2.5	-5.8
	8. やる気	-0.6	0.5	-1.9	-0.8	-0.1	-0.6	-3.6	1.6	<u>2.6</u>	-4.6	<u>12.3</u>
	9. 合わなかった	<u>5.3</u>	<u>7.2</u>	<u>8.8</u>	<u>6.3</u>	<u>8.7</u>	<u>8.6</u>	<u>4.1</u>	<u>8.1</u>	<u>10.7</u>	-1.2	-4.5
	10. 環境の変化	<u>3.5</u>	<u>7.8</u>	<u>7.4</u>	<u>5.5</u>	<u>7.7</u>	<u>8.7</u>	<u>2.8</u>	<u>6.8</u>	<u>9.8</u>	-1.2	-2.8
	11. 親	0.6	<u>5.6</u>	<u>3.9</u>	<u>4.3</u>	<u>2.6</u>	<u>3.3</u>	-0.2	<u>4.3</u>	<u>4.5</u>	-1.8	<u>3.9</u>
	12. 家庭環境	1.5	<u>4.7</u>	<u>2.6</u>	<u>4.6</u>	<u>2.6</u>	<u>2.1</u>	1.0	<u>5.3</u>	<u>4.3</u>	-1.0	<u>3.1</u>
	13. 精神的不調	<u>5.1</u>	<u>2.3</u>	-2.5	<u>21.6</u>	<u>3.4</u>	<u>2.2</u>	<u>9.2</u>	<u>11.5</u>	0.6	-1.6	-6.0
	14. 身体的不調	<u>3.6</u>	<u>2.6</u>	0.4	<u>22.8</u>	<u>4.2</u>	<u>4.1</u>	<u>9.4</u>	<u>9.0</u>	1.7	-0.9	-8.0
	15. 障害	<u>9.2</u>	<u>10.4</u>	<u>11.6</u>	<u>15.2</u>	<u>10.7</u>	<u>9.9</u>	<u>5.8</u>	<u>8.4</u>	<u>9.6</u>	-0.7	-8.5
	16. 生活リズム	<u>2.9</u>	<u>3.8</u>	1.9	<u>7.9</u>	<u>4.1</u>	1.8	<u>3.7</u>	<u>5.4</u>	<u>5.3</u>	-1.2	0.8
	17. ネット等	<u>5.7</u>	<u>6.9</u>	<u>8.1</u>	<u>3.7</u>	<u>7.9</u>	<u>8.7</u>	<u>4.8</u>	<u>8.2</u>	<u>11.4</u>	-1.1	-5.4
	18. その他	-1.9	-1.5	-1.9	0.8	-1.5	-1.4	-2.4	-2.1	-1.0	<u>3.5</u>	<u>3.9</u>
	19. わからない	-3.9	-4.0	-3.6	-5.5	-4.4	-4.1	-7.7	-3.1	-3.2	-3.0	<u>12.8</u>

インターネット調査においては、きっかけとして「友人との関係 (いやがらせやいじ

め)」を選択したグループは、上位3項目として、「学校の先生（担任の先生や保健室の先生など）」「教育支援センター（適応指導教室）・教育相談所」「その他」の項目に統計的な差があった。「友人との関係（いやがらせやいじめを除く）」を選択したグループは、上位3項目として、「保健所・保健センター」「教育支援センター（適応指導教室）・教育相談所」「児童相談所、福祉事務所」の項目に統計的な差があった。「先生との関係（先生が怒る、注意がうるさい、体罰など）」を選択したグループは、上位3項目として、「保健所・保健センター」「民間施設（「フリースクール」と呼ばれる場所など）」「児童相談所、福祉事務所」の項目に統計的な差があった。「先生との関係（先生と合わなかったなど）」を選択したグループは、上位3項目として、「民間施設（「フリースクール」と呼ばれる場所など）」「保健所・保健センター」「児童相談所、福祉事務所」の項目に統計的な差があった。「勉強が分からなかった（授業についていけなかった、成績が良くなかったなど）」を選択したグループは、上位3項目として、「民間施設（「フリースクール」と呼ばれる場所など）」「1～5.以外で当時の在籍校以外の心理相談・カウンセリングなどをする機関」「保健所・保健センター」の項目に統計的な差があった。「授業が面白くなかった」を選択したグループは、上位3項目として、「なし」「保健所・保健センター」「SNS や電話相談」の項目に統計的な差があった。「学校のきまりなどの問題（学校の校則がきびしいなど）」を選択したグループは、上位3項目として、「1～5.以外で当時の在籍校以外の心理相談・カウンセリングなどをする機関」「SNS や電話相談」「民間施設（「フリースクール」と呼ばれる場所など）」の項目に統計的な差があった。「学校生活に対してやる気が出なかった」を選択したグループは、「何も利用しなかった」「SNS や電話相談」の項目に統計的な差があった。「入学、転校、進級した先の学校や学級が自分に合わなかった」を選択したグループは、上位3項目として、「SNS や電話相談」「保健所・保健センター」「民間施設（「フリースクール」と呼ばれる場所など）」の項目に統計的な差があった。「家族の生活環境の変化（父親や母親の単身赴任、家族の別居、親の転職や失業などの経済的な問題など）」を選択したグループは、上位3項目として、「SNS や電話相談」「1～5.以外で当時の在籍校以外の心理相談・カウンセリングなどをする機関」「児童相談所、福祉事務所」の項目に統計的な差があった。「親との関係（親が怒る、親の言葉や態度への反発、親との会話がほとんどないなど）」を選択したグループは、上位4項目として、「児童相談所、福祉事務所」「SNS や電話相談」「病院・診療所」「学校にいる相談員（スクールカウンセラーなど）」の選択肢に統計的な差があった。「家庭環境に起因するもの（両親の不和、祖父母と父母の不和など）」を選択したグループは、上位3項目として、「学校にいる相談員（スクールカウンセラーなど）」「児童相談所、福祉事務所」「病院・診療所」の項目に統計的な差があった。「精神的な不調（漠然とした不安や気持ちの落ち込みなど）」を選択したグループは、上位3項目として、「病院・診療所」「学校にいる相談員（スクールカウンセラーなど）」「学校の先生（担任の先生や保健室の先生など）」の項目に統計的な差があった。「身体的な不調（学校に行こうとすると腹痛や頭痛に襲われたなど）」を選

択したグループは、上位3項目として、「病院・診療所」「学校の先生（担任の先生や保健室の先生など）」「学校にいる相談員（スクールカウンセラーなど）」の項目に統計的な差があった。「障害による学習上・生活上の困難」を選択したグループは、上位3項目として、「病院・診療所」「保健所・保健センター」「民間施設（「フリースクール」と呼ばれる場所など）」の項目に統計的な差があった。「生活リズムの乱れ（朝起きられないなど）」を選択したグループは、上位3項目として、「病院・診療所」「学校にいる相談員（スクールカウンセラーなど）」「SNS や電話相談」の項目に統計的な差があった。「インターネットやメール、ゲームなどの影響（一度始めると止められない、学校より楽しいなど）」を選択したグループは、上位3項目として、「SNS や電話相談」「1～5.以外で当時の在籍校以外の心理相談・カウンセリングなどをする機関」「学校にいる相談員（スクールカウンセラーなど）」の項目に統計的な差があった。「その他」を選択したグループは、「何も利用しなかった」「その他」の項目に統計的な差があった。「わからない」を選択したグループは、「何も利用しなかった」の項目に統計的な差があった。

不登校のきっかけが精神的・身体的不調であれば、「病院・診療所」の回答が有意に期待値より高いなど、きっかけと相談先の役割が関連する項目において期待値が有意に高い傾向がみられる。一方、「学校に対してやる気が出なかった」ことがきっかけである場合は、「SNS や電話相談」に相談している人もいるものの、「何も利用しなかった」の項目が期待値を有意に上回っており、他のきっかけと比較して相談に結びつきにくい可能性が示唆される。

Q5												
Q2.1		1. 教育支援センター	2. 児相	3. 保健所	4. 病院	5. 民間施設	6. その他機関	7. 先生	8. 学校の相談員	9. SNS	10. その他	11. なし
	1. 友人(いやがらせやいじめ)	<u>6.1</u>	0.6	-2.3	-10.8	-6.9	-10.3	<u>13.3</u>	-1.5	-3.3	<u>7.4</u>	-0.8
	2. 友人(いやがらせやいじめを除く)	0.5	<u>2.8</u>	<u>7.8</u>	0.8	<u>2.7</u>	<u>3.0</u>	0.0	1.1	<u>2.4</u>	-0.3	-6.1
	3. 先生(怒る、うるさい、体罰)	1.6	1.0	<u>9.1</u>	<u>2.1</u>	<u>8.9</u>	<u>8.1</u>	-5.6	0.2	1.6	1.6	-7.2
	4. 先生(相性)	0.9	1.2	0.6	0.0	<u>4.9</u>	<u>4.4</u>	-4.4	0.4	1.8	-0.5	-2.1
	5. 勉強	-1.7	1.5	<u>2.4</u>	-0.5	<u>6.4</u>	<u>8.1</u>	-1.2	0.8	<u>4.6</u>	-1.4	-3.2
	6. 授業	-2.8	0.5	<u>3.3</u>	-2.6	0.2	<u>3.2</u>	-3.4	-1.8	<u>2.0</u>	-2.1	1.1
	7. きまり	-1.0	<u>2.9</u>	<u>2.1</u>	1.8	<u>7.6</u>	<u>7.3</u>	0.8	<u>5.4</u>	<u>7.1</u>	-1.9	-7.0
	8. やる気	-3.6	-1.8	-4.6	-5.6	-2.3	-2.9	-7.5	-3.3	-1.9	-3.2	<u>11.9</u>
	9. 合わなかった	-1.6	1.1	-0.6	-1.3	1.2	<u>2.1</u>	-0.3	1.9	<u>2.2</u>	-1.0	0.9
	10. 環境の変化	-2.1	0.0	-0.9	-1.0	-0.9	1.0	-1.5	-0.6	0.9	1.2	-0.2
	11. 親	-2.3	0.6	-1.7	0.7	-1.7	-0.8	-2.7	-2.7	-0.7	-0.2	<u>3.4</u>
	12. 家庭環境	-1.8	<u>2.3</u>	-1.0	0.2	-1.3	-2.1	-2.8	0.0	1.2	-0.8	<u>3.2</u>
	13. 精神的不調	0.7	-3.0	-3.2	<u>12.6</u>	0.0	1.2	<u>3.2</u>	<u>4.8</u>	-3.1	-1.9	-2.7
	14. 身体的不調	0.8	-1.4	-1.4	<u>17.2</u>	-1.0	0.7	<u>3.6</u>	1.5	-2.0	-2.6	-6.9
	15. 障害	<u>3.6</u>	1.4	-0.9	<u>7.6</u>	1.8	0.0	0.7	0.6	0.6	-1.1	-3.3
	16. 生活リズム	-2.5	-1.8	-2.5	0.6	-2.5	-2.0	-1.7	-0.6	0.3	-2.1	<u>3.7</u>
	17. ネット等	0.2	-1.4	0.0	-2.3	-0.6	0.9	-2.3	1.2	0.2	0.8	-0.4
	18. その他	-2.0	-1.9	-1.4	0.5	-2.1	-1.7	-2.1	-2.7	-1.7	1.3	<u>4.3</u>
	19. わからない	-3.9	-4.0	-3.6	-5.5	-4.4	-4.1	-7.7	-3.1	-3.2	-3.0	<u>12.8</u>

インターネット調査において、きっかけとして最もあてはまる項目を一つだけ選択した結果と、不登校当時相談した施設について見たところ、各施設において対応しているきっかけに特徴があることがわかる。例えば、前の表と同様に、不登校のきっかけが精神的・身体的不調であれば、「病院・診療所」の回答が有意に期待値より高いなど、きっかけと

相談先の役割が関連する項目において期待値が有意に高い傾向があることが考えられる。
また、「学校に対してやる気が出なかった」ことがきっかけである場合は、「何も利用しなかった」の項目が期待値を有意に上回っており、他のきっかけと比較して相談に結びつきにくい可能性が示唆される。

(オンライン調査)

Q5												
Q2		1. 教育支援センター	2. 児相	3. 保健所	4. 病院	5. 民間施設	6. その他機関	7. 先生	8. 学校の相談員	9. SNS	10. その他	11. なし
	1. 友人(いやがらせやいじめ)	0.3	0.6	0.7	0.3	-1.6	-2.2	-0.2	-1.1	-0.3	<u>3.6</u>	-0.8
	2. 友人(いやがらせやいじめを除く)	0.6	-0.6	-0.8	-1.1	1.1	0.6	-0.1	0.7	0.1	-0.2	0.2
	3. 先生(怒る、うるさい、体罰)	-0.5	0.8	1.3	0.3	-0.2	0.4	-0.8	-2.7	0.0	1.2	1.2
	4. 先生(相性)	-0.3	-1.4	0.3	1.0	0.7	-0.6	-0.8	0.3	0.6	<u>2.5</u>	0.1
	5. 勉強	0.4	-0.3	-0.2	-1.2	-1.1	1.3	-0.3	-0.6	0.0	0.1	0.2
	6. 授業	0.6	-0.3	-0.2	-1.6	-2.4	-1.1	-1.2	-1.3	-0.1	1.2	1.9
	7. きまり	0.4	0.1	-0.3	-1.2	0.5	0.3	-0.1	1.2	-0.1	1.1	0.7
	8. やる気	1.1	0.3	0.2	0.4	-0.4	0.0	-0.5	-0.3	-0.2	-1.6	-0.7
	9. 合わなかった	1.2	-0.4	1.0	0.7	0.4	-0.5	0.2	1.0	0.3	-0.1	0.8
	10. 環境の変化	-1.4	<u>2.1</u>	0.9	0.5	1.0	0.0	-0.2	-0.3	0.0	-1.5	0.2
	11. 親	-1.5	1.2	0.8	0.8	-1.0	1.3	0.1	-0.2	0.2	-2.1	<u>2.3</u>
	12. 家庭環境	0.0	1.0	1.1	-0.4	-0.2	0.2	-0.2	-1.3	0.4	-0.6	-0.7
	13. 精神的不調	-0.9	-1.0	-1.3	<u>2.7</u>	1.0	<u>2.7</u>	0.9	1.0	0.9	-0.9	-1.4
	14. 身体的不調	0.1	1.3	0.0	<u>4.1</u>	0.0	1.6	1.2	1.6	0.2	1.5	-2.3
	15. 障害	0.6	<u>2.3</u>	<u>3.2</u>	<u>3.0</u>	0.6	1.5	<u>2.6</u>	<u>3.5</u>	<u>2.3</u>	1.9	-1.4
	16. 生活リズム	0.2	1.4	-0.2	1.9	0.2	1.9	<u>2.7</u>	1.6	0.0	-0.5	-0.4
	17. ネット等	1.3	<u>2.1</u>	0.5	0.8	-0.4	1.8	-0.1	-0.1	1.7	-1.0	0.7
	18. その他	-0.9	0.0	0.8	0.2	-1.9	0.6	0.0	-0.7	0.9	1.4	0.1
	19. わからない	-0.5	-1.2	0.5	0.0	-0.7	-0.6	-1.3	0.8	0.6	-0.1	<u>2.0</u>

オンライン調査においては、きっかけとして「友人との関係（いやがらせやいじめ）」を選択したグループは、「その他」の項目に統計的な差があった。「友人との関係（いやがらせやいじめを除く）」「先生との関係（先生が怒る、注意がうるさい、体罰など）」を選

択したグループの項目に統計的な差はなかった。「先生との関係（先生と合わなかったなど）」を選択したグループは、「その他」の項目に統計的な差があった。「勉強が分からなかった（授業についていけなかった、成績が良くなかったなど）」「授業が面白くなかった」「学校のきまりなどの問題（学校の校則がきびしいなど）」「学校生活に対してやる気が出なかった」「入学、転校、進級した先の学校や学級が自分に合わなかった」「家庭環境に起因するもの（両親の不和、祖父母と父母の不和など）」を選択したグループの項目に統計的な差はなかった。「親との関係（親が怒る、親の言葉や態度への反発、親との会話がほとんどないなど）」を選択したグループは、「何も利用しなかった」の選択肢に統計的な差があった。「家族の生活環境の変化（父親や母親の単身赴任、家族の別居、親の転職や失業などの経済的な問題など）」を選択したグループは、「児童相談所、福祉事務所」の項目に統計的な差があった。「精神的な不調（漠然とした不安や気持ちの落ち込みなど）」を選択したグループは、「病院・診療所」「1～5.以外で当時の在籍校以外の心理相談・カウンセリングなどをする機関」の項目に統計的な差があった。「身体的な不調（学校に行こうとすると腹痛や頭痛に襲われたなど）」を選択したグループは、「病院・診療所」の項目に統計的な差があった。「障害による学習上・生活上の困難」を選択したグループは、上位3項目として、「学校にいる相談員（スクールカウンセラーなど）」「保健所・保健センター」「病院・診療所」の項目に統計的な差があった。「生活リズムの乱れ（朝起きられないなど）」を選択したグループは、「学校の先生（担任の先生や保健室の先生など）」の項目に統計的な差があった。「インターネットやメール、ゲームなどの影響（一度始めると止められない、学校より楽しいなど）」を選択したグループは、「児童相談所、福祉事務所」の項目に統計的な差があった。「その他」を選択したグループの項目に統計的な差はなかった。「わからない」を選択したグループは、「何も利用しなかった」の項目に統計的な差があった。

インターネット調査と同様に、不登校当時相談した機関や人毎に対応する不登校のきっかけが明確である。例えば、不登校のきっかけが精神的・身体的不調であれば、「病院・診療所」の回答が有意に期待値より高い。

Q5												
Q2.1		1. 教育支援センター	2. 児相	3. 保健所	4. 病院	5. 民間施設	6. その他機関	7. 先生	8. 学校の相談員	9. SNS	10. その他	11. なし
	1. 友人(いやがらせやいじめ)	0.2	0.1	-1.6	0.4	0.1	-1.6	-0.2	0.7	1.1	<u>2.9</u>	-1.2
	2. 友人(いやがらせやいじめを除く)	1.3	-0.2	0.6	-0.9	1.1	-0.5	1.4	1.0	0.7	-1.1	-0.9
	3. 先生(怒る、うるさい、体罰)	0.6	-0.2	0.5	-1.5	-1.2	-0.6	-0.8	-0.8	-0.8	1.0	1.4
	4. 先生(相性)	-0.4	-1.3	-0.9	<u>2.9</u>	<u>2.4</u>	-0.7	1.9	0.8	-0.9	0.7	-1.3
	5. 勉強	-0.4	-0.9	-0.6	-1.7	-0.8	1.0	-0.4	1.1	-0.6	-0.8	-0.2
	6. 授業	-1.2	-1.0	1.0	-1.9	-1.0	-1.1	-1.2	-0.4	-0.6	-0.9	<u>3.3</u>
	7. きまり	0.5	1.7	-0.6	-0.9	0.7	0.1	1.1	0.0	-0.6	0.6	0.0
	8. やる気	-1.6	0.0	-1.1	-0.8	-1.2	1.4	-1.1	-2.1	0.1	-1.4	0.9
	9. 合わなかった	<u>2.3</u>	-1.1	0.7	0.0	0.9	-1.3	-1.3	-0.3	-0.7	0.1	-1.3
	10. 環境の変化	-0.6	<u>3.0</u>	<u>2.1</u>	1.3	<u>2.5</u>	-0.7	-0.1	-0.5	-0.4	-0.6	0.0
	11. 親	-0.8	<u>2.6</u>	1.8	-0.9	0.2	0.6	-1.3	-1.6	-0.4	-0.6	0.8
	12. 家庭環境	0.3	-0.9	1.1	-0.4	-0.2	1.0	-0.4	-1.6	-0.6	-0.8	0.6
	13. 精神的不調	0.3	1.0	-1.2	<u>2.5</u>	0.4	<u>2.7</u>	0.5	-0.1	0.9	-1.6	-1.5
	14. 身体的不調	-0.4	-1.5	-1.0	0.4	0.0	0.3	<u>2.3</u>	<u>2.1</u>	0.2	0.3	-2.2
	15. 障害	0.0	-0.7	-0.5	0.0	0.2	-0.8	0.4	-0.7	-0.4	-0.6	0.8
	16. 生活リズム	0.9	1.0	-0.5	-1.7	-1.6	-0.8	-0.5	-0.7	-0.4	-0.6	1.8
	17. ネット等	0.4	<u>3.0</u>	<u>4.5</u>	0.3	-0.5	-0.7	-0.1	0.5	-0.4	-0.6	1.1
	18. その他	-0.7	0.5	1.3	0.7	-1.2	1.3	0.1	0.2	1.4	<u>2.1</u>	-0.7
	19. わからない	-0.5	-1.2	0.5	0.0	-0.7	-0.6	-1.3	0.8	0.6	-0.1	<u>2.0</u>

オンライン調査において、きっかけとして最もあてはまる項目を一つだけ選択した結果と、不登校当時相談した機関や人について見たところ、各機関や人において対応しているきっかけに特徴があることがわかる。例えば、前の表と同様に、不登校のきっかけが「精神的不調」であれば、「病院・診療所」の回答が有意に期待値より高いなど、きっかけと

相談先の役割が関連する項目において期待値が有意に高い傾向があることが考えられる。

(3) 不登校当時の支援ニーズとの関連(Q6)

(インターネット調査)

Q6										
Q 2		1. 進学	2. 仕事	3. 勉強	4. 表現	5. 居場所	6. 悩み	7. 生活	8. その他	9. なし
	1. 友人 (いやがらせや いじめ)	<u>16.0</u>	<u>6.8</u>	<u>7.4</u>	<u>11.3</u>	<u>13.7</u>	<u>12.4</u>	-2.6	<u>4.2</u>	-11.4
	2. 友人 (いやがらせや いじめを除く)	<u>11.8</u>	<u>13.4</u>	<u>11.0</u>	<u>11.6</u>	<u>12.0</u>	<u>4.7</u>	<u>6.7</u>	-0.7	-10.1
	3. 先生 (怒る、 うるさい、 体罰)	<u>9.3</u>	<u>12.6</u>	<u>11.7</u>	<u>10.3</u>	<u>6.9</u>	<u>6.7</u>	<u>6.6</u>	<u>6.0</u>	-11.0
	4. 先生 (相性)	<u>9.9</u>	<u>11.0</u>	<u>10.6</u>	<u>11.3</u>	<u>8.2</u>	<u>10.8</u>	<u>7.3</u>	<u>5.1</u>	-8.1
	5. 勉強	<u>9.4</u>	<u>15.5</u>	<u>22.6</u>	<u>9.7</u>	<u>11.5</u>	<u>5.6</u>	<u>10.4</u>	-0.8	-7.5
	6. 授業	<u>4.8</u>	<u>9.6</u>	<u>7.9</u>	<u>2.5</u>	<u>5.0</u>	-0.8	<u>7.8</u>	0.0	<u>3.4</u>
	7. きまり	<u>9.0</u>	<u>12.9</u>	<u>9.5</u>	<u>8.5</u>	<u>8.6</u>	<u>3.7</u>	<u>11.4</u>	<u>3.1</u>	-5.7
	8. やる気	<u>3.4</u>	<u>6.8</u>	<u>6.0</u>	<u>7.5</u>	<u>2.3</u>	<u>5.9</u>	<u>10.0</u>	0.4	<u>6.8</u>
	9. 合わなかった	<u>6.8</u>	<u>11.0</u>	<u>8.2</u>	<u>10.2</u>	<u>12.1</u>	<u>9.0</u>	<u>7.9</u>	<u>3.8</u>	-8.1
	10. 環境 の変化	<u>7.4</u>	<u>12.0</u>	<u>8.0</u>	<u>7.6</u>	<u>9.6</u>	<u>10.0</u>	<u>11.1</u>	<u>3.7</u>	-5.6
	11. 親	<u>9.9</u>	<u>11.1</u>	<u>8.4</u>	<u>11.6</u>	<u>10.8</u>	<u>16.9</u>	<u>13.3</u>	<u>9.1</u>	-7.6
	12. 家庭 環境	<u>10.6</u>	<u>12.4</u>	<u>7.6</u>	<u>10.6</u>	<u>9.2</u>	<u>17.3</u>	<u>12.9</u>	<u>9.0</u>	-5.5
	13. 精神的 不調	<u>13.4</u>	<u>11.5</u>	<u>10.7</u>	<u>18.8</u>	<u>9.7</u>	<u>41.8</u>	<u>13.1</u>	<u>4.0</u>	-13.5
	14. 身体的 不調	<u>10.8</u>	<u>8.2</u>	<u>9.2</u>	<u>11.5</u>	<u>9.3</u>	<u>31.5</u>	<u>10.8</u>	<u>4.2</u>	-11.3
	15. 障害	<u>7.9</u>	<u>12.4</u>	<u>9.2</u>	<u>6.6</u>	<u>7.1</u>	<u>11.7</u>	<u>12.7</u>	<u>2.5</u>	-6.2
	16. 生活 リズム	<u>8.8</u>	<u>9.9</u>	<u>7.5</u>	<u>5.9</u>	<u>5.1</u>	<u>11.3</u>	<u>29.1</u>	<u>3.6</u>	-2.9
	17. ネット 等	<u>5.5</u>	<u>8.3</u>	<u>4.4</u>	<u>4.7</u>	<u>5.2</u>	<u>3.7</u>	<u>15.5</u>	2.0	-3.4
	18. その他	-2.8	-2.0	-2.7	-2.4	-3.3	-1.0	-0.2	<u>8.7</u>	<u>3.6</u>
	19. わからない	-9.3	-7.6	-10.9	-13.4	-10.6	-13.2	-4.8	-3.7	<u>27.1</u>

インターネット調査においては、きっかけとして「友人との関係（いやがらせやいじめ）」を選択したグループは、上位3項目として、「進学するための相談や手助け」「友人と知り合えたり、仲間と過ごせたりする居場所についての情報提供」「精神的・身体的な不調についての相談や手助け」の項目に統計的な差があった。「友人との関係（いやがら

せやいじめを除く)」を選択したグループは、上位3項目として、「仕事につくための相談や手助け」「友人と知り合えたり、仲間と過ごせたりする居場所についての情報提供」「進学するための相談や手助け」の項目に統計的な差があった。「先生との関係（先生が怒る、注意がうるさい、体罰など）」を選択したグループは、上位3項目として、「仕事につくための相談や手助け」「学校の勉強についての相談や手助け」「自分の気持ちをはっきり表現したり、人とうまくつきあったりするための方法についての相談や手助け」の項目に統計的な差があった。「先生との関係（先生と合わなかったなど）」を選択したグループは、上位3項目として、「自分の気持ちをはっきり表現したり、人とうまくつきあったりするための方法についての相談や手助け」「仕事につくための相談や手助け」「精神的・身体的な不調についての相談や手助け」の項目に統計的な差があった。「勉強が分からなかった（授業についていけなかった、成績が良くなかったなど）」を選択したグループは、上位3項目として、「学校の勉強についての相談や手助け」「仕事につくための相談や手助け」「友人と知り合えたり、仲間と過ごせたりする居場所についての情報提供」の項目に統計的な差があった。「授業が面白くなかった」を選択したグループは、上位3項目として、「仕事につくための相談や手助け」「学校の勉強についての相談や手助け」「規則正しい生活習慣についての相談や手助け」の項目に統計的な差があった。「学校のきまりなどの問題（学校の校則がきびしいなど）」を選択したグループは、上位3項目として、「仕事につくための相談や手助け」「規則正しい生活習慣についての相談や手助け」「学校の勉強についての相談や手助け」の項目に統計的な差があった。「学校生活に対してやる気が出なかった」を選択したグループは、上位4項目として、「規則正しい生活習慣についての相談や手助け」「自分の気持ちをはっきり表現したり、人とうまくつきあったりするための方法についての相談や手助け」「仕事につくための相談や手助け」「なし」の項目に統計的な差があった。「入学、転校、進級した先の学校や学級が自分に合わなかった」を選択したグループは、上位3項目として、「友人と知り合えたり、仲間と過ごせたりする居場所についての情報提供」「仕事につくための相談や手助け」「自分の気持ちをはっきり表現したり、人とうまくつきあったりするための方法についての相談や手助け」の項目に統計的な差があった。「家族の生活環境の変化（父親や母親の単身赴任、家族の別居、親の転職や失業などの経済的な問題など）」を選択したグループは、上位3項目として、「仕事につくための相談や手助け」「規則正しい生活習慣についての相談や手助け」「精神的・身体的な不調についての相談や手助け」の項目に統計的な差があった。「親との関係（親が怒る、親の言葉や態度への反発、親との会話がほとんどないなど）」を選択したグループは、上位3項目として、「精神的・身体的な不調についての相談や手助け」「規則正しい生活習慣についての相談や手助け」「自分の気持ちをはっきり表現したり、人とうまくつきあったりするための方法についての相談や手助け」の項目に統計的な差があった。「家庭環境に起因するもの（両親の不和、祖父母と父母の不和など）」を選択したグループは、上位3項目として、「精神的・身体的な不調についての相談や手助け」「規則正しい生活習慣につ

いての相談や手助け」「仕事につくための相談や手助け」の項目に統計的な差があった。

「精神的な不調（漠然とした不安や気持ちの落ち込みなど）」を選択したグループは、上位3項目として、「精神的・身体的な不調についての相談や手助け」「自分の気持ちをはっきり表現したり、人とうまくつきあったりするための方法についての相談や手助け」「進学するための相談や手助け」の項目に統計的な差があった。「身体的な不調（学校に行こうとすると腹痛や頭痛に襲われたなど）」を選択したグループは、上位4項目として、「精神的・身体的な不調についての相談や手助け」「自分の気持ちをはっきり表現したり、人とうまくつきあったりするための方法についての相談や手助け」「進学するための相談や手助け」「規則正しい生活習慣についての相談や手助け」の項目に統計的な差があった。

「障害による学習上・生活上の困難」を選択したグループは、上位3項目として、「規則正しい生活習慣についての相談や手助け」「仕事につくための相談や手助け」「精神的・身体的な不調についての相談や手助け」の項目に統計的な差があった。「生活リズムの乱れ（朝起きられないなど）」を選択したグループは、上位3項目として、「規則正しい生活習慣についての相談や手助け」「精神的・身体的な不調についての相談や手助け」「仕事につくための相談や手助け」の項目に統計的な差があった。「インターネットやメール、ゲームなどの影響（一度始めると止められない、学校より楽しいなど）」を選択したグループは、上位3項目として、「規則正しい生活習慣についての相談や手助け」「仕事につくための相談や手助け」「進学するための相談や手助け」の項目に統計的な差があった。

「その他」を選択したグループは、「その他」「なし」の項目に統計的な差があった。「わからない」を選択したグループは、「なし」の項目に統計的な差があった。

不登校のきっかけに関わらず、どの支援ニーズも統計的に有意な差があることが分かる。ただし、「授業が面白くなかった」「学校生活に対してやる気が出なかった」がきっかけの場合は「なし」の項目も期待値を上回っており、一部の回答者においては学校の環境全般や自身の状況に対する関心や期待度が低い状態である可能性が示唆される。「友人との関係（いやがらせやいじめ）」においては「規則正しい生活習慣についての相談や手助け」、「授業が面白くなかった」においては「精神的・身体的な不調についての相談や手助け」においても統計的な差は見られなかった。

なお、「勉強が分からなかった」がきっかけであれば「学校の勉強についての相談や手助け」への支援ニーズ、「精神的な不調」であれば「精神的・身体的な不調についての相談や手助け」への支援ニーズなど、きっかけに直接的に関わる項目はより強く関連する。

(オンライン調査)

Q6										
Q 2		1. 進学	2. 仕事	3. 勉強	4. 表現	5. 居場所	6. 悩み	7. 生活	8. その他	9. なし
	1. 友人 (いやがらせや いじめ)	0.5	0.3	0.9	-0.3	1.9	-0.6	0.6	1.9	-1.0
	2. 友人 (いやがらせや いじめを除く)	<u>2.2</u>	<u>2.1</u>	<u>2.2</u>	0.5	1.3	<u>2.5</u>	1.4	-2.2	-0.4
	3. 先生 (怒る、うるさい、 体罰)	1.5	1.8	1.0	-0.6	<u>2.1</u>	-0.3	-0.3	1.4	-1.6
	4. 先生 (相性)	0.7	0.1	<u>2.4</u>	0.5	1.6	1.5	1.9	-0.4	-1.6
	5. 勉強	0.3	-0.2	1.0	1.6	-0.1	0.3	0.1	-1.0	-0.5
	6. 授業	-1.8	0.9	-1.4	-0.7	-0.2	-1.8	0.8	-0.5	<u>2.5</u>
	7. きまり	0.3	-0.3	-0.2	-1.2	-0.4	-0.6	-0.1	-0.5	1.7
	8. やる 気	-0.2	<u>2.6</u>	-2.0	0.3	0.7	-0.4	0.3	0.0	0.6
	9. 合わ なかった	-0.1	-1.1	0.9	1.5	<u>2.1</u>	1.1	0.0	<u>2.6</u>	-0.8
	10. 環境 の変化	1.5	0.2	<u>2.5</u>	<u>2.6</u>	<u>2.2</u>	<u>2.2</u>	0.4	1.0	-1.0
	11. 親	<u>2.4</u>	1.1	1.9	<u>3.4</u>	1.8	1.6	1.4	1.1	-1.9
	12. 家庭 環境	1.6	0.9	<u>2.1</u>	<u>3.4</u>	<u>2.1</u>	<u>3.0</u>	0.7	1.5	-2.1
	13. 精神的 不調	1.1	1.2	0.8	<u>2.9</u>	1.4	<u>5.1</u>	1.0	-2.6	-1.5
	14. 身体的 不調	1.5	1.0	<u>2.1</u>	-0.1	1.7	<u>3.3</u>	1.8	-0.3	-0.4
	15. 障害	1.6	<u>3.2</u>	<u>2.7</u>	1.7	1.6	<u>2.8</u>	<u>2.4</u>	0.3	-2.2
	16. 生活 リズム	1.0	1.9	<u>2.2</u>	1.0	1.7	<u>2.4</u>	<u>5.0</u>	0.2	-0.1
	17. ネット 等	1.0	2.0	1.2	0.9	0.3	0.7	<u>2.2</u>	-0.2	0.1
	18. その他	-1.6	-0.8	-1.1	-0.9	-1.0	-1.2	-0.7	0.3	<u>3.7</u>
	19. わか らない	-0.6	-1.1	-1.2	0.3	-0.7	-3.4	-1.7	-1.1	1.6

オンライン調査においては、きっかけとして「友人との関係（いやがらせやいじめ）」を選択したグループの項目に統計的な差はなかった。「友人との関係（いやがらせやいじめを除く）」を選択したグループは、上位3項目として、「精神的・身体的な不調についての相談や手助け」「進学するための相談や手助け」「学校の勉強についての相談や手助け」の項目に統計的な差があった。「先生との関係（先生が怒る、注意がうるさい、体罰など）」を選択したグループは、「友人と知り合えたり、仲間と過ごせたりする居場所についての情報提供」の項目に統計的な差があった。「先生との関係（先生と合わなかったなど）」を選択したグループは、「学校の勉強についての相談や手助け」の項目に統計的な差があっ

た。「勉強が分からなかった（授業についていけなかった、成績が良くなかったなど）」を選択したグループの項目に統計的な差はなかった。「授業が面白くなかった」を選択したグループは、「なし」の項目に統計的な差があった。「学校のきまりなどの問題（学校の校則がきびしいなど）」を選択したグループの項目に統計的な差はなかった。「学校生活に対してやる気が出なかった」を選択したグループは、「仕事につくための相談や手助け」の項目に統計的な差があった。「入学、転校、進級した先の学校や学級が自分に合わなかった」を選択したグループは、「友人と知り合えたり、仲間と過ごせたりする居場所についての情報提供」「その他」の項目に統計的な差があった。「家族の生活環境の変化（父親や母親の単身赴任、家族の別居、親の転職や失業などの経済的な問題など）」を選択したグループは、上位4項目として、「自分の気持ちをはっきり表現したり、人とうまくつきあったりするための方法についての相談や手助け」「学校の勉強についての相談や手助け」「友人と知り合えたり、仲間と過ごせたりする居場所についての情報提供」「精神的・身体的な不調についての相談や手助け」の項目に統計的な差があった。「親との関係（親が怒る、親の言葉や態度への反発、親との会話がほとんどないなど）」を選択したグループは、「自分の気持ちをはっきり表現したり、人とうまくつきあったりするための方法についての相談や手助け」「進学するための相談や手助け」の項目に統計的な差があった。「家庭環境に起因するもの（両親の不和、祖父母と父母の不和など）」を選択したグループは、上位4項目として、「自分の気持ちをはっきり表現したり、人とうまくつきあったりするための方法についての相談や手助け」「精神的・身体的な不調についての相談や手助け」「学校の勉強についての相談や手助け」「友人と知り合えたり、仲間と過ごせたりする居場所についての情報提供」の項目に統計的な差があった。「精神的な不調（漠然とした不安や気持ちの落ち込みなど）」を選択したグループは、「精神的・身体的な不調についての相談や手助け」「自分の気持ちをはっきり表現したり、人とうまくつきあったりするための方法についての相談や手助け」の項目に統計的な差があった。「身体的な不調（学校に行こうとすると腹痛や頭痛に襲われたなど）」を選択したグループは、「精神的・身体的な不調についての相談や手助け」「学校の勉強についての相談や手助け」の項目に統計的な差があった。「障害による学習上・生活上の困難」を選択したグループは、上位3項目として、「仕事につくための相談や手助け」「精神的・身体的な不調についての相談や手助け」「学校の勉強についての相談や手助け」の項目に統計的な差があった。「生活リズムの乱れ（朝起きられないなど）」を選択したグループは、上位3項目として、「規則正しい生活習慣についての相談や手助け」「精神的・身体的な不調についての相談や手助け」「学校の勉強についての相談や手助け」の項目に統計的な差があった。「インターネットやメール、ゲームなどの影響（一度始めると止められない、学校より楽しいなど）」を選択したグループは、「規則正しい生活習慣についての相談や手助け」の項目に統計的な差があった。「その他」を選択したグループは、「なし」の項目に統計的な差があった。「わからない」を選択したグループの項目に統計的な差はなかった。

インターネット調査と同様に、不登校のきっかけに関わらず、どの支援ニーズも一定の需要があることが想定される。また、不調がきっかけであり、悩みに関する支援ニーズを持つ回答は期待値を上回ることが多く、不調の原因が幅広く、個別の悩みを相談したいというニーズがある可能性が示唆される。

(4) 中学卒業後の経験との関連 (Q13)

(インターネット調査)

Q13-a: 学業（受験、資格試験など）で苦労した					
Q2		おおいにあった	ある程度あった	あまりなかった	ほとんどなかった
	1. 友人(いやがらせやいじめ)	<u>15.7</u>	-0.5	-9.1	-4.5
	2. 友人(いやがらせやいじめを除く)	<u>2.5</u>	<u>6.6</u>	-3.4	-6.2
	3. 先生(怒る、うるさい、体罰)	<u>6.4</u>	1.4	-3.8	-3.7
	4. 先生(相性)	<u>7.3</u>	-1.5	-4.2	-0.7
	5. 勉強	<u>22.4</u>	1.7	-10.4	-12.1
	6. 授業	<u>7.5</u>	0.4	-5.5	-1.7
	7. きまり	<u>5.8</u>	0.2	-2.6	-2.9
	8. やる気	<u>4.8</u>	-4.8	-0.3	1.3
	9. 合わなかった	<u>4.9</u>	-2.7	-1.1	-0.3
	10. 環境の変化	<u>8.6</u>	-1.8	-4.3	-1.5
	11. 親	<u>11.7</u>	-3.0	-5.1	-2.2
	12. 家庭環境	<u>10.7</u>	-3.2	-5.5	-0.5
	13. 精神的不調	<u>9.4</u>	-4.5	-2.0	-1.6
	14. 身体的不調	<u>5.5</u>	-4.1	-1.2	0.8
	15. 障害	<u>10.5</u>	-2.5	-3.3	-3.5
	16. 生活リズム	<u>6.8</u>	-1.5	-2.3	-2.3
	17. ネット等	<u>3.5</u>	-1.3	-0.1	-1.7
	18. その他	-1.4	-5.0	0.7	<u>6.3</u>
	19. わからない	-5.8	-4.9	0.4	<u>10.7</u>

インターネット調査においては、きっかけとして「その他」「わからない」を選択したグループは、学業（受験、資格試験など）で苦労したことは「ほとんどなかった」という回答に統計的な差があった。一方、その他の項目を選択したグループは、学業（受験、資格試験など）で苦労したことは「おおいにあった」という回答に統計的な差があった。特に、上位3項目のきっかけとして、「勉強が分からなかった（授業についていけなかった、成績が良くなかったなど）」「友人との関係（いやがらせやいじめ）」「親との関係（親が怒

る、親の言葉や態度への反発、親との会話がほとんどないなど）」が挙げられた。また、きっかけとして「友人との関係（いやがらせやいじめを除く）」を選択したグループは、学業（受験、資格試験など）で苦労したことは「ある程度あった」という回答においても統計的な差があった。

不登校のきっかけが明確である場合、学業でおおいに苦労した方が統計的に有意な差があることが分かる。

（オンライン調査）

Q13-a: 学業（受験、資格試験など）で苦労した					
Q2		おおいにあった	ある程度あった	あまりなかった	ほとんどなかった
	1. 友人(いやがらせやいじめ)	0.8	-0.9	0.2	-0.2
	2. 友人(いやがらせやいじめを除く)	1.0	0.3	-0.8	-0.7
	3. 先生(怒る、うるさい、体罰)	0.3	0.7	-0.8	-0.3
	4. 先生(相性)	0.6	-0.3	-0.4	0.1
	5. 勉強	<u>2.1</u>	1.7	-2.1	-2.2
	6. 授業	-1.3	-0.9	0.4	<u>2.2</u>
	7. きまり	0.0	1.1	-1.0	-0.1
	8. やる気	-0.2	-1.1	1.8	-0.5
	9. 合わなかった	0.2	0.8	-1.5	0.5
	10. 環境の変化	1.9	-1.0	-0.9	-0.1
	11. 親	<u>2.3</u>	-1.0	-0.8	-0.6
	12. 家庭環境	1.3	-1.2	-0.1	0.0
	13. 精神的不調	1.9	-0.3	-0.8	-1.1
	14. 身体的不調	1.0	0.5	-0.1	-1.7
	15. 障害	0.3	0.6	-0.6	-0.4
	16. 生活リズム	<u>2.2</u>	-0.1	-1.3	-1.0
	17. ネット等	<u>2.3</u>	-0.8	-1.2	-0.3
	18. その他	0.0	-0.7	0.3	0.5
	19. わからない	-0.1	-0.7	0.8	0.0

オンライン調査においては、きっかけとして「勉強が分からなかった（授業についていけなかった、成績が良くなかったなど）」「親との関係（親が怒る、親の言葉や態度への反発、親との会話がほとんどないなど）」「生活リズムの乱れ（朝起きられないなど）」「インターネットやメール、ゲームなどの影響（一度始めると止められない、学校より楽しいなど）」を選択したグループは、学業（受験、資格試験など）で苦労したことは「おおいにあった」という回答に統計的な差があった。一方、きっかけとして「授業が面白くなか

った」を選択したグループは、学業（受験、資格試験など）で苦勞したことは「ほとんどなかった」という回答に統計的な差があった。その他のきっかけを選択したグループの項目に統計的な差はなかった。

インターネット調査と異なり、きっかけとして「授業が面白くなかった」と選択したグループは学業でほとんど苦勞していないといった回答が統計的に有意な回答であったが、調査対象として支援を受けた不登校経験者が多く含まれることから、学校以外で学業に関する支援を受けていたことが影響している可能性も示唆される。

（インターネット調査）

Q13-b: 仕事（就職活動を含む）で苦勞した					
Q2		おおいにあった	ある程度あった	あまりなかった	ほとんどなかった
	1. 友人(いやがらせやいじめ)	<u>14.5</u>	-3.9	-6.9	-2.9
	2. 友人(いやがらせやいじめを除く)	<u>3.6</u>	<u>4.5</u>	-3.5	-5.1
	3. 先生(怒る、うるさい、体罰)	<u>8.2</u>	1.1	-4.8	-4.3
	4. 先生(相性)	<u>8.8</u>	-2.7	-3.6	-2.0
	5. 勉強	<u>15.0</u>	<u>2.6</u>	-4.7	-12.9
	6. 授業	<u>4.1</u>	-0.4	-1.0	-2.7
	7. きまり	<u>6.3</u>	0.4	-1.1	-5.6
	8. やる気	<u>3.5</u>	-4.0	0.4	0.6
	9. 合わなかった	<u>3.1</u>	0.1	-2.0	-1.1
	10. 環境の変化	<u>7.2</u>	-0.7	-3.5	-2.7
	11. 親	<u>12.9</u>	-2.9	-5.9	-3.5
	12. 家庭環境	<u>12.6</u>	-4.0	-5.1	-2.6
	13. 精神的不調	<u>13.5</u>	-5.2	-4.3	-3.1
	14. 身体的不調	<u>7.5</u>	-5.8	-0.8	0.0
	15. 障害	<u>12.3</u>	-2.5	-4.8	-4.4
	16. 生活リズム	<u>7.1</u>	-2.9	-0.5	-3.3
	17. ネット等	<u>2.6</u>	1.4	-2.1	-1.9
	18. その他	-1.0	-4.1	-0.5	<u>6.1</u>
	19. わからない	-6.3	-1.5	-0.6	<u>8.6</u>

インターネット調査においては、きっかけとして「その他」「わからない」を選択したグループは、仕事（就職活動を含む）で苦勞したことは「ほとんどなかった」という回答に統計的な差があった。一方、その他の項目を選択したグループは、仕事（就職活動を含む）で苦勞したことは「おおいにあった」という回答に統計的な差があった。特に、上位3項目のきっかけとして、「勉強が分からなかった（授業についていけなかった、成績が

良くなかったなど)」「友人との関係 (いやがらせやいじめ)」「精神的な不調 (漠然とした不安や気持ちの落ち込みなど)」が挙げられた。また、きっかけとして「友人との関係 (いやがらせやいじめを除く)」「勉強が分からなかった (授業についていけなかった、成績が良くなかったなど)」を選択したグループは、仕事 (就職活動を含む) で苦労したことは「ある程度あった」という回答においても統計的な差があった。

学業関連と同様、不登校のきっかけが明確である場合、仕事でおおいに苦労した方が統計的に有意な差があることが分かる。

(オンライン調査)

Q13-b: 仕事 (就職活動を含む) で苦労した					
Q2		おおいにあった	ある程度あった	あまりなかった	ほとんどなかった
	1. 友人(いやがらせやいじめ)	1. 6	0. 7	-1. 2	-1. 1
	2. 友人(いやがらせやいじめを除く)	-0. 5	0. 8	-0. 6	0. 2
	3. 先生(怒る、うるさい、体罰)	1. 8	-0. 7	-1. 7	0. 4
	4. 先生(相性)	0. 2	-1. 3	1. 2	0. 1
	5. 勉強	<u>3. 4</u>	-1. 3	-0. 7	-1. 4
	6. 授業	-0. 5	-1. 1	0. 3	1. 2
	7. きまり	-0. 4	-1. 5	1. 2	0. 7
	8. やる気	-0. 4	-0. 8	<u>2. 4</u>	-1. 0
	9. 合わなかった	-1. 5	0. 7	0. 6	0. 2
	10. 環境の変化	0. 0	1. 4	0. 8	-2. 0
	11. 親	<u>2. 2</u>	1. 0	-0. 1	-2. 8
	12. 家庭環境	1. 0	0. 8	-1. 0	-0. 8
	13. 精神的な不調	0. 5	0. 5	0. 2	-1. 1
	14. 身体的な不調	-0. 9	-0. 5	<u>2. 6</u>	-0. 9
	15. 障害	<u>2. 1</u>	-0. 5	-0. 8	-0. 9
	16. 生活リズム	<u>2. 2</u>	-1. 2	-0. 3	-0. 7
	17. ネット等	<u>2. 6</u>	-1. 2	-0. 4	-1. 0
	18. その他	-0. 9	-0. 9	-0. 5	<u>2. 1</u>
	19. わからない	0. 3	-0. 2	-1. 5	1. 3

オンライン調査においては、きっかけとして「勉強が分からなかった (授業についていけなかった、成績が良くなかったなど)」「親との関係 (親が怒る、親の言葉や態度への反発、親との会話がほとんどないなど)」「障害による学習上・生活上の困難」「生活リズムの乱れ (朝起きられないなど)」「インターネットやメール、ゲームなどの影響 (一度始めると止められない、学校より楽しいなど)」を選択したグループは、仕事 (就職活動を含む) で苦労したことは「おおいにあった」という回答に統計的な差があった。一方、き

きっかけとして「学校生活に対してやる気が出なかった」「身体的な不調（学校に行こうとすると腹痛や頭痛に襲われたなど）」を選択したグループは、仕事（就職活動を含む）で苦労したことは「あまりなかった」という回答に統計的な差があった。また、きっかけとして「その他」を選択したグループは、仕事（就職活動を含む）で苦労したことは「ほとんどなかった」という回答に統計的な差があった。その他のきっかけを選択したグループの項目に統計的な差はなかった。

インターネット調査と異なり、「学校生活に対してやる気が出なかった」「身体的な不調（学校に行こうとすると腹痛や頭痛に襲われたなど）」など、学校に関連する項目がきっかけの場合については仕事関連であり苦労していない可能性が示唆される。

（インターネット調査）

Q13-c: 体力が低下したり不足したりして苦労した					
Q2		おおいにあった	ある程度あった	あまりなかった	ほとんどなかった
	1. 友人(いやがらせやいじめ)	<u>9.7</u>	-0.7	-5.3	-2.1
	2. 友人(いやがらせやいじめを除く)	<u>5.3</u>	<u>3.8</u>	-2.3	-6.2
	3. 先生(怒る、うるさい、体罰)	<u>6.9</u>	<u>3.6</u>	-4.8	-4.8
	4. 先生(相性)	<u>7.3</u>	-0.8	-3.8	-1.4
	5. 勉強	<u>10.8</u>	<u>2.5</u>	-3.1	-8.9
	6. 授業	1.8	-1.1	-0.5	0.1
	7. きまり	<u>6.2</u>	0.9	-2.1	-4.1
	8. やる気	<u>4.6</u>	-4.2	0.5	-0.2
	9. 合わなかった	<u>4.4</u>	-0.2	-2.9	-0.6
	10. 環境の変化	<u>8.1</u>	-0.5	-3.7	-2.6
	11. 親	<u>12.4</u>	-0.5	-5.1	-4.9
	12. 家庭環境	<u>13.4</u>	-2.4	-4.9	-3.9
	13. 精神的な不調	<u>18.4</u>	1.4	-6.8	-10.2
	14. 身体的な不調	<u>14.6</u>	1.7	-6.0	-8.1
	15. 障害	<u>12.9</u>	0.7	-4.3	-7.4
	16. 生活リズム	<u>10.3</u>	-0.3	-3.3	-5.2
	17. ネット等	<u>5.0</u>	<u>2.2</u>	-2.9	-3.8
	18. その他	0.5	-5.0	-0.9	<u>5.7</u>
	19. わからない	-4.6	-3.2	0.6	<u>6.8</u>

インターネット調査においては、きっかけとして「その他」「わからない」を選択したグループは、体力が低下したり不足したりして苦労したことは「ほとんどなかった」という回答に統計的な差があった。また、きっかけとして「授業が面白くなかった」を選択し

たグループの項目に統計的な差はなかった。一方、その他の項目を選択したグループは、体力が低下したり不足したりして苦勞したことは「おおいにあった」という回答に統計的な差があった。特に、上位3項目のきっかけとして、「精神的な不調（漠然とした不安や気持ちの落ち込みなど）」「身体的な不調（学校に行こうとすると腹痛や頭痛に襲われたなど）」「家庭環境に起因するもの（両親の不和、祖父母と父母の不和など）」が挙げられた。また、きっかけとして「友人との関係（いやがらせやいじめを除く）」「先生との関係（先生が怒る、注意がうるさい、体罰など）」「勉強が分からなかった（授業についていけなかった、成績が良くなかったなど）」「インターネットやメール、ゲームなどの影響（一度始めると止められない、学校より楽しいなど）」を選択したグループは、体力が低下したり不足したりして苦勞したことは「ある程度あった」という回答においても統計的な差があった。

学業関連と同様、不登校のきっかけが明確である場合、体力が低下したり不足したりしておおいに苦勞した方が統計的に有意な差があることが分かる。

(オンライン調査)

Q13-c: 体力が低下したり不足したりして苦勞した					
Q2		おおいにあった	ある程度あった	あまりなかった	ほとんどなかった
	1. 友人(いやがらせやいじめ)	0.9	-0.2	-1.7	0.9
	2. 友人(いやがらせやいじめを除く)	0.8	0.5	-0.1	-1.4
	3. 先生(怒る、うるさい、体罰)	-1.1	0.4	-0.1	0.9
	4. 先生(相性)	0.5	1.4	-0.5	-1.7
	5. 勉強	0.7	1.6	-0.8	-1.8
	6. 授業	0.1	0.3	-2.2	1.9
	7. きまり	-1.3	1.3	-1.3	1.4
	8. やる気	1.7	-1.0	-0.7	-0.1
	9. 合わなかった	0.8	0.7	-1.8	0.1
	10. 環境の変化	0.6	0.2	0.2	-1.1
	11. 親	-0.4	1.2	0.1	-1.0
	12. 家庭環境	-1.2	1.1	0.8	-0.7
	13. 精神的不調	<u>3.2</u>	0.6	-0.9	-3.4
	14. 身体的不調	-0.2	<u>3.0</u>	0.6	-3.7
	15. 障害	1.0	0.1	-0.4	-0.9
	16. 生活リズム	<u>2.4</u>	1.4	-1.4	-2.8
	17. ネット等	<u>4.0</u>	-0.5	-1.4	-2.6
	18. その他	-0.1	-0.1	-1.2	1.5
	19. わからない	-1.2	-0.2	0.8	0.8

オンライン調査においては、きっかけとして「精神的な不調（漠然とした不安や気持ちの落ち込みなど）」「生活リズムの乱れ（朝起きられないなど）」「インターネットやメール、ゲームなどの影響（一度始めると止められない、学校より楽しいなど）」を選択したグループは、体力が低下したり不足したりして苦勞したことは「おおいにあった」という回答に統計的な差があった。また、きっかけとして「身体的な不調（学校に行こうとすると腹痛や頭痛に襲われたなど）」を選択したグループは、体力が低下したり不足したりして苦勞したことは「ある程度あった」という回答に統計的な差があった。その他のきっかけを選択したグループの項目に統計的な差はなかった。

(インターネット調査)

Q13-d: 生活リズムが乱れ苦勞した					
Q2		おおいにあった	ある程度あった	あまりなかった	ほとんどなかった
	1. 友人(いやがらせやいじめ)	<u>7.8</u>	-3.9	-4.0	0.9
	2. 友人(いやがらせやいじめを除く)	<u>4.2</u>	<u>3.9</u>	-3.4	-5.3
	3. 先生(怒る、うるさい、体罰)	<u>5.0</u>	<u>2.2</u>	-5.3	-1.9
	4. 先生(相性)	<u>5.9</u>	-1.7	-3.3	-0.5
	5. 勉強	<u>9.4</u>	1.0	-1.5	-9.3
	6. 授業	<u>3.5</u>	0.7	-0.6	-3.9
	7. きまり	<u>6.1</u>	1.6	-3.9	-3.9
	8. やる気	<u>7.8</u>	-0.1	-2.9	-4.7
	9. 合わなかった	<u>3.5</u>	-1.8	-1.2	-0.2
	10. 環境の変化	<u>7.9</u>	-1.3	-3.1	-3.3
	11. 親	<u>12.4</u>	-0.8	-4.6	-6.8
	12. 家庭環境	<u>12.1</u>	-1.9	-5.0	-4.8
	13. 精神的不調	<u>16.6</u>	-0.5	-5.5	-10.5
	14. 身体的不調	<u>8.5</u>	-0.2	-3.3	-4.9
	15. 障害	<u>11.8</u>	-2.3	-3.8	-5.3
	16. 生活リズム	<u>21.4</u>	<u>2.6</u>	-10.0	-14.3
	17. ネット等	<u>9.0</u>	1.7	-4.2	-6.7
	18. その他	0.6	-2.9	-2.4	<u>5.5</u>
	19. わからない	-5.1	-3.8	1.5	<u>8.1</u>

インターネット調査においては、きっかけとして「その他」「わからない」を選択したグループは、生活リズムが乱れ苦勞したことは「ほとんどなかった」という回答に統計的な差があった。一方、その他の項目を選択したグループは、生活リズムが乱れ苦勞したことは「おおいにあった」という回答に統計的な差があった。特に、上位3項目のきっかけとして、「生活リズムの乱れ（朝起きられないなど）」「精神的な不調（漠然とした不安や気持ちの落ち込みなど）」「親との関係（親が怒る、親の言葉や態度への反発、親との会話がほとんどないなど）」が挙げられた。また、きっかけとして「友人との関係（いやがらせやいじめを除く）」「先生との関係（先生が怒る、注意がうるさい、体罰など）」「生活リズムの乱れ（朝起きられないなど）」を選択したグループは、生活リズムが乱れ苦勞したことは「ある程度あった」という回答においても統計的な差があった。

不登校のきっかけが明確である場合、生活リズムが乱れ苦勞したことはおおいにあった方が統計的に有意な差があることが分かる。

(オンライン調査)

Q13-d: 生活リズムが乱れ苦勞した					
Q2		おおいにあった	ある程度あった	あまりなかった	ほとんどなかった
	1. 友人(いやがらせやいじめ)	1. 2	0. 1	-1. 7	0. 3
	2. 友人(いやがらせやいじめを除く)	1. 0	-1. 3	0. 6	-0. 5
	3. 先生(怒る、うるさい、体罰)	0. 8	-1. 0	0. 4	-0. 3
	4. 先生(相性)	<u>2. 1</u>	-0. 6	-1. 3	-0. 5
	5. 勉強	<u>2. 0</u>	-0. 1	0. 7	-3. 1
	6. 授業	0. 1	-1. 1	-0. 7	1. 8
	7. きまり	-0. 6	-0. 9	-0. 2	2. 0
	8. やる気	0. 3	0. 3	0. 7	-1. 3
	9. 合わなかった	1. 0	-0. 4	-1. 0	0. 3
	10. 環境の変化	0. 3	0. 9	-0. 3	-1. 0
	11. 親	2. 0	-0. 8	-0. 6	-0. 8
	12. 家庭環境	-0. 2	0. 0	0. 1	0. 2
	13. 精神的不調	1. 7	0. 3	-1. 0	-1. 4
	14. 身体的不調	0. 0	0. 3	0. 2	-0. 5
	15. 障害	0. 7	0. 8	-0. 4	-1. 3
	16. 生活リズム	<u>5. 7</u>	-0. 3	-2. 8	-3. 4
	17. ネット等	<u>5. 0</u>	-1. 2	-1. 9	-2. 5
	18. その他	0. 3	-0. 9	-1. 5	<u>2. 3</u>
	19. わからない	-0. 9	1. 4	0. 4	-0. 9

オンライン調査においては、きっかけとして「先生との関係（先生と合わなかったなど）」「勉強が分からなかった（授業についていけなかった、成績が良くなかったなど）」「生活リズムの乱れ（朝起きられないなど）」「インターネットやメール、ゲームなどの影響（一度始めると止められない、学校より楽しいなど）」を選択したグループは、生活リズムが乱れ苦勞したことは「おおいにあった」という回答に統計的な差があった。一方、きっかけとして「その他」を選択したグループは、生活リズムが乱れ苦勞したことは「ほとんどなかった」という回答に統計的な差があった。その他のきっかけを選択したグループの項目に統計的な差はなかった。

(インターネット調査)

Q13-e: 人との関わりに不安を感じたり、人と関わりをもつことに苦勞した					
Q2		おおいにあった	ある程度あった	あまりなかった	ほとんどなかった

1. 友人(いやがらせやいじめ)	<u>24.2</u>	-2.7	-16.3	-12.3
2. 友人(いやがらせやいじめを除く)	<u>8.3</u>	0.9	-5.3	-7.2
3. 先生(怒る、うるさい、体罰)	<u>4.9</u>	-1.4	-2.4	-2.2
4. 先生(相性)	<u>8.1</u>	-2.0	-5.6	-2.4
5. 勉強	<u>11.3</u>	-2.6	-4.8	-7.2
6. 授業	-1.5	-1.7	1.7	<u>2.8</u>
7. きまり	<u>2.4</u>	-3.0	1.5	-0.9
8. やる気	<u>5.8</u>	-4.8	-1.8	0.7
9. 合わなかった	<u>5.7</u>	-3.1	-1.9	-1.5
10. 環境の変化	<u>7.0</u>	-4.0	-2.5	-1.5
11. 親	<u>16.5</u>	-6.2	-7.8	-6.0
12. 家庭環境	<u>15.8</u>	-7.1	-7.3	-4.2
13. 精神的不調	<u>28.9</u>	-7.8	-14.8	-13.4
14. 身体的不調	<u>15.8</u>	-5.3	-5.7	-8.6
15. 障害	<u>10.7</u>	-4.3	-5.0	-3.4
16. 生活リズム	<u>6.5</u>	-2.6	-3.3	-1.8
17. ネット等	<u>3.6</u>	-3.2	0.7	-1.4
18. その他	-1.6	-2.9	0.2	<u>6.5</u>
19. わからない	-9.2	-2.6	<u>4.9</u>	<u>11.6</u>

インターネット調査においては、きっかけとして「勉強が分からなかった（授業についていけなかった、成績が良くなかったなど）」「その他」「わからない」を選択したグループは、人との関わりに不安を感じたり、人と関わりをもつことに苦労したことは「ほとんどなかった」という回答に統計的な差があった。また、きっかけとして「わからない」を選択したグループは、人との関わりに不安を感じたり、人と関わりをもつことに苦労したことは「あまりなかった」という回答に統計的な差があった。一方、その他の項目を選択したグループは、人との関わりに不安を感じたり、人と関わりをもつことに苦労したことは「おおいにあった」という回答に統計的な差があった。特に、上位3項目のきっかけとして、「精神的な不調（漠然とした不安や気持ちの落ち込みなど）」「友人との関係（いやがらせやいじめ）」「親との関係（親が怒る、親の言葉や態度への反発、親との会話がほとんどないなど）」が挙げられた。

不登校のきっかけが明確である場合、「勉強が分からなかった（授業についていけなかった、成績が良くなかったなど）」を除き、おおいに人との関わりに不安を感じたり、人と関わりをもつことに苦労した方が統計的に有意な差があることが分かる。勉強については他の項目と比較して影響が少ない可能性が示唆される。一方、不登校のきっかけとして精神的な不調や人間関係がある場合は、社会的な不安や対人関係の困難が残る可能性を示

唆している。

(オンライン調査)

Q13-e: 人との関わりに不安を感じたり、人と関わりをもつことに苦労した					
Q2		おおいにあった	ある程度あった	あまりなかった	ほとんどなかった
	1. 友人(いやがらせやいじめ)	0.8	0.5	-0.9	-1.0
	2. 友人(いやがらせやいじめを除く)	1.3	-1.2	-0.2	0.0
	3. 先生(怒る、うるさい、体罰)	-1.5	-0.4	<u>4.0</u>	-1.3
	4. 先生(相性)	0.4	-0.6	<u>2.1</u>	-2.0
	5. 勉強	<u>2.7</u>	-1.5	-0.2	-1.7
	6. 授業	-0.5	-0.7	1.4	0.4
	7. きまり	-1.5	-0.6	1.7	1.5
	8. やる気	0.3	-0.7	0.2	0.4
	9. 合わなかった	1.2	0.7	-1.2	-1.6
	10. 環境の変化	1.4	-0.7	-1.2	0.1
	11. 親	1.8	0.1	-1.5	-1.4
	12. 家庭環境	0.8	-0.8	-0.1	0.0
	13. 精神的不調	<u>2.8</u>	-0.7	-1.7	-1.4
	14. 身体的不調	-0.2	<u>2.0</u>	-1.4	-1.2
	15. 障害	0.0	0.9	-0.4	-0.9
	16. 生活リズム	<u>2.3</u>	-0.3	-2.2	-0.8
	17. ネット等	<u>2.4</u>	-0.6	-1.1	-1.5
	18. その他	-1.0	-0.4	1.0	1.1
	19. わからない	0.3	0.0	0.5	-0.9

オンライン調査においては、きっかけとして「勉強が分からなかった（授業についていけなかった、成績が良くなかったなど）」「精神的な不調（漠然とした不安や気持ちの落ち込みなど）」「生活リズムの乱れ（朝起きられないなど）」「インターネットやメール、ゲームなどの影響（一度始めると止められない、学校より楽しいなど）」を選択したグループは、人との関わりに不安を感じたり、人と関わりをもつことに苦労したことは「おおいにあった」という回答に統計的な差があった。また、きっかけとして「身体的な不調（学校に行こうとすると腹痛や頭痛に襲われたなど）」を選択したグループは、人との関わりに不安を感じたり、人と関わりをもつことに苦労したことは「ある程度あった」という回答に統計的な差があった。一方、きっかけとして「先生との関係（先生が怒る、注意がうるさい、体罰など）」「先生との関係（先生と合わなかったなど）」を選択したグループは、人との関わりに不安を感じたり、人と関わりをもつことに苦労したことは「あまりなかつ

た」という回答に統計的な差があった。その他のきっかけを選択したグループの項目に統計的な差はなかった。

インターネット調査と異なり、「勉強が分からなかった（授業についていけなかった、成績が良くなかったなど）」は「おおいにあった」一方、先生との関係は「あまりなかった」という回答に有意差が生じた。

（インターネット調査）

Q13-f: 成長した、視野が広がった					
Q2		おおいにあった	ある程度あった	あまりなかった	ほとんどなかった
	1. 友人(いやがらせやいじめ)	<u>6.8</u>	-2.3	-2.8	-0.5
	2. 友人(いやがらせやいじめを除く)	1.1	1.8	0.2	-3.7
	3. 先生(怒る、うるさい、体罰)	<u>4.4</u>	1.2	-4.3	-0.6
	4. 先生(相性)	<u>6.0</u>	0.6	-4.3	-1.5
	5. 勉強	<u>3.7</u>	-0.6	-2.8	0.5
	6. 授業	<u>6.7</u>	-2.2	-2.2	-1.1
	7. きまり	<u>7.0</u>	2.0	-4.3	-4.3
	8. やる気	<u>3.1</u>	-3.6	0.4	1.2
	9. 合わなかった	<u>2.4</u>	-1.5	-0.7	0.5
	10. 環境の変化	<u>5.9</u>	0.0	-5.2	0.5
	11. 親	<u>4.6</u>	-0.8	-3.7	1.1
	12. 家庭環境	<u>6.4</u>	-2.6	-4.0	1.9
	13. 精神的不調	<u>2.2</u>	-2.6	-0.2	1.4
	14. 身体的不調	<u>4.4</u>	-1.0	-2.1	-0.5
	15. 障害	<u>4.3</u>	-2.1	-1.4	0.2
	16. 生活リズム	<u>4.9</u>	1.1	-2.1	-3.8
	17. ネット等	<u>2.6</u>	-1.2	-0.8	0.1
	18. その他	<u>2.5</u>	-0.8	-2.7	1.8
	19. わからない	-4.2	-5.2	0.8	<u>10.1</u>

インターネット調査においては、きっかけとして「わからない」を選択したグループは、成長した、視野が広がったことは「ほとんどなかった」という回答に統計的な差があった。また、きっかけとして「友人との関係（いやがらせやいじめを除く）」を選択したグループの項目に統計的な差はなかった。一方、その他の項目を選択したグループは、成長した、視野が広がったことは「おおいにあった」という回答に統計的な差があった。特に、上位3項目のきっかけとして、「学校のきまりなどの問題（学校の校則がきびしいなど）」「友人との関係（いやがらせやいじめ）」「授業が面白くなかった」が挙げられた。

不登校のきっかけが明確である場合、おおいに成長した、視野が広がった方が統計的に有意な差があることが分かる。

(オンライン調査)

Q13-f: 成長した、視野が広がった					
Q2		おおいにあった	ある程度あった	あまりなかった	ほとんどなかった
	1. 友人(いやがらせやいじめ)	0.4	0.1	-0.6	0.0
	2. 友人(いやがらせやいじめを除く)	-2.1	<u>2.3</u>	-0.2	0.2
	3. 先生(怒る、うるさい、体罰)	-0.1	-0.2	0.8	-0.6
	4. 先生(相性)	0.6	0.0	-0.8	-0.2
	5. 勉強	-0.4	1.9	-1.5	-0.6
	6. 授業	0.6	1.2	-1.5	-1.2
	7. きまり	1.2	0.4	-1.3	-1.3
	8. やる気	0.9	-0.8	-0.9	1.2
	9. 合わなかった	<u>2.2</u>	-1.0	-1.2	-0.8
	10. 環境の変化	1.0	0.0	-0.9	-0.8
	11. 親	0.3	0.0	-0.7	0.2
	12. 家庭環境	-0.3	-0.3	0.7	0.0
	13. 精神的不調	-1.0	0.9	-0.4	0.8
	14. 身体的不調	-0.1	-0.6	<u>2.1</u>	-1.6
	15. 障害	-1.5	0.8	0.9	0.2
	16. 生活リズム	-0.5	1.4	-1.1	0.0
	17. ネット等	-1.4	1.4	-1.9	<u>3.1</u>
	18. その他	1.0	-1.0	-0.8	1.3
	19. わからない	-1.0	-0.1	0.2	1.9

オンライン調査においては、きっかけとして「入学、転校、進級した先の学校や学級が自分に合わなかった」を選択したグループは、成長した、視野が広がったことは「おおいにあった」という回答に統計的な差があった。また、きっかけとして「友人との関係（いやがらせやいじめを除く）」を選択したグループは、成長した、視野が広がったことは「ある程度あった」という回答に統計的な差があった。一方、きっかけとして「身体的な不調（学校に行こうとすると腹痛や頭痛に襲われたなど）」を選択したグループは、成長した、視野が広がったことは「あまりなかった」という回答に統計的な差があった。また、きっかけとして「インターネットやメール、ゲームなどの影響（一度始めると止められない、学校より楽しいなど）」を選択したグループは、成長した、視野が広がったことは「ほとんどなかった」という回答に統計的な差があった。その他のきっかけを選択したグ

ループの項目に統計的な差はなかった。

インターネット調査と異なり、オンライン調査では環境の変化などがきっかけの場合、成長した、視野が広がったとある一方、ネット等がきっかけの場合、成長や視野の広がりが感じられていない可能性が示唆される。

(インターネット調査)

Q13-g: 人に優しくなった、人の痛みが分かるようになった					
Q2		おおいにあった	ある程度あった	あまりなかった	ほとんどなかった
	1. 友人(いやがらせやいじめ)	<u>15.6</u>	-3.0	-9.8	-3.8
	2. 友人(いやがらせやいじめを除く)	1.4	1.3	0.1	-3.9
	3. 先生(怒る、うるさい、体罰)	<u>5.8</u>	-0.8	-4.7	-0.5
	4. 先生(相性)	<u>7.6</u>	-2.3	-4.2	-1.1
	5. 勉強	<u>3.3</u>	0.4	-3.1	-1.0
	6. 授業	<u>2.0</u>	-3.5	-1.5	<u>4.6</u>
	7. きまり	<u>3.6</u>	0.6	-3.0	-2.0
	8. やる気	-2.0	-3.4	<u>3.1</u>	<u>4.0</u>
	9. 合わなかった	<u>3.7</u>	-1.4	-2.3	0.2
	10. 環境の変化	<u>5.5</u>	-1.9	-3.1	-0.5
	11. 親	<u>7.4</u>	-3.2	-3.9	0.1
	12. 家庭環境	<u>7.4</u>	-3.1	-4.5	0.7
	13. 精神的不調	<u>7.6</u>	-0.8	-4.4	-3.4
	14. 身体的不調	<u>7.6</u>	0.0	-5.5	-3.3
	15. 障害	<u>5.4</u>	-2.5	-4.2	<u>2.0</u>
	16. 生活リズム	<u>2.8</u>	-0.5	-1.8	-0.7
	17. ネット等	0.4	-1.3	-0.3	1.8
	18. その他	1.2	-2.0	-0.9	<u>2.6</u>
	19. わからない	-7.8	-5.3	<u>5.0</u>	<u>12.4</u>

インターネット調査においては、きっかけとして「授業が面白くなかった」「学校生活に対してやる気が出なかった」「障害による学習上・生活上の困難」「その他」「わからない」を選択したグループは、人に優しくなった、人の痛みが分かるようになったことは「ほとんどなかった」という回答に統計的な差があった。また、きっかけとして「学校生活に対してやる気が出なかった」「わからない」を選択したグループは、人に優しくなった、人の痛みが分かるようになったことは「あまりなかった」という回答に統計的な差があった。「友人との関係(いやがらせやいじめを除く)」「インターネットやメール、ゲームなどの影響(一度始めると止められない、学校より楽しいなど)」を選択したグループ

の項目に統計的な差はなかった。一方、その他の項目を選択したグループは、人に優しくなった、人の痛みが分かるようになったことは「おおいにあった」という回答に統計的な差があった。特に、上位3項目のきっかけとして、「友人との関係（いやがらせやいじめ）」「精神的な不調（漠然とした不安や気持ちの落ち込みなど）」「身体的な不調（学校に行こうとすると腹痛や頭痛に襲われたなど）」が挙げられた。なお、きっかけとして「授業が面白くなかった」「障害による学習上・生活上の困難」を選択したグループにおいては、「おおいにあった」「ほとんどなかった」の回答において統計的な差があった。

精神的・身体的な不調や人間関係における困難がきっかけであった方の一部においては、それらの経験が他者の気持ちへの共感力の向上につながっている可能性を示唆している。ただし、「友人との関係（いやがらせやいじめを除く）」は有意差がなく、より多岐に渡る人間関係がきっかけである場合は必ずしも人に優しくなった、人の痛みが分かるようになった、という振り返りにはつながらない可能性も示唆される。

(オンライン調査)

Q13-g: 人に優しくなった、人の痛みが分かるようになった					
Q2		おおいにあった	ある程度あった	あまりなかった	ほとんどなかった
	1. 友人(いやがらせやいじめ)	<u>2.5</u>	-2.6	-1.4	1.8
	2. 友人(いやがらせやいじめを除く)	-0.8	0.3	<u>2.3</u>	-1.7
	3. 先生(怒る、うるさい、体罰)	0.8	-1.3	1.5	-0.9
	4. 先生(相性)	1.1	0.0	-1.4	-0.6
	5. 勉強	1.1	-0.4	-1.3	0.1
	6. 授業	0.4	-1.4	1.4	0.1
	7. きまり	0.4	0.4	-0.5	-1.0
	8. やる気	-2.0	0.4	1.6	1.1
	9. 合わなかった	0.9	-0.5	0.3	-1.0
	10. 環境の変化	0.2	0.1	-0.8	0.5
	11. 親	1.9	-1.7	-0.9	0.5
	12. 家庭環境	-0.7	0.6	0.5	-0.3
	13. 精神的不調	-0.8	1.1	-0.1	-0.3
	14. 身体的不調	0.1	1.7	-1.2	-2.0
	15. 障害	-1.6	0.9	1.3	-0.1
	16. 生活リズム	-0.7	0.8	0.1	-0.4
	17. ネット等	-1.2	0.6	-0.7	2.0
	18. その他	2.0	-1.2	-1.3	0.0
	19. わからない	-1.6	0.2	0.9	1.6

オンライン調査においては、きっかけとして「友人との関係 (いやがらせやいじめ)」を選択したグループは、人に優しくなった、人の痛みが分かるようになったことは「おおいにあった」という回答に統計的な差があった。一方、きっかけとして「友人との関係 (いやがらせやいじめを除く)」を選択したグループは、人に優しくなった、人の痛みが分かるようになったことは「あまりなかった」という回答に統計的な差があった。その他のきっかけを選択したグループの項目に統計的な差はなかった。

インターネット調査と同様、「友人との関係 (いやがらせやいじめ)」といったきっかけにおいては他者の困難に対する共感力を深める可能性を示唆している一方、「友人との関係 (いやがらせやいじめを除く)」は「あまりなかった」が有意に多く、人間関係のきっかけによって不登校経験の捉え方が異なる可能性が示唆される。

(5) 第9章のまとめ

第9章では不登校のきっかけと他項目の関連として、学校を休みはじめた時期、不登校当時に相談した機関や人、不登校当時の支援ニーズ、中学卒業後の経験との関連について整理した。統計的に有意差があった回答を中心に記載した。

学校を休みはじめた時期との関連について、インターネット調査では、小学校全般において、先生との関係が休みはじめるきっかけとして期待値を上回っている。また、「小学校1年生」から「小学校3年生」においては、「学校生活に対してやる気が出なかった」

「入学、転校、進級した先の学校や学級が自分に合わなかった」「身体的な不調（学校に行こうとすると腹痛や頭痛に襲われたなど）」といった、新たな環境への適応に苦難することで休みは始めているケースや、「障害による学習上・生活上の困難」「家庭環境に起因するもの（両親の不和、祖父母と父母の不和など）」など、周囲と異なる状況におかれている者において休みは始めるケースが統計的に有意であった。「小学校4年生」「小学校5年生」にかけては、「勉強が分からなかった（授業についていけなかった、成績が良くなかったなど）」「家族の生活環境の変化（父親や母親の単身赴任、家族の別居、親の転職や失業などの経済的な問題など）」など、学校についていけず、休みは始める可能性が示唆される。中学校から休みは始めるケースにおいて、「中学校1年生」「中学校2年生」においては、「友人との関係（いやがらせやいじめ）」「精神的な不調（漠然とした不安や気持ちの落ち込みなど）」等、小学校より人間関係が複雑化し、友人とのトラブル等も増えていく過程で様々なストレスを受けることで不調に陥る可能性が示唆される。また、「学校生活に対してやる気が出なかった」「入学、転校、進級した先の学校や学級が自分に合わなかった」など、小学校と同様、新たな環境への適応に困難を示す者も一定数いることが示唆される。オンライン調査では、インターネット調査と比較して統計的に有意な項目は少ないが、インターネット調査と同様、「中学校1年生」「中学校2年生」においては、精神的な不調をきっかけとして休みは始める傾向が見られた。

不登校当時に相談した機関や人との関連について、最もあてはまるきっかけについてまとめた。インターネット調査では、多様な相談先につながったきっかけについて、「友人との関係（いやがらせやいじめ）」は、まず「学校の先生（担任の先生や保健室の先生など）」に相談することが多く、それに加えて「教育支援センター（適応指導教室）・教育相談所」などに相談することが多い。人間関係のきっかけは学校以外の公的相談機関や民間施設など、多様な相談先を活用しているが、特に「授業が面白くなかった」「学校のきまりなどの問題（学校の校則がきびしいなど）」「学校が合わなかった」など、学習や学校の環境に関するきっかけは上記に加えて「SNS や電話相談」も期待値を上回っていた。「精神的な不調（漠然とした不安や気持ちの落ち込みなど）」「身体的な不調（学校に行こうとすると腹痛や頭痛に襲われたなど）」は「病院・診療所」に加え、「学校の先生（担任の先生や保健室の先生など）」「学校にいる相談員（スクールカウンセラーなど）」が連携して対応している可能性がうかがえる。相談先とつながらなかったきっかけについて、「親との

関係（親が怒る、親の言葉や態度への反発、親との会話がほとんどないなど）」「家庭環境に起因するもの（両親の不和、祖父母と父母の不和など）」といった家庭内の問題に関しては外部が気づきにくいことに加え、本人が直接支援につながりにくい可能性が示唆される。また、「学校生活に対してやる気が出なかった」といったきっかけはそもそも外部の相談に結びつきにくい可能性がある。オンライン調査では、インターネット調査と比較して統計的に有意な項目は少ないが、インターネット調査と同様、きっかけと相談先の役割が関連する項目において期待値が有意に高い傾向が見られた。

不登校当時の支援ニーズとの関連について、インターネット調査では、不登校のきっかけに関わらず、どの支援ニーズも統計的に有意な差があることが分かった。特に、不登校時に相談した機関や人との関連を見ると、「家庭環境に起因するもの（両親の不和、祖父母と父母の不和など）」「学校生活に対してやる気が出なかった」「生活リズムの乱れ（朝起きられないなど）」「家族の生活環境の変化（父親や母親の単身赴任、家族の別居、親の転職や失業などの経済的な問題など）」「インターネットやメール、ゲームなどの影響（一度始めると止められない、学校より楽しいなど）」は統計的に有意な相談先がないものの、支援ニーズとしてはほとんどの項目で有意差が見られていることから、当事者の支援ニーズを拾い上げていくことの重要性が示唆される。オンライン調査では、インターネット調査と同様に、不登校のきっかけに関わらず、どの支援ニーズも一定の需要があることが想定される。また、「精神的・身体的な不調についての相談や手助け」に関する支援ニーズを持つ回答は期待値を上回ることが多く、不調の原因が幅広く、個別の悩みを相談したいというニーズがある可能性が示唆される。

中学卒業後の経験との関連について、インターネット調査では、基本的に不登校のきっかけがはっきりしている場合、これまで苦労をした経験があるや、成長した、視野が広がった等と回答する傾向が高いことが示唆されるが、オンライン調査では、インターネット調査と比較して、統計的に有意な項目は少なかった。

第10章 不登校当時に相談した機関や人と他項目の関連

(1) 不登校当時に相談した機関や人について(Q5)

1. 単純集計

【(Q5) 不登校当時の施設の利用状況・相談した人】は、「11. 何も利用しなかった」を排他設問とした多肢選択設問である。回答数の多い順に並び変えて示すと下記の結果になる。

■ 「不登校当時に相談した機関や人」(Q5)の単純集計

※設問及び選択肢については、P. 28 を参照する。

(インターネット調査)

	回答数	割合
11. なし	9,307	51.1%
7. 先生	3,842	21.1%
4. 病院	2,190	12.0%
8. 学校の相談員	2,003	11.0%
1. 教育支援センター	1,762	9.7%
5. 民間施設	1,338	7.3%
2. 児相	1,255	6.9%
6. その他機関	938	5.2%
3. 保健所	734	4.0%
9. SNS	557	3.1%
10. その他	334	1.8%

上記は、インターネット調査にて不登校児童生徒に相談した機関や人の数を集計した結果である。最も選択者数が多いのは「何も利用しなかった」であった。ただし、世代間により解釈が異なる可能性があることには留意が必要である。「学校の先生（担任の先生や保健室の先生など）」「病院・診療所」「学校にいる相談員（スクールカウンセラーなど）」の3つの機関・人の利用状況は約30%未満から10%超であり、比較的用户数が多い。また、「教育支援センター（適応指導教室）・教育相談所」「民間施設（「フリースクール」と呼ばれる場所など）」「児童相談所、福祉事務所」「1～5.以外で当時の在籍校以外の心理相談・カウンセリングなどをする機関」の4つの機関・人は約10%未満から5%超であり利用者は中程度である。「保健所・保健センター」「SNS や電話相談」「その他」の3つの機関・人は約5%未満であり、利用者は少ない。

(オンライン調査)

	回答数	割合
7. 先生	136	42.4%
4. 病院	107	33.3%
1. 教育支援センター	105	32.7%
8. 学校の相談員	97	30.2%
5. 民間施設	95	29.6%
11. なし	65	20.2%
6. その他機関	30	9.3%
2. 児相	22	6.9%
10. その他	19	5.9%
3. 保健所	11	3.4%
9. SNS	10	3.1%

上記は、オンライン調査にて不登校児童に相談した機関や人の数を集計した結果である。最も選択者数が多いのは「学校の先生（担任の先生や保健室の先生など）」であった。「病院・診療所」、「教育支援センター（適応指導教室）・教育相談所」「学校にいる相談員（スクールカウンセラーなど）」の3つの機関・人の利用状況は約40%未満から30%超であり、利用者数が多い。また、「民間施設（「フリースクール」と呼ばれる場所など）」「何も利用しなかった」の2つの機関・人は約30%未満から10%超であり利用者数は比較的用户が多い。「1～5.以外で当時の在籍校以外の心理相談・カウンセリングなどをする機関」「児童相談所、福祉事務所」「その他」の3つの機関・人は約10%未満から5%超であり、利用者数は中程度である。「保健所・保健センター」「SNS や電話相談」の2つの機関・人は約5%未満であり、利用者数は少ない。なお、オンライン調査における対象者は、支援団体や自治体などから案内を受けた方であることから、解釈には留意が必要である。

2. 施設・相談機関の複数利用について

■ 利用した施設・相談機関の選択数

次の表は回答者の間に Q5 おける選択数の分布を示したものである。選択数が0（n=0）の度数は「何も利用しなかった」という項目を選択した回答者の数である。

(インターネット調査)

施設・相談機関数	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
人数	9,307	5,381	2,051	875	359	132	42	16	11	33	0	0	0

インターネット調査においては、選択項目「何も利用しなかった」を除いた12個の選択

項目の選択総数は 8,900 人、そのうちの 3,519 人（39.5%）の回答者は2つ以上の項目（機関・人）を選択（利用）している。一人あたり 0.8 個の機関・人を利用していることになる。

（オンライン調査）

施設・相談機関数	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
人数	65	70	85	49	28	16	6	1	0	0	1	0	0

オンライン調査においては、選択項目「何も利用しなかった」を除いた 12 個の選択項目の選択総数は 256 人、そのうちの 186 人（72.7%）の回答者は2つ以上の項目（機関・人）を選択（利用）している。一人あたり 2.0 個の機関・人を利用していることになる。

インターネット調査よりも多い傾向にある。これは、オンライン調査の調査対象は、支援団体や自治体などから案内された方であることから利用施設数が多い可能性が示唆される。

■ 群間差の大きい順の組み合わせ

（インターネット調査）

組み合わせ		p 値	標準化残差	観測数	期待値
7. 先生	8. 学校の相談員	**	29.3	928	423
1. 教育支援センター	2. 児相	**	27.9	403	121
2. 児相	3. 保健所	**	26.1	226	51
1. 教育支援センター	3. 保健所	**	25.0	267	71
3. 保健所	5. 民間施設	**	21.4	202	54
1. 教育支援センター	5. 民間施設	**	20.6	344	129
3. 保健所	9. SNS	**	20.0	114	22
1. 教育支援センター	4. 病院	**	19.1	460	212
5. 民間施設	8. 学校の相談員	**	18.7	353	147
3. 保健所	6. その他機関	**	18.6	147	38

*p<0.05、**p<0.01

インターネット調査においては、表から、回答者の利用傾向は、「学校にいる相談員（スクールカウンセラーなど）」「学校の先生（担任の先生や保健室の先生など）」の組み合わせが多く、学校内の相談支援を併用していることが示唆される。一方で、「教育支援センター（適応指導教室）・教育相談所」「児童相談所、福祉事務所」「保健所・保健セン

ター」「民間施設（「フリースクール」と呼ばれる場所など）」の学内外の機関は相互に利用されることが多いことが分かる。

（オンライン調査）

組み合わせ		p 値	標準化残差	観測数	期待値
7. 先生	8. 学校の相談員	**	6.6	68	41
2. 児相	3. 保健所	**	5.2	5	1
4. 病院	7. 先生	**	4.5	64	45
2. 児相	4. 病院	**	3.6	15	7
4. 病院	8. 学校の相談員	**	3.5	46	32
6. その他機関	9. SNS	**	3.4	4	1
4. 病院	9. SNS	**	3.2	8	3
1. 教育支援センター	7. 先生	**	3.0	57	44
5. 民間施設	7. 先生	**	2.9	52	40
1. 教育支援センター	3. 保健所	**	2.9	8	4
8. 学校の相談員	9. SNS	**	2.8	7	3
4. 病院	5. 民間施設	*	2.4	41	32
1. 教育支援センター	2. 児相	*	2.3	12	7
3. 保健所	4. 病院	*	2.2	7	4
3. 保健所	7. 先生	*	2.1	8	5
6. その他機関	8. 学校の相談員	*	2.1	14	9

*p<0.05、**p<0.01

オンライン調査においては、上の表から、回答者の利用傾向は、「学校の先生（担任の先生や保健室の先生など）」「学校にいる相談員（スクールカウンセラーなど）」の組み合わせが多く、学校内の相談支援を併用していることが分かる。一方で、「児童相談所、福祉事務所」「保健所・保健センター」「病院・診療所」「民間施設（「フリースクール」と呼ばれる場所など）」「教育支援センター（適応指導教室）・教育相談所」の学内外の機関は相互に利用されることが多いことが分かる。

(2) 不登校の継続理由・不登校の態様との関連(Q4)

以下の集計表は、【不登校の継続理由(Q4)】と、【不登校ときに相談した機関や人(Q5)】との関係を見たものである。Q4とQ5はともに多肢選択設問であり、Q4とQ5のすべての選択項目に対する回答(0:No、1:Yesの2値データ)の組み合わせから全部で231個のクロス集計表が計算されるが、表中の数値は、これら231個のクロス表から求めた調整済み群間差の値を示したものである。5%の有意水準において、この値の絶対値が1.96以上であれば、当該2項目間に相関関係(プラスの場合は正の相関関係、マイナスの場合は負の相関関係)があることを示している。以下の表では、この残差が2以上の箇所(有意な正の相関が認められる箇所)を斜体下線で表示している。

■ 不登校の継続理由(Q4)と利用した施設・相談機関(Q5)とのクロス集計から求めた群間差値

※設問及び選択肢については、P.22(Q4)、P.28(Q5)を参照する。

(インターネット調査)

	1. 友人 (いやが らせやい じめ)	2. 友人 (いや がらせ やいじ めを除 く)	3. 先生 (いや がらせ やいじ めを除 く)	4. 先生 (相性)	5. 勉強	6. 授業	7. 友人 (影響)	8. やる 気	9. 悪気 なし	10. 断 続的な 登校	11. 精 神的な 不調
1. 教育支援センター	<u>7.8</u>	<u>10.9</u>	<u>9.7</u>	<u>6.6</u>	<u>4.7</u>	1.2	<u>7.6</u>	0.1	<u>2.7</u>	<u>9.0</u>	<u>6.7</u>
2. 児相	<u>2.2</u>	<u>10.5</u>	<u>11.3</u>	<u>6.7</u>	<u>9.9</u>	<u>5.6</u>	<u>12.2</u>	<u>2.1</u>	<u>6.0</u>	<u>13.0</u>	<u>2.1</u>
3. 保健所	-3.6	<u>8.2</u>	<u>17.2</u>	<u>6.8</u>	<u>11.2</u>	<u>6.9</u>	<u>19.3</u>	-1.9	<u>9.4</u>	<u>12.0</u>	-2.9
4. 病院	-8.2	<u>4.3</u>	<u>7.2</u>	<u>6.5</u>	<u>6.2</u>	-1.0	<u>5.6</u>	0.0	1.3	<u>7.7</u>	<u>23.5</u>
5. 民間施設	-7.9	<u>4.8</u>	<u>12.7</u>	<u>9.0</u>	<u>12.6</u>	<u>5.2</u>	<u>15.2</u>	1.4	<u>7.7</u>	<u>14.7</u>	<u>3.6</u>
6. その他機関	-10.6	<u>2.8</u>	<u>6.6</u>	<u>5.3</u>	<u>11.7</u>	<u>9.2</u>	<u>17.6</u>	<u>2.3</u>	<u>7.0</u>	<u>12.7</u>	<u>3.1</u>
7. 先生	<u>13.4</u>	<u>4.3</u>	-4.3	-1.9	1.1	-3.2	<u>4.1</u>	-1.7	-2.1	<u>7.5</u>	<u>11.0</u>
8. 学校の相談員	-0.8	<u>6.6</u>	<u>5.7</u>	<u>5.8</u>	<u>5.2</u>	1.6	<u>12.2</u>	<u>3.8</u>	<u>5.3</u>	<u>12.3</u>	<u>12.9</u>
9. SNS	-3.5	<u>4.3</u>	<u>7.6</u>	<u>4.6</u>	<u>7.9</u>	<u>5.1</u>	<u>18.3</u>	<u>2.6</u>	<u>8.9</u>	<u>12.7</u>	1.4
10. その他	<u>7.4</u>	-0.8	1.8	1.2	-1.8	-3.8	-2.0	-4.7	-3.7	-2.5	-1.7
11. なし	<u>2.5</u>	-3.3	-4.1	-1.3	-4.4	<u>4.2</u>	-12.7	<u>8.5</u>	<u>2.9</u>	-10.2	-6.8

	12. 身体的不調	13. 生活リズム	14. 登校への疑問	15. 好みの選択	16. 親からの注意不足	17. 学校からの支援不足	18. 助言	19. 障害	20. その他	21. わからない
1. 教育支援センター	<u>6.0</u>	<u>5.1</u>	<u>4.0</u>	<u>6.0</u>	<u>5.3</u>	<u>6.2</u>	<u>9.3</u>	<u>6.7</u>	-2.2	-5.3
2. 児相	<u>2.5</u>	<u>4.5</u>	<u>4.9</u>	<u>7.8</u>	<u>7.9</u>	<u>10.4</u>	<u>6.9</u>	<u>6.5</u>	-1.6	-3.6
3. 保健所	1.1	<u>3.8</u>	<u>2.6</u>	<u>7.3</u>	<u>9.6</u>	<u>14.2</u>	<u>10.1</u>	<u>7.1</u>	-2.9	-3.4
4. 病院	<u>24.3</u>	<u>8.2</u>	<u>3.2</u>	<u>4.0</u>	<u>4.4</u>	<u>3.3</u>	<u>12.8</u>	<u>13.5</u>	-0.2	-5.7
5. 民間施設	<u>5.5</u>	<u>4.7</u>	<u>3.7</u>	<u>7.3</u>	<u>9.2</u>	<u>11.1</u>	<u>12.2</u>	<u>8.4</u>	-2.0	-4.7
6. その他機関	<u>4.9</u>	<u>4.9</u>	<u>2.3</u>	<u>6.7</u>	<u>7.2</u>	<u>8.2</u>	<u>10.1</u>	<u>9.0</u>	-2.8	-5.3
7. 先生	<u>12.6</u>	<u>2.7</u>	-0.3	1.2	<u>3.2</u>	0.2	<u>9.9</u>	<u>3.7</u>	-1.7	-9.0
8. 学校の相談員	<u>10.1</u>	<u>7.0</u>	<u>3.0</u>	<u>6.0</u>	<u>8.5</u>	<u>6.5</u>	<u>14.5</u>	<u>6.8</u>	-2.1	-5.4
9. SNS	<u>2.9</u>	<u>7.2</u>	<u>4.0</u>	<u>9.6</u>	<u>10.8</u>	<u>13.3</u>	<u>12.3</u>	<u>9.3</u>	-1.0	-4.1
10. その他	-0.6	-0.8	-1.6	-0.4	-0.5	-1.8	-0.4	-1.3	<u>4.5</u>	-3.3
11. なし	-10.1	0.5	<u>3.9</u>	-0.9	-2.1	-2.8	-11.7	-7.1	<u>4.5</u>	<u>15.3</u>

不登校の継続理由毎に、対応する不登校当時に相談した施設が明確である。例えば、不登校の継続理由が精神的・身体的不調であれば、病院・診療所の回答が期待値を統計的に有意に上回っている。

不登校のきっかけと継続理由は、大きく変化しないという結果が第7章2節で示唆されている通り、不登校のきっかけと当時相談した機関との関連について分析した第9章2節と同様の結果を得た。

(オンライン調査)

	1. 友人 (いや がらせ やいじ め)	2. 友人 (いや がらせ やいじ めを除 く)	3. 先生 (いや がらせ やいじ めを除 く)	4. 先生 (相性)	5. 勉強	6. 授業	7. 友人 (影響)	8. やる 気	9. 悪気 なし	10. 断 続的な 登校	11. 精 神的不 調
1. 教育支援セン ター	-0.9	0.8	-0.3	-0.5	0.3	0.5	-0.2	0.5	0.3	-0.9	1.1
2. 児相	-0.4	-0.9	-0.5	-1.7	0.4	0.5	0.1	1.7	-0.8	1.0	-0.1
3. 保健所	0.1	0.1	0.9	0.5	1.0	0.8	-0.7	-0.1	-0.6	0.7	-1.3
4. 病院	-0.5	-0.2	-0.4	0.2	0.5	-0.2	-1.4	0.1	-0.4	1.6	<u>3.5</u>
5. 民間施設	-1.1	-1.3	-1.4	-1.0	-1.0	-1.4	0.7	-0.3	0.2	1.0	1.6
6. その他機関	-0.8	-1.2	0.4	-1.6	<u>3.1</u>	-1.2	-0.2	0.2	-0.3	0.9	<u>2.8</u>
7. 先生	-0.7	0.2	-0.4	-0.9	0.5	-0.6	1.4	0.3	-0.2	<u>2.4</u>	1.0
8. 学校の相談員	-0.9	0.8	-2.1	1.2	0.3	-0.6	-0.6	0.5	-0.6	1.7	<u>2.3</u>
9. SNS	0.3	1.0	1.1	0.1	-1.0	0.1	1.0	0.1	-1.4	<u>2.8</u>	0.9
10. その他	<u>3.2</u>	1.1	<u>2.4</u>	1.8	0.8	-0.3	-0.9	-2.1	0.1	-1.6	-2.2
11. なし	0.9	0.7	1.8	-0.6	-0.8	1.5	0.3	-0.8	1.2	0.1	-2.2

	12. 身体 的不調	13. 生活 リズム	14. 登校 への疑 問	15. 好み の選択	16. 親か らの注 意不足	17. 学校 からの 支援不 足	18. 助言	19. 障害	20. その他	21. わか らない
1. 教育支援セン ター	1.2	-0.3	0.4	0.6	-0.6	-1.4	0.3	-1.1	0.2	-2.1
2. 児相	0.8	1.3	-1.2	-0.1	-1.5	-0.8	-0.5	<u>3.4</u>	0.0	-1.0
3. 保健所	-0.1	0.2	-1.6	-1.1	0.0	-0.6	0.1	<u>2.4</u>	0.8	-0.7
4. 病院	<u>2.7</u>	<u>2.3</u>	0.3	-0.3	-2.3	0.7	<u>2.1</u>	<u>2.7</u>	0.8	0.2
5. 民間施設	-1.6	-0.5	-0.9	<u>3.1</u>	1.0	0.2	<u>2.2</u>	-0.3	0.5	-1.3
6. その他機関	1.1	<u>2.0</u>	-0.3	-1.3	1.5	0.2	0.4	<u>3.2</u>	-0.3	-0.3
7. 先生	<u>2.1</u>	<u>2.6</u>	1.9	-1.3	-2.9	-1.9	-0.4	<u>2.1</u>	0.0	-1.6
8. 学校の相談員	0.7	1.6	1.2	-1.5	-2.0	-0.5	1.4	<u>2.7</u>	-0.1	1.1
9. SNS	0.8	0.4	0.1	0.0	0.1	1.4	1.9	<u>2.6</u>	<u>2.5</u>	-0.7
10. その他	0.4	-0.4	-0.9	0.9	1.1	0.7	1.7	<u>2.1</u>	<u>2.5</u>	0.2
11. なし	-2.4	-1.0	0.3	-0.2	1.0	1.0	-1.5	-1.2	0.1	<u>2.2</u>

インターネット調査と同様に、不登校の継続理由が精神的・身体的不調であれば、病院・診療所の回答が期待値を統計的に有意に上回っている。

(3) 不登校当時の支援のニーズとの関連(Q6)

■ 【(Q5) 不登校当時の施設の利用状況・相談した人】と【(Q6) 不登校当時の支援のニーズ】とのクロス集計(上段…観測数、下段…群間差)

※設問及び選択肢については、P. 28(Q5)、P. 33(Q6)を参照する。

(インターネット調査)

Q5	Q6								
	1. 進学	2. 仕事	3. 勉強	4. 表現	5. 居場所	6. 悩み	7. 生活	8. その他	9. なし
1. 教育支援センター	779	395	689	814	503	679	254	31	185
	<u>29.8</u>	<u>18.7</u>	<u>17.8</u>	<u>12.1</u>	<u>8.4</u>	<u>7.2</u>	<u>11.6</u>	-0.7	-19.8
2. 児相	487	376	504	598	397	483	172	19	133
	<u>19.6</u>	<u>24.8</u>	<u>15.7</u>	<u>11.2</u>	<u>9.8</u>	<u>5.9</u>	<u>8.6</u>	-1.2	-16.4
3. 保健所	256	269	365	354	257	237	121	5	33
	<u>12.0</u>	<u>24.9</u>	<u>18.2</u>	<u>8.7</u>	<u>9.7</u>	0.8	<u>9.4</u>	-2.6	-16.0
4. 病院	662	385	783	995	628	1,144	316	47	256
	<u>15.6</u>	<u>13.0</u>	<u>16.1</u>	<u>12.8</u>	<u>9.6</u>	<u>22.9</u>	<u>13.1</u>	0.6	-21.1
5. 民間施設	421	323	547	680	475	499	200	12	110
	<u>13.1</u>	<u>18.3</u>	<u>16.9</u>	<u>14.1</u>	<u>13.7</u>	<u>5.2</u>	<u>10.7</u>	-3.0	-18.9
6. その他機関	228	201	322	477	353	377	150	17	61
	<u>5.0</u>	<u>12.3</u>	<u>9.1</u>	<u>11.7</u>	<u>13.0</u>	<u>6.2</u>	<u>10.1</u>	-0.4	-16.8
7. 先生	1,033	486	1,202	1,755	1,216	1,731	428	92	484
	<u>15.8</u>	<u>6.6</u>	<u>15.0</u>	<u>18.3</u>	<u>18.6</u>	<u>21.2</u>	<u>9.6</u>	<u>2.0</u>	-28.2
8. 学校の相談員	613	366	766	948	696	948	329	33	197
	<u>15.3</u>	<u>13.5</u>	<u>18.1</u>	<u>14.1</u>	<u>16.3</u>	<u>16.7</u>	<u>16.0</u>	-1.2	-22.0
9. SNS	161	159	225	280	246	246	145	11	24
	<u>6.7</u>	<u>15.1</u>	<u>10.4</u>	<u>8.6</u>	<u>13.8</u>	<u>6.8</u>	<u>16.8</u>	0.0	-14.0
10. その他	58	27	66	130	86	145	27	42	50
	-0.4	-1.1	-1.1	<u>2.2</u>	<u>2.2</u>	<u>4.9</u>	0.4	<u>14.0</u>	-6.5
11. なし	1,110	559	1,370	2,422	1,411	2,324	465	187	4,605
	-22.4	-17.7	-25.2	-21.4	-19.3	-18.0	-13.2	0.2	<u>54.0</u>

インターネット調査において、【不登校ときに相談した機関や人(Q5)】と【不登校当時の支援のニーズとの関連(Q6)】との関連について、有意な差が見られる項目を期待値から最も解離しているものから順に示すと以下のとおりである。

様々な機関・人において、不登校ときに相談した際のニーズは幅が広いことが分かる。

【不登校当時に相談した機関や人(Q5)】→【不登校当時の支援のニーズとの関連(Q6)】

- 「1. 教育支援センター」→「1. 進学」「2. 仕事」「3. 勉強」「4. 表現」「7. 生活」「5. 居場所」「6. 悩み」
- 「2. 児相」→「2. 仕事」「1. 進学」「3. 勉強」「4. 表現」「5. 居場所」「7. 生活」「6. 悩み」
- 「3. 保健所」→「2. 仕事」「3. 勉強」「1. 進学」「5. 居場所」「7. 生活」「4. 表現」
- 「4. 病院」→「6. 悩み」「3. 勉強」「1. 進学」「7. 生活」「2. 仕事」「4. 表現」「5. 居場所」
- 「5. 民間施設」→「2. 仕事」「3. 勉強」「4. 表現」「5. 居場所」「1. 進学」「7. 生活」「6. 悩み」
- 「6. その他機関」→「5. 居場所」「2. 仕事」「4. 表現」「7. 生活」「3. 勉強」「6. 悩み」「1. 進学」
- 「7. 先生」→「6. 悩み」「5. 居場所」「4. 表現」「1. 進学」「3. 勉強」「7. 生活」「2. 仕事」「8. その他」
- 「8. 学校の相談員」→「3. 勉強」「6. 悩み」「5. 居場所」「7. 生活」「1. 進学」「4. 表現」「2. 仕事」
- 「9. SNS」→「7. 生活」「2. 仕事」「5. 居場所」「3. 勉強」「4. 表現」「6. 悩み」「1. 進学」
- 「10. その他」→「8. その他」「6. 悩み」「4. 表現」「5. 居場所」

不登校当時の支援ニーズは多様であるが、それぞれの支援ニーズにより異なる機関・人を選択しており、機関・人は複数の支援ニーズにも対応していることがうかがえる。

(オンライン調査)

Q5	Q6								
	1. 進学	2. 仕事	3. 勉強	4. 表現	5. 居場所	6. 悩み	7. 生活	8. その他	9. なし
1. 教育支援センター	44	17	46	57	57	50	19	2	12
	1.9	0.7	<u>2.1</u>	1.8	<u>3.3</u>	0.9	1.7	-2.0	-2.4
2. 児相	11	5	10	13	10	11	8	0	4
	1.6	1.2	1.0	1.2	0.4	0.6	<u>3.3</u>	-1.2	-0.1
3. 保健所	3	1	3	7	7	4	3	0	1
	-0.5	-0.5	-0.6	1.1	1.5	-0.5	1.4	-0.8	-0.9
4. 病院	40	13	43	50	55	58	20	5	14
	0.7	-0.8	1.2	-0.1	<u>2.6</u>	<u>2.6</u>	2.0	-0.5	-1.9
5. 民間施設	35	15	37	48	54	47	21	5	8
	0.6	0.5	0.8	0.8	<u>3.6</u>	1.3	<u>3.0</u>	-0.2	-3.1
6. その他機関	13	2	13	15	13	19	3	0	4
	1.1	-1.3	0.9	0.3	0.2	<u>2.2</u>	-0.6	-1.4	-0.8
7. 先生	45	14	49	66	66	65	23	6	20
	-0.5	-1.8	0.1	0.5	<u>2.2</u>	1.2	1.6	-0.8	-1.7
8. 学校の相談員	33	10	39	48	45	51	17	2	14
	-0.1	-1.4	1.1	0.6	1.2	<u>2.1</u>	1.4	-1.8	-1.4
9. SNS	5	1	4	7	6	9	1	1	0
	1.0	-0.4	0.3	1.5	1.2	<u>3.0</u>	-0.3	0.6	-1.6
10. その他	7	4	7	7	9	8	3	1	4
	0.2	0.9	0.1	-0.9	0.5	-0.2	0.3	-0.1	0.2
11. なし	16	10	15	29	16	22	4	6	19
	-1.9	0.3	-2.4	-0.4	-3.1	-1.8	-1.9	1.4	<u>2.4</u>

オンライン調査について、【不登校当時に相談した機関や人(Q5)】と【不登校当時の支援のニーズとの関連(Q6)】との関連について、有意な差が見られる項目を期待値から最も解離しているものから順に示すと以下のとおりである。

インターネット調査とは異なり、一部有意な差は見られないものの、「教育支援センター（適応指導教室）・教育相談所」「民間施設（「フリースクール」と呼ばれる場所など）」「病院・診療所」も複数の支援ニーズに応えていることが分かる。

【不登校当時に相談した機関や人(Q5)】→【不登校当時の支援のニーズとの関連(Q6)】

「1. 教育支援センター」→「5. 居場所」「3. 勉強」

「2. 児相」→「7. 生活」

「4. 病院」→「5. 居場所」「6. 悩み」

「5. 民間施設」→「5. 居場所」「7. 生活」

「6. その他機関」→「6. 悩み」

「7. 先生」→「5. 居場所」

「8. 学校の相談員」→「6. 悩み」

「9. SNS」→「6. 悩み」

「11. なし」→「9. なし」

(4) 第10章のまとめ

第10章では不登校当時に相談した機関や人と他項目の関連として、不登校当時に相談した機関や人、不登校の継続理由・不登校の態様、不登校当時の支援ニーズとの関連について整理した。統計的に有意差があった回答を中心に記載した。

不登校当時に相談した機関や人について、インターネット調査では、回答割合の順番に並べると、上位3件は「何も利用しなかった」「学校の先生（担任の先生や保健室の先生など）」「病院・診療所」であり、半数以上はどこにも相談していないことが分かった。ただし、1か所でも相談した実績のある人のうち、39.5%は2機関以上を利用しているため、一定数は他機関との連携も含めて複数の機関が本人に関わっていることがわかる。その連携について、利用機関の組み合わせを分析したところ、「学校の先生（担任の先生や保健室の先生など）」と「学校にいる相談員（スクールカウンセラーなど）」、「教育支援センター（適応指導教室）・教育相談所」と「児童相談所、福祉事務所」、「児童相談所、福祉事務所」と「保健所・保健センター」等、学校内のリソースや公的機関同士の連携が上位であった。また、フリースクール等の民間施設や病院と公的機関の相互利用も統計的に有意な形で実施されていた。オンライン調査では、「何も利用しなかった」を除き、インターネット調査と同様の傾向が見られた。利用期間の組み合わせについても、インターネット調査と同様の傾向が見られた。

不登校の継続理由・不登校の態様との関連について、インターネット調査では、不登校の継続理由が精神的・身体的不調であれば、「病院・診療所」の回答が期待値を統計的に有意に上回っているなど、不登校の継続理由毎に、対応する不登校当時に相談した機関・人が明確である。オンライン調査では、インターネット調査と同様の傾向が見られた。

不登校当時の支援ニーズとの関連について、インターネット調査では、機関・人は複数の支援ニーズに対応していることがうかがえる。オンライン調査では、インターネット調査と比較して統計的に有意な項目は少ないが、「教育支援センター（適応指導教室）・教育相談所」「民間施設（「フリースクール」と呼ばれる場所など）」「病院・診療所」も不登校経験者の複数の支援ニーズに応えていることが示唆された。

第 11 章 不登校経験に関する振り返りと他項目との関連

(1) 不登校のきっかけとの関連 (Q2)

(インターネット調査)

Q7	Q2								
	1. 友人 (いやが らせや いじめ)	2. 友人 (いやが らせや いじめ を除く)	3. 先生 (怒る、 うるさ い、体 罰)	4. 先生 (相性)	5. 勉強	6. 授業	7. きま り	8. やる 気	9. 合わ なかつ た
1. 行けばよかつ た	1, 279	691	428	550	650	614	270	938	277
	-6. 0	<u>4. 5</u>	-3. 2	-3. 2	<u>11. 6</u>	<u>5. 7</u>	1. 5	<u>9. 3</u>	1. 0
2. しかたがなかつ た	3, 014	1, 355	992	1, 241	881	825	466	1, 285	573
	<u>4. 8</u>	<u>6. 0</u>	0. 8	0. 4	-0. 3	-8. 0	-1. 8	-7. 0	<u>2. 6</u>
3. 行かなくてよ かった	2, 624	890	947	1, 129	563	768	423	991	402
	<u>12. 7</u>	-2. 4	<u>8. 3</u>	<u>6. 7</u>	-6. 5	-1. 4	2. 0	-6. 7	-0. 7
4. 何とも思わな い	1, 658	674	537	753	563	834	329	1, 206	313
	-13. 1	-7. 9	-7. 3	-5. 2	-3. 3	<u>5. 3</u>	-1. 5	<u>6. 4</u>	-3. 7
5. その他	69	24	36	46	27	25	15	41	23
	-0. 3	-1. 2	<u>2. 7</u>	<u>3. 2</u>	1. 2	0. 0	0. 8	0. 9	<u>2. 9</u>

Q7	Q2									
	10. 環 境の変 化	11. 親	12. 家 庭環境	13. 精神 的不調	14. 身体 的不調	15. 障 害	16. 生 活リズム	17. ネ ット等	18. そ の他	19. わ からな い
1. 行けばよかつ た	302	332	342	805	448	104	441	156	35	91
	<u>6. 0</u>	<u>3. 3</u>	<u>3. 5</u>	<u>2. 4</u>	-2. 5	1. 5	<u>8. 5</u>	<u>6. 9</u>	-1. 0	-3. 1
2. しかたがな かつた	489	601	634	1, 750	1, 179	194	586	152	59	127
	<u>2. 5</u>	1. 8	<u>2. 8</u>	<u>8. 9</u>	<u>8. 0</u>	1. 1	-1. 9	-3. 5	-3. 1	-9. 4
3. 行かなくて よかった	281	402	367	1, 021	743	139	349	114	63	115
	-4. 6	-2. 6	-5. 2	-6. 3	-1. 6	-0. 4	-7. 8	-3. 5	-0. 2	-6. 6
4. 何とも思わ ない	263	352	382	926	580	108	479	151	84	397
	-3. 6	-3. 0	-1. 8	-5. 7	-5. 8	-2. 2	<u>2. 2</u>	1. 5	<u>3. 9</u>	<u>19. 8</u>
5. その他	17	27	31	45	41	5	24	4	7	8
	1. 9	<u>3. 7</u>	<u>4. 6</u>	1. 5	<u>3. 7</u>	0. 2	<u>2. 3</u>	-0. 3	<u>3. 5</u>	0. 8

不登校のきっかけが友人関係のうち、「友人との関係（いやがらせやいじめ）」がきっかけの場合、「しかたがなかった」「行かなくてよかった」といった回答が期待値より統計的に有意に多かった一方、「友人との関係(いやがらせやいじめを除く)」きっかけであった場合、「行けばよかった」「しかたがなかった」といった回答において有意に差があった。

先生との関係においては、理由に関わらず「行かなくてよかった」との回答に統計的に差があった。一方、「勉強が分からなかった（授業についていけなかった、成績が悪くなかったなど）」「授業が面白くなかった」がきっかけの場合は「行けばよかった」の回答が期待値より有意に高かった。

「家族の生活環境の変化（父親や母親の単身赴任、家族の別居、親の転職や失業などの経済的な問題など）」「家庭環境に起因するもの（両親の不和、祖父母と父母の不和など）」「精神的な不調（漠然とした不安や気持ちの落ち込みなど）」「身体的な不調（学校に行こうとすると腹痛や頭痛に襲われたなど）」をきっかけとする方は「行けばよかった」「しかたがなかった」とする回答に統計的に差があった。

(オンライン調査)

Q7	Q2								
	1. 友人 (いやが らせや いじめ)	2. 友人 (いやが らせや いじめ を除く)	3. 先生 (怒る、 うるさい、 体罰)	4. 先生 (相性)	5. 勉強	6. 授業	7. きま り	8. やる 気	9. 合わ なかった
1. 行けばよかつ た	16	12	10	13	7	11	6	14	9
	-0.5	-0.7	-0.1	-1.0	-1.2	0.2	-1.8	-0.8	0.3
2. しかたがなか った	40	38	17	33	25	17	20	38	20
	-0.4	1.2	-2.1	-1.1	0.2	-2.2	-1.5	-0.2	0.2
3. 行かなくてよ かった	41	23	26	37	21	25	25	34	18
	<u>2.0</u>	-1.0	<u>2.0</u>	1.9	0.5	1.6	1.4	0.8	0.8
4. 何とも思わな い	12	11	9	14	8	11	13	16	2
	-0.6	0.0	0.4	0.6	0.0	1.2	1.9	1.1	-2.0
5. その他	4	7	4	5	5	3	5	4	4
	-1.5	0.7	-0.1	-0.7	0.5	-0.7	0.4	-1.3	0.4

Q7	Q2									
	10. 環 境の変 化	11. 親	12. 家 庭環境	13. 精 神的な 不調	14. 身 体的な 不調	15. 障 害	16. 生 活リズ ム	17. ネ ット等	18. そ の他	19. わ からな い
1. 行けばよかつ た	7	9	8	21	12	4	10	13	1	5
	1.0	0.0	0.2	-0.7	-2.0	-0.3	0.0	<u>3.0</u>	-0.9	1.5
2. しかたがな かった	13	21	14	64	56	19	31	14	7	6
	0.5	-0.1	-1.3	<u>2.1</u>	<u>3.0</u>	<u>3.4</u>	<u>2.0</u>	-0.4	1.1	-0.3
3. 行かなくて よかった	8	17	21	42	33	5	11	7	3	3
	-0.6	0.0	<u>2.3</u>	-0.4	-0.4	-1.5	-2.5	-1.8	-0.7	-1.2
4. 何とも思わ ない	3	7	3	14	10	1	11	4	1	2
	-0.5	0.0	-1.4	-1.4	-1.5	-1.5	1.3	-0.5	-0.6	-0.1
5. その他	1	4	3	8	7	0	2	3	2	2
	-0.8	0.2	0.0	-0.6	-0.2	-1.5	-1.2	0.3	1.3	0.9

インターネット調査と同様、友人や先生との関係において、「友人との関係（いやがらせやいじめ）」「先生との関係（先生が怒る、注意がうるさい、体罰など）」といったきっかけにおいては「行かなくてよかった」の項目に統計的に差があった。一方、「行けばよかった」の回答に統計的に有意差があったのは「インターネットやメール、ゲームなどの影響（一度始めると止められない、学校より楽しいなど）」の理由のみであり、オンライン調査の調査対象の平均年齢がインターネット調査の調査対象の平均年齢より低く、また、

近年、不登校支援の取り組みが拡充され、不登校になった際の選択肢が増えていることも要因の一つである可能性がある。

また、「精神的な不調（漠然とした不安や気持ちの落ち込みなど）」「身体的な不調（学校に行こうとすると腹痛や頭痛に襲われたなど）」「障害による学習上・生活上の困難」の場合は「しかたがなかった」とする回答が統計的に有意に高い。

（２）不登校当時の支援のニーズとの関連（Q6）

■ 【(Q6) 不登校当時の支援のニーズ】と【(Q7) 不登校経験に関する振り返り】とのクロス集計（上段…観測数、下段…群間差）

※設問及び選択肢については、P. 33 (Q6)、P. 35 (Q7) を参照する。

（インターネット調査）

Q6	Q7				
	1. 行けばよかった	2. しかたがなかった	3. 行かなくてよかった	4. 何とも思わない	5. その他
1. 進学	893	1, 325	720	336	35
	<u>17. 9</u>	<u>9. 4</u>	-6. 2	-20. 0	1. 7
2. 仕事	501	710	361	195	21
	<u>13. 7</u>	<u>6. 2</u>	-5. 9	-13. 2	1. 8
3. 勉強	918	1, 685	975	439	46
	<u>11. 8</u>	<u>12. 9</u>	-3. 3	-21. 6	<u>2. 5</u>
4. 表現	1, 059	2, 527	1, 636	793	53
	<u>2. 3</u>	<u>17. 3</u>	<u>2. 0</u>	-23. 5	0. 6
5. 居場所	695	1, 546	1, 020	493	38
	<u>3. 3</u>	<u>11. 3</u>	1. 4	-17. 1	1. 4
6. 悩み	942	2, 316	1, 525	801	61
	0. 3	<u>15. 2</u>	<u>2. 0</u>	-19. 9	<u>2. 6</u>
7. 生活	364	476	294	218	17
	<u>10. 4</u>	1. 4	-4. 0	-6. 9	1. 8
8. その他	29	118	122	60	33
	-4. 4	-0. 2	<u>3. 4</u>	-3. 1	<u>17. 7</u>
9. なし	796	1, 120	1, 300	2, 450	39
	-6. 4	-26. 1	-6. 7	<u>41. 8</u>	-1. 4

上記は、インターネット調査による【(Q7) 不登校経験に関する振り返り】と【(Q6) 不登校当時の支援のニーズ】の回答傾向である。「行けばよかった」と回答した人において有意な差が生じている、期待値からの乖離が大きい上位３項目は「進学するための相談や

手助け」「仕事につくための相談や手助け」「学校の勉強についての相談や手助け」である。

「しかたがなかった」と回答した人において有意な差が生じている、期待値からの乖離が大きい上位3項目は「自分の気持ちをはっきり表現したり、人とうまくつきあったりするための方法についての相談や手助け」「精神的・身体的な不調についての相談や手助け」

「学校の勉強についての相談や手助け」である。「行かなくてよかった」と回答した人において有意な差が生じている、期待値からの乖離が大きい上位3項目は「その他」「自分の気持ちをはっきり表現したり、人とうまくつきあったりするための方法についての相談や手助け」「精神的・身体的な不調についての相談や手助け」である。「何とも思わない」と回答した人において有意な差が生じている項目は「なし」である。「その他」と回答した人において有意な差が生じている、期待値からの乖離が大きい上位3項目は「その他」「精神的・身体的な不調についての相談や手助け」「学校の勉強についての相談や手助け」である。

「進学するための相談や手助け」「仕事につくための相談や手助け」など、支援による帰結がはっきりしている（望んだ形で進学・就業の有無）項目においては「行けばよかった」という回答が期待値からの乖離が大きい一方で、「自分の気持ちをはっきり表現したり、人とうまくつきあったりするための方法についての相談や手助け」「精神的・身体的な不調についての相談や手助け」など、支援による帰結が個人によって様々である項目においては「しかたがなかった」「行かなくてよかった」という回答が期待値からの乖離が大きいとおり、学校から得られるはずであった機会の解像度が高いほど、学校にいけなかったことに対して後悔を感じている可能性が示唆される。なお、「学校の勉強についての相談や手助け」は、「行けばよかった」「しかたがなかった」の双方が期待値からの乖離が大きいとおり、学校外での学習支援へのアクセスの有無等が影響している可能性が示唆される。

(オンライン調査)

Q6	Q7				
	1. 行けばよかった	2. しかたがなかった	3. 行かなくてよかった	4. 何とも思わない	5. その他
1. 進学	24	45	25	8	9
	<u>2.2</u>	1.0	-1.9	-2.0	1.0
2. 仕事	12	17	7	5	5
	<u>2.1</u>	0.0	-2.3	-0.3	1.4
3. 勉強	23	53	20	9	10
	1.6	<u>2.6</u>	-3.5	-1.8	1.4
4. 表現	31	61	42	7	10
	<u>2.3</u>	1.3	-0.5	-3.9	0.3
5. 居場所	28	45	46	4	10
	<u>2.3</u>	-0.9	1.8	-4.2	0.8
6. 悩み	20	66	40	6	9
	-0.6	<u>3.3</u>	-0.3	-3.8	0.1
7. 生活	13	19	7	1	3
	<u>2.8</u>	1.1	-2.0	-2.1	0.2
8. その他	4	4	6	2	2
	0.8	-1.3	0.4	-0.1	0.9
9. なし	2	19	14	22	4
	-2.9	-1.0	-1.2	<u>6.4</u>	0.1

上記は、オンライン調査による【(Q7) 不登校経験に関する振り返り】と【(Q6) 不登校当時の支援のニーズ】の回答傾向である。「行けばよかった」と回答した人において有意な差が生じている、期待値からの乖離が大きい上位3項目は「規則正しい生活習慣についての相談や手助け」「自分の気持ちをはっきり表現したり、人とうまくつきあったりするための方法についての相談や手助け」「友人と知り合えたり、仲間と過ごせたりする居場所についての情報提供」である。「しかたがなかった」と回答した人において有意な差が生じている項目は「精神的・身体的な不調についての相談や手助け」「学校の勉強についての相談や手助け」である。「行かなくてよかった」と回答した人において有意な差が生じている項目はなかった。「何とも思わない」と回答した人において有意な差が生じている項目は「なし」である。「その他」と回答した人において有意な差が生じている項目はなかった。

インターネット調査と同様に「精神的・身体的な不調についての相談や手助け」を除く「進学するための相談や手助け」から「規則正しい生活習慣についての相談や手助け」まで支援のニーズを感じていた不登校経験者は、不登校に関する振り返りにおいて「行けば

よかった」との項目に統計的に差があった。一方で、インターネット調査とは異なり、「しかたがなかった」との回答は概ね期待値より多く観測されたが、一部統計的に有意差が見られなかった。

(3) 現在の生活の満足度との関連 (Q11)

※設問及び選択肢については、P. 47 を参照する。

(インターネット調査)

Q7	Q11-2			
	1. 満足している	2. まあ満足している	3. やや不満だ	4. 不満だ
1. 行けばよかった	668	1,132	615	598
	<u>8.74</u>	<u>-7.80</u>	-3.24	<u>5.28</u>
2. しかたがなかった	862	2,880	1,371	915
	<u>-6.21</u>	<u>7.20</u>	0.17	-3.58
3. 行かなくてよかった	822	2,150	1,087	680
	<u>1.30</u>	<u>2.19</u>	0.52	-4.80
4. 何とも思わない	679	1,800	1,009	790
	-1.74	<u>-2.91</u>	1.64	<u>3.79</u>
5. その他	17	51	45	36
	<u>-1.75</u>	<u>-2.42</u>	<u>2.21</u>	<u>2.50</u>

不登校に関する振り返りについて、「しかたがなかった」「行かなくてよかった」と回答した不登校経験者は現在「まあ満足している」との回答に統計的に差があった一方、「行けばよかった」と回答した不登校経験者は現在「満足している」「不満だ」と二極化する結果が見られた。また、「何とも思わない」と回答した不登校経験者は現在「不満だ」との回答に統計的な差があった。

過去の経験の捉え方が現在の生活の満足度に影響している可能性が見られる。「しかたがなかった」「行かなくてよかった」といった振り返りをしている方は現在の生活に「まあ満足している」という可能性が示唆されるが、「何とも思わない」といった振り返りは現在の生活に「不満だ」という可能性が示唆される。一方、「行けばよかった」と回答した人は、過去の不登校への向き合い方が現在の生活の満足度に影響している可能性が示唆される。

(オンライン調査)

Q7	Q11-2			
	1. 満足している	2. まあ満足している	3. やや不満だ	4. 不満だ
1. 行けばよかった	9	31	7	3
	-2.7	<u>2.4</u>	0.4	-0.1
2. しかたがなかった	30	58	19	11
	-2.6	0.7	1.5	1.7
3. 行かなくてよかった	46	38	9	1
	<u>3.5</u>	-1.5	-1.0	-2.5
4. 何とも思わない	18	15	3	3
	1.6	-1.1	-1.0	0.4
5. その他	8	8	2	2
	0.5	-0.6	-0.3	0.7

インターネット調査とは異なり、不登校に関する振り返りについて「行かなくてよかった」と回答した不登校経験者は現在「満足している」との結果において統計的に差があり、「行けばよかった」と回答した不登校経験者においても二極化せず、「まあ満足している」との回答が統計的に有意に期待値より多かった。これはオンライン調査の調査対象は支援団体からの支援を受けていることが多いことも理由であると考えられる。

(4) 中学卒業以降において励ましや支えになった人との関連 (Q12)

(インターネット調査)

Q7	Q12								
	1. 家族	2. 友人	3. 職場 の上司・同僚	4. 先生	5. 学校の 相談員 (ス クール カウンセ ラー など)	6. 自治 体の相 談員	7. 医師	8. その他	9. とく にない
1. 行けばよかった	1,520	1,238	514	453	213	136	175	22	903
	<u>10.0</u>	<u>6.2</u>	<u>4.7</u>	<u>2.7</u>	<u>2.6</u>	<u>3.1</u>	-2.7	-3.6	-3.8
2. しかたがなかった	2,895	2,452	950	957	452	252	532	101	1,540
	<u>11.1</u>	<u>8.9</u>	<u>3.8</u>	<u>6.7</u>	<u>5.8</u>	<u>3.2</u>	<u>7.1</u>	1.9	-14.9
3. 行かなくてよかった	1,896	1,662	694	642	302	179	344	86	1,437
	-3.6	-1.8	0.7	0.2	1.1	0.9	1.0	<u>2.6</u>	-4.5
4. 何とも思わない	1,320	1,179	437	383	130	77	196	40	2,063
	-17.3	-13.4	-8.8	-9.9	-9.5	-7.1	-6.9	-3.1	<u>24.3</u>
5. その他	62	52	16	19	5	4	16	12	54
	-0.2	-0.3	-1.3	-0.3	-1.4	-0.6	1.8	<u>6.8</u>	0.9

不登校に関する振り返りについて「行けばよかった」「しかたがなかった」と回答した不登校経験者は、統計的に有意な形で、中学校卒業以降様々な人や機関から励ましや支えを受けていることが分かった。一方で、「行かなくてよかった」や「何とも思わない」と回答した不登校経験者は、励ましや支えを受けたとする回答に統計的な有意差は見られなかった。

(オンライン調査)

Q7	Q12								
	1. 家族	2. 友人	3. 職場 の上 司・同 僚	4. 先生	5. 学校 の相談 員（ス クール カウンセ ラー など）	6. 自治 体の相 談員	7. 医師	8. その他	9. とく にない
1. 行けばよかった	31	27	8	21	9	4	8	7	8
	-0.2	0.9	0.7	1.8	1.4	-0.6	0.0	-0.3	0.8
2. しかたがなかった	77	57	15	39	14	15	21	18	13
	0.6	0.1	0.0	0.6	-0.1	0.9	0.6	0.0	-0.6
3. 行かなくてよかった	63	48	13	23	11	10	17	16	8
	0.9	0.7	0.4	-1.7	-0.2	0.0	0.6	0.6	-1.4
4. 何とも思わない	18	13	4	10	3	2	6	3	8
	-2.4	-2.0	-0.5	-0.8	-0.9	-1.2	-0.1	-1.4	1.6
5. その他	14	9	1	7	2	3	0	5	3
	0.6	-0.3	-1.1	0.4	-0.3	0.7	-2.0	1.3	0.4

オンライン調査においては、統計的な差は見られなかったものの、例えば、不登校に関する振り返りについて「行けばよかった」と回答した不登校経験者は、中学校卒業以降、「学校の先生」や「学校にいる相談員（スクールカウンセラーなど）」からの励ましや支援が期待値より多かった。これは、オンライン調査の調査対象の平均年齢がインターネット調査の平均年齢よりも低く、学校の相談員などの不登校支援に対する体制が近年整っていたことが可能性の一つとして考えられる。

一方で、「何とも思わない」と回答した不登校経験者は、統計的な差はないものの、概ね期待値より低くなっていた。

(5) 不登校経験と中学卒業後の経験との関連 (Q13)

(インターネット調査)

総回答数	おおいにあった				
	1. 行けばよかった	2. しかたがなかった	3. 行かなくてよかった	4. 何とも思わない	5. その他
a. 学業（受験、資格試験など）で苦労した	1,028 <u>23.8</u>	1,106 -0.8	699 -8.0	531 -12.0	35 1.5
b. 仕事（就職活動を含む）で苦労した	959 <u>14.9</u>	1,339 1.3	906 -4.9	699 -9.6	37 1.0
c. 体力が低下したり不足したりして苦労した	730 <u>11.8</u>	1,050 1.4	727 -3.3	534 -8.8	30 1.1
d. 生活リズムが乱れ苦労した	971 <u>15.8</u>	1,293 0.0	867 -6.2	735 -7.8	42 <u>2.0</u>
e. 人との関わりに不安を感じたり、人と関わりをもつことに苦労した	1,265 <u>8.9</u>	2,298 <u>6.3</u>	1,640 -0.6	1,085 -15.0	73 <u>3.6</u>
f. 成長した、視野が広がった	559 <u>3.6</u>	840 -6.2	948 <u>7.9</u>	597 -4.9	34 <u>2.1</u>
g. 人に優しくなった、人の痛みが分かるようになった	857 <u>6.2</u>	1,466 0.6	1,254 <u>4.5</u>	760 -11.0	44 1.6

上記は、インターネット調査による【(Q7) 不登校経験に関する振り返り】と【(Q13) 現在の自分が成長したところ】において、「おおいにあった」回答の傾向である。「行けばよかった」と回答した人において有意な差が生じている、期待値からの乖離が大きい上位3項目は「学業（受験、資格試験など）で苦労した」「生活リズムが乱れ苦労した」「仕事（就職活動を含む）で苦労した」である。「しかたがなかった」と回答した人において有意な差が生じている項目は「人との関わりに不安を感じたり、人と関わりをもつことに苦労した」である。「行かなくてよかった」と回答した人において有意な差が生じている項目は「成長した、視野が広がった」、「人に優しくなった、人の痛みが分かるようになった」である。「何とも思わない」と回答した人において有意な差が生じている項目はなかった。「その他」と回答した人において有意な差が生じている、期待値からの解離が大きい上位3項目は「人との関わりに不安を感じたり、人と関わりをもつことに苦労した」「成長した、視野が広がった」「生活リズムが乱れ苦労した」である。

(オンライン調査)

総回答数	おおいにあった				
	1. 行けばよかった	2. しかたがなかった	3. 行かなくてよかった	4. 何とも思わない	5. その他
a. 学業（受験、資格試験など）で苦労した	23 <u>2.9</u>	39 1.2	18 -2.5	7 -1.6	6 0.1
b. 仕事（就職活動を含む）で苦労した	18 2.0	35 1.5	15 -2.4	10 0.1	2 -1.6
c. 体力が低下したり不足したりして苦労した	24 <u>3.1</u>	41 1.5	19 -2.4	4 -2.8	7 0.5
d. 生活リズムが乱れ苦労した	27 <u>3.6</u>	44 1.5	18 -3.2	10 -0.9	4 -1.2
e. 人との関わりに不安を感じたり、人と関わりをもつことに苦労した	30 <u>2.9</u>	52 0.7	28 -2.7	13 -1.1	10 0.8
f. 成長した、視野が広がった	16 -1.9	39 -3.2	61 <u>4.7</u>	16 -0.5	11 1.0
g. 人に優しくなった、人の痛みが分かるようになった	18 -1.5	49 -1.1	51 <u>2.0</u>	17 -0.3	11 0.9

上記は、オンライン調査による【(Q7) 不登校経験に関する振り返り】と【(Q13) 現在の自分が成長したところ】において、「おおいにあった」回答の傾向である。「行けばよかった」と回答した人において有意な差が生じている、期待値からの乖離が大きい上位4項目は「生活リズムが乱れ苦労した」「体力が低下したり不足したりして苦労した」「学業（受験、資格試験など）で苦労した」「人との関わりに不安を感じたり、人と関わりをもつことに苦労した」である。「しかたがなかった」と回答した人において有意な差が生じている項目はなかった。「行かなくてよかった」と回答した人において有意な差が生じている項目は「成長した、視野が広がった」「人に優しくなった、人の痛みが分かるようになった」である。「何とも思わない」「その他」と回答した人において有意な差が生じている項目はなかった。

(インターネット調査)

総回答数	ある程度あった				
	1. 行けばよかった	2. しかたがなかった	3. 行かなくてよかった	4. 何とも思わない	5. その他
a. 学業（受験、資格試験など）で苦勞した	1, 004	2, 549	1, 448	1, 079	33
	-0. 3	<u>17. 5</u>	-5. 1	-13. 2	-3. 0
b. 仕事（就職活動を含む）で苦勞した	1, 009	2, 168	1, 399	1, 084	38
	<u>2. 8</u>	<u>9. 6</u>	-3. 1	-9. 6	-1. 5
c. 体力が低下したり不足したりして苦勞した	875	2, 057	1, 385	1, 035	36
	-0. 7	<u>9. 4</u>	-0. 6	-8. 8	-1. 5
d. 生活リズムが乱れ苦勞した	1, 030	2, 307	1, 565	1, 254	35
	0. 2	<u>8. 6</u>	-1. 7	-7. 4	-2. 7
e. 人との関わりに不安を感じたり、人と関わりをもつことに苦勞した	1, 023	2, 355	1, 600	1, 363	41
	-1. 4	<u>8. 0</u>	-2. 2	-5. 0	-1. 9
f. 成長した、視野が広がった	1, 108	2, 498	1, 777	1, 374	58
	-0. 8	<u>7. 9</u>	0. 1	-8. 2	0. 4
g. 人に優しくなった、人の痛みが分かるようになった	1, 236	2, 951	2, 039	1, 623	62
	-2. 9	<u>10. 5</u>	-0. 7	-8. 3	-0. 5

上記は、インターネット調査による【(Q7) 不登校経験に関する振り返り】と【(Q13) 現在の自分が成長したところ】において、「ある程度あった」回答の傾向である。「行けばよかった」と回答した人において有意な差が生じている、期待値からの乖離が大きい項目は「仕事（就職活動を含む）で苦勞した」である。「しかたがなかった」と回答した人において有意な差が生じている上位3項目は「学業（受験、資格試験など）で苦勞した」「人に優しくなった、人の痛みが分かるようになった」「仕事（就職活動を含む）で苦勞した」である。「行かなくてよかった」「何とも思わない」「その他」と回答した人において有意な差が生じている項目はなかった。

(オンライン調査)

総回答数	ある程度あった				
	1. 行けばよかった	2. しかたがなかった	3. 行かなくてよかった	4. 何とも思わない	5. その他
a. 学業（受験、資格試験など）で苦勞した	9 -2.0	37 0.5	35 1.9	10 -0.6	4 -1.0
b. 仕事（就職活動を含む）で苦勞した	15 1.0	32 0.9	16 -2.0	7 -1.0	8 1.7
c. 体力が低下したり不足したりして苦勞した	14 -0.3	42 1.7	21 -1.9	15 1.2	4 -1.0
d. 生活リズムが乱れ苦勞した	11 -0.5	33 1.1	20 -0.9	7 -1.0	8 1.7
e. 人との関わりに不安を感じたり、人と関わりをもつことに苦勞した	15 -0.6	50 <u>2.5</u>	29 -0.7	11 -0.8	3 -1.8
f. 成長した、視野が広がった	19 0.6	40 -0.1	29 -0.8	16 0.9	6 -0.4
g. 人に優しくなった、人の痛みが分かるようになった	22 1.1	46 0.5	36 0.3	9 -1.9	6 -0.7

上記は、オンライン調査による【(Q7) 不登校経験に関する振り返り】と【(Q13) 現在の自分が成長したところ】において、「ある程度あった」回答の傾向である。「しかたがなかった」と回答した人において有意な差が生じている項目は「人との関わりに不安を感じたり、人と関わりをもつことに苦勞した」である。「行けばよかった」「行かなくてよかった」「何とも思わない」「その他」と回答した人において有意な差が生じている項目はなかった。

(インターネット調査)

総回答数	あまりなかった				
	1. 行けばよかった	2. しかたがなかった	3. 行かなくてよかった	4. 何とも思わない	5. その他
a. 学業（受験、資格試験など）で苦勞した	565 -10.7	1,515 -3.1	1,442 <u>7.0</u>	1,279 <u>5.6</u>	39 -0.1
b. 仕事（就職活動を含む）で苦勞した	628 -6.4	1,555 0.7	1,239 1.2	1,186 <u>3.8</u>	32 -1.1
c. 体力が低下したり不足したりして苦勞した	816 -2.6	1,828 <u>2.6</u>	1,303 -2.8	1,300 <u>2.2</u>	44 0.1
d. 生活リズムが乱れ苦勞した	611 -6.7	1,542 1.0	1,232 1.6	1,146 <u>2.9</u>	40 0.5
e. 人との関わりに不安を感じたり、人と関わりをもつことに苦勞した	443 -5.4	990 -4.3	916 <u>2.4</u>	941 <u>7.4</u>	18 -1.9
f. 成長した、視野が広がった	823 -3.3	1,935 <u>4.7</u>	1,331 -3.1	1,312 1.4	31 -2.4
g. 人に優しくなった、人の痛みが分かるようになった	611 -1.3	1,218 -2.2	923 -3.3	1,069 <u>7.0</u>	30 -0.3

上記は、インターネット調査による【(Q7) 不登校経験に関する振り返り】と【(Q13) 現在の自分が成長したところ】において、「あまりなかった」回答の傾向である。「行けばよかった」と回答した人において有意な差が生じている、期待値からの乖離が大きい項目はなかった。「しかたがなかった」と回答した人において有意な差が生じている項目は「成長した、視野が広がった」「体力が低下したり不足したりして苦勞した」である。「行かなくてよかった」と回答した人において有意な差が生じている項目は「学業（受験、資格試験など）で苦勞した」「人との関わりに不安を感じたり、人と関わりをもつことに苦勞した」である。「何とも思わない」と回答した人において有意な差が生じている、期待値からの乖離が大きい上位3項目は「人との関わりに不安を感じたり、人と関わりをもつことに苦勞した」「人に優しくなった、人の痛みが分かるようになった」「学業（受験、資格試験など）で苦勞した」である。「その他」と回答した人において有意な差が生じている項目はなかった。

(オンライン調査)

総回答数	あまりなかった				
	1. 行けばよかった	2. しかたがなかった	3. 行かなくてよかった	4. 何とも思わない	5. その他
a. 学業（受験、資格試験など）で苦勞した	13	27	21	14	5
	0.2	-0.6	-0.7	1.7	0.0
b. 仕事（就職活動を含む）で苦勞した	9	22	24	5	3
	-0.3	-0.3	1.7	-1.1	-0.5
c. 体力が低下したり不足したりして苦勞した	7	18	26	9	5
	-1.2	-1.7	<u>2.1</u>	0.5	0.5
d. 生活リズムが乱れ苦勞した	8	24	32	10	3
	-1.4	-1.2	<u>2.7</u>	0.3	-1.0
e. 人との関わりに不安を感じたり、人と関わりをもつことに苦勞した	1	7	23	6	4
	-2.5	-2.8	<u>4.0</u>	0.5	1.0
f. 成長した、視野が広がった	5	33	4	5	1
	-1.1	<u>5.0</u>	-3.5	-0.4	-1.3
g. 人に優しくなった、人の痛みが分かるようになった	5	15	6	5	2
	-0.1	1.1	-1.5	0.6	0.0

上記は、オンライン調査による【(Q7) 不登校経験に関する振り返り】と【(Q13) 現在の自分が成長したところ】において、「あまりなかった」回答の傾向である。「行けばよかった」と回答した人において有意な差が生じている項目はなかった。「しかたがなかった」と回答した人において有意な差が生じている項目は「成長した、視野が広がった」である。「行かなくてよかった」と回答した人において有意な差が生じている、期待値からの乖離が大きい上位3項目は「人との関わりに不安を感じたり、人と関わりをもつことに苦勞した」「生活リズムが乱れ苦勞した」「体力が低下したり不足したりして苦勞した」である。「何とも思わない」「その他」と回答した人において有意な差が生じている項目はなかった。

(インターネット調査)

総回答数	ほとんどなかった				
	1. 行けばよかった	2. しかたがなかった	3. 行かなくてよかった	4. 何とも思わない	5. その他
a. 学業（受験、資格試験など）で苦勞した	416 -10.8	858 -16.1	1,150 <u>6.1</u>	1,389 <u>20.7</u>	42 <u>2.1</u>
b. 仕事（就職活動を含む）で苦勞した	417 -11.3	966 -12.8	1,195 <u>7.1</u>	1,309 <u>16.4</u>	42 2.0
c. 体力が低下したり不足したりして苦勞した	592 -6.8	1,093 -14.0	1,324 <u>6.4</u>	1,409 <u>14.7</u>	39 0.5
d. 生活リズムが乱れ苦勞した	401 -9.3	886 -11.3	1,075 <u>6.6</u>	1,143 <u>13.8</u>	32 0.6
e. 人との関わりに不安を感じたり、人と関わりをもつことに苦勞した	282 -4.6	385 -16.0	583 1.1	889 <u>20.7</u>	17 -0.2
f. 成長した、視野が広がった	523 1.6	755 -9.9	683 -4.3	995 <u>13.9</u>	26 0.4
g. 人に優しくなった、人の痛みが分かるようになった	309 -2.0	393 -14.4	523 -0.8	826 <u>18.8</u>	13 -1.0

上記は、インターネット調査による【(Q7) 不登校経験に関する振り返り】と【(Q13) 現在の自分が成長したところ】において、「ほとんどなかった」回答の傾向である。「行けばよかった」「しかたがなかった」と回答した人において有意な差が生じている項目はなかった。「行かなくてよかった」と回答した人において有意な差が生じている、期待値からの乖離が大きい上位3項目は「仕事（就職活動を含む）で苦勞した」「生活リズムが乱れ苦勞した」「体力が低下したり不足したりして苦勞した」である。「何とも思わない」と回答した人において有意な差が生じている有意な差が生じている、期待値からの乖離が大きい上位3項目は「学業（受験、資格試験など）で苦勞した」「人との関わりに不安を感じたり、人と関わりをもつことに苦勞した」「人に優しくなった、人の痛みが分かるようになった」である。「その他」と回答した人において有意な差が生じている項目は「学業（受験、資格試験など）で苦勞した」である。

(オンライン調査)

総回答数	ほとんどなかった				
	1. 行けばよかった	2. しかたがなかった	3. 行かなくてよかった	4. 何とも思わない	5. その他
a. 学業（受験、資格試験など）で苦勞した	5	15	20	8	5
	-1.3	-1.4	1.5	0.7	1.1
b. 仕事（就職活動を含む）で苦勞した	8	29	39	17	7
	-2.5	-1.9	<u>2.6</u>	1.8	0.4
c. 体力が低下したり不足したりして苦勞した	5	17	28	11	4
	-2.0	-2.0	<u>2.7</u>	1.3	0.0
d. 生活リズムが乱れ苦勞した	4	17	24	12	5
	-2.2	-1.7	1.8	1.9	0.7
e. 人との関わりに不安を感じたり、人と関わりをもつことに苦勞した	4	9	14	9	3
	-1.0	-1.9	1.0	<u>2.2</u>	0.4
f. 成長した、視野が広がった	10	6	0	2	2
	<u>4.4</u>	-0.6	-3.0	-0.3	0.7
g. 人に優しくなった、人の痛みが分かるようになった	5	8	1	8	1
	0.8	-0.2	-2.7	<u>3.4</u>	-0.4

上記は、オンライン調査による【(Q7) 不登校経験に関する振り返り】と【(Q13) 現在の自分が成長したところ】において、「ほとんどなかった」回答の傾向である。「行けばよかった」と回答した人において有意な差が生じている項目は「成長した、視野が広がった」である。「しかたがなかった」と回答した人において有意な差が生じている項目はなかった。「行かなくてよかった」と回答した人において有意な差が生じている項目は「体力が低下したり不足したりして苦勞した」「仕事（就職活動を含む）で苦勞した」である。「何とも思わない」と回答した人において有意な差が生じている項目は「人に優しくなった、人の痛みが分かるようになった」「人との関わりに不安を感じたり、人と関わりをもつことに苦勞した」である。「その他」と回答した人において有意な差が生じている項目はなかった。

全体的に、インターネット調査について、「成長した、視野が広がった」「人に優しくなった、人の痛みが分かるようになった」を除く項目において、「おおいにあった」という回答をした不登校経験者は、「行けばよかった」と回答し、「ある程度あった」という回答をした場合は「しかたがなかった」と回答し、「あまりなかった」「ほとんどなかった」という回答をした場合は「行かなくてよかった」や「何とも思わない」と回答したものにおいて、統計的に差が見られた。

「成長した、視野が広がった」「人に優しくなった、人の痛みが分かるようになった」については他の選択肢と傾向が異なる結果が得られた。「おおいにあった」と回答した人は「行けばよかった」「行かなくてよかった」の二極化が見られており、現状に満足している人の中には、十分に成長できたと感じている人もいる可能性が示唆された。

オンライン調査においては、統計的な差は比較的に見られなかったものの、概ねインターネット調査と同様の傾向が見られた。また、インターネット調査と比較して、「何とも思わない」とする回答において、有意差がほとんど見られなかった。

(6) 第11章のまとめ

第11章では不登校経験に関する振り返りと他項目の関連として、不登校のきっかけ、不登校当時の支援ニーズ、現在の生活の満足度、中学卒業以降において励ましや支えになった人、不登校経験と中学卒業後の経験との関連について整理した。統計的に有意差があった回答を中心に記載した。

不登校のきっかけとの関連について、インターネット調査では、「行かなくてよかった」という振り返りがなされたきっかけは「友人との関係（いやがらせやいじめ）」、先生との関係など、学校内で生じる人間関係であり、原因と距離を取ることが効果的だと判断した可能性が示唆される。「何とも思わない」という振り返りがなされたきっかけについては、いずれも「行けばよかった」といった回答と二極化している。きっかけは「授業が面白くなかった」「学校生活に対してやる気が出なかった」「生活リズムの乱れ（朝起きられないなど）」などが該当しており、想定される理由の一つとして、不登校の状況をどのように捉えているかによって、学校に対する評価が分かれている可能性が示唆される。その他のきっかけについては概ね「行けばよかった」「しかたがなかった」といった回答であり、不登校経験者において、本当は学校に行きたかった層が一定数存在していることが示唆される。オンライン調査では、インターネット調査と比較して統計的に有意な項目は少ないが、インターネット調査と同様、「友人との関係（いやがらせやいじめ）」や先生との関係がきっかけであれば「行かなくてよかった」といった回答が有意に多かった。

不登校当時の支援のニーズとの関連について、インターネット調査では、支援ニーズを認識できている者においては学校に対して「何とも思わない」ことはなく、基本的に「行けばよかった」「しかたがなかった」との回答が期待値を上回っている。ただし、「自分の気持ちをはっきり表現したり、人とうまくつきあったりするための方法についての相談や手助け」「精神的・身体的な不調についての相談や手助け」など、支援による帰結が個人によって様々である項目においては「しかたがなかった」「行かなくてよかった」と回答する可能性も示唆される。オンライン調査では、インターネット調査と比較して統計的に有意な項目は少ないが、インターネット調査と同様の傾向が見られた。

現在の生活の満足度との関連について、インターネット調査では、過去の経験の捉え方が現在の生活の満足度に影響している可能性が見られる。「しかたがなかった」「行かなく

てよかった」といった振り返りをしている方は現在の生活に「まあ満足している」という可能性が示唆されるが、「何とも思わない」といった振り返りは現在の生活に「不満だ」という可能性が示唆される。一方、「行けばよかった」と回答した人は、過去の不登校への向き合い方が現在の生活の満足度に影響している可能性が示唆される。オンライン調査では、インターネット調査と比較して統計的に有意な項目が少ないため、比較が困難である。

中学卒業以降において励ましや支えになった人との関連について、インターネット調査では、基本的に励ましや支えを受けている者においては「行けばよかった」「しかたがなかった」と回答している。オンライン調査では、統計的に有意な項目がなかったため、比較が困難である。

不登校経験と中学卒業後の経験との関連について、インターネット調査では、中学卒業後に苦労した経験が「おおいにあった」者においては、学校で得られたかもしれない経験に対して後悔の念を抱いている可能性が示唆される。一方、中学卒業後に「成長した、視野が広がった」「人に優しくなった、人の痛みが分かるようになった」経験が「おおいにあった」と回答した方においては、「行けばよかった」といった回答に加え、「行かなくてよかった」といった回答も期待値を上回っていた。オンライン調査では、インターネット調査と比較して統計的に有意な項目は少ないが、インターネット調査と同様の傾向が見られた。

第12章 最終学歴とその他設問についての分析

(1) 不登校期間との関係(Q1)

(インターネット調査)

・小学校

Q1						
Q9		1. ほとんど休まなかった	2. 少し休んだ	3. 半分程度休んだ	4. かなり休んだ	5. ほとんど休んだ
	1. 中学校卒業	<u>5.7</u>	-10.9	-3.7	<u>3.2</u>	<u>10.7</u>
	2. 高等学校卒業	<u>4.1</u>	-4.3	-3.2	<u>2.2</u>	<u>2.2</u>
	3. 専門・高専・短大卒業	0.2	<u>4.2</u>	-1.2	-2.8	-3.5
	4. 専修一般・各種卒業	-4.5	<u>3.8</u>	<u>6.3</u>	-1.8	-4.7
	5. 大学卒業	-4.2	<u>7.2</u>	<u>2.1</u>	-1.9	-6.3
	6. 大学院卒業	-4.0	-0.7	<u>2.8</u>	1.4	<u>3.2</u>
	7. その他	0.0	-0.3	0.5	-1.3	1.4

インターネット調査においては、最終学歴として「中学校卒業」を選択したグループは、「ほとんど休んだ」「ほとんど休まなかった」「かなり休んだ」の項目に統計的に差があった。「高等学校卒業（中等教育学校後期課程、専修学校の高等課程、特別支援学校高等部を含む）」を選択したグループは、「ほとんど休まなかった」「かなり休んだ」「ほとんど休んだ」の項目に統計的に差があった。「専修学校（専門課程）卒業・高等専門学校卒業・短期大学卒業」を選択したグループは、「少し休んだ」の項目に統計的に差があった。「専修学校（一般課程）卒業・各種学校卒業」を選択したグループは、「半分程度休んだ」「少し休んだ」の項目に統計的に差があった。「大学卒業」を選択したグループは、「少し休んだ」「半分程度休んだ」の項目に統計的に差があった。「大学院修士課程卒業・大学院博士後期課程修了（満期退学含む）」を選択したグループは、「ほとんど休んだ」「半分程度休んだ」の選択肢に統計的に差があった。「その他」を選択したグループは、項目に統計的に差はなかった。

小学校においては、「少し休んだ」「半分程度休んだ」際に高等学校卒業以上が最終学歴となる回答が期待値を有意に上回った一方、中学校、高等学校卒業が最終学歴と関連が示唆されるのは「ほとんど休まなかった」「かなり休んだ」と二極化している。「ほとんど休んだ」に関しては、中学校、高等学校卒業、又は大学院卒業の項目において統計的に差があり、小学校においてほとんど休んだ群に複数の傾向があることが示唆される。

・ 中学校

Q1						
Q9		1. ほとんど休まなかった	2. 少し休んだ	3. 半分程度休んだ	4. かなり休んだ	5. ほとんど休んだ
	1. 中学校卒業	-14.4	-18.7	-3.1	<u>10.7</u>	<u>29.6</u>
	2. 高等学校卒業	-2.8	-3.5	-1.1	<u>3.0</u>	<u>5.3</u>
	3. 専門・高専・短大卒業	<u>4.8</u>	<u>2.6</u>	-0.4	-0.1	-7.1
	4. 専修一般・各種卒業	0.1	<u>5.0</u>	<u>4.1</u>	-3.5	-7.2
	5. 大学卒業	<u>8.4</u>	<u>11.6</u>	1.2	-7.4	-16.4
	6. 大学院卒業	<u>2.8</u>	<u>2.0</u>	0.6	-3.2	-2.8
	7. その他	-1.7	-0.2	-0.1	-1.0	<u>2.8</u>

インターネット調査においては、最終学歴として「中学校卒業」、「高等学校卒業（中等教育学校後期課程、専修学校の高等課程、特別支援学校高等部を含む）」を選択したグループは、「ほとんど休んだ」「かなり休んだ」の項目に統計的に差があった。「専修学校（専門課程）卒業・高等専門学校卒業・短期大学卒業」を選択したグループは、「ほとんど休まなかった」「少し休んだ」の選択肢に統計的に差があった。「専修学校（一般課程）卒業・各種学校卒業」を選択したグループは、「少し休んだ」「半分程度休んだ」の選択肢に統計的に差があった。「5. 大学卒業」を選択したグループは、「少し休んだ」「ほとんど休まなかった」の選択肢に統計的に差があった。「大学院修士課程卒業・大学院博士後期課程修了（満期退学含む）」を選択したグループは、「ほとんど休まなかった」「少し休んだ」の選択肢に統計的に差があった。「その他」を選択したグループは、「ほとんど休んだ」の選択肢に統計的に差があった。

中学校においては、小学校よりも休んだ頻度と最終学歴の間に負の相関関係が示唆される。これは、中学校時代に不登校を経験することの方がその後卒業後の進路に影響を与える可能性を示唆している。

(オンライン調査)

・小学校

Q1						
Q9		1. ほとんど休まなかった	2. 少し休んだ	3. 半分程度休んだ	4. かなり休んだ	5. ほとんど休んだ
	1. 中学校卒業	-0.4	-0.9	-0.6	1.1	0.7
	2. 高等学校卒業	0.6	1.0	-1.5	0.6	-1.0
	3. 専門・高専・短大卒業	-0.7	-0.4	-0.9	1.0	0.9
	4. 専修一般・各種卒業	-0.9	0.8	0.6	-1.0	0.6
	5. 大学卒業	0.3	0.2	2.0	-1.5	-0.6
	6. 大学院卒業	-0.7	-1.5	0.1	-0.3	<u>2.1</u>
	7. その他	0.6	0.1	0.9	-0.5	-1.0

オンライン調査においては、最終学歴として「大学院修士課程卒業・大学院博士後期課程修了（満期退学含む）」を選択したグループは、「ほとんど休んだ」の項目に統計的に差があった。その他の項目においては、統計的な差はなかった。

統計的に有意な差はないものの、インターネット調査と同様に、小学校においては、「少し休んだ」「半分程度休んだ」際に専修学校や大学を最終学歴とする回答が期待値を上回っていた。

・中学校

Q1						
Q9		1. ほとんど休まなかった	2. 少し休んだ	3. 半分程度休んだ	4. かなり休んだ	5. ほとんど休んだ
	1. 中学校卒業	-1.3	-1.2	-0.6	0.1	1.4
	2. 高等学校卒業	0.3	-1.5	-0.6	0.8	0.3
	3. 専門・高専・短大卒業	-1.1	-1.7	1.2	1.2	-0.3
	4. 専修一般・各種卒業	-0.5	0.6	-0.8	0.6	-0.2
	5. 大学卒業	0.4	<u>2.5</u>	-0.1	-1.5	-0.2
	6. 大学院卒業	<u>2.4</u>	1.2	1.2	-1.7	-0.9
	7. その他	0.1	0.9	0.1	0.3	-0.8

オンライン調査においては、最終学歴として、「中学校卒業」から「専修学校（一般課程）卒業・各種学校卒業」、「その他」を選択したグループは、選択肢に統計的に差は見られなかった。「大学卒業」を選択したグループは、「少し休んだ」の項目に統計的に差があった。「大学院修士課程卒業・大学院博士後期課程修了（満期退学含む）」を選択したグループは、「ほとんど休まなかった」の項目に統計的に差があった。

統計的な差は概ね見られないものの、インターネット調査と同様に、中学校においては、小学校よりも休んだ頻度と最終学歴の間に負の相関関係が示唆される。

(2) 不登校当時の支援との関係(Q5)

(インターネット調査)

Q5												
Q9		1. 教育支援センター	2. 児相	3. 保健所	4. 病院	5. 民間施設	6. その他機関	7. 先生	8. 学校の相談員	9. SNS	10. その他	11. なし
	1. 中学校卒業	-2.5	<u>2.2</u>	-6.5	-4.7	-5.8	-5.0	-9.1	-7.8	-5.6	-2.4	<u>15.8</u>
	2. 高等学校卒業	-1.8	-2.7	-6.2	-2.6	-5.9	-7.2	-0.3	-2.5	-4.8	0.8	<u>10.1</u>
	3. 専門・高専・短大卒業	-3.3	-1.3	<u>2.3</u>	0.2	0.1	1.4	1.1	-1.5	-2.2	1.7	-2.5
	4. 専修一般・各種卒業	-3.2	-0.9	<u>4.3</u>	0.5	<u>8.1</u>	<u>8.8</u>	-2.3	1.6	<u>4.5</u>	-1.6	-9.6
	5. 大学卒業	<u>7.6</u>	<u>2.7</u>	<u>5.8</u>	<u>4.0</u>	<u>5.1</u>	<u>4.0</u>	<u>7.3</u>	<u>7.9</u>	<u>6.6</u>	0.8	-12.7
	6. 大学院卒業	1.0	0.1	<u>2.6</u>	<u>3.7</u>	1.0	<u>2.1</u>	-0.1	1.3	<u>3.2</u>	-0.8	-4.3
	7. その他	1.0	-1.2	-0.9	0.6	1.5	0.1	1.3	<u>2.3</u>	2.0	1.2	-0.6

インターネット調査においては、最終学歴として、「中学校卒業」を選択したグループは、「何も利用しなかった」「児童相談所、福祉事務所」の項目に統計的に差があった。

「高等学校卒業（中等教育学校後期課程、専修学校の高等課程、特別支援学校高等部を含む）」を選択したグループは、「何も利用しなかった」の項目に統計的に差があった。「専修学校（専門課程）卒業・高等専門学校卒業・短期大学卒業」を選択したグループは、「保健所・保健センター」の項目に統計的に差があった。「専修学校（一般課程）卒業・各種学校卒業」を選択したグループは、上位3項目として「1～5.以外で当時の在籍校以外の心理相談・カウンセリングなどをする機関」「民間施設（「フリースクール」と呼ばれる場所など）」「SNS や電話相談」の項目に統計的に差があった。「大学卒業」を選択したグループは、上位3項目として「学校にいる相談員（スクールカウンセラーなど）」「教育支援センター（適応指導教室）・教育相談所」「学校の先生（担任の先生や保健室の先生など）」の項目に統計的に差があった。「大学院修士課程卒業・大学院博士後期課程修了（満期退学含む）」を選択したグループは、上位3項目として「病院・診療所」「SNS や電話相談」「保健所・保健センター」の項目に統計的に差があった。「その他」を選択したグループは、「学校にいる相談員（スクールカウンセラーなど）」の選択肢に統計的に差があった。

中学校・高校を最終学歴として持つ不登校経験者は支援団体などのサービスを受けない回答が期待値を有意に上回っていた。一方で、専修学校や大学卒業を最終学歴として持つ不登校経験者は、様々な支援機関と相談していることが分かる。

(オンライン調査)

Q5												
Q9		1. 教育支援センター	2. 児相	3. 保健所	4. 病院	5. 民間施設	6. その他機関	7. 先生	8. 学校の相談員	9. SNS	10. その他	11. なし
	1. 中学校卒業	-2.2	0.2	0.6	1.0	0.1	-1.6	0.0	-0.4	0.7	1.2	0.4
	2. 高等学校卒業	1.1	0.0	1.0	0.4	-0.1	-1.6	1.1	-0.3	-0.7	-0.8	-0.7
	3. 専門・高専・短大卒業	-0.2	0.6	-1.1	-1.1	0.2	0.0	0.2	-1.5	0.0	0.1	-0.2
	4. 専修一般・各種卒業	0.3	0.6	1.4	0.3	1.3	0.3	-1.0	-0.3	1.5	0.8	<u>2.1</u>
	5. 大学卒業	-0.7	0.0	-1.1	-1.4	-0.7	<u>2.4</u>	-2.3	1.2	-0.2	-0.7	1.5
	6. 大学院卒業	1.1	0.1	-0.7	-0.2	-1.1	<u>2.7</u>	-0.3	-0.6	1.0	0.3	-0.4
	7. その他	1.1	-1.4	0.1	1.4	1.0	-1.0	<u>2.1</u>	1.4	-1.0	0.4	-2.2

オンライン調査においては、最終学歴として、「中学校卒業」「高等学校卒業（中等教育学校後期課程、専修学校の高等課程、特別支援学校高等部を含む）」「専修学校（専門課程）卒業・高等専門学校卒業・短期大学卒業」を選択したグループは、項目に統計的な差は見られなかった。「専修学校（一般課程）卒業・各種学校卒業」を選択したグループは、「何も利用しなかった」の項目に統計的に差があった。「大学卒業」「大学院修士課程卒業・大学院博士後期課程修了（満期退学含む）」を選択したグループは、「1～5.以外で当時の在籍校以外の心理相談・カウンセリングなどをする機関」の項目に統計的に差があった。「その他」を選択したグループは、「学校の先生（担任の先生や保健室の先生など）」の選択肢に統計的に差があった。

(3) 不登校当時の支援のニーズとの関係 (Q6)

(インターネット調査)

Q6										
Q 9		1. 進 学	2. 仕 事	3. 勉 強	4. 表 現	5. 居 場 所	6. 悩 み	7. 生 活	8. そ の 他	9. なし
	1. 中学校卒業	-1.6	<u>4.4</u>	-3.3	-7.0	-6.9	-2.6	-0.8	-1.1	<u>15.9</u>
	2. 高等学校卒業	-0.9	-0.6	-2.5	-4.0	-4.6	<u>2.6</u>	-2.5	1.0	<u>9.2</u>
	3. 専門・高専・短大卒業	-1.5	0.2	<u>2.0</u>	<u>3.3</u>	<u>3.9</u>	0.9	-1.5	0.4	-5.2
	4. 専修一般・各種卒業	-5.2	-1.9	0.0	1.2	0.8	-4.7	-1.6	-2.2	-6.3
	5. 大学卒業	<u>6.2</u>	-0.8	<u>4.5</u>	<u>7.3</u>	<u>5.7</u>	1.5	<u>3.4</u>	0.5	- 12.4
	6. 大学院卒業	0.1	-1.8	-2.0	-3.1	1.1	-1.3	<u>4.1</u>	-0.3	-1.8
	7. その他	-0.2	-1.4	-2.3	1.0	0.7	<u>3.3</u>	-0.3	<u>4.5</u>	-1.3

インターネット調査においては、不登校当時の支援ニーズとして、「中学校卒業」を選択したグループは、「とくにない」「仕事につくための相談や手助け」の項目に統計的に差があった。「高等学校卒業（中等教育学校後期課程、専修学校の高等課程、特別支援学校高等部を含む）」を選択したグループは、「とくにない」「精神的・身体的な不調についての相談や手助け」の項目に統計的に差があった。「専修学校（専門課程）卒業・高等専門学校卒業・短期大学卒業」を選択したグループは、「友人と知り合えたり、仲間と過ごせたりする居場所についての情報提供」「自分の気持ちをはっきり表現したり、人とうまくつきあったりするための方法についての相談や手助け」「学校の勉強についての相談や手助け」の項目に統計的に差があった。「専修学校（一般課程）卒業・各種学校卒業」を選択したグループは、選択肢に統計的な差はなかった。「大学卒業」を選択したグループは、「自分の気持ちをはっきり表現したり、人とうまくつきあったりするための方法についての相談や手助け」「進学するための相談や手助け」「友人と知り合えたり、仲間と過ごせたりする居場所についての情報提供」「学校の勉強についての相談や手助け」「規則正しい生活習慣についての相談や手助け」の項目に統計的に差があった。「大学院修士課程卒業・大学院博士後期課程修了（満期退学含む）」を選択したグループは、「規則正しい生活習慣についての相談や手助け」の項目に統計的に差があった。「その他」を選択したグループは、「その他」「精神的・身体的な不調についての相談や手助け」の項目に統計的に差があった。

(オンライン調査)

Q6										
Q 9		1. 進 学	2. 仕 事	3. 勉 強	4. 表 現	5. 居場 所	6. 悩 み	7. 生 活	8. その 他	9. な し
	1. 中学校卒業	-1.4	1.1	-2.2	0.4	0.1	-0.9	-0.2	-0.2	0.6
	2. 高等学校卒業	-0.7	0.4	0.3	0.0	-0.4	-0.5	0.9	-0.1	-0.5
	3. 専門・高専・短大卒業	0.0	0.8	-0.2	-2.3	-2.4	0.7	-0.2	-0.6	0.4
	4. 専修一般・各種卒業	-1.3	-0.1	-0.6	-0.5	-0.2	0.4	-0.1	0.9	0.4
	5. 大学卒業	0.9	-0.9	0.6	<u>2.7</u>	0.0	0.9	-1.4	0.6	-0.2
	6. 大学院卒業	-0.3	-1.5	0.2	-0.6	0.9	0.7	-1.4	1.6	-0.3
	7. その他	<u>2.6</u>	-0.4	1.6	-1.3	<u>2.6</u>	-1.0	<u>2.1</u>	-1.3	0.0

オンライン調査については大学卒業を最終学歴として持つ不登校経験者が「自分の気持ちをはっきり表現したり、人とうまくつきあったりするための方法についての相談や手助け」に支援ニーズを統計的に有意に感じている、その他を最終学歴として持つ不登校経験者が「進学するための相談や手助け」「友人と知り合えたり、仲間と過ごせたりする居場所についての情報提供」「規則正しい生活習慣についての相談や手助け」に支援ニーズを統計的に有意に感じているほかは、統計的な差はなかった。

統計的な差はないものの、インターネット調査と異なり、中学校・高等学校卒業を最終学歴として持つ不登校経験者は支援ニーズとして「仕事につくための相談や手助け」「自分の気持ちをはっきり表現したり、人とうまくつきあったりするための方法についての相談や手助け」を選択することが期待値より高い。

(4) 現在の生活の満足度との関連 (Q11)

(インターネット調査)

Q11-2					
Q9		1. 満足して いる	2. まあ満足 している	3. やや不満 だ	4. 不満だ
	1. 中学校卒業	-6.2	-9.5	<u>4.2</u>	<u>14.2</u>
	2. 高等学校卒業	-6.3	-3.6	<u>3.6</u>	<u>7.1</u>
	3. 専門・高専・短大卒業	0.1	<u>4.6</u>	-1.5	-4.5
	4. 専修一般・各種卒業	-3.3	<u>2.8</u>	<u>3.3</u>	-4.0
	5. 大学卒業	<u>9.5</u>	<u>6.6</u>	-6.2	-11.2
	6. 大学院卒業	<u>7.5</u>	-2.3	-2.7	-1.4
	7. その他	-0.6	-0.9	1.1	0.6

インターネット調査においては、最終学歴として、「中学校卒業」「高等学校卒業（中等

教育学校後期課程、専修学校の高等課程、特別支援学校高等部を含む)」を選択したグループは、大きい順に「不満だ」「やや不満だ」の項目に統計的に差があった。「専修学校（専門課程）卒業・高等専門学校卒業・短期大学卒業」を選択したグループは、「まあ満足している」の項目に統計的に差があった。「専修学校（一般課程）卒業・各種学校卒業」を選択したグループは、「やや不満だ」「まあ満足している」の項目に統計的に差があった。「大学卒業」を選択したグループは、「満足している」「まあ満足している」の項目に統計的に差があった。「大学院修士課程卒業・大学院博士後期課程修了（満期退学含む）」を選択したグループは、「満足している」の項目に統計的に差があった。「その他」を選択したグループは、選択肢に統計的な差はなかった。

（オンライン調査）

Q11-2					
Q9		1. 満足している	2. まあ満足している	3. やや不満だ	4. 不満だ
	1. 中学校卒業	-1.7	0.1	<u>2.1</u>	0.4
	2. 高等学校卒業	-1.9	1.4	-0.8	1.8
	3. 専門・高専・短大卒業	1.1	0.0	-1.1	-0.8
	4. 専修一般・各種卒業	0.2	-0.5	1.1	-0.7
	5. 大学卒業	<u>2.3</u>	-2.1	0.0	-0.3
	6. 大学院卒業	0.3	0.5	-0.5	-0.9
	7. その他	0.4	0.3	-0.1	-1.4

オンライン調査においては、最終学歴として、「高等学校卒業（中等教育学校後期課程、専修学校の高等課程、特別支援学校高等部を含む）」から「専修学校（専門課程）卒業・高等専門学校卒業・短期大学卒業」、「専修学校（一般課程）卒業・各種学校卒業」、「大学院修士課程卒業・大学院博士後期課程修了（満期退学含む）」、「その他」を選択したグループは、項目に統計的に差が見られなかった。「中学校卒業」を選択したグループは、「やや不満だ」の項目に統計的に差があった。「大学卒業」を選択したグループは、「満足している」の項目に統計的に差があった。

統計的な差は見られないものの、インターネット調査と同様に、中学校・高等学校卒業を最終学歴として持つ不登校経験者は「不満だ」「やや不満だ」と回答し、専門学校や専修学校、大学、大学院を最終学歴とする不登校経験者は「満足している」と回答する傾向がある可能性が示唆される。

（５）第 12 章のまとめ

第 12 章では最終学歴と他項目の関連として、不登校期間、不登校当時の支援、不登校当時の支援のニーズ、現在の生活の満足度との関連について整理した。統計的に有意差があった回答を中心に記載した。

不登校期間との関係について、インターネット調査では、小学校においては、同じ不登校の状況においても、「少し休んだ」あるいは「半分程度休んだ」とする者の最終学歴は多様である一方、中学校においては、「ほぼ欠席」とすると進学しない、あるいはできない傾向が高くなることが示唆される。オンライン調査では、インターネット調査と比較して統計的に有意な項目が少ないため、比較が困難である。

不登校当時の支援との関係について、インターネット調査では、「中学校卒業」「高等学校卒業（中等教育学校後期課程、専修学校の高等課程、特別支援学校高等部を含む）」を最終学歴とする不登校経験者は支援を受けていない者が多く、支援を受けられることを認識していない、あるいは支援を必要としていないと捉えている可能性が示唆される。一方で、「専修学校（一般課程）卒業・各種学校卒業」「大学卒業」「大学院修士課程卒業・大学院博士後期課程修了（満期退学含む）」を最終学歴として持つ不登校経験者は、様々な支援にアクセスをできていた可能性が示唆される。オンライン調査では、インターネット調査と比較して統計的に有意な項目が少ないため、比較が困難である。

不登校当時の支援のニーズとの関係について、インターネット調査では、「中学校卒業」「高等学校卒業（中等教育学校後期課程、専修学校の高等課程、特別支援学校高等部を含む）」を最終学歴とする不登校経験者は、支援ニーズとして「とくにない」の項目が期待値より有意に上回っていた。また、「中学校卒業」が最終学歴の場合、「仕事につくための相談や手助け」が期待値を上回っており、学校に十分に行けておらず、高校進学等を諦めざるを得なかった場合、周囲の環境に求職関連の情報が十分に行きわたっていなかった可能性が示唆される。また、「専修学校（専門課程）卒業・高等専門学校卒業・短期大学卒業」や「大学卒業」を最終学歴とする不登校経験者は、「学校の勉強についての相談や手助け」「自分の気持ちをはっきり表現したり、人とうまくつきあったりするための方法についての相談や手助け」「友人と知り合えたり、仲間と過ごせたりする居場所についての情報提供」にニーズを持つ傾向がある。この傾向は、不登校になっている一方で、仕事等をしていく上で勉強や対人コミュニケーションに必要性を感じている層が存在する可能性が示唆される。オンライン調査では、インターネット調査と比較して統計的に有意な項目が少ないため、比較が困難である。

現在の生活の満足度との関連について、インターネット調査では、「中学校卒業」「高等学校卒業（中等教育学校後期課程、専修学校の高等課程、特別支援学校高等部を含む）」を最終学歴とする不登校経験者は、「不満だ」「やや不満だ」と回答し、「専修学校（専門課程）卒業・高等専門学校卒業・短期大学卒業」「専修学校（一般課程）卒業・各種学校卒業」「大学卒業」「大学院修士課程卒業・大学院博士後期課程修了（満期退学含む）」を

最終学歴とする不登校経験者は「満足している」「まあ満足している」と回答する傾向がある可能性が示唆される。オンライン調査では、インターネット調査と比較して統計的に有意な項目が少ないため、比較が困難である。

第Ⅳ部 インタビュー調査編

インタビュー調査では、インターネット調査及びオンライン調査により得られた結果をより掘り下げ、不登校のきっかけや当時の支援ニーズ、不登校経験に関する振り返りなどについてより深く分析することを目的とする。

支援団体等と繋がりのある不登校経験者等の中から選定した 13 名及び支援団体 4 団体の代表者等に、面接担当者がオンライン通話にてインタビューを行った。インタビューはオンラインで行い、臨機応変に質問を変えたり順序を変えたりする半構造化面接技法を用いて実施した。

第13章 不登校を経験者へのインタビューのまとめ

本章では、小学生もしくは中学生当時に不登校を経験した方に対してインタビュー調査を実施した結果を記す。

(1) インタビュー対象者

支援団体等とつながりのある不登校経験者の中から、文部科学省担当者と協議した上で対象を選定した。

	名	性別	年代
1	Aさん	女性	20代前半
2	Bさん	男性	20代後半
3	Cさん	女性	20代前半
4	Dさん	男性	20代前半
5	Eさん	女性	20代前半
6	Fさん	女性	10代後半
7	Gさん	男性	10代後半
8	Hさん	男性	20代後半
9	Iさん	女性	30代前半
10	Jさん	男性	30代前半
11	Kさん	女性	20代後半
12	Lさん	男性	20代前半
13	Mさん	女性	20代前半

(2) インタビュー項目

インタビュー項目は下記のとおりである。

(1) 不登校の理由や受けていた支援等	Q1：不登校の主なきっかけ Q2：不登校の主な継続理由 Q3：不登校である時に最も困っていた点 Q4：不登校の状態である時に受けていた主な支援と支援を受けての感想 Q5：不登校の時にあればよかったと思う支援内容
(2) 現在までの進路	Q6：調査時現在の進学・就業状況 Q7：これまでの進学・就業状況の履歴 Q8：これまでの進学・就業において、課題と感じたこと Q9：これまでの進学・就業をふりかえり、あってよかったと思う支援内容 Q10：これまでの進学・就業をふりかえり、あればよかったと思う支援内容 Q11：不登校を経験したことについての思い

(3) 対象者の不登校経験等

各インタビュー対象者の不登校にまつわる経験やエピソード等は、以下のとおりである。

Aさん（女性、20代前半）

- ・ 小学校5年、小学校5～6年、中学校1～3年の主に3期間の不登校期間があった。
- ・ 小学校5～6年のときのきっかけは、小5で先生にからかわれた後に、同級生にいじめられたこと（無視、仲間外れ）である。学校へ行きたくないと母親へ言った際にけんかをしたが、その後学校に行かなくてもよいと言ってくれたため登校しなかった。
- ・ 不登校で困った点としては、休んだ際に、同級生がプリントや手紙を家に持ってきてくれることである。いじめ等の張本人が家に来たり、学校においでと言われてたりすることが苦痛だった。
- ・ 同じような経験を持つ方が集まる場所があればよかった。
- ・ 中学校1年のときには、6月頃から再度不登校になった。その後、中学校2,3年から断続的に保健室登校をしていた。きっかけは、中学校入学時に環境の変化があったことである。小6で震災があり入学が遅れたこと、入部した吹奏楽部のコンクールがありピリピリした雰囲気であったこと、勉強が分からなかったこと、小学校の時よりも学年の上下関係が強くなったことに戸惑ったことが主なきっかけである。保健室登校していたが、その理由は、勉強がしたかったためである。しかし、先生が教えてくれるということもなく、学業の遅れや最低限の学習内容を身に付けるこ

とはできなかったと感じた。

- ・ 適応支援教室があり、そこでは同じような経験を持つ人と勉強ができると聞いていたが、家からは遠くて通うことができず、行けたらよかった。

B さん(男性、20 代後半)

- ・ 小学校 1～3 年、中学校 1～3 年に 2 期間の不登校期間があった。
- ・ 小学校のときは、消しゴムを隠されるといった、いたずらのようないじめがきっかけで行けなくなると記憶しているが、その理由や対応策がわからなかったことが不登校の要因だと思う。
- ・ 祖母が不登校に対してきびしい姿勢を示しており、いじめを行った相手に対して強硬な対応を取るべきだと主張することがあり困っていた。また、自身の不登校のことで、祖母が母親に対して強く責めることもあった。その他の困った点として、勉強面で苦手な科目ができてしまった点が挙げられる。
- ・ 2 年生のころ担任の先生は非常に熱心で、週に一度の頻度で家に訪問してくれていた。学校での出来事や行事の予定等を共有してくれたため、学校とのつながりを感じることができ、楽しかったと記憶している。
- ・ 家庭状況を相談できる場所について知る機会があればよかったと思う。
- ・ 中学校のときは、副担任がややきびしい性格でもあり、校則違反で髪が長いことを指摘されて嫌だった。部活は文科系に入りたかったが、ほとんどが体育会系でバスケット部に入部したが、先輩の発言に疑問に思ったり、顧問の先生の発言と先輩の発言の矛盾があったりなど、納得ができない点があり、悩むことが多かった。朝に弱く決められた時間までに登校することがつらいことも相まって、不登校が継続したと思う。
- ・ 不登校が原因で、祖母がより一層きびしい姿勢をとるようになり、母親が精神的に不調をきたすこととなった。今思えば、うつ症状だったのかも知れない。その結果、母親から押さえつけられ首を絞められる暴力を受けることもあり、心中を迫られるようなこともあった。
- ・ 当時は、学校にあまり行かなかったが、適応支援教室には通っていた。学校に戻ることを目的とした支援が多く、居心地が良くなく、家庭状況についても相談できるような雰囲気ではなかった。
- ・ 親が不安定だと、子供としては何もできないので、親に対してケアができる支援があるとよかったと思う。

C さん (女性、20 代前半)

- ・ 中学校 2 年生の夏休み明けから卒業まで不登校であった。
- ・ 双子の兄が先に不登校ぎみになり兄の状況を学校で聞かれることが増えたこと、ま

たクラスに騒がしい生徒がいたことにより、通学する意欲がなくなった。先生やスクールカウンセラーに話を聞いてもらっていたが、クラスの様子は変わらなかったため、戻ることが想像できなかった。一時期、保健室登校をしていたが、その先生から「保健室は体調が悪い人が過ごす場所であり、健康な人がいるべきではない」と指摘されたことがあり、保健室登校もできなくなった。

- ・ 高校受験を考えはじめる中学校 2 年生の頃から不登校だったため、勉強したい思いはあった。しかしクラスには行けない自分にもどかしさを感じ、困っていた。
- ・ 学校へ行かず、支援センターに行けばいいと思ったときは気持ちが楽になった。それまでは同級生が勉強している間、自分は家にいることについて不安に感じていたが、支援センターで勉強できるようになって、自分の行動が認められるように感じた。気が楽になるような場所だった。
- ・ 当時は高校の進路が心配で、一度不登校になってしまうと高校へ進学することができないと思っていた。進路の決め方や進路先についての情報が得られる環境があるとよかった。

D さん（男性、20 代前半）

- ・ 中学校 1 年生の 5 月から終わりまで不登校であった。
- ・ 中学校に入学すると小学生の頃よりもクラスの人数が増え、顔見知りだった人が他のクラスに分かれてしまったこともあり、あまりクラスに馴染めなかった。また、新しいクラスでは声の大きな生徒が物事を決めていく感じであり、自分の思うような方法で進めることができずストレスを感じていた。5 月の半ば頃に学校に行こうとした際、玄関から動けなくなった。最初のうちは、靴を隠して学校に行ったふりをするなどして家の人に気づかれないようにしていたが、間もなく気づかれてしまった。
- ・ 学校内の不登校の子が過ごす場所があり、夏休み明けからそこへ週 1 回程度通っていた。中学校 1 年生の後半は出席できそうな授業には出席しており、少しずつ通常通り通学できるようになっていった。中学校 2 年生では、出席停止の期間を除いて全日登校できていた。
- ・ 家では両親、祖父母と生活をしており、日中、両親は仕事で家にいなかったが、祖父母が家におり、不登校のことについて祖父母から指摘されることがあり、辛く感じていた。
- ・ 支援センターへ週 3、4 回通い、勉強はあまりしなかったが、通って何かをすること自体が不安感や孤独感を小さくしてくれた。
- ・ 進学先について情報があまりなく、どうやって見つけていいかわからなかった。探してきたとしても学校の先生からはあまり勧められない状況だった。進学に関する情報をもっとあれば、将来に対する不安は軽減できたのではないかと考える。

E さん（女性、20 代前半）

- ・ 中学校 1 年生の 5 月から中学校の卒業まで不登校であった。
- ・ 小学校 2 年生のときにいじめに遭い、それが原因で違う小学校に転校した。その後、入学した中学校は他の学区から生徒が集まるような学校だったため、知らない人が多く、いじめられていた当時を思い出すこともあった。そのような状況下で、割り当てられた役員の仕事に対する責任と重圧で通学に対する意欲がなくなった。担任の先生は気が強い人で相談が難しかった。また、小学校 2 年生のいじめの時、だれも助けてくれない状況があったため、それを思い出し、まただれも助けてくれないのではないかと思い、不登校が継続してしまった。
- ・ 林間学校や合唱コンクールなどの学校の行事に誘われることが、断りづらく困っていた。普段登校していないのに行事だけ参加することの後ろめたさや、参加しても居場所がなく、苦痛を感じていた。
- ・ 1 年生の秋ごろに母に支援センターに連れてこられて、支援センターでは、何をしても肯定されるし、よく褒めてくれるし、居心地がよかった。学校に行かなくなっただけからは毎日支援センターに行っていた。
- ・ 中学校 3 年生の頃に家庭内で色々あり、担任の先生に雑談交じりで話したところ、スクールカウンセラーを紹介された。スクールカウンセラーへ、家庭状況について相談することができたことはよかった。

F さん（女性、10 代後半）

- ・ 中学校 3 年生の 1 年間はほぼ不登校であった。
- ・ 中学校 1 年生の林間学校に行ったときに友人に嫌いと言われたことがきっかけで、他の人もそう思っているのではないかと考えるようになった。その結果、クラスへの行きづらさを感じ、別室登校が始まった。中学校 1 年生～2 年生の間は週 2、3 日、別室登校をしていた。中学校 3 年生ではほとんど登校していない。
- ・ 別室登校時は、中学校 1 年生の頃は好きな勉強や読書、パズルなど比較的自由に何をしていてもよかったが、中学校 2 年生になるとルールが変わり、1 日 2 時間まで先生と 1 対 1 で勉強しなければならなくなり居心地が悪くなった。また当時お世話になっていた相談員の先生が別の学校へ異動してしまい、さらに居心地が悪くなった。そのような中で支援センターの存在を知り、中学校 3 年生の時はそこに通うことになった。
- ・ 中学校 1、2 年生の別室登校している間は、このままでいいのか、生きていていいのかと考えることがあった。また、家族との関係にも悩んでいた。
- ・ 支援センターに通うようになってからは、ポジティブな気持ちの期間が増えたと思う。支援センターが、学校や家以外の居場所となった点が理由だと思う。支援セン

ターでは主に勉強をしていた。

- ・ 進路の話について、先生から教室に来ないと進学はできないと言われていたが、母と調べたところ通信制の選択肢があることを知った。学校からそのような情報を得られるとよかったと思う。

G さん（男性、10 代後半）

- ・ 中学校 2 年生のコロナによる出席停止期間明けから中学校 3 年生まで不登校であった。
- ・ 小学校から中学校に上がるときに、2 つの小学校の生徒が混ざるような形で学校が形成されていた。知らない人が多い環境に慣れず、また勉強が苦手と同級生に対し劣等感のようなものを感じ休みがちになった。中学校 2 年生の冬にコロナ禍による出校停止期間があり、停止期間明けから登校できなくなった。
- ・ 外に出られないこと、家族以外の人とコミュニケーションがとれないことが困った。
- ・ 学校の紹介のカウンセラーの人と 2、3 回、話をしたことはある。話せる相手がいたこと自体はよかったと思う。
- ・ 当時は支援センターのような存在は知らなかったので、それを知る機会があればよかったと思う。

H さん（男性、20 代後半）

- ・ 小学校 5、6 年、中学校 2、3 年の 2 期間の不登校期間があった。
- ・ 小学校 5、6 年のときの思い当たる理由としては、人間関係の疲弊と野外行事への抵抗感がきっかけである。
- ・ 両親の勧めがあり、病院で行われているカウンセリングを受けた。両親以外で話ができる人がいなかったため、話を聞いてもらえる安心感があり、気持ちに余裕ができた。
- ・ 学校の先生は、気を遣ってどうしたら来てもらえるかを考えてくれた。自分は運動が好きで足が速かったこともあり、体育祭のリレー選手として出てくれないかという打診をしてくれた。それ自体は嫌な気持ちはしなかったが、不登校の原因が人間関係に対する疲弊であったため、学校に行こうという気持ちにまではならなかった。
- ・ 家族以外の人と交流する機会はなかったため、同級生の子たちともっと遊びたかった。同年代の人と関わる方法について、自分では情報を持っていなかった。そうした機関があって情報を知っていれば、そこに行っていたと思う。
- ・ 中学校 2、3 年のときのきっかけは、小学校と同じで人間関係のストレスが原因である。加えて、神経症のような身体症状が出てきたので、その後は学校へ行かなくなった。
- ・ 中学 3 年時の夏休み明けくらいに学校に通った。その間は適応指導教室に通ってい

た。そこでは人間関係に問題はなく、負担も感じなかった。同じ境遇の同年代の人たちがいて、通いやすかった。

- ・ 現在ではソーシャルワーカーが不登校の生徒の家庭を訪問し、1、2時間話をするという支援があるが、当時もそうした制度があれば使いたかった。当時の自分は不安でいっぱい、大学とはどういう場所かというような親とも話せない質問をしたかった。適応指導教室では、進路について質問する機会は少なかった。また、家においてもつまらないことがあり、気晴らしに話せる場があればよかったと思う。

I さん（女性、30 代前半）

- ・ 中学校1年生の夏休み明けから中学校の卒業まで不登校であった。
- ・ 小学校6年生のタイミングで引っ越しに伴い転校した。不登校のきっかけは、新しい学校に行ってから男子生徒からいやがらせを受けたこと。小学校6年時は登校できたが、中学1年生になり、いやがらせを行っていた学生と同じクラスになり、PTSDのような症状が発症した。担任の先生は不登校について理解がなく、副担任の先生は、通学することが辛いという話をした際に認めてくれたが、学期中にクラスを変えるということではできなかった。
- ・ 中学2年生の際に復帰しようと数日通ったが、周りが理解してくれていなかった。友達に話しかけたところ、他の生徒が、話をしないほうがよいと言うなど、通えるような環境になかった。
- ・ 中学2年時に適応相談センターに通っていたが、センターの中でもいじめが起きたため途中から行かなくなった。いじめの当事者ではなかったが、いたたまれなくなり積極的に通えなくなってしまった。
- ・ 子供の頃は、登校しないと生活リズムが作れないものである。そのため、生活リズムについて大人と一緒に考えたかった。また、進路相談も受けたかった。センター内で友達が進学を考え出した際に、自分自身も考えはじめたが、進路について情報がなく、支援は実際にはあったかもしれないがアクセスできず不足していたと感じる。

J さん（男性、30 代前半）

- ・ 小学校1年生の入学直後から中学3年生まで不登校であった。
- ・ 保育園の年中あたりから通園を渋ることがあり、原因は6歳上の兄から暴力をふるわれることがあったことが考えられる。年齢が離れていたため、当時は抵抗ができず我慢することが多かった。
- ・ 小学校入学直後に行かなくなったことで人間関係が形成できず、一方で同級生は人間関係ができている状況になっていた。既に人間関係ができているところに入ることができず、学校が怖い場所だと思うようになった。

- ・ それまで学校に行くことがなかったため、高校に通いはじめた時に授業の受け方やノートの取り方がわからなかった。また授業中、座り続けることが苦痛だった。
- ・ 中学生まで学校に行けていないことによる自己肯定感の低さは、高校入学後も継続して感じていた。進学した高校にいる生徒は約8割が不登校経験者と言われていたが、不登校の期間が長かったこともあり、自己肯定感は低いままだった。
- ・ 小学2年生の時、担任の先生の紹介で適応指導教室の存在を知り、小学2年生から中学卒業まで通っていた。適応指導教室には、週に一度は学校に行くという方針があり、この方針の存在は、学校に行けない自分はダメな存在であると言われていたように感じていた。

Kさん（女性、20代後半）

- ・ 高校2年生の進級時に不登校となり2年時に退学した。
- ・ 勉強を重視する学校であり、勉強についていけなくなった。また、将来の不安があり、孤立しているように感じたこともある。大学やどの分野に進みたいということも決まっていなかったため、嫌気がさしていた。
- ・ 高卒認定試験を受験することに決めたため、高校2年で退学した。退学前は、高卒認定試験の準備のため、単位を取る目的で学校へ行った。その際は、学校の先生がサポートしてくれた。
- ・ 特に父親が、不登校になったことを心配していた。社会人として生きていけないぞと言われた。また、自分自身も罪悪感があった。
- ・ 母親がフリースクールを探してくれていて、自分は当時やることがなかったので行くようになった。高校を辞めてすぐに通いだした。週に2、3回のペースで通い、そこでは考える機会を提供してくれたと思う。自分一人でいると変なことを考えすぎてしまうが、他の人がいることで自分自身を見つめ直すことに集中ができた。フリースクールでは、高卒認定を受けるための勉強を教えてもらえてとても助かった。

Lさん（男性、20代前半）

- ・ 小学校3年、中学校1年の夏前から卒業までの2期間の不登校期間があった。
- ・ 幼稚園の年中時に一年登園しなかったが、年長で戻った。また、小学校3年の時に不安定で行ったり行かなかったりし、その後嫌々通った。中学校でも、初めは嫌々行だったが、親の強制ではなく、自分で行かなければならないと思っていた。
- ・ 小3のときの不登校のきっかけは特にないが、もともと集団の中に入るのが嫌だったことだと思う。
- ・ 中1のときの不登校のきっかけは、複数の小学校からの生徒が合わさって大人数になったときに、大勢の人の中で過ごすことができなかったことである。
- ・ 一週間に一回程度、保健室登校はしていた。不登校をきっかけに父親と揉めたため、

心療内科に通った。その結果、家族関係を改善することができた。

- ・ 通信制の高校卒業後にフリースクールへ行った。通信高校在籍時はひきこもりだったため、社会に出るための練習として通った。
- ・ 勉強した方がよかったと思うため、在宅でできる家庭教師などの支援があればよかった。

Mさん（女性、20代前半）

- ・ 小学校5年、中学校2年の11月頃から3年の卒業までの2期間の不登校期間があった。
- ・ 小学校5年で行ったり行かなかったりした。その後、私立の小学校に移り卒業した。中学校進学後は、中2の11月頃から学校に行けなくなった。不登校のきっかけは、寂しかったことが積み重なったことだと思う。その後、公立の中学校に移り、市が運営しているフリースクール（教育支援センター）に半年通ったが合わなかったため、他のフリースクールに移った。二つ目のフリースクールは自分で調べていった。当時、祖父、祖母は現役で働いていて、また母子家庭だったため、家に一人であることが多く、学校で嫌なことがあったときなどに、家でだれにも話ができなかったことが積み重なっていた。
- ・ 転校後は、学力向上に取り組む公立校に入学した。それまで私立校に通っていて校則等が緩かったが、掃除よりも、勉強や、給食を残さないなど、学力向上に取り組んでいたことからしっかりしなさいということを言われて、ギャップを感じて中学校で2回目の転校をした。そこでもまた不登校になった。きっかけは母と二人暮らしをはじめたことで、母親が朝、先に働きに出た後は家にだれもいなくなり、学校には行こうとしなかった。家事も自分がやらなければならなかった。
- ・ その後、3回目の転校をした。担任の先生は理解があり、フリースクールに行くなら学校に来なくてよいとってくれた。行きたいときに来ればよいと言ってくれたため、行きたくなかったから行かなかった。
- ・ 複数回の転校によって、新しい人と人間関係を作ることに疲れたため登校する意欲を失くした。中学校でもフリースクールへ通うことに理解があったため、不登校が継続した。また、行きたい高校があり、やりたいこともあったため、不登校であっても問題ないと思っていた。
- ・ 母子家庭の支援があればよかったと思う。母子家庭は所得が少ないため、それを補うために母親はより働かなければならなかった。

（４）各項目のポイント

インタビュー項目毎の、インタビューで得られたポイントは、以下のとおりである。

① 不登校のきっかけ

不登校のきっかけとして、友人関係や対人関係による疲労やストレスといった要因、学校や家庭での環境といった要因、勉強に対するストレスや身体・精神的な不調といった要因に関する回答が見られた。

(ア) 友人関係

- 自身のお調子者のなキャラクターに悪乗りする友人からギャグを強いられたり見世物にされたりすることがあり、それが嫌で不登校になった。(Bさん)
- 林間学校に行ったときに友人に嫌いと言われたことがきっかけで、他の人もそう思っているのではないかと考えるようになった。(Fさん)
- 引っ越しに伴い転校した。不登校のきっかけは、その新しい学校に行ってから男子生徒に嫌がらせを受けたことである。(Iさん)

(イ) 対人関係による疲労やストレス

- 新しいクラスでは声の大きな生徒が物事を決めていく感じであり、自分の思うような方法で進めることができずストレスを感じていた。(Dさん)
- 人間関係の疲弊と野外行事への抵抗感がきっかけで休みはじめた。(Jさん)
- きっかけは特にないが、もともと集団の中に入るのが嫌だったことだと思う。(Lさん)

(ウ) 進学による環境の変化

- 中学校入学時に環境の変化があったことである。小6で震災があり入学が遅れたこと、入部した吹奏楽部のコンクールがありピリピリした雰囲気であったこと、勉強が分からなかったこと、小学校の時よりも学年の上下関係が強くなったことに戸惑ったことが主なきっかけである。(Aさん)
- 中学校に入学すると小学生の頃よりもクラスの人数が増え、顔見知りだった人が他のクラスに分かれてしまったこともあり、あまりクラスに馴染めなかった。(Dさん)
- 入学した中学校は他の学区から生徒が集まるような学校だったため、知らない人が多く、いじめられていた当時を思い出すこともあった。そのような状況下で、割り当てられた役員の仕事に対する責任と重圧で通学に対する意欲がなくなった。(Eさん)
- 知らない人が多い環境に慣れず、また勉強が苦手と同級生に対し劣等感のようなものを感じ休みがちになった。(Gさん)
- 不登校のきっかけは、複数の小学校からの生徒が合わさって大人数になったときに、大勢の人の中で過ごすことができなかったことである。(Lさん)

(エ) 家庭環境

- 双子の兄が先に不登校ぎみになり兄の状況を学校で聞かれることが増えたことにより、通学する意欲がなくなった。(Cさん)
- 保育園の年中あたりから通園を渋ることがあり、原因は6歳上の兄から暴力をふるわれることがあったことが考えられる。年齢が離れていたため、当時は抵抗ができず我慢することが多かった。(Hさん)
- 寂しかったことが積み重なったためだと思う。当時、祖父、祖母は現役で働いていて、また母子家庭だったため、家に一人でいることが多く、学校で嫌なことがあったときなどに、家でだれにも話ができなかったことが積み重なっていた。(Mさん)

(オ) 勉強に対するストレス

- 勉強が苦手で同級生に対し劣等感のようなものを感じ休みがちになった。(Gさん)
- 勉強を重視する学校であり、勉強についていけなくなった。また、将来の不安があり、孤立しているように感じたこともある。大学やどの分野に進みたいということも決まっていなかったため、嫌気がさしていた。(Kさん)

(カ) 身体・精神的な不調

- 中学1年生になり、いやがらせを行っていた生徒と同じクラスになり、PTSDのような症状が発症した。(Iさん)
- 人間関係のストレスが原因で、加えて、神経症のような身体症状が出てきたので、その後は学校へ行かなくなった。(Jさん)

② 不登校の継続理由

不登校の継続理由として、先生や学校を理由に挙げる方が多かった。また、親に登校することを促されなかったことを不登校の継続理由として挙げている回答も見られた。

(ア) 友人との関係

- もどる気持ちにはなかなか耐えず、学級のみんなが「まっているよ」など色紙を書いてもってきたことも嫌だった。(Aさん)
- 先生やスクールカウンセラーに話を聞いてもらっていたが、クラスの状況は変わらなかったため、戻ることが想像できなかった。(Cさん)
- 中学2年生の際に復帰しようと数日通ったが、周りが理解してくれていなかった。友達に話しかけたところ、他の生徒が、話をしないほうがよいと言うなど、通えるような環境になかった。(Iさん)

(イ) 先生や学校との関係

- 当時の副担任がややきびしい性格でもあり、校則違反で髪が長いことを指摘

されて嫌だった。バスケット部に入部したが、先輩の発言を疑問に思ったり、顧問の先生の発言と先輩の発言の矛盾があったりなど、納得ができない点があり、悩むことが多かった。(Bさん)

- 一時期、保健室登校をしていたが、その先生から「保健室は体調が悪い人が過ごす場所であり、健康な人がいるべきではない」と指摘されたことがあり、保健室登校もできなくなった (Cさん)
- 担任の先生は気が強い人で相談が難しかった。また、小学校2年生のいじめの時、終わりまでだれも助けてくれない状況があったため、それを思い出し、まただれも助けてくれないのではないかと思い、不登校が継続してしまった。(Eさん)
- 別室登校時は、中学校1年生の頃は好きな勉強や読書、パズルなど比較的自由に何をしていてもよかったが、中学校2年生になるとルールが変わり、1日2時間まで先生と1対1で勉強しなければならなくなり居心地が悪くなった。また当時お世話になっていた相談員の先生が別の学校へ異動してしまい、さらに居心地が悪くなった。(Fさん)
- 担任の先生は不登校について理解がなく、副担任の先生は、通学することが辛いという話をした際に認めてくれたが、学期中にクラスを変えろということとはできなかった。(Iさん)

(ウ) 親から登校するようすすめられず、家にいても親から注意されなかったため

- 家庭内のトラブルがきっかけとなり不登校になっていたが、兄との関係や家庭内の状況も変わらなかったため、不登校が継続したと考える。当時、親からは学校へ行きたくないのであれば、行かなくてもよいと言われていた。既に兄が不登校であったことも、そうした考えの背景にあったと思われる。(Hさん)
- 兄も不登校経験者だったため、不登校のハードルが高くなかった。両親は兄が不登校だった際の状況を知っていたため、学校へ行かない選択を認めてくれていた。(Iさん)
- 学校を行かないと楽であったため、徐々に休みはじめ、家で過ごすことが多くなった。また、両親も学校へ行きたくなければ行かなくてよいと考えていた。(Jさん)

(エ) 生活リズムの乱れによる影響

- 朝に弱く決められた時間までに登校することがつらいことも相まって、不登校が継続したと思う。(Bさん)

(オ) コロナ禍による影響

- 中学校2年生の冬にコロナ禍による休校期間があり、休校期間明けから登校できなくなった。(Gさん)

③ 不登校であるときに困っていたこと

学校での勉強や進学についての回答が見られた一方で、普段の生活、将来についての漠然とした不安、家庭内の関係性についての回答も見られた。

(ア) 学校での勉強や進学について

- 授業に出ていないので勉強について困っていた。(Aさん)
- 高校受験を考えはじめる中学校2年生の頃から不登校だったため、勉強したい思いはあった。しかしクラスには行けない自分にもどかしさを感じ、困っていた。(Cさん)

(イ) 普段の生活について

- 外に出られないこと、家族以外の人とコミュニケーションがとれないことが困ったこと。(Gさん)
- 中学生まで学校に行けていないことによる自己肯定感の低さは、高校入学後も継続して感じていた。(Hさん)

(ウ) 将来についての漠然とした不安について

- 中学校1、2年生の別室登校している間は、このままでいいのか、生きていいのかと考えることがあった。(Fさん)
- やることがなく孤独感を感じていた。同年代が学校に通っている中、自分だけ時間が止まっているように感じ、将来が不安だった。(Dさん)

(エ) 家庭内の関係性について

- 不登校が原因で祖母がより一層きびしい姿勢をとるようになり、母親が精神的に不調をきたすこととなった。今思えば、うつ症状だったのかも知れない。(Bさん)
- 下にきょうだい二人いて、悪い影響を与えかねないと思っていた。父親がきびしかったため、なぜ通学できないのかで揉めた。(Lさん)

④ 不登校であるときに受けていた支援と支援を受けての感想

不登校児童生徒に対し、学校、教育支援センター（適応指導教室、適応支援教室、支援センター等）、民間（病院、フリースクール、フリースペース等）それぞれの立場からの支援や居場所の提供をしており、総じて肯定的な評価が得られた。

(ア) 学校による支援について

- 肯定的意見
 - ① 小学2年生のころ担任の先生は非常に熱心で、週に一度の頻度で家に訪問してくれていた。学校での出来事や行事の予定等を共有してくれたため、学校

とのつながりを感じることができ、楽しかったと記憶している。(Bさん)

- ② 学校内の不登校の子が過ごす場所があり、夏休み明けからそこへ週 1 回程度通っていた。中学校 1 年生の後半は出席できそうな授業には出席しており、少しずつ通常通り通学できるようになっていった。中学校 2 年生では、休校期間を除いて全日登校できていた。(Dさん)
- ③ スクールカウンセラーに家庭状況について相談することで、気持ちは幾分か楽になった。(Eさん)
- ④ 中学校の時の学校における支援では、私が陸上部に入っていたため、リレーの選手として出て欲しいというような打診があり、ありがたいと感じた。(Jさん)

➤ 否定的意見

- ① 同級生がプリントや手紙を家に持ってきてくれることには困っていた。いじめの張本人が家に来ること、学校においでと言うことが苦痛だった。(Aさん)

(イ) 教育支援センターによる支援について

➤ 肯定的意見

- ① 適応支援教室に行くとは登校扱いになることもあり、卒業自体は問題なくできた。(Bさん)
- ② 学校へ行かず、支援センターに行けばいいと思ったときは気持ちが楽になった。それまでは同級生が勉強している間、自分は家にいることについて不安に感じていたが、支援センターで勉強できるようになって、自分の行動が認められるように感じた。(Cさん)
- ③ 支援センターへ週 3、4 通い、勉強はあまりしなかったが、通って何かをすること自体が不安感や孤独感を小さくしてくれた。(Dさん)
- ④ 地元の適応指導教室へ週 2、3 回通い、勉強したり遊んだりしていた。適応指導教室内の人間関係に問題はなく、負担も感じなかった。同じ境遇の同年代の人たちがいて、通いやすかった。(Jさん)

➤ 否定的意見

- ① 当時は、学校にあまり行かなかったが、適応支援教室には通っていた。学校に戻ることを目的とした支援が多く、居心地が良くなく、家庭状況についても相談できるような雰囲気ではなかった。(Bさん)
- ② 適応指導教室には、週に一度は学校に行くという方針があり、この方針の存在は、学校に行けない自分はダメな存在であると言われていたように感じていた。職員からも学校へ行くよう促されることがあり、同じように感じることもあった。(Hさん)

(ウ) 民間による支援について

➤ 肯定的意見

- ① 病院で行われているカウンセリングを受けた。両親以外で話をできる人がいなかったため、話を聞いてもらえる安心感があり、気持ちに余裕ができた。
(Jさん)
- ② フリースペースへ週に2、3回のペースで通い、そこでは考える機会を提供してくれたと思う。自分一人ではいると変なことを考えすぎてしまうが、他の人がいることで自分自身を見つめ直すことに集中ができた。(Kさん)
- ③ 不登校をきっかけに父親と揉めたため、心療内科に通った。その結果、家族関係を改善することができた。(Lさん)

⑤ 不登校の時にあればよかったと思う支援

不登校支援に関する情報があればよかったという回答を得た。また、学習支援や、家庭状況や生活習慣などの家庭環境に関する相談や支援を求める回答も得られた。

(ア) 不登校支援に関する情報へのアクセス

- 不登校支援に関しての情報をなかなか得ることができず、支援に関する情報が欲しいと思った。(Aさん)
- 当時は家でインターネットを利用できる環境もなかったため、情報を得る手段や場所が学校に限られていた。(Bさん)

(イ) 学習支援

- 適応支援教室があり、そこでは同じような経験を持つ人と勉強ができると聞いていたが、家からは遠くて通うことができず、行けたらよかった。(Aさん)
- 勉強した方がよかったと思うため、在宅でできる家庭教師などの支援があればよかった。(Lさん)

(ウ) 家庭環境に関する相談や支援

- 家庭状況について相談できる場所や手段について知る機会が欲しかった。親が不安定だと、子供としては何もできないので、親に対してケアができる支援があるとよかったと思う。(Bさん)
- 不登校になるきっかけがいじめや両親からの暴力ではなく、家庭内環境が要因だった。このことを考えると、不登校の子供に対してだけではなく、家族全体へのサポートがあればよかったと思う。(Hさん)

⑥ 現在の進学・就業状況

就業している方は福祉関係やフリースペースの仕事に就いているという回答が見られた。また、現在学生の回答者も、教育、福祉、心理を専攻している方が一定程度おり、不登校の経験を活かした進路が多く見られた。

(ア) 福祉に関する仕事に就業

- 現在は、フリースペースでアシスタントをしている。朝から夜まで週5日勤務。仕事内容は、子供たちと遊ぶことや、勉強支援である。拘束時間としては長いが、実働時間としては1、2時間程度働いている。(Aさん)
- 現在は、若者支援/訓練を目的とした工房にて働いている。(Bさん)
- 相談窓口にて、子供若者支援の仕事をしている。当時の経験があったので、同じように悩んでいる方の力になればということで就職した。(Jさん)

(イ) 現在在学中

- 現在は4年制大学に通っており、この3月に卒業予定である。卒業後は特別支援学校の教員として勤務する予定である。(Cさん)
- 今年の4月から心理学を学ぶため、大学に進学予定。将来は公認心理師の資格取得を目指そうと思っている。(Fさん)
- 県外の大学に通っており、今年卒業予定である。4月からは小売り系の会社に就職予定。いずれは商品開発系の仕事に従事したいと考えている。(Dさん)

⑦ これまでの進学・就業状況の履歴

中学校卒業後は通信制の高校に通う方が多かったが、全日制や定時制の高校に通ったという回答も見られた。高校卒業後は専門学校や大学に進学する回答者が多かった。また、フリースクールに通ったという回答も見られた。

(ア) 通信制・全日制・定時制高校への進学

- 中学校卒業後は、通信制の高校に通っており、週2日の午前登校を2年間、週2日の午後登校を1年間続けた。(Eさん)
- 中学校卒業後、全日制高校へ進学した。中学校の出席日数・内申点が足りなくても受けられる「不登校枠」のある高校が県内に数校あり、そのうちの一つに入学した。(Jさん)
- 中学卒業後、夜間定時制高校に進学して4年間通い卒業した。(Iさん)

(イ) 専門学校・大学への進学

- 高校卒業後は理系の専門学校に進学し、今まで約2年間通学している。(Eさん)
- 高校卒業後、大学進学し4年で卒業して社会人になった。(Jさん)
- キャリアアップのため大学へ進学した。コロナや社会情勢等に左右されにくい資格を活かした仕事に就きたいと考え、社会福祉士を取得しようと思っている。(Mさん)

(ウ) フリースクールの利用

- 大学卒業後は1年くらいひきこもっていた期間があり、その後地元のフリース

ペースに通所しはじめた。(Bさん)

- 高校卒業後、1年程フリースクールへ通って、その後フリースクール経由で紹介されたアルバイトを1年経験した。(Lさん)

⑧ 進学・就業において課題と感じたこと

進学については、不登校による学業面での不安や不足が高校ないしは大学の選択肢に影響を与えているという回答を得た。また、進学後に関しても、コミュニケーション力や自己肯定感に対する不安が、普段の生活にも影響を与えているという回答も得た。就業についても同様に、コミュニケーション力不足や自己肯定感の低下に関する回答を得たのに加え、履歴書の書き方に苦勞する、面接時に覚悟がいるなど、課題を感じているという回答が見られた。

(ア) 進学について

- 高校進学の段階で、出席日数やテストの成績/内申が進学先に大きく影響を与えており、県立高校への進学ができなかった点が自身で抱えていた困難だと思う。(Cさん)
- 不登校時代に勉強していなかった科目に関して、専門学校時代に苦勞した。(Eさん)
- 4月から入学予定の専門学校は、人とのコミュニケーションが必要になることから、初対面の人ともコミュニケーションがとれるかどうか不安である。(Gさん)
- 自己肯定感の低さが課題だと感じている。上の立場の人間から強く言われると頭が真っ白になり、何も言えなくなってしまう点も課題だと感じる。(Hさん)
- 人に相談する経験が不足していたこともあり、大学の進路選択の際に、心理学科で習う内容について十分に情報収集できておらず、入学してから期待していた内容とのギャップを感じた。(Iさん)
- 高校の選択が大学の選択にもつながってくるので、中学校のときの不登校が大学の選択にもつながるという間接的な影響があったと思う。(Jさん)

(イ) 就業について

- 大勢の人と関わる機会が少なかったこともあり、社会に出るハードルが高いと感じる。特に、就業する段階で、面接のときや電話をかけることに覚悟がいると感じた。(Aさん)
- 人付き合いと、早起きの習慣については苦手だと思っている。モチベーションの維持、努力の継続や行動力が足りないなども課題に感じている。(Bさん)
- 自分がどれ程無理なく頑張れるかについて、知る機会がなく、新しいことを

経験した際に、無理をし過ぎると感じる。(I さん)

- 就業する際に履歴書を書くことが困る。嘘は書けないが、複雑なため書きにくいと感じる。(K さん)

⑨ 進学・就業においてあってよかったと思う支援

進学に関しては、先生からの支援を挙げている回答が多かった。一方で、就業については、フリースクール等での情報提供や経験が活かされたといった回答を得た。

(ア) 進学について

- 中学校卒業後の進路について悩んでいる中、進路指導の先生をはじめ、様々な先生に協力いただき、進学先の高校に関する調査等を支援いただいた。(C さん)
- 高校の先生へ心理学を学びたいと伝えたときに、大学の一覧を教えてくれたり、進路が具体的になったときに試験の日程をプリントアウトしてくれたりした。(F さん)
- 大学で編入学を検討した際に、大学教授から当時志していた職種に近い社会福祉士について教えてくれたことがよかった。(I さん)

(イ) 就業について

- 大学卒業後に受けるようになったカウンセリングは、今も継続して受けている。カウンセリングを受けたことで、自分のことを振り返ることができたと思う。(H さん)
- フリーターとなったときに、フリースペースのスタッフに職を相談した。その後、フリースペースで求人の機会を知ることができた。(K さん)
- フリースクールに通いイベントに参加していたが、トラブルなどがあった際に、対応する力を身に付けることができた。(M さん)

⑩ 進学・就業においてあればよかった支援

進学・就業先に関する情報にアクセスできなかったことから、不登校当時に情報があればよかったとする回答が多かった。また、具体的な支援として進学・就業に向けた機会があればよかったとする回答も得た。

(ア) 進学・就業先に関する情報へのアクセス

- 当時は高校の進路が心配で、一度不登校になってしまうと高校へ進学することができないと思っていた。進路の決め方や進路先についての情報が得られる環境があるとよかった。(C さん)
- 進学先について情報があまりなく、どうやって見つけていいかわからなかつ

た。探してきたとしても学校の先生からはあまり勧められない状況だった。進学に関する情報がもっとあれば、将来に対する不安は軽減できたのではないかと考える。(Dさん)

- 当時の自分は不安でいっぱい、大学とはどういう場所かというような親とも話せない質問をしたかった。適応指導教室には通っていたが、一対一ではなく、進路について質問する機会は少なかった。(Jさん)
- 当時はインターネットで十分に調べるといった環境があまりなかったため、不登校になった際の進学・就業に関しての選択肢について教えてほしかった。(Iさん)

(イ) 進学・就業に向けた機会

- 出席日数が不足、高校進学の選択肢が少なかった。そのため、現在導入されているような適応指導教室へ行くことで出席扱いになる制度や、他の中学校に越境して通える学校に行ければよかったと思う。(Jさん)
- アルバイトや職業体験で仕事に関しての体験をする機会があればよかったと思う。自分は何ができるのだろうという悩みがあったため、機会が欲しかった。(Lさん)

⑪ 不登校経験に対する想い

不登校経験によって学べたことに関して多くのコメントを得た。一方で、進学に関して不利になったため学校へ通うことを推奨するコメントも得た。

(ア) 不登校経験によって学べたこと

- 不登校になったことで、他の人ができない経験をして視野が広がった部分もあると感じる。学校以外での学び方や過ごし方があることを知ることができたのはよかった。(Aさん)
- 不登校の経験の中で、自分のマイナス部分を受容できるようになった。自分が受け入れられなかったような他者の特性についても受け入れることができるようになったと思う。(Dさん)
- 不登校にならなかつたら出会えなかった素敵な人がいるので、無駄ではなかったと思う。また不登校になったことで日々の小さな幸せに気付けるようになったと思う。(Fさん)
- 不登校当時は、不登校であることに対しマイナスイメージがあったが、今はそうした経験が今の自分を形成していると考え、無駄ではなかったと考える。また、自分のことを俯瞰して見ることができるようになった。(Gさん)

(イ) 不登校経験によって不利になったこと

- 悪かった点は、コミュニケーション能力が高くないと思っていることである。

現在では、コロナもあり不登校の方はよりコミュニケーション能力が落ちて
いることが危惧される。不登校になると、後で努力しなければならない量が増えるため、学校に通えるならば通ったほうがよいと思う。(I さん)

- 進路選択で不利になるため、学校へ行けるなら行ったほうがよいと思う。一方で、現在は不登校でも進路の選択肢は増えてきていると思う。(J さん)

(5) 第13章のまとめ

本章では、不登校のきっかけ、継続理由、困っていた点等について、インターネット調査やオンライン調査における結果の背景にあるエピソードや具体例を記載した。

インターネット調査等では浮き彫りにならなかったものの、インタビュー調査で得られた実情がいくつかあった。その一つに、不登校時に受けていた支援に関し、インターネット調査では、「あまり手助けとならなかった」の上位に「先生」「SC」が入っていたものの、インタビュー調査では、「先生が家に訪問して学校での出来事や行事の予定を話してくれたため、学校とのつながりを感じることができた」「リレーの選手として出て欲しいと言われた」「スクールカウンセラーへ家庭状況について相談することで気持ちが楽になった」といった、先生による肯定的に捉えられた対応もあった。一方、いじめの張本人との関係構築がなされないまま、当人がプリントや手紙を家に持ってこられるといった手配等には困惑した例もあった。

また、不登校時にあればよかった支援について、インターネット調査等では明確に示されなかったが、不登校になった時に受けられる支援や支援先等に関する情報を得ることが難しいという点が挙げられ、不登校になって学校との関係が希薄になった際、相談先がなく悩みを抱え込む姿も窺えた。さらに、家庭環境に起因する不登校や、不登校に起因する家庭環境の悪化もある中、家庭に関しての相談先を見つけられない状況も見受けられた。

進学・就業については、自身の不登校の経験等を踏まえて、または活かして、不登校の子供を手助けしたり相談相手になったりするような、福祉系の進路を目指したり実際に進んだりする例が複数みられた。一方、出席日数や学力が志望先の条件に合わなかったり、人と関わる機会の少なさ等から、人付き合いや人々の中でのふるまい、また履歴書の書き方といった実務面で対応の困難さを感じたりする例も見られた。

進学・就業においてあってよかった支援については、先生が進学先の情報を教えてくれた、スクールカウンセラーが相談に乗ってくれた、といった声が聞かれた。また、フリースクールでの経験が不登校により得られなかった経験を補ったり、フリースクールの職員が相談相手になってくれたりしたという声もあった。

不登校を経験したことに関しては、視野が広がった、自分を俯瞰して見られるようになった、自分のマイナス面を受容できるようになった、他者の特性を受け入れられるようになったという肯定的な評価もあった。一方、コミュニケーション面や進路選択で課題となったという評価もあった。

第14章 支援団体へのインタビューのまとめ

本章では、支援団体の代表者等に対してインタビュー調査を実施した結果を記す。

(1) インタビュー対象団体

全国的または自治体における支援団体の中から、文部科学省担当者と協議した上で対象を選定した。

	団体名	属性
1	団体 A	公的支援（福祉）
2	団体 B	公的支援（教育）
3	団体 C	民間支援（保護者）
4	団体 D	民間支援（フリースクール）

(2) インタビュー項目

インタビュー項目は下記のとおりである。

(1) 不登校の理由や有意義と考える支援内容等	Q1：支援を通してみたときに、支援対象者の不登校の主なきっかけ、及び継続理由として考えられる事項 Q2：支援を通してみたときに、不登校である時に最も困っていると考えられる点 Q3：支援を通してみたときに、不登校の状態である時に団体として提供するとよいと考える支援内容
(2) 現在までの進路	Q1：支援を通してみたときに、支援対象者の進学・就業状況 Q2：支援を通してみたときに、支援対象者が進学・就業において課題と感じるが多いこと Q3：支援を通してみたときに、進学・就業に際して団体として提供するとよいと考える支援内容

(3) 各支援団体の活動状況等

各団体の不登校にまつわる支援内容や特徴的な進学・就業状況等は、以下のとおりである。

団体 A（公的支援（福祉））

- ・ 人によって不登校のきっかけは様々である。学校のペースについていけない、クラスでのトラブル、友人関係、学習のつまずき、教員との関係、体調不良、事故・病休、長期休暇の影響、親子関係、発達面に関することなど様々である。
- ・ 一つの理由ではなく、複数の理由が重なって不登校になることも多い。また、どうして学校へ行けないのか、自分でも分からない場合がある。そのため、理由によらず、その子供はどのように心と体を休める必要があるのかを考えている。不登校の理由を探したり聞き出したりするよりも、今の状態を理解することに努め、必要な

支援が届けることが重要と感じる。

- ・ きっかけとしてきびしく注意されたり、分かってもらえなかったりということがあ
る。そういった子供への働きかけとして、例えば、毎日電話を掛けることは追い詰
めと思うが、学校が何も支援しない場合は見放された子供は感じてしまう。
- ・ 正確に自分の状態を答えられないこと、周囲の期待に応えられないことが困ってい
ることだと思う。あとは、周囲の理解が得られないこと。学校へ行きたくても、体
が動かず、気持ちも落ち込み、自信がもてない状態で、自分ではうまくいかないとい
うことは分かるが、次にどうすればよいのか分からない。親に迷惑をかけている
と感じ、そのことを辛く思っていると思う。
- ・ 団体としては、相談できる場所があるということを伝えている。また、社会や仲間
との関わりを学べる場所、安心して過ごせる場所を提供することを行っている。
- ・ 活動については、子供が体を動かして取り組めることや、興味のあることに力いっ
ぱい取り組めるように支援している。また、ありのままを受け入れて寄り添ってく
れる大人がいることが重要と考えている。学習の支援も行っており、わかったとい
うことを味わってもらうことが、自信を取り戻すきっかけになると感じている。
- ・ 子供目線では、不登校になると自分だけかと思ってしまうことが多いが、自立支援
教室があることで、自分に似た境遇の人がいることがわかり、安心につながる場合
もある。
- ・ 通信制高校が非常に増えていて、進路の選択肢が増えていると感じる。通学時間や
日数などを自分で選べること、不登校を経験した子への理解があり、手厚い支援が
受けられることもある。そのため、通信制高校に進学する子も多い。
- ・ コロナ禍を経て、少人数のほうが居心地がよい、大人数は怖いという子供もいる。
コロナ禍でオンライン授業をやっている、急に学級に入った際に大人数に囲まれる
ことになるため、やりにくい子供もいると思う。
- ・ 就業については、自分が不登校を経験したため、今悩んでいる人に貢献したいとい
う思いは職種によらず感じていることだと思う。
- ・ 進学については、進路に関する情報不足がある。家族が全日制高校にこだわり、理
解を得られず子供が辛い思いをすることもある。

団体B（公的支援（教育））

- ・ 不登校のきっかけは十人十色で様々である。本人への聞き取り調査の結果では、家
庭環境、友人関係、学習面、学校や先生との関係、無気力、不安がきっかけとして
挙げられる。その中でも友人関係、親子関係、学習面、無気力が多い傾向である。
- ・ コロナ禍後に小学校低学年の通所の希望が増えたように思う。小学校低学年のタイ
ミングや幼稚園のタイミングでコロナによるケースもあるかもしれない。出席停止
期間となり、それを契機に友人と会えなくなり、不登校になったのではないかと推

測する。また世の中の傾向として、学校に無理して行く必要はないという風潮が出てきたこともそうした傾向を後押ししているように感じる。

- ・ 市全体の取り組みとして、中学校の校内に、校内フリースクールのような居場所を設置するようになった。中学生に関する通所の希望は割合として減っているが、要因としてはそのこともあるのではないかと考える。
- ・ 不登校の子供への支援だけでなく、家庭への支援も実施している。適応指導教室と並行して、個別の保護者相談/子供相談を実施しており、2週間に一度、50分のカウンセリングをしている。
- ・ 相談員は子供を認めて自己肯定感が上がるような声かけを意識している。また、自分で決定し達成するような体験ができるように促している。
- ・ 支援において気を付けている点として、子供に対し、職員からは学校の話をしていないようにしている。
- ・ 子供たちは進学後に毎日通うことができるかどうか不安に感じている。また、学習が原因で不登校になった子供については、進学後も学校のペースについていけるかどうか不安視しているように見える。
- ・ 進路指導は中学校がやるべきという考えがあるため、当センターでは進路指導をしないこととしている。
- ・ 学校が進路指導を行えるよう、中学校3年生を対象に、10月～12月頃に学校へ子供たちに関する情報を共有する場を設定している。
- ・ センターのOBOGを呼んで、卒業後に社会でどのように活躍されているかといった体験談を共有してもらうようなイベントを毎年2月中旬頃に開催している。

団体C（民間支援（保護者））

- ・ 不登校のきっかけは特定の一つのケースではなく、人によって様々である。学校内の人間関係や勉強についていけないこと、すごく頑張っていてある日、力尽きてしまうこともある。
- ・ 小学校の低学年の相談については昨年くらいから増えてきている。それまでは高学年中高生の相談が主だった。相談については保護者から受けることが多い。また学校の先生からの紹介もしばしばある。
- ・ 初めてフリースクールに来た子供は、ほとんど何も言えず黙っている子供も多い。自己否定感でいっぱいのため、親や教師などまわりの大人に対して自分の本当の気持ちと言えなくなったり、苦しんでいる子供が多い。
- ・ 学校に入学した当初は皆通学に対する意欲はあったと思う。そのような状況下で学校に行くことができないということが苦しうに見える。ストレスから頭痛や腹痛を訴えるような子供も存在する。
- ・ しっかり休んで元気になってくると子供は自ら動きだしたくなってくる。子供が興

味のあること、やりたいことを積極的にすることでさらに元気になる。それを受け止めて、実行できるよう環境を用意してあげることが大切である。

- ・ 興味があることを実現し、その喜びを感じることで、さらに元気になることができる。
- ・ 中学校の先生は通信制の高校についてあまり知らないことが多い。
- ・ 就業については、不登校経験のある子供は、すぐに社会に出るという点に関しては自信がないところもあると思う。
- ・ 不登校になって早くにフリースクールとつながることができた子供の進学/就業状況は、よい傾向にある。
- ・ 不登校の子供と親との良好な関係も重要だと考える。親からきびしい声をかけられてしまうと、子供は自分に自信が持てないまま大人になってしまうためである。
- ・ 子供が不登校になってしまった際は、親が気持ちを切り替えて子供の状況を受け入れたり、学校外の居場所・親の会を紹介したりするようにしてあげることで、子供は回復が早くなる傾向にあると思う。そのような対応を実現するためにも、不登校の子供をもつ親同士でコミュニケーションをとり、情報交換することも重要だと考える。
- ・ 学校の先生の中には全日制の高校に行かなければいけないという考えを持つ人もいるため、子供たちには通信制の高校に行って成功している人の話などをしてあげることがよいと思う。
- ・ 月に一度、不登校の子供をもつ親のための会を開催しているが、その中で孤独感を感じている親がいた。国や県が子供を支援してくれているような実感がなく、自分の子供のことはだれが見てくれているのだろうかという孤独感を感じて寂しく感じていると伺った。このあたりの支援については、学校の先生方をお願いするのは業務量から大変だと思うので、子供の所属先を教育委員会とするなど、別の支援の方法があったらありがたい。

団体D（民間支援（フリースクール））

- ・ 不登校の原因は多様であり、一つの理由ではなく、いくつかの理由が複合している。学校や家庭環境の要因が大きいと思われる。
- ・ 近年の動向としては、小学校低学年の児童の支援や相談が増えている。中でも、困窮世帯、経済的な負担の大きい多子世帯やひとり親世帯の不登校が増えてきているように思う。これらの世帯では、母親を支える父親がいないことや、兄弟がいる中で自分だけ不登校ということの疎外感が、子供にとって家庭の中での居心地の悪さを招いている。
- ・ きっかけとして特徴的なのは、成績がよい児童が偏差値の高い学校に行き、普通の成績になって成績が落ちていくと、自己否定してしまい不登校になる生徒がいる。

その後、ひきこもりになるなど長引くことが多いと思う。

- ・ 10 年程前から、いじめの傍観者が不登校になるケースも目立ってきた。次は自分がいじめの対象になると思うことや、いじめを止められない罪悪感から、不登校になってしまうようである。
- ・ 多動的でにぎやかな子がいる学級では、その子が不登校になるかどうかは、学級内で受け入れられるかが重要だと思う。学級が多様性を認められるかが重要だが、学校の中では未だに多様性は認められていない。
- ・ 経済的に困窮している家庭が多い。不登校離職というものがある。親は家に一人でいさせるのが不安で、母親が仕事に行けず家庭の収入は減り、不登校児童の昼ご飯が出ないので出費が嵩む。
- ・ 経済的困窮により、フリースクールに通えない子がいる。多子世帯の全員を入れるわけにもいかないが、どの子供を入れるかということで葛藤がある。
- ・ 子供や親が不登校のイメージに囚われていて困っていることも課題の一つだと思う。不登校になったらキャリアに傷がつくのでフリースクールに行けないと思う子供もいる。自分で不登校に関するレッテルで苦しんでいる。
- ・ 不登校から脱却できている当事者は、社会に出てからは困っていない印象。一方で、脱却できていない子供は成人になってからフリースクールに来ることもある。
- ・ 大人であるスタッフが一緒に楽しむようにしている。子供にとってのロールモデルを見つけることが重要だと思う。両親や学校の先生などの教える立場にいる人だけではなく、一緒に笑って過ごしている大人を見ると将来楽しいと思えると考えます。
- ・ 子供に教えるということではなく、子供の主体性を重要だと思っているため、意欲を伸ばすことを重要視している。
- ・ 不登校経験があったが、その後何とかなっている子供たちは、順調に進んでいった子供たちよりもひきこもりになりにくいのではないかなと思う。順調に進学したが、就職した先がブラックでひきこもる人もいると思う。一方で、ひきこもりのうち、不登校経験者は少ないように思う。
- ・ 20 歳で相談に来るケースもあるが、課題であると思う。通信制高校を出た後に社会とのつながりがなくなる子供がいるように思う。
- ・ 自分のやりたいことが分かるような体験を提供できればよいと思う。農業体験を提供したおかげで、大学進学で農業関連を選択するという子供いた。

(4) 第 14 章のまとめ

本調査では、不登校の子供の支援を行っている公的及び民間施設へのインタビューも行った。

不登校のきっかけや継続理由については、不登校経験者へのインタビューでもあったように、支援する側でも、要因が様々であり複数の要因が重なっているという受け止めがさ

れていた。また、いじめられた当事者ではなく、いじめの傍観者が不登校になるケースも目立ってきたということで、現に不登校経験者のインタビューでも聞かれた例に言及された。さらに、コロナ禍により友人と会えなくなった影響や、無理して学校に行く必要はないという風潮が、低学年の子供の不登校の増加傾向を後押ししているという指摘がなされた。

不登校時に困っていると思われる事項については、親や先生に本当の気持ちと言えない、周囲の理解が得られない、学校に行きたくても行けないなど、コミュニケーション面に困難があり、つらい気持ちを抱え込んでいる状況がある点について指摘された。

支援団体として提供するとよいと考える支援内容としては、公的機関（教育支援センター等）からは2団体とも、相談できる場所や安心できる居場所の提供、自身や自己肯定感が持てるような働きかけが重要という考えが得られた。民間施設（フリースクール等）からは2団体とも、興味や意欲を引き出し、主体性をもって行動に移すような機会や経験を与えることが望まれるという考えが得られた。

進学・就業に関する支援についての課題としては、進路指導を学校に行くきっかけにしてもらいたいという支援団体の思いと、支援団体で進路指導をしてもらいたいという利用者の思いとの間に葛藤があるという声があった。また、不登校の状態からいきなりフルタイムの就業をすることには困難がある場合があるという指摘がなされた。

進学・就業に関する支援については、パンフレットの配布、ガイダンスやOBOG体験談等を開催して積極的な情報提供を行い、主体的な選択ができるような手助けをしていた。

第Ⅳ部 まとめ

第15章 調査のまとめ

インターネット調査やオンライン調査でみたように、友人関係が不登校のきっかけや継続の最も大きな要因であった。一方、インタビュー調査では対人関係の難しさを経て自分自身のこと及び他者との関わり方を見つめ直すことで、自身の進路につながるような経験をしているということが得られた。これは、人間関係の構築に関し、不登校になった時から進学・就業先を決める時に至るまで問題意識として抱えている可能性と、そうした経験を通じて成長に至っている人もいることを示しており、不登校支援においては、人間関係やコミュニケーション関係の構築についての支援が重要であると言える。

インタビュー調査においては、先生からの働きかけやスクールカウンセラーの受け止めが本人の救いとなった例がみられ、不登校の期間中も学校の関与が依然重要であることが示された。一方で、いじめが原因となっている際の双方の関係構築の試みには慎重な検討を要することも示された。また、進路については必ず考えなければならない事項の一つであるが、当人、保護者、学校、支援者間で対応に関する認識の共有が図られていない状況も見られたことから、関係者間の一層の連携やコミュニケーションが望まれる。

第Ⅴ部 資料編

アンケート調査票

不登校に関するアンケート				
質問番号	回答形式	選択肢	質問項目と選択肢	
<0>基本項目				
SC1	単数回答		あなたの性別を教えてください。	
		1	男性	
		2	女性	
		3	その他（どちらともいえない・わからない・答えたくない）	
SC2	自由回答		あなたの年齢を教えてください。※令和7年1月末時点	
			（ ）歳（18歳以上50歳代までを本調査の対象とする）	
SC3	単数回答		小・中学校において不登校の経験はありますか。(注釈)「不登校」とは、 病気や経済的理由以外の何らかの理由で、年度間に30日以上学校を欠席した状況のこと を指します。この定義も参照し、当てはまると思う場合には「ある」と回答してください。	
		1	ある（「ある」と回答した方を本調査の対象とする）	
		2	ない	
本調査				
<1>基本状況、小学校・中学校の時の様子				
Q1			小学校と中学校の出席状況についてお聞きします。それぞれについて、あなたの状況に一番近い番号を一つ選んでください。(注釈)学年によって欠席頻度が異なる場合には、欠席日数が最も多かった学年を想定して回答してください。	
Q1-a	単数回答		小学校の時はどのくらい学校を休みましたか。	
		1	ほとんど休まなかった（目安：週1日未満の欠席、年間30日未満の欠席）	
		2	少し休んだ（目安：週1～2日未満の欠席）	
		3	半分程度休んだ（目安：週2～3日程度の欠席）	
		4	かなり休んだ（目安：週3～4日未満の欠席）	
		5	ほとんど休んだ（目安：週5日程度の欠席）	
Q1-b	単数回答		中学校の時はどのくらい学校を休みましたか。	
		1	ほとんど休まなかった（目安：週1日未満の欠席、年間30日未満の欠席）	
		2	少し休んだ（目安：週1～2日未満の欠席）	
		3	半分程度休んだ（目安：週2～3日程度の欠席）	
		4	かなり休んだ（目安：週3～4日未満の欠席）	
		5	ほとんど休んだ（目安：週5日程度の欠席）	
Q1-c	単数回答		中学校3年生の時は不登校でしたか。(注釈)「不登校」とは、 病気や経済的理由以外の何らかの理由で、年度間に30日以上学校を欠席した状況のこと を指します。この定義も参照し、当てはまると思う場合には「はい」と回答してください。	
		1	はい	
		2	いいえ	
Q2	複数回答		あなたが学校を休みはじめた時のきっかけは何ですか。	
			a.思いあたるものをすべて選択してください。	b.最もあてはまるものを一つ選択してください。
		1	友人との関係（いやがらせやいじめ）	
		2	友人との関係（いやがらせやいじめを除く）	
		3	先生との関係（先生が怒る、注意がうるさい、体罰など）	
		4	先生との関係（先生と合わなかったなど）	
		5	勉強が分からなかった（授業についていけなかった、成績が良くなかったなど）	
		6	授業が面白くなかった	
		7	学校のきまりなどの問題（学校の校則がきびしいなど）	
		8	学校生活に対してやる気が出なかった	
		9	入学、転校、進級した先の学校や学級が自分に合わなかった	
		10	家族の生活環境の変化（父親や母親の単身赴任、家族の別居、親の転職や失業などの経済的な問題など）	
		11	親との関係（親が怒る、親の言葉や態度への反発、親との会話がほとんどないなど）	
		12	家庭環境に起因するもの（両親の不和、祖父母と父母の不和など）	
		13	精神的な不調（漠然とした不安や気持ちの落ち込みなど）	
		14	身体的な不調（学校に行こうとすると腹痛や頭痛に襲われたなど）	
		15	障害による学習上・生活上の困難	
		16	生活リズムの乱れ（朝起きられないなど）	
		17	インターネットやメール、ゲームなどの影響（一度始めると止められない、学校より楽しいなど）	
		18	その他（具体的にご記入ください）	
19	わからない			
Q3			あなたが最初に学校を休みはじめたのは、何年生の何月頃ですか。学校と時期のそれぞれ一つずつ選択してください。覚えていない場合は、最も近いと思われる回答を選択ください。	
Q3-a	単数回答		学年	
		1	小学校1年生	
		2	小学校2年生	
		3	小学校3年生	
		4	小学校4年生	
		5	小学校5年生	
		6	小学校6年生	
		7	中学校1年生	
		8	中学校2年生	
		9	中学校3年生	
Q3-b	単数回答		時期	
		1	4月～7月	
		2	8月～12月	
		3	1月～3月	

Q4	複数回答	不登校が継続した要因について、今、ふりかえてみて、あなたにあてはまるものすべてを選択してください。 a.あてはまると思うものをすべて選択してください。 b.最もあてはまるものを一つ選択してください。		
		1	友人との関係（いやがらせやいじめ）	
		2	友人との関係（いやがらせやいじめを除く）	
		3	先生との関係（先生が怒る、注意がうるさい、体罰など）	
		4	先生との関係（先生と合わなかったなど）	
		5	勉強が分からなかった（授業についていけなかった、成績が良くなかったなど）	
		6	授業が面白くなかった	
		7	周囲の友人の影響（学校に行かないグループと近かった、友人に遊びに誘われたなど）	
		8	学校生活に対するやる気が出なかったため	
		9	学校へ行かないことをあまり悪く思わなかったため	
		10	だれかが迎えに来たり強く催促されたりすると学校へ行くが、長続きしなかったため	
		11	精神的な不調（漠然とした不安や気持ちの落ち込みなど）	
		12	身体的な不調（学校に行こうとすると腹痛や頭痛に襲われたなど）	
		13	生活リズムの乱れ	
		14	なぜ学校に行かなくてはならないのかが理解できなかったため	
		15	自分の好きな方向を選んだため	
		16	親から登校するようすすめられず、家にも親から注意されなかったため	
		17	学校から登校するように働きかけがなかったため	
		18	保護者やまわりの人に学校を休んでもいいと助言されたため	
		19	障害による学習上・生活上の困難	
		20	その他（具体的に記入ください）	
		21	わからない	
Q5	複数回答	不登校だった当時、次のような場所や人に相談したことはありますか。 a.相談したことがあるものをすべて選択してください。 b.相談した結果、どれくらい手助けになりましたか。次の1.～3.の中からいちばん近いものをひとつ選択してください。		
		1	教育支援センター（通応指導教室）・教育相談所	1. かなり手助けになった 2. 少し手助けになった 3. あまり手助けにならなかった
		2	児童相談所、福祉事務所	1. かなり手助けになった 2. 少し手助けになった 3. あまり手助けにならなかった
		3	保健所・保健センター	1. かなり手助けになった 2. 少し手助けになった 3. あまり手助けにならなかった
		4	病院・診療所	1. かなり手助けになった 2. 少し手助けになった 3. あまり手助けにならなかった
		5	民間施設（「フリースクール」と呼ばれる場所など）	1. かなり手助けになった 2. 少し手助けになった 3. あまり手助けにならなかった
		6	1～5.以外で当時の在籍校以外の心理相談・カウンセリングなどをする機関	1. かなり手助けになった 2. 少し手助けになった 3. あまり手助けにならなかった
		7	学校の先生（担任の先生や保健室の先生など）	1. かなり手助けになった 2. 少し手助けになった 3. あまり手助けにならなかった
		8	学校にいる相談員（スクールカウンセラーなど）	1. かなり手助けになった 2. 少し手助けになった 3. あまり手助けにならなかった
		9	SNSや電話相談	1. かなり手助けになった 2. 少し手助けになった 3. あまり手助けにならなかった
		10	その他（具体的に記入ください）	1. かなり手助けになった 2. 少し手助けになった 3. あまり手助けにならなかった
		11	何も利用しなかった	
Q6	複数回答	不登校だった当時に欲しかった相談や手助けについて、あてはまるものすべてを選択してください		
		1	進学するための相談や手助け	
		2	仕事につくための相談や手助け	
		3	学校の勉強についての相談や手助け	
		4	自分の気持ちをはっきり表現したり、人とうまくつきあったりするための方法についての相談や手助け	
		5	友人と知り合えたり、仲間と過ごせたりする居場所についての情報提供	
		6	精神的・身体的な不調についての相談や手助け	
		7	規則正しい生活習慣についての相談や手助け	
		8	その他（具体的に記入ください）	
		9	とくにない	
Q7	単数回答	今、考えると、小・中学生の頃、不登校で学校に行かなかったことをどう思いますか。次の1.～5.の中からいちばん近いものをひとつ選択してください。		
		1	行けばよかった	
		2	しかなかった	
		3	行かなくてよかった	
		4	何とも思わない	
		5	その他（具体的に記入ください）	
< 2 > 中学卒業から現在までの様子				
Q8-a	単数回答	中学校を卒業してすぐの時点（4月時点）で、あなたの進路状況についてあてはまるものをひとつ選択してください。		
		1	就職せずに高等学校等に進学した	
		2	高等学校等に進学せずに就職した	
		3	就職して働きながら、高等学校等に進学もした	
		4	高等学校等に進学もせず、就職もしなかった	
		5	その他（具体的に記入ください）	
Q8-b	単数回答	(Q8-aで1または3を回答した者のみ) どの高等学校等に進学しましたか。ひとつ選んでください。		
		1	全日制高校	
		2	定時制高校	
		3	通信制高校	
		4	中等教育学校後期課程	
		5	高等専門学校	
		6	専修学校（一般課程・高等課程）・各種学校	
		7	特別支援学校高等部	
Q9	単数回答	あなたの最終学歴は次のどれにあたりますか。		
		1	中学校卒業	
		2	高等学校卒業（中等教育学校後期課程、専修学校の高等課程、特別支援学校高等部を含む）	
		3	専修学校（専門課程）卒業・高等専門学校卒業・短期大学卒業	
		4	専修学校（一般課程）卒業・各種学校卒業	
		5	大学卒業	
		6	大学院 修士課程卒業・大学院 博士後期課程修了（満期退学含む）	
		7	その他（具体的に記入ください）	

Q10	複数回答	あなたは、これまでに次のような経験はありますか。あてはまるものすべてを選択してください。	
		1	高等学校等での不登校
		2	高等学校等での留年
		3	高等学校等での中退
		4	高等学校等への転編入学
		5	高等学校卒業程度認定試験（旧大学入学資格検定）の受験
		6	大学・短大・専門学校での留年
		7	大学・短大・専門学校での中退
		8	大学・短大・専門学校への転編入学
		9	休職
		10	無職
		11	いずれも該当しない
<3>現在の生活			
Q11-a	複数回答	現在の就業状況や就学状況について、あてはまるものすべてを選択してください。	
		1	正規社員・職員として民間企業や官公庁などに勤めている
		2	労働者派遣事業者の派遣社員
		3	パート、アルバイトとして民間企業や官公庁などに勤めている
		4	会社などの役員
		5	家業を手伝っている
		6	自分で会社などを経営している
		7	主婦、主夫
		8	学生など
		9	その他（具体的に記入ください）
		10	とくに仕事についたり、学校に通ったりなどはしていない
Q11-a	複数回答	あなたは、全体として見ると、現在の生活にどの程度満足していますか。あてはまるものを1つ選んでください。	
			満足している
			まあ満足している
			やや不満だ
			不満だ
Q12	複数回答	中学を卒業して以降の生活において、どのような人のアドバイスやはげましが支えになりましたか。	
		a.あてはまると思うものをすべて選択してください。	
		b.最もあてはまるものを一つ選択してください。	
		1	家族
		2	友人
		3	職場の上司・同僚
		4	学校の先生
		5	学校の相談員（スクールカウンセラーなど）
		6	自治体の相談員
		7	医師
8	その他（具体的に記入ください）		
9	とくにない		
Q13		小・中学生の頃に不登校を経験したことで、中学校卒業後今までに、次のようなことがありましたか。a～e.のそれぞれのことであてはまるものをひとつずつ選んでください。	
Q13-a	単数回答	学業（受験、資格試験など）で苦勞した	
		1	おおいにあった
		2	ある程度あった
		3	あまりなかった
		4	ほとんどなかった
Q13-b	単数回答	仕事（就職活動を含む）で苦勞した	
		1	おおいにあった
		2	ある程度あった
		3	あまりなかった
		4	ほとんどなかった
Q13-c	単数回答	体力が低下したり不足したりして苦勞した	
		1	おおいにあった
		2	ある程度あった
		3	あまりなかった
		4	ほとんどなかった
Q13-d	単数回答	生活リズムが乱れ苦勞した	
		1	おおいにあった
		2	ある程度あった
		3	あまりなかった
		4	ほとんどなかった
Q13-e	単数回答	人との関わりに不安を感じたり、人と関わりをもつことに苦勞した	
		1	おおいにあった
		2	ある程度あった
		3	あまりなかった
		4	ほとんどなかった
Q13-f	単数回答	成長した、視野が広がった	
		1	おおいにあった
		2	ある程度あった
		3	あまりなかった
		4	ほとんどなかった
Q13-g	単数回答	人に優しくなった、人の痛みが分かるようになった	
		1	おおいにあった
		2	ある程度あった
		3	あまりなかった
		4	ほとんどなかった

集計表

<インターネット調査>

SC1 あなたの性別を教えてください。

	回答数	割合
男	8,822	48.5%
女	9,180	50.4%
その他	205	1.1%
総数	18,207	100%

SC2 あなたの年齢を教えてください。※令和7年1月末時点

	回答数	割合
18～19 歳	211	1.2%
20～24 歳	1,037	5.7%
25～29 歳	2,087	11.5%
30～34 歳	2,258	12.4%
35～40 歳	2,925	16.1%
40～44 歳	2,517	13.8%
45～49 歳	2,496	13.7%
50～54 歳	2,721	14.9%
54～59 歳	1,955	10.7%
総計	18,207	100%

SC3 小・中学校において不登校の経験はありますか。(注釈)「不登校」とは、病気や経済的理由以外の何らかの理由で、年度間に30日以上学校を欠席した状況のことを指します。この定義も参照し、当てはまると思う場合には「ある」と回答してください。

	回答数	割合
ある	18,207	100%
ない	0	0.0%
総数	18,207	100%

Q1 小学校と中学校の出席状況についてお聞きします。それぞれについて、あなたの状況に一番近い番号を一つ選んでください。(注釈) 学年によって欠席頻度が異なる場合には、欠席日数が最も多かった学年を想定して回答してください。

	Q1-a：小学校の時		Q1-b：中学校の時	
	回答数	割合	回答数	割合
1. ほとんど休まなかった（目安：週 1 日未満の欠席、年間 30 日未満の欠席）	6, 170	33. 9%	2, 576	14. 1%
2. 少し休んだ （目安：週 1 ～ 2 日未満の欠席）	6, 768	37. 2%	6, 531	35. 9%
3. 半分程度休んだ （目安：週 2 ～ 3 日程度の欠席）	2, 285	12. 6%	3, 277	18. 0%
4. かなり休んだ （目安：週 3 ～ 4 日未満の欠席）	1, 532	8. 4%	2, 397	13. 2%
5. ほとんど休んだ （目安：週 5 日程度の欠席）	1, 452	8. 0%	3, 426	18. 8%
総数	18, 207	100%	18, 207	100%

Q1-c 中学校 3 年生の時は不登校でしたか。

	回答数	割合
はい	11, 024	60. 5%
いいえ	7, 183	39. 5%
総数	18, 207	100%

Q2 あなたが学校を休みはじめた時のきっかけは何ですか。

	Q2-a：思い当たるものすべて			Q2-b：最もあてはまるもの一つ		
	総数	回答数	割合	総数	回答数	割合
1. 友人(いやがらせやいじめ)	18, 207	8, 644	47. 5%	18, 132	6, 594	36. 4%
2. 友人(いやがらせやいじめを除く)	18, 207	3, 634	20. 0%	18, 132	1, 386	7. 6%
3. 先生(怒る、うるさい、体罰)	18, 207	2, 940	16. 1%	18, 132	918	5. 1%
4. 先生(相性)	18, 207	3, 719	20. 4%	18, 132	861	4. 7%
5. 勉強	18, 207	2, 684	14. 7%	18, 132	632	3. 5%

6. 授業	18,207	3,066	16.8%	18,132	582	3.2%
7. きまり	18,207	1,503	8.3%	18,132	299	1.6%
8. やる気	18,207	4,461	24.5%	18,132	1,396	7.7%
9. 合わなかった	18,207	1,588	8.7%	18,132	481	2.7%
10. 環境の変化	18,207	1,352	7.4%	18,132	331	1.8%
11. 親	18,207	1,714	9.4%	18,132	294	1.6%
12. 家庭環境	18,207	1,756	9.6%	18,132	389	2.1%
13. 精神的不調	18,207	4,547	25.0%	18,132	1,496	8.3%
14. 身体的不調	18,207	2,991	16.4%	18,132	809	4.5%
15. 障害	18,207	550	3.0%	18,132	153	0.8%
16. 生活リズム	18,207	1,879	10.3%	18,132	426	2.3%
17. ネット等	18,207	577	3.2%	18,132	149	0.8%
18. その他	18,207	248	1.4%	18,132	198	1.1%
19. わからない	18,207	738	4.1%	18,132	738	4.1%

Q3 あなたが最初に学校を休みはじめたのは、何年生の何月頃ですか。学校と時期のそれぞれ一つずつ選択してください。覚えていない場合は、最も近いと思われる回答を選択ください。

Q3-a：学年	回答数	割合
1. 小学校1年生	1,173	6.4%
2. 小学校2年生	756	4.2%
3. 小学校3年生	1,562	8.6%
4. 小学校4年生	1,945	10.7%
5. 小学校5年生	2,554	14.0%
6. 小学校6年生	1,667	9.2%
7. 中学校1年生	3,013	16.5%
8. 中学校2年生	3,578	19.7%
9. 中学校3年生	1,959	10.8%
総数	18,207	100%

Q3-b：時期	回答数	割合
1. 4月～7月	7,877	43.3%
2. 8月～12月	8,396	46.1%
3. 1月～3月	1,934	10.6%
総数	18,207	100%

Q4 不登校が継続した要因について、今、ふりかえてみて、あなたにあてはまると思うものすべてを選択してください。

	Q4-a：あてはまると思うものすべて			Q4-b：最もあてはまるもの一つ		
	総数	回答数	割合	総数	回答数	割合
1. 友人(いやがらせやいじめ)	18,207	8,086	44.4%	18,151	6,260	34.5%
2. 友人(いやがらせやいじめを除く)	18,207	3,433	18.9%	18,151	1,151	6.3%
3. 先生(怒る、うるさい、体罰)	18,207	2,893	15.9%	18,151	907	5.0%
4. 先生(相性)	18,207	3,965	21.8%	18,151	982	5.4%
5. 勉強	18,207	2,701	14.8%	18,151	679	3.7%
6. 授業	18,207	2,835	15.6%	18,151	609	3.4%
7. 友人(影響)	18,207	1,250	6.9%	18,151	415	2.3%
8. やる気	18,207	4,390	24.1%	18,151	1,385	7.6%
9. 悪意なし	18,207	1,935	10.6%	18,151	391	2.2%
10. 断続的な登校	18,207	925	5.1%	18,151	116	0.6%
11. 精神的不調	18,207	4,843	26.6%	18,151	1,915	10.6%
12. 身体的不調	18,207	2,958	16.2%	18,151	838	4.6%
13. 生活リズム	18,207	1,823	10.0%	18,151	385	2.1%
14. 登校への疑問	18,207	1,645	9.0%	18,151	358	2.0%
15. 好みの選択	18,207	665	3.7%	18,151	142	0.8%
16. 親からの注意不足	18,207	643	3.5%	18,151	103	0.6%
17. 学校からの注意不足	18,207	502	2.8%	18,151	51	0.3%
18. 助言	18,207	624	3.4%	18,151	119	0.7%
19. 障害	18,207	473	2.6%	18,151	184	1.0%
20. その他	18,207	250	1.4%	18,151	209	1.2%
21. わからない	18,207	952	5.2%	18,151	952	5.2%

Q5 不登校だった当時、次のような場所や人に相談したことはありますか。a. 相談したことがあるものをすべて選択してください。(いくつでも)

	回答数	割合
1. 教育支援センター	1,762	9.7%
2. 児相	1,255	6.9%
3. 保健所	734	4.0%
4. 病院	2,190	12.0%
5. 民間施設	1,338	7.3%
6. その他機関	938	5.2%
7. 先生	3,842	21.1%
8. 学校の相談員	2,003	11.0%
9. SNS	557	3.1%
10. その他	334	1.8%
11. なし	9,307	51.1%
総数	18,207	—

Q5-1b 相談した結果、どれくらい手助けになりましたか。次の1.～3.の中からいちばん近いものをひとつ選択してください。

	総数	かなり手助けになった		少し手助けになった		あまり手助けにならなかった	
		回答数	割合	回答数	割合	回答数	割合
Q5-aで「なし」以外を回答した者	8,900	-	-	-	-	-	-
1. 教育支援センター	1,762	498	5.6%	697	7.8%	567	6.4%
2. 児相	1,255	294	3.3%	516	5.8%	445	5.0%
3. 保健所	734	201	2.3%	369	4.1%	164	1.8%
4. 病院	2,190	459	5.2%	890	10.0%	841	9.4%
5. 民間施設	1,338	402	4.5%	614	6.9%	322	3.6%
6. その他機関	938	218	2.4%	462	5.2%	258	2.9%
7. 先生	3,842	738	8.3%	1,544	17.3%	1,560	17.5%
8. 学校の相談員	2,003	404	4.5%	878	9.9%	721	8.1%
9. SNS	557	137	1.5%	252	2.8%	168	1.9%
10. その他	334	163	1.8%	112	1.3%	59	0.7%

Q6 不登校だったときに欲しかった相談や手助けについて、あてはまるものすべてを選択してください。(いくつでも)

	回答数	割合
1. 進学するための相談や手助け	3,309	18.2%
2. 仕事につくための相談や手助け	1,788	9.8%
3. 学校の勉強についての相談や手助け	4,063	22.3%
4. 自分の気持ちをはっきり表現したり、人とうまくつきあったりするための方法についての相談や手助け	6,068	33.3%
5. 友人と知り合えたり、仲間と過ごせたりする居場所についての情報提供	3,792	20.8%
6. 精神的・身体的な不調についての相談や手助け	5,645	31.0%
7. 規則正しい生活習慣についての相談や手助け	1,369	7.5%
8. その他	362	2.0%
9. とくにない	5,705	31.3%
総数	18,207	—

Q7 今、考えると、小・中学生の頃、不登校で学校に行かなかったことをどう思いますか。次の1.～5.の中からいちばん近いものをひとつ選択してください。

	回答数	割合
1. 行けばよかった	3,013	16.5%
2. しかたがなかった	6,028	33.1%
3. 行かなくてよかった	4,739	26.0%
4. 何とも思わない	4,278	23.5%
5. その他	149	0.8%
総数	18,207	100%

Q8-a 中学校を卒業してすぐの時点（4月時点）で、あなたの進路状況についてあてはまるものをひとつ選択してください。

	回答数	割合
1. 就職せずに高等学校等に進学した	14,132	77.6%
2. 高等学校等に進学せずに就職した	1,667	9.2%
3. 就職して働きながら、高等学校等に進学もした	1,213	6.7%
4. 高等学校等に進学もせず、就職もしなかった	1,117	6.1%
5. その他	78	0.4%
総数	18,207	100%

Q8-b どの高等学校等に進学しましたか。ひとつ選んでください。

	回答数	割合
1. 全日制高校	10,990	73.1%
2. 定時制高校	1,180	7.8%
3. 通信制高校	1,522	10.1%
4. 中等教育学校後期課程	244	1.6%
5. 高等専門学校	710	4.7%
6. 専修学校（一般課程・高等課程）・各種学校	294	2.0%
7. 特別支援学校高等部	104	0.7%
総数	15,044	100%

Q9 あなたの最終学歴は次のどれにあたりますか。

	回答数	割合
1. 中学校卒業	2,323	12.8%

2. 高等学校卒業（中等教育学校後期課程、専修学校の高等課程、特別支援学校高等部を含む）	5,733	31.5%
3. 専修学校（専門課程）卒業・高等専門学校卒業・短期大学卒業	2,765	15.2%
4. 専修学校（一般課程）卒業・各種学校卒業	1,279	7.0%
5. 大学卒業	5,277	29.0%
6. 大学院修士課程卒業・大学院博士後期課程修了（満期退学含む）	812	4.5%
7. その他	18	0.1%
総数	18,207	100%

Q10 あなたは、これまでに次のような経験はありますか。あてはまるものすべてを選択してください。（いくつでも）

	回答数	割合
1. 高等学校等での不登校	3,585	19.7%
2. 高等学校等での留年	862	4.7%
3. 高等学校等の中退	2,138	11.7%
4. 高等学校等への転編入学	1,274	7.0%
5. 高等学校卒業程度認定試験（旧大学入学資格検定）の受験	916	5.0%
6. 大学・短大・専門学校での留年	1,034	5.7%
7. 大学・短大・専門学校での中退	1,183	6.5%
8. 大学・短大・専門学校への転編入学	497	2.7%
9. 休職	2,725	15.0%
10. 無職	5,159	28.3%
11. いずれも該当しない	6,013	33.0%
総数	18,207	—

Q11-a 現在の就業状況や進学状況について、あてはまるものすべてを選択してください。（いくつでも）

	回答数	割合
1. 正規社員・職員として民間企業や官公庁などに勤めている	6,955	38.2%
2. 労働者派遣事業者の派遣社員	922	5.1%

3. パート、アルバイトとして民間企業や官公庁などに勤めている	3,862	21.2%
4. 会社などの役員	813	4.5%
5. 家業を手伝っている	815	4.5%
6. 自分で会社などを経営している	1,247	6.8%
7. 主婦、主夫	1,845	10.1%
8. 学生など	618	3.4%
9. その他	162	0.9%
10. とくに仕事についたり、学校に通ったりなどはしていない	2,362	13.0%
総数	18,207	—

Q11-b あなたは、全体として見ると、現在の生活にどの程度満足していますか。あてはまるものを1つ選んでください。

	回答数	割合
1. 満足している	3,048	16.7%
2. まあ満足している	8,013	44.0%
3. やや不満だ	4,127	22.7%
4. 不満だ	3,019	16.6%
総数	18,207	—

Q12 中学を卒業して以降の生活において、どのような人のアドバイスやはげましが支えになりましたか。

	Q12-a：あてはまると思うものすべて			Q12-b：最もあてはまるもの一つ		
	総数	回答数	割合	総数	回答数	割合
1. 家族	18,207	7,693	42.3%	18,183	6,027	33.1%
2. 友人	18,207	6,583	36.2%	18,183	3,198	17.6%
3. 職場の上司・同僚	18,207	2,611	14.3%	18,183	957	5.3%
4. 先生	18,207	2,454	13.5%	18,183	780	4.3%
5. 学校の相談員（スクールカウンセラーなど）	18,207	1,102	6.1%	18,183	405	2.2%
6. 自治体の相談員	18,207	648	3.6%	18,183	220	1.2%
7. 医師	18,207	1,263	6.9%	18,183	385	2.1%

8. その他	18,207	261	1.4%	18,183	214	1.2%
9. とくにない	18,207	5,997	32.9%	18,183	5,997	33.0%

Q13 小・中学生の頃に不登校を経験したことで、中学校卒業後今までに、次のようなことがありましたか。a.～g.のそれぞれのことであてはまるものをひとつずつ選んでください。

	おおいにあった		ある程度あった		あまりなかった		ほとんどなかった	
	回答数	割合	回答数	割合	回答数	割合	回答数	割合
a. 学業（受験、資格試験など）で苦労した	3,399	18.7%	6,113	33.6%	4,840	26.6%	3,855	21.2%
b. 仕事（就職活動を含む）で苦労した	3,940	21.6%	5,698	31.3%	4,640	25.5%	3,929	21.6%
c. 体力が低下したり不足したりして苦労した	3,071	16.9%	5,388	29.6%	5,291	29.1%	4,457	24.5%
d. 生活リズムが乱れ苦労した	3,908	21.5%	6,191	34.0%	4,571	25.1%	3,537	19.4%
e. 人との関わりに不安を感じたり、人と関わりをもつことに苦労した	6,361	34.9%	6,382	35.1%	3,308	18.2%	2,156	11.8%
f. 成長した、視野が広がった	2,978	16.4%	6,815	37.4%	5,432	29.8%	2,982	16.4%
g. 人に優しくなった、人の痛みが分かるようになった	4,381	24.1%	7,911	43.5%	3,851	21.2%	2,064	11.3%

<オンライン調査>

SC1 あなたの性別を教えてください。

	回答数	割合
男	155	48.3%
女	152	47.4%
その他	14	4.4%
総数	321	100%

SC2 あなたの年齢を教えてください。※令和7年1月末時点

	回答数	割合
18～19 歳	75	23.4%
20～24 歳	95	29.6%
25～29 歳	36	11.2%
30～34 歳	41	12.8%
35～40 歳	17	5.3%
40～44 歳	29	9.0%
45～49 歳	16	5.0%
50～54 歳	9	2.8%
54～59 歳	3	0.9%
総計	321	100%

SC3 小・中学校において不登校の経験はありますか。(注釈)「不登校」とは、病気や経済的理由以外の何らかの理由で、年度間に30日以上学校を欠席した状況のことを指します。この定義も参照し、当てはまると思う場合には「ある」と回答してください。

	回答数	割合
ある	321	100%
ない	0	0.0%
総数	321	100%

Q1 小学校と中学校の出席状況についてお聞きします。それぞれについて、あなたの状況に一番近い番号を一つ選んでください。(注釈) 学年によって欠席頻度が異なる場合には、欠席日数が最も多かった学年を想定して回答してください。

	Q1-a：小学校の時		Q1-b：中学校の時	
	回答数	割合	回答数	割合
1. ほとんど休まなかった（目安：週 1 日未満の欠席、年間 30 日未満の欠席）	129	40.2%	11	3.4 %
2. 少し休んだ （目安：週 1～2 日未満の欠席）	47	14.6%	23	7.2 %
3. 半分程度休んだ （目安：週 2～3 日程度の欠席）	23	7.2%	23	7.2 %
4. かなり休んだ （目安：週 3～4 日未満の欠席）	33	10.3%	55	17.1 %
5. ほとんど休んだ （目安：週 5 日程度の欠席）	89	27.7%	209	65.1 %
総数	321	100%	321	100%

Q1-c 中学校 3 年生の時は不登校でしたか。

	回答数	割合
はい	274	85.4%
いいえ	47	14.6%
総数	321	100%

Q2 あなたが学校を休みはじめた時のきっかけは何ですか。

	Q2-a：思い当たるものすべて			Q2-b：最もあてはまるもの一つ		
	総数	回答数	割合	総数	回答数	割合
1. 友人(いやがらせやいじめ)	321	113	35.2%	320	56	17.5%
2. 友人(いやがらせやいじめを除く)	321	91	28.3%	320	17	5.3%
3. 先生(怒る、うるさい、体罰)	321	66	20.6%	320	18	5.6%
4. 先生(相性)	321	102	31.8%	320	21	6.6%
5. 勉強	321	66	20.6%	320	11	3.4%
6. 授業	321	67	20.9%	320	12	3.8%
7. きまり	321	69	21.5%	320	10	3.1%
8. やる気	321	106	33.0%	320	30	9.4%
9. 合わなかった	321	53	16.5%	320	15	4.7%

10. 環境の変化	321	32	10.0%	320	5	1.6%
11. 親	321	58	18.1%	320	6	1.9%
12. 家庭環境	321	49	15.3%	320	11	3.4%
13. 精神的不調	321	149	46.4%	320	37	11.6%
14. 身体的不調	321	118	36.8%	320	27	8.4%
15. 障害	321	29	9.0%	320	6	1.9%
16. 生活リズム	321	65	20.2%	320	6	1.9%
17. ネット等	321	41	12.8%	320	5	1.6%
18. その他	321	14	4.4%	320	9	2.8%
19. わからない	321	18	5.6%	320	18	5.6%

Q3 あなたが最初に学校を休みはじめたのは、何年生の何月頃ですか。学校と時期のそれぞれ一つずつ選択してください。覚えていない場合は、最も近いと思われる回答を選択ください。

Q3-a：学年	回答数	割合
1. 小学校1年生	19	5.9%
2. 小学校2年生	22	6.9%
3. 小学校3年生	37	11.5%
4. 小学校4年生	33	10.3%
5. 小学校5年生	54	16.8%
6. 小学校6年生	20	6.2%
7. 中学校1年生	74	23.1%
8. 中学校2年生	43	13.4%
9. 中学校3年生	19	5.9%
総数	321	100%

Q3-b：時期	回答数	割合
1. 4月～7月	134	41.7%
2. 8月～12月	149	46.4%
3. 1月～3月	38	11.8%
総数	321	100%

Q4 不登校が継続した要因について、今、ふりかえてみて、あなたにあてはまると思うものすべてを選択してください。

Q4-a：あてはまると思うものすべて			Q4-b：最もあてはまるもの一つ		
総数	回答数	割合	総数	回答数	割合

1. 友人(いやがらせやいじめ)	321	84	26.2%	318	42	13.2%
2. 友人(いやがらせやいじめを除く)	321	83	25.9%	318	15	4.7%
3. 先生(怒る、うるさい、体罰)	321	55	17.1%	318	13	4.1%
4. 先生(相性)	321	94	29.3%	318	17	5.3%
5. 勉強	321	76	23.7%	318	14	4.4%
6. 授業	321	59	18.4%	318	5	1.6%
7. 友人(影響)	321	13	4.0%	318	0	0.0%
8. やる気	321	122	38.0%	318	34	10.7%
9. 悪意なし	321	49	15.3%	318	6	1.9%
10. 断続的な登校	321	38	11.8%	318	7	2.2%
11. 精神的不調	321	178	55.5%	318	67	21.1%
12. 身体的不調	321	120	37.4%	318	25	7.9%
13. 生活リズム	321	80	24.9%	318	8	2.5%
14. 登校への疑問	321	60	18.7%	318	12	3.8%
15. 好みの選択	321	32	10.0%	318	6	1.9%
16. 親からの注意不足	321	29	9.0%	318	5	1.6%
17. 学校からの注意不足	321	9	2.8%	318	1	0.3%
18. 助言	321	55	17.1%	318	9	2.8%
19. 障害	321	26	8.1%	318	8	2.5%
20. その他	321	14	4.4%	318	10	3.1%
21. わからない	321	14	4.4%	318	14	4.4%

Q5 不登校だった当時、次のような場所や人に相談したことはありますか。a. 相談したことがあるものをすべて選択してください。(いくつでも)

	回答数	割合
1. 教育支援センター	105	32.7%
2. 児相	22	6.9%
3. 保健所	11	3.4%
4. 病院	107	33.3%
5. 民間施設	95	29.6%
6. その他機関	30	9.3%
7. 先生	136	42.4%
8. 学校の相談員	97	30.2%
9. SNS	10	3.1%
10. その他	19	5.9%
11. なし	65	20.2%
総数	321	—

Q5-1b 相談した結果、どれくらい手助けになりましたか。次の1.～3.の中からいちばん近いものをひとつ選択してください。

	総数	かなり手助けになった		少し手助けになった		あまり手助けにならなかった	
		回答数	割合	回答数	割合	回答数	割合
Q5-aで「なし」以外を回答した者	256	-	-	-	-	-	-
1. 教育支援センター	105	47	18.4%	30	11.7%	28	10.9%
2. 児相	22	7	2.7%	7	2.7%	8	3.1%
3. 保健所	11	0	0.0%	3	1.2%	8	3.1%
4. 病院	107	27	10.5%	42	27.0%	38	14.8%
5. 民間施設	95	61	23.8%	24	33.2%	10	3.9%
6. その他機関	30	5	2.0%	12	6.6%	13	5.1%
7. 先生	136	31	12.1%	58	34.8%	47	18.4%
8. 学校の相談員	97	27	10.5%	30	22.3%	40	15.6%
9. SNS	10	0	0.0%	5	2.0%	5	2.0%
10. その他	17	11	4.3%	3	5.5%	3	1.2%

Q6 不登校だったときに欲しかった相談や手助けについて、あてはまるものすべてを選択してください。（いくつでも）

	回答数	割合
1. 進学するための相談や手助け	111	34.6%
2. 仕事につくための相談や手助け	46	14.3%
3. 学校の勉強についての相談や手助け	115	35.8%
4. 自分の気持ちをはっきり表現したり、人とうまくつきあったりするための方法についての相談や手助け	151	47.0%
5. 友人と知り合えたり、仲間と過ごせたりする居場所についての情報提供	133	41.4%
6. 精神的・身体的な不調についての相談や手助け	141	43.9%
7. 規則正しい生活習慣についての相談や手助け	43	13.4%
8. その他	18	5.6%
9. とくにない	61	19.0%
総数	321	—

Q7 今、考えると、小・中学生の頃、不登校で学校に行かなかったことをどう思いますか。次の1.～5.の中からいちばん近いものをひとつ選択してください。

	回答数	割合
1. 行けばよかった	50	15.6%

2. しかたがなかった	118	36.8%
3. 行かなくてよかった	94	29.3%
4. 何とも思わない	39	12.1%
5. その他	20	6.2%
総数	321	100%

Q8-a 中学校を卒業してすぐの時点（4月時点）で、あなたの進路状況についてあてはまるものをひとつ選択してください。

	回答数	割合
1. 就職せずに高等学校等に進学した	285	88.8%
2. 高等学校等に進学せずに就職した	3	0.9%
3. 就職して働きながら、高等学校等に進学もした	5	1.6%
4. 高等学校等に進学もせず、就職もしなかった	20	6.2%
5. その他	8	2.5%
総数	321	100%

Q8-b どの高等学校等に進学しましたか。ひとつ選んでください。

	回答数	割合
1. 全日制高校	109	38.9%
2. 定時制高校	46	16.4%
3. 通信制高校	118	42.1%
4. 中等教育学校後期課程	0	0.0%
5. 高等専門学校	3	1.1%
6. 専修学校（一般課程・高等課程）・各種学校	2	0.7%
7. 特別支援学校高等部	2	0.7%
総数	280	100%

Q9 あなたの最終学歴は次のどれにあたりますか。

	回答数	割合
1. 中学校卒業	40	12.5%
2. 高等学校卒業（中等教育学校後期課程、専修学校の高等課程、特別支援学校高等部を含む）	130	40.5%
3. 専修学校（専門課程）卒業・高等専門学校卒業・短期大学卒業	32	10.0%

4. 専修学校（一般課程）卒業・各種学校卒業	8	2. 5%
5. 大学卒業	72	22. 4%
6. 大学院修士課程卒業・大学院博士後期課程修了（満期退学含む）	13	4. 0%
7. その他	26	8. 1%
総数	321	100%

Q10 あなたは、これまでに次のような経験はありますか。あてはまるものすべてを選択してください。（いくつでも）

	回答数	割合
1. 高等学校等での不登校	85	26. 5%
2. 高等学校等での留年	28	8. 7%
3. 高等学校等の中退	46	14. 3%
4. 高等学校等への転編入学	40	12. 5%
5. 高等学校卒業程度認定試験（旧大学入学資格検定）の受験	34	10. 6%
6. 大学・短大・専門学校での留年	19	5. 9%
7. 大学・短大・専門学校での中退	20	6. 2%
8. 大学・短大・専門学校への転編入学	7	2. 2%
9. 休職	34	10. 6%
10. 無職	98	30. 5%
11. いずれも該当しない	135	42. 1%
総数	321	—

Q11-a 現在の就業状況や進学状況について、あてはまるものすべてを選択してください。（いくつでも）

	回答数	割合
1. 正規社員・職員として民間企業や官公庁などに勤めている	67	20. 9%
2. 労働者派遣事業者の派遣社員	2	0. 6%
3. パート、アルバイトとして民間企業や官公庁などに勤めている	76	23. 7%
4. 会社などの役員	7	2. 2%
5. 家業を手伝っている	15	4. 7%
6. 自分で会社などを経営している	25	7. 8%

7. 主婦、主夫	17	5.3%
8. 学生など	115	35.8%
9. その他	12	3.7%
10. とくに仕事についたり、学校に通ったりなどはしていない	35	10.9%
総数	321	—

Q11-b あなたは、全体として見ると、現在の生活にどの程度満足していますか。あてはまるものを1つ選んでください。

	回答数	割合
1. 満足している	111	34.6%
2. まあ満足している	150	46.7%
3. やや不満だ	40	12.5%
4. 不満だ	20	6.2%
総数	321	—

Q12 中学を卒業して以降の生活において、どのような人のアドバイスやはげましが支えになりましたか。

	Q12-a：あてはまると思うものすべて			Q12-b：最もあてはまるもの一つ		
	総数	回答数	割合	総数	回答数	割合
1. 家族	321	203	63.2%	321	131	40.8%
2. 友人	321	154	48.0%	321	47	14.6%
3. 職場の上司・同僚	321	41	12.8%	321	12	3.7%
4. 先生	321	100	31.2%	321	25	7.8%
5. 学校の相談員（スクールカウンセラーなど）	321	39	12.1%	321	14	4.4%
6. 自治体の相談員	321	34	10.6%	321	15	4.7%
7. 医師	321	52	16.2%	321	9	2.8%
8. その他	321	49	15.3%	321	28	8.7%
9. とくにない	321	40	12.5%	321	40	12.5%

Q13 小・中学生の頃に不登校を経験したことで、中学校卒業後今までに、次のようなことがありましたか。a.～g.のそれぞれのことであてはまるものをひとつずつ選んでください。

	おおいにあった		ある程度あった		あまりなかった		ほとんどなかった	
	回答数	割合	回答数	割合	回答数	割合	回答数	割合
a. 学業（受験、資格試験など）で苦労した	93	29.0%	95	29.6%	80	24.9%	53	16.5%
b. 仕事（就職活動を含む）で苦労した	80	24.9%	78	24.3%	63	19.6%	100	31.2%
c. 体力が低下したり不足したりして苦労した	95	29.6%	96	29.9%	65	20.2%	65	20.2%
d. 生活リズムが乱れ苦労した	103	32.1%	79	24.6%	77	24.0%	62	19.3%
e. 人との関わりに不安を感じたり、人と関わりをもつことに苦労した	133	41.4%	108	33.6%	41	12.8%	39	12.1%
f. 成長した、視野が広がった	143	44.5%	110	34.3%	48	15.0%	20	6.2%
g. 人に優しくなった、人の痛みが分かるようになった	146	45.5%	119	37.1%	33	10.3%	23	7.2%

不登校を経験した方へのインタビュー結果

Aさん

1. 不登校の理由や受けていた支援等

(1) 不登校の主なきっかけ

- 背景事情：
 - 小学校 5 年、小学校 5～6 年、中学校 1～3 年の主に 3 期間の不登校期間があった。
- ①小学校 5 年（はじめ）（約 14 年前）
 - 小学校 5 年生に進級して少し経った後、1 週間程度不登校になった。
 - きっかけは、先生から当時仲が良かった男の子との関係をみんなの前でからかわれたこと。母が学校に電話して、学校に謝罪してもらい登校を再開した。
- ②小学校 5～6 年（約 14～13 年前）
 - 1 回目の不登校の後、再度登校をはじめた後に再度不登校になった。
 - きっかけは、小 5 で先生にからかわれた後に、同級生にいじめられたこと（無視、仲間外れ）である。
- ③中学校 1 年（6 月頃）～3 年（約 12～10 年前）
 - 中学校 1 年 6 月頃から再度不登校になった。その後、中学校 2, 3 年から断続的に保健室登校をしていた。
 - きっかけは、中学校入学時に環境の変化があったことである。小 6 で震災があり入学が遅れたこと、入部した吹奏楽部のコンクールがありピリピリした雰囲気であったこと、勉強が分からなかったこと、小学校の時よりも学年の上下関係が強くなったことに戸惑ったことが主なきっかけである。

(2) 不登校の主な継続理由

- ①小学校 5 年（はじめ）
 - 不登校は継続していない。
- ②小学校 5～6 年
 - 約 2 年間不登校の状態が継続した。同級生からのいじめをきっかけに不登校になったが、学校へ行きたくないと母親へ言った際に、母親とけんかを

した。その後学校に行かなくてもよいと母親が言ってくれたため登校しなかった。

- 先生には母から相談をしていた。もどる気持ちにはなかなかねず、学級のみんが「まっているよ」など色紙を書いてもってきたことも嫌だった。からかわれていた事実もあり、その児童が原因なのにも関わらず、しれつと励ましの言葉を書いていることも許せなかった。その児童に対して後ほどきちんと注意してもらうことで、もどることができるようになった。

- ③中学校1年（6月頃）～3年

- 約3年間不登校の状態が継続した。継続理由は小学校の時に不登校であったときから、行かなくてもよいという理解を母親から得られていたこと。

(3) 不登校である時に最も困っていた点

- ①小学校5年（はじめ）

- 短かったので気にならなかった。

- ②小学校5～6年

- 休んだ際に、同級生がプリントや手紙を家に持ってきてくれることが困っていた。いじめ等の張本人が家に来たり、学校においでと言われたりすることが苦痛だった。

- ③中学校1年（6月頃）～3年

- 一人でいることは苦痛ではなかったが、授業に出ていないので勉強について困っていた。中学校の時に保健室登校していたが、その理由は、勉強がしたかったためである。しかし、先生が教えてくれるということもなく、学業の遅れや最低限の学習内容を身に付けることはできなかったと感じた。

(4) 不登校の状態である時に受けていた主な支援と支援を受けての感想

- ①小学校5年（はじめ）

- 不登校のきっかけに対し、母親が学校へ連絡をしてくれた。また、母親が行かなくていいと認めてくれたことはよかった。

- ②小学校5～6年

- 同級生がプリントや手紙を家に持ってきてくれることには困っていた。いじめの張本人が家に来ること、学校においでと言うことが苦痛だった。

- 通信添削での勉強をはじめたが、一人で勉強するのに向いていなくてやめた。その後一人で勉強していた。
- ③中学校 1 年（6 月頃）～3 年
 - 将来への不安から勉強をしたいと思い、中 2 の終わるか中 3 初めに半年程度保健室登校をはじめた。保健室では、プリントを渡されて、一人で解く形式で、分からない箇所に関しても質問できなかった。保健室の先生はいたが、付きっ切りではなく、自発的にコミュニケーションをとらなければならなかった。
 - 一対一での先生からの指導は難しいと思うが、一人の先生から 10 分程度でも教えてもらえると期待していたが、期待と異なり、保健室に人が入ってくることも苦手なため行かなくなった。
 - 小学校 4 年まで通っていた塾の先生が母の知人でもあり、通っていた学校の状態が悪いことなどを教えてくれて、学校へ行かなくてよかったと肯定してくれたことはよかった。

(5) 不登校の時にあればよかったと思う支援内容

- ①小学校 5 年（はじめ）
 - 短期間でもあり、特になし。
- ②小学校 5～6 年
 - 勉強に関して、一対一で家に来てもらう形式で教えてほしいと思う。また、同じような経験を持つ方が集まる場所があればよかった。
- ③中学校 1（6 月）～3 年
 - 適応支援教室があり、そこでは同じような経験を持つ人と勉強ができると聞いていたが、家からは遠くて通うことができず、行けたらよかった。

2. 現在までの進路

(1) 調査時現在の進学・就業状況

- 現在は、フリースペースでアシスタントをしている。朝から夜まで週 5 日勤務。仕事内容は、子供たちと遊ぶことや、勉強支援である。拘束時間としては長いが、実働時間としては 1, 2 時間程度働いている。

(2) これまでの進学・就業状況の履歴

- 中学校卒業後、通信制の高校に3年間通って卒業した。通信制高校は家からは遠かったので一人暮らしをして通学しており、高校2年の秋までほぼ毎日通学していた。
- 高校3年時は、満員電車が嫌だったことや親がいなかったため頼れる人がいなかったことから、コースを変更して月数回通っていた。
- 高校は継続できた理由は、学校に自分と似た経験をした人が多く在籍していると思えたためである。不登校経験を言葉には出さなかったが、そのように思うことができた。
- 大学進学も検討したが、進学しなかった。

(3) これまでの進学・就業において、課題と感じたこと

- 就業について、大勢の人と関わる機会が少なかったこともあり、社会に出るハードルが高いと感じる。特に、就業する段階で、面接のときや電話をかけることに覚悟がいると感じた。
- 中学校卒業後、受験や仕事探しについて支援先を知らず、外部の手助けを借りなかった。ハローワークにも行ったが、フルタイムの条件など水準が高かった。

(4) これまでの進学・就業をふりかえり、あってよかったと思う支援内容

- 就業に関して、母親が関係していたフリースペースがあり、そこで仕事に就くことができた。

(5) これまでの進学・就業をふりかえり、あればよかったと思う支援内容

- 不登校支援に関しての情報をなかなか得ることができず、支援に関する情報が欲しいと思った。こういう場所があり、こういうやり方があるということを知りたかった。

(6) 不登校を経験したことについての思い

- フリースペースで手伝いをしていて、もし学校へ通っていたらということをよく考える。ここではない場所でも働けていたかと思う。
- 一方で、学校に行かないこと自体は悪いことではないと思う。不登校になったことで、他の人ができない経験をして視野が広がった部分もあると感じる。学校以外での学び方や過ごし方があることを知ることができたのはよかった。フリースペースで過ごす中で、学校とは違う接し方、考え方がわかったのはよかったと思う。

Bさん

1. 不登校の理由や受けていた支援等

(1) 不登校の主なきっかけ

● 背景情報：

- 幼稚園の年少の頃、小学校 1～3 年生、中学校 1～3 年生の頃に不登校期間があった。

● ①幼稚園（年少）（約 24 年前）

- 友達と遊んで楽しく過ごしていたが、その中で暴力的な子や言葉がきびしい子がいたため、行きづらく感じ幼稚園に行かなくなった。
- 年長の頃には遊べるが増えてきたこともあり、比較的登園していた。

● ②小学校 1～3 年生（約 21～19 年前）

- 入学して 1 週間ほどで学校に行かなくなった。理由は、（はっきりとしたきっかけがないというよりも）昔ことでよく覚えていない。勉強も難しいと感じていなかった。（勉強は割合や少数が苦手だった。ほかには社会など、長文が苦手だった。）
- 2 年生、3 年生のころは消しゴムを隠されるといった、いたずらのようないじめがきっかけで行けなくなったと記憶している。
- 小学 4 年生～6 年生にかけては、先生が面白く、また友人とも楽しく過ごすことができたため、不登校ではなかった。

● ③中学校 1～3 年生（約 15～13 年前）

- 入学して 3 週間ほどで不登校になった。
- きっかけは、自身のお調子者的なキャラクターに悪乗りする友人からギャグを強いられたり見世物にされたりすることがあり、それが嫌で不登校になった。
- 1～2 か月に 1 回程度、担任の先生から呼び出されたときだけ、登校していた。

(2) 不登校の主な継続理由

- ①幼稚園（年少）（約 24 年前）
 - 先生が母親と会話していることはあったが、園で具体的に何か対策を講じてくれることはなかったと記憶している。
 - 幼稚園に苦手な人がいると思うと、登園することができなかった。また、昼寝を強要されることが嫌で、昼寝をせず園庭を歩いたりしていた。
 - 期間としては1か月くらい行かないことがあった。
- ②小学校 1～3 年生（約 21～19 年前）
 - いたずらされる理由がわからず、対応策がわからなかったことが不登校継続の要因だと思う。
- ③中学校 1～3 年生（約 15～13 年前）
 - 当時の副担任がややきびしい性格でもあり、校則違反で髪が長いことを指摘されて嫌だった。
 - 部活は文科系に入りたかったが、学校にある部活のほとんどが体育会系の部活であった。バスケット部に入部したが、先輩の発言を疑問に思ったり、顧問の先生の発言と先輩の発言の矛盾があったりなど、納得ができない点があり、悩むことが多かった。
 - 朝に弱く決められた時間までに登校することがつらいことも相まって、不登校が継続したと思う。

(3) 不登校である時に最も困っていた点

- ①幼稚園（年少）（約 24 年前）
 - なぜ幼稚園へ行かないのかと、親から聞かれることがしばしばあった。
- ②小学校 1～3 年生（約 21～19 年前）
 - 祖母が不登校に対してきびしい姿勢を示しており、いじめを行った相手に対して強硬な対応を取るべきだと主張することがあり困っていた。
 - また、自身の不登校のことで、祖母が母親に対して強く責めることもあった。
 - 母親は学校に行った方がいいとは言いつつ、休んでもいいと言ってくれていた。
 - 不登校であっても一緒に遊ぶ友達はいたので、その点に関しては困ることはなかった。

- その他の困った点として、勉強面で苦手な科目ができてしまった点が挙げられる。

- ③中学校 1～3 年生（約 15～13 年前）

- 中学 1 年が終わり、進級するタイミングで、東日本大震災が発生。実家は無事だったが、生活が不自由で困っていた。
- 不登校が原因で祖母がより一層きびしい姿勢をとるようになり、母親が精神的に不調をきたすこととなった。今思えば、うつ症状だったのかも知れない。
- その結果、母親から押さえつけられ首を絞められる暴力を受けることもあり、心中を迫られるようなこともあった。

(4) 不登校の状態である時に受けていた主な支援と支援を受けての感想

- ①幼稚園（年少）（約 24 年前）
- 特に支援は受けていない。

- ②小学校 1～3 年生（約 21～19 年前）

- 2 年生のころ担任の先生は非常に熱心で、週に一度の頻度で家に訪問してくれていた。
- 学校での出来事や行事の予定等を共有してくれたため、学校とのつながりを感じることができ、楽しかったと記憶している。

- ③中学校 1～3 年生（約 15～13 年前）

- 当時は、学校にあまり行かなかったが、適応支援教室には通っていた。
- 学校に戻ることを目的とした支援が多く、居心地が良くなく、家庭状況についても相談できるような雰囲気ではなかった。
- 中学校にはスクールソーシャルワーカーがおり、その方と会話することもあった。そこでの話は、登校のことは切り離されており、いやではなかった。
- 適応支援教室に行くと登校扱いになることもあり、卒業自体は問題なくできた。

(5) 不登校の時にあればよかったと思う支援内容

- ①幼稚園（年少）（約 24 年前）
- 思い当たらない。放っておいてくれた方がありがたいと思っている。

- ②小学校 1～3 年生（約 21～19 年前）
 - 家庭状況について相談できる場所について知る機会があればよかったと思う。
- ③中学校 1～3 年生（約 15～13 年前）
 - 家庭状況について相談できる場所や手段について知る機会が欲しかった。
 - 親が不安定だと、子供としては何もできないので、親に対してケアができる支援があるとよかったと思う。
 - 当時は家でインターネットを利用できる環境もなかったため、情報を得る手段や場所が学校に限られていた。

2. 現在までの進路

(1) 調査時現在の進学・就業状況

- 現在は、若者支援/訓練を目的とした工房にて働いている。

(2) これまでの進学・就業状況の履歴

- 中学校卒業後は定時制高校に進学していて、夜間に学校へ通っていた。
- 高校生の時は一番楽しく、不登校になることはなかった。
- 高校卒業後は大学に進学した。
- 大学生の頃は友人関係に悩むことがあったが、不登校になることはなかった。自分のしたいこと（UNO）や、させたいこと（ゲーム、動画鑑賞）を相手に強いるタイプの人間につきまといわれてしまう傾向があるようである。
- 大学卒業後は 1 年くらいひきこもっていた期間があり、その後地元のフリースペースに通所しはじめた。
- 現在、フリースペースには 3 年ほど関わっている。
- 大学生時代の友人関係に悩んでいた時、相談先となっていた場所が大学の学生相談室だった。
- ひきこもっていた期間に、大学の相談室を思い出した。卒業後 1 年は相談できる制度があり、9 月位から、月一で電話で相談した。相談の結果、次の居場所を模索することに決め、フリースペースに通いはじめた。

(3) これまでの進学・就業において、課題と感じたこと

- 学力の不足については感じるところがある。
- また、人付き合いと、早起きの習慣については苦手だと思っている。
- モチベーションの維持、努力の継続や行動力が足りないなど。

(4) これまでの進学・就業をふりかえり、あってよかったと思う支援内容

- 高校生の頃は、支援を必要に感じなかった。夜間部だったこともあり、早起きする必要がなく通学も苦でなく、楽しく過ごすことができた。
- 大学生の頃も、しっかり通学していた。通学していた理由は、親から4年で卒業するよう言われていたことと、自身でも4年で卒業した方がよいとの考えがあったため。大学生の頃は、講義での疑問を解消してくれる教授がいたことは快適に思う部分であった。
- 大学4年生くらいからコロナ期間になったこともあり、外に出ることが少なくなり、就職の情報が得にくい状況だった。
- 親からのプレッシャーに関しては、最近は感じていないが大学卒業後のひきこもっていた時期は就職するようプレッシャーを感じていた。ひきこもりの期間は、そもそも働きたいと思わないことがあった。

(5) これまでの進学・就業をふりかえり、あればよかったと思う支援内容

- 現在、精神科に通っており、精神的疾患を持っていることが判明した。働いているフリースペースで情報を得たのがきっかけだが、自分の意思で決め、行ってみることにした。当時から精神病に関する情報がわかっていれば、もっと早く気付くことはできたのかもしれない。少しでも興味があったり、自分には必要と思わない人も、一度悩みを打ち明けてもよいと思う。行ってもいやな思いをする場所ではなく、関心がある人は行ってみたらよいと思う。
- 自分が中学生で不登校だった時期に、祖母の強いプレッシャーで母が精神的に追い詰められたようであり、保護者が相談する機関があり、またそれがよく周知されていたらよかったかも知れない。

(6) 不登校を経験したことについての想い

- 不登校の経験が、今の自分の考え方等に影響を与えたことはよかったと考えている。
- 不登校を経験していなかったらどのような自分になっていたのかは気になるが、後悔はしていない。
- 学校に行かなくてよかった点としては、そのおかげで出会えた友達がいること。中学生の頃に通っていた適応支援教室で出会った仲のよい友人とは、未だに付き合いが続いている。

Cさん、Dさん、Eさん、Fさん、Gさん（グループインタビュー形式で実施した）

1. 不登校の理由や受けていた支援等

(1) 不登校の主なきっかけ

- 背景情報：
 - Cさんには、中学校 2 年生から 3 年生の不登校の経験について話していただいた。
 - Dさんには、中学校 1 年生の 5 月から終わりまでの不登校の経験について話していただいた。
 - Eさんには、中学校 1 年生の 5 月から中学校 3 年生の卒業までの不登校の経験について話していただいた。
 - Fさんには、中学校 3 年生の 1 年間の不登校の経験について話していただいた。
 - Gさんには、中学校 2 年生のコロナによる出席停止期間明けから中学校 3 年生までの不登校の経験について話していただいた。
- ①Cさん：中学校 2～3 年(約 8～7 年前)
 - 双子の兄が先に不登校ぎみになり兄の状況を学校で聞かれることが増えたこと、またクラスに騒がしい生徒がいたことにより、通学する意欲がなくなった。
- ②Dさん：中学校 1 年(約 9 年前)
 - 中学校に入学すると小学生の頃よりもクラスの人数が増え、顔見知りだった人が他のクラスに分かれてしまったこともあり、あまりクラスに馴染めなかった。また、新しいクラスでは声の大きな生徒が物事を決めていく感じであり、自分の思うような方法で進めることができずストレスを感じていた。
 - 5月の半ば頃に学校に行こうとした際、玄関から動けなくなった。最初のうちは、靴を隠して学校に行ったふりをするなどして家の人に気づかれないようにしていたが、間もなく気づかれてしまった。
- ③Eさん：中学校 1～3 年(約 7～5 年前)
 - 小学校 2 年生のときにいじめに遭い、それが原因で違う小学校に転校した。その後、入学した中学校は他の学区から生徒が集まるような学校だったため、知らない人が多く、いじめられていた当時を思い出すこともあった。そのような状況下で、割り当てられた役員の仕事に対する責任と重圧で通学に対する意欲がなくなった。

- ④Fさん：中学校3年(約3年前)
 - 中学校1年生の林間学校に行ったときに友人に嫌いと言われたことがきっかけで、他の人もそう思っているのではないかと考えるようになった。その結果、クラスへの行きづらさを感じ、別室登校が始まった。
 - 中学校1年生～2年生の間は週2,3日、別室登校をしていた。中学校3年生ではほとんど登校していない。
- ⑤Gさん：中学校2～3年(約4～3年前)
 - 小学校から中学校に上がるときに、2つの小学校の生徒が混ざるような形で学校が形成されていた。知らない人が多い環境に慣れず、また勉強が苦手な同級生に対し劣等感のようなものを感じ休みがちになった。中学校2年生の冬にコロナ禍による出校停止期間があり、停止期間明けから登校できなくなった。

(2) 不登校の主な継続理由

- ①Cさん：中学校2～3年(約8～7年前)
 - 先生やスクールカウンセラーに話を聞いてもらっていたが、クラスの状況は変わらなかったため、戻ることが想像できなかった。
 - 一時期、保健室登校をしていたが、その先生から「保健室は体調が悪い人が過ごす場所であり、健康な人がいるべきではない」と指摘されたことがあり、保健室登校もできなくなった。
- ②Dさん：中学校1年(約9年前)
 - 学校内の不登校の子が過ごす場所があり、夏休み明けからそこへ週1回程度通っていた。中学校1年生の後半は出席できそうな授業には出席しており、少しずつ通常通り通学できるようになっていった。中学校2年生では、出席停止の期間を除いて全日登校できていた。
- ③Eさん：中学校1～3年(約7～5年前)
 - 担任の先生は気が強い人で相談が難しかった。また、小学校2年生のいじめの時、終わりまでだれも助けてくれない状況があったため、それを思い出し、まただれも助けてくれないのではないかと思います、不登校が継続してしまった。
- ④Fさん：中学校3年(約3年前)

- 別室登校時は、中学校 1 年生の頃は好きな勉強や読書、パズルなど比較的自由に何をしていてもよかったが、中学校 2 年生になるとルールが変わり、1 日 2 時間まで先生と 1 対 1 で勉強しなければならなくなり居心地が悪くなった。また当時お世話になっていた相談員の先生が別の学校へ異動してしまい、さらに居心地が悪くなった。そのような中で支援センターの存在を知り、中学校 3 年生の時はそこに通うことになった。
 - 中学校 1 年生～2 年生の間は週 2, 3 日、別室登校をしていた。中学校 3 年生ではほとんど登校していない。
- ⑤G さん：中学校 2～3 年(約 4～3 年前)
 - 中学校 2 年生の冬にコロナ禍による出校停止期間があり、停止期間明けから登校できなくなった。
- (3) 不登校である時に最も困っていた点
- ①C さん：中学校 2～3 年(約 8～7 年前)
 - 高校受験を考えはじめる中学校 2 年生の頃から不登校だったため、勉強したい思いはあった。しかしクラスには行けない自分にもどかしさを感じ、困っていた。
 - ②D さん：中学校 1 年(約 9 年前)
 - やることがなく孤独感を感じていた。同年代が学校に通っている中、自分だけ時間が止まっているように感じ、将来が不安だった。
 - 家では両親、祖父母と生活をしており、日中、両親は仕事で家にいなかったが、祖父母が家におり、不登校のことについて祖父母から指摘されることがあり、辛く感じていた。
 - ③E さん：中学校 1～3 年(約 7～5 年前)
 - 林間学校や合唱コンクールなどの学校の行事に誘われることが、断りづらく困っていた。普段登校していないのに行事だけ参加することの後ろめたさや、参加しても居場所がなく、苦痛を感じていた。
 - ④F さん：中学校 3 年(約 3 年前)
 - 中学校 3 年生の時に支援センターに通いはじめてからは困ることはなかったが、中学校 1, 2 年生の別室登校している間は、このままでいいのか、生

きていていいのかと考えることがあった。また、家族との関係にも悩んでいた。

- ⑤Gさん：中学校2～3年(約4～3年前)
 - 外に出られないこと、家族以外の人とコミュニケーションがとれないことが困ったこと。

(4) 不登校の状態である時に受けていた主な支援と支援を受けての感想

- ①Cさん：中学校2～3年(約8～7年前)
 - 中学校2年生の頃は約半年間を家で過ごしていた。その間、保健室登校をしたこともあったが、勉強はせず、先生と話をする程度だった。中学校2年生の終わり頃に支援センターの存在を知り、そこで勉強することになった。
 - 近所に支援センターへ通っていた人がおり、母親を通じて施設の存在を知った。その後、見学を経て通うことにした。通うことが決まってからは毎日通い、国語、数学、英語の勉強をしていた。高校進学には学校への出席数も必要だったので、午前中は支援センター、午後は学校の別室へ登校していた。
 - 学校へ行かず、支援センターに行けばいいと思ったときは気持ちが楽になった。それまでは同級生が勉強している間、自分は家にいることについて不安に感じていたが、支援センターで勉強できるようになって、自分の行動が認められるように感じた。気が楽になるような場所だった。
- ②Dさん：中学校1年(約9年前)
 - 不登校になって1、2か月くらいで、母から支援センターの存在を知った。
 - 支援センターへ週3、4回通って、支援員と卓球をよくしたりしていた。勉強はあまりしなかったが、通って何かをすること自体が不安感や孤独感を小さくしてくれた。
- ③Eさん：中学校1～3年(約7～5年前)
 - 1年生の秋ごろに母に支援センターに連れてこられて、支援センターでは、何をしていても肯定されるし、よく褒めてくれるし、居心地がよかった。学校に行かなくなってからは毎日支援センターに行っていた。
 - 中学校3年生の頃に家庭内で色々あり、担任の先生に雑談交じりで話したところ、スクールカウンセラーを紹介された。想定外の出来事ではあった

が、スクールカウンセラーに家庭状況について相談することで気持ちは幾分か楽になったと記憶している。

- ④Fさん：中学校3年(約3年前)
 - 病院の心理カウンセラーの先生に話を聞いてもらっていた。頻度としては1～2月に一度程度の頻度だった。心理カウンセラーに話して数日は気持ちが楽になっていたが、だんだん苦しくなることがあった。
 - 中学校3年生になり、支援センターに通うようになった。その時も心理カウンセラーにお世話になることがあったが、ポジティブな気持ちの期間が増えたと思う。支援センターが、学校や家以外の居場所となった点が理由だと思う。支援センターでは主に勉強をしていた。
- ⑤Gさん：中学校2～3年(約4～3年前)
 - 支援センターを利用したことはない。
 - 学校の紹介のカウンセラーの人と2、3回、話をしたことはある。話せる相手がいたこと自体はよかったと思う。

(5) 不登校の時にあればよかったと思う支援内容

- ①Cさん：中学校2～3年(約8～7年前)
 - 当時は高校の進路が心配で、一度不登校になってしまうと高校へ進学することができないと思っていた。進路の決め方や進路先についての情報が得られる環境があるとよかった。
- ②Dさん：中学校1年(約9年前)
 - 進学先について情報があまりなく、どうやって見つけていいかわからなかった。探してきたとしても学校の先生からはあまり勧められない状況だった。進学に関する情報がもっとあれば、将来に対する不安は軽減できたのではないかと考える。
- ③Eさん：中学校1～3年(約7～5年前)
 - 中学校3年生の頃に家庭内で色々あり、担任の先生に雑談交じりで話したところ、スクールカウンセラーを紹介された。スクールカウンセラーへ、家庭状況について相談することができたことはよかった。
- ④Fさん：中学校3年(約3年前)

- 進路の話について、先生から教室に来ないと進学はできないと言われていたが、母と調べたところ通信制の選択肢があることを知った。学校からそのような情報を得られるとよかったと思う。
- ⑤Gさん：中学校2～3年(約4～3年前)
 - 当時は支援センターのような存在は知らなかったなので、それを知る機会があればよかったと思う。

2. 現在までの進路

(1) 調査時現在の進学・就業状況

- ①Cさん：中学校2～3年(約8～7年前)
 - 現在は4年制大学に通っており、この3月に卒業予定である。卒業後は特別支援学校の教員として勤務する予定である。
- ②Dさん：中学校1年(約9年前)
 - 県外の大学に通っており、今年卒業予定である。
 - 4月からは小売り系の会社に就職予定。いずれは商品開発系の仕事に従事したいと考えている。
- ③Eさん：中学校1～3年(約7～5年前)
 - 理系の専門学校に通っている。
 - 今年の4月から会社の設計部に配属予定である。
- ④Fさん：中学校3年(約3年前)
 - 通信制の高校に通っている。
 - 今年の4月から心理学を学ぶため、大学に進学予定。
 - 将来は公認心理師の資格取得を目指そうと思っている。
- ⑤Gさん：中学校2～3年(約4～3年前)
 - 通信制の高校に3年間通っており、今年の4月から専門学校に進学予定。

(2) これまでの進学・就業状況の履歴

- ①Cさん：中学校2～3年(約8～7年前)
 - 中学校卒業後は、私立の全日制の高校に3年間通った。
 - その後4年生の大学に通い、今に至る。

- ②Dさん：中学校 1 年(約 9 年前)
 - 中学校卒業後は、公立の全日制高校に 3 年間通った。
 - その後、県外の 4 年生大学に進学し、今に至る。
- ③Eさん：中学校 1～3 年(約 7～5 年前)
 - 中学校卒業後は、通信制の高校に通っており、週 2 日の午前登校を 2 年間、週 2 日の午後登校を 1 年間続けた。
 - 高校卒業後は理系の専門学校に進学し、今まで約 2 年間通学している。
- ④Fさん：中学校 3 年(約 3 年前)
 - 通信制の高校に進学し、今に至る。
- ⑤Gさん：中学校 2～3 年(約 4～3 年前)
 - 通信制の高校に進学し、今に至る。
 - 通信制の高校の時は週に 2 日通っていた。不登校時代の自分のことについて知っている人がいなかったことや、学校の人とコミュニケーションをとっている中で自分に自信がついた。

(3) これまでの進学・就業において、課題と感じたこと

- ①Cさん：中学校 2～3 年(約 8～7 年前)
 - 高校進学の段階で、出席日数やテストの成績/内申が進学先に大きく影響を与えており、県立高校への進学ができなかった点が自身で抱えていた困難だと思う。
- ②Dさん：中学校 1 年(約 9 年前)
 - 中学校 1 年生のころにほとんど出席していなかったため、出席数が少なく、内申が低かった。これにより高校進学の実選択肢が狭まってしまい、進路選択について困難に感じていた。
- ③Eさん：中学校 1～3 年(約 7～5 年前)
 - 不登校時代に勉強していなかった科目に関して、専門学校時代に苦労した。そうした苦手な科目については、独学で勉強を進めた。
- ④Fさん：中学校 3 年(約 3 年前)
 - 高校に入ってから、進路について先生が熱心にサポートしてくれたので、課題に感じたことはあまりなかった。

- ⑤Gさん：中学校2～3年(約4～3年前)
 - 勉強面は課題に感じていた。また4月から入学予定の柔道整復科の専門学校は、人とのコミュニケーションが必要になることから、初対面の人ともコミュニケーションがとれるかどうか不安である。

(4) これまでの進学・就業をふりかえり、あってよかったと思う支援内容

- ①Cさん：中学校2～3年(約8～7年前)
 - 中学校卒業後の進路について悩んでいる中、進路指導の先生をはじめ、様々な先生に協力いただき、進学先の高校に関する調査等を支援いただいた。その結果、高校に進学することができ、そこでは自分の不登校時代を知る人はいなかったこともあり、新たな気持ちで高校生活を過ごすことができた。
- ④Fさん：中学校3年(約3年前)
 - 高校の先生から、心理学を学びたいと伝えたときに大学の一覧を教えてくれたり、進路が具体的になったときに試験の日程をプリントアウトしてくれたりした。
- ⑤Gさん：中学校2～3年(約4～3年前)
 - 高校生のときアルバイトをしようと思ったときに、先生から声が小さいから毎朝聞こえるように挨拶しようかと言われ、毎朝先生に挨拶すると決めてコミュニケーションをとるようにしているうちに、自然と自分に自信が出てきたということはある。

(5) これまでの進学・就業をふりかえり、あればよかったと思う支援内容

—

(6) 不登校を経験したことについての思い

- ①Cさん：中学校2～3年(約8～7年前)
 - 当時は非常に辛い時期もあり、登校できていた方がよかったとは思いますが、自身の不登校の経験に対する向き合い方を学ぶことができた。就職した後は、この不登校の経験を活かして教員としての勤務に取り組みたいと思っている。
- ②Dさん：中学校1年(約9年前)

- 不登校の経験の中で、自分のマイナス部分を受容できるようになった。自分が受け入れられなかったような他者の特性についても受け入れることができるようになったと思う。
- ③Eさん：中学校1～3年(約7～5年前)
 - 不登校の当時はどん底にいた気持ちだったが、今では4月から就職できる状況になることができた。また戻ってしまわないか不安な気持ちはある。現状はようやく0に戻ったような気持ちである。
- ④Fさん：中学校3年(約3年前)
 - 不登校にならなかつたら出会えなかった素敵な人がいるので、無駄ではなかったと思う。また不登校になったことで日々の小さな幸せに気付けるようになったと思う。
- ⑤Gさん：中学校2～3年(約4～3年前)
 - 不登校当時は、不登校であることに對しマイナスイメージがあったが、今はそうした経験が今の自分を形成していると考ええると、無駄ではなかったと考える。また、自分のことを俯瞰して見ることができるようになった。

Hさん

1. 不登校の理由や受けていた支援等

(1) 不登校の主なきっかけ

- 背景事情：
 - 小学校 5、6 年、中学校 2、3 年の 2 期間の不登校期間があった。
- ①小学校 5、6 年(はじめ) (約 21～20 年前)
 - 思い当たる理由としては、人間関係の疲弊と野外行事への抵抗感がきっかけで休みはじめた。あまり自己主張しないタイプで、人に合わせるが多く、疲弊感が積み重なり、学校に行くことがしんどくなった。野外学習(2泊3日)が小学5年の夏にあり、慣れない環境で家族以外の人と生活するのは負担に感じたため、夏前に不登校になった。(野外学習には行かなかった。)
 - 小学6年生のどこかで回復してきたため、学校に戻った。一方で、休んでいた時期でも、学校の同級生とは放課後に遊んだりしていた。
- ②中学校 2、3 年 (約 21～20 年前)
 - 中学校 1 年時は通っていた。きっかけは、小学校と同じで人間関係のストレスが原因である。加えて、神経症のような身体症状が出てきたので、その後は学校へ行かなくなった。中学校のおそらく 2 年の 2 学期にパタッといなくなった。症状が体に出ていたので、家族も、無理はしなくていいという判断だった。

(2) 不登校の主な継続理由

- ①小学校 5、6 年
 - 学校に行かないと楽であったため、徐々に休みはじめ、家で過ごすことが多くなった。また、両親も学校へ行きたくなければ行かなくてよいと考えていた。
- ②中学校 2、3 年
 - 中学校 2、3 年時(はじめ)は身体症状や不調があり休んでいたが、中学3年時の夏休み明けくらいに学校に通った。その間は適応指導教室に通っていた。だれかからいやがらせを受けていたということもなく、集団生活によって負担がかかったという理由で不登校であったため、負担を感じなくなれば復学できた。身体症状についても、休んでいるうちに回復した。

(3) 不登校である時に最も困っていた点

- ①小学校 5、6 年
 - 学校に来ていない人というレッテルが貼られたのはしんどかった。小学 6 年生になって学校に行ったときに、「うわー」というリアクションがクラスで起こり、そのような空気感だと学校に行くハードルが高いと感じた。
- ②中学校 2、3 年
 - 高校進学の見路に困った。不登校のため内申が足りておらず、受験できる学校が少なかった。また、自分一人では見路についての選択肢を調べきれなかった。選択肢を知る機会があればよかった。

(4) 不登校の状態である時に受けていた主な支援と支援を受けての感想

- ①小学校 5、6 年
 - 両親の勧めがあり、病院で行われているカウンセリングを受けた。両親以外で話をできる人がいなかったため、話を聞いてもらえる安心感があり、気持ちに余裕ができた。
 - 学校の先生は、気を遣ってどうしたら来てもらえるかを考えてくれた。自分は運動が好きで足が速かったこともあり、体育祭のリレー選手として出てくれないかという打診をしてくれた。それ自体は嫌な気持ちはしなかったが、不登校の原因が人間関係に対する疲弊であったため、学校に行こうという気持ちにまではならなかった。
- ②中学校 2、3 年
 - 地元の適応指導教室へ週 2、3 回通い、勉強したり遊んだりしていた。適応指導教室内の人間関係に問題はなく、負担も感じなかった。同じ境遇の同年代の人たちがいて、通いやすかった。
 - 中学校の時の学校における支援では、私が陸上部に入っていたため、リレーの選手として出て欲しいというような打診があり、ありがたいと感じた。

(5) 不登校の時にあればよかったと思う支援内容

- ①小学校 5、6 年
 - 家族以外の人と交流する機会 was なかったため、同級生の子たちともっと遊びたかった。放課後は遊んでいたが、日中に同じくらいの年代の人と関わっていたらよかった。
 - 同年代の人と関わる方法について、自分では情報を持っていなかった。そうした機関があつて情報を知っていれば、そこに行っていたと思う。
- ②中学校 2、3 年

- 現在ではソーシャルワーカーが不登校の生徒の家庭を訪問し、1, 2 時間話をするという支援があるが、当時もそうした制度があれば使いたかった。当時の自分は不安でいっぱい、大学とはどういう場所かというような親とも話せない質問をしたかった。適応指導教室には通っていたが、一対一ではなく、進路について質問する機会は少なかった。また、家にいてもつまらないことがあり、気晴らしに話せる場があればよかったと思う。

2. 現在までの進路

(1) 調査時現在の進学・就業状況

- 大学卒業後は、名古屋市の相談窓口にて、子供若者支援の仕事をしている。当時の経験があったので、同じように悩んでいる方の力になればということで就職した。

(2) これまでの進学・就業状況の履歴

- 中学校卒業後、全日制高校へ進学した。中学校の出席日数・内申点が足りなくても受けられる「不登校枠」のある高校が県内に数校あり、そのうちの一つに入学した。遠方であったが、不登校枠での入学か否かは他の生徒から知られるようにはなっておらず、中学校の環境からリセットされることで安心感もあった。
- 高校卒業後、大学進学し4年で卒業して社会人になった。大学に行きたくないと感じたことはなかった。

(3) これまでの進学・就業において、課題と感じたこと

- 登校日数が足りないことなどにより、進路選択の幅は狭くなったと思う。登校日数が多くなくても、もう少し進路の選択肢があればよかった。
- 進路選択について、あまり学校に行っていない場合でも、今はだいぶ進路選択の環境が整ってきているようだが、自分のころは、出席日数が足りないとそもそも受験できない高校があった。今は、越境して中学校を転籍して通うことで、出席にできることもあるようである。
- 高校の選択が大学の選択にもつながってくるので、中学校のときの不登校が大学の選択にもつながるという間接的な影響があったと思う。

(4) これまでの進学・就業をふりかえり、あつてよかったと思う支援内容

- 中学校卒業は、進学・就業に際して特に支援を受けなかった。

(5) これまでの進学・就業をふりかえり、あればよかったと思う支援内容

- 出席日数が足らず、高校進学を選択肢が少なかった。そのため、現在導入されているような適応指導教室へ行くことで出席扱いになる制度や、他の中学校に越境して通える学校に行ければよかったと思う。

(6) 不登校を経験したことについての思い

- 進路選択で不利になるため、学校へ行けるなら行ったほうがよいと思う。一方で、現在は不登校でも進路の選択肢は増えてきていると思う。現在だと、適応指導教室へ行けない家庭への訪問支援や、校内に居場所カフェがある自治体もある。スクールカウンセラーからの支援は、市内では全校で受けられる。不登校になったからと言って失望するような環境ではなくなっている。

I さん

1. 不登校の理由や受けていた支援等

(1) 不登校の主なきっかけ

- 背景事情：
 - 中学校 1 年生の夏休み明け一週間経過後から中学校 3 年生の最後まで不登校(中学 3 年時 2010 年頃)
- 小学校 6 年生のタイミングで引っ越しに伴い転校した。不登校のきっかけは、新しい学校に行ってから男子生徒からいやがらせを受けたこと。小学校 6 年時は登校できたが、中学 1 年生になり、いやがらせを行っていた学生と同じクラスになり、PTSD のような症状が発症した。一学期は登校できたが、夏休み中に症状が再発した。その後、中学 1 年生の夏休み明けから調子がおかしくなり（体が拒否する、布団から起き上がれない）、学校へ通わなくなった。

(2) 不登校の主な継続理由

- 担任の先生は不登校について理解がなく、女性の副担任の先生は、通学することが辛いという話をした際に認めてくれたが、学期中にクラスを変えるということではできなかった。
- 中学 1 年生の時の担任の先生から受けた対応が恐ろしいと感じ、その後学校の先生全体に対して信用が落ちてしまった。
- 兄も不登校経験者だったため、不登校のハードルが高くなかった。両親は兄が不登校だった際の状況を知っていたため、学校へ行かない選択を認めてくれた。
- 中学 2 年生の際に復帰しようと数日通ったが、周りが理解してくれていなかった。友達に話しかけたところ、他の生徒が、話をしないほうがよいと言うなど、通えるような環境になかった。

(3) 不登校である時に最も困っていた点

- 外に出ること自体が怖かった。周りの子供にも不登校であることを知られていたため、外に出ることに抵抗感があり、休日であっても外に出ることが憚られた。加えて、勉強が進まないため、内申点も低くなってしまった。

(4) 不登校の状態である時に受けていた主な支援と支援を受けての感想

- 適応相談センターに個別相談を実施している週があり、その週は好きなことをできたため頑張って通っていた。その週の活動としては、卓球をしたり、本を読むなどの活動をしていて、楽しかった。
- 通いはじめたきっかけは、兄が適応相談センターに通っていたということがあ

る。

- 中学2年時に適応相談センターに通っていたが、センターの中でもいじめが起きたため途中から行かなくなった。いじめの当事者ではなかったが、いたたまれなくなり積極的に通えなくなってしまった。適応相談センターへは、1時間登校していたら学校での出席扱いされるようなシステムだったため通っていたが、あまり人に関わらなかった。
- 感想としては、全体的に良かったと感じている。一方で、人が集まると衝突が起きることは避けられないと思い、残念だと感じた。
- それ以外の民間支援機関へは行かなかったが、祖父母が近くに住んでいたため、たまに泊りに行っていた。そこは安心できる場所であったため、回復により影響を与えたと思う。祖父母は、それまでの経験等から不登校に関して理解があり、高校へも進学しなくてよいと言ってくれていた。

(5) 不登校の時にあればよかったと思う支援内容

- 子供の頃は、登校しないと生活リズムが作れないものである。そのため、生活リズムについて大人と一緒に考えたかった。また、進路相談も受けたかった。センター内で友達が進学を考え出した際に、自分自身も考えはじめたが、進路について情報がなく、支援は実際にはあったかもしれないがアクセスできず不足していたと感じる。
- 現在は、支援やその情報も増え、不登校であることのハードルは下がったと思う。当時のセンターでは、中卒で働く人も結構いたが、現在はセンターに通う生徒はほとんどが進学するようになった。

2. 現在までの進路

(1) 調査時現在の進学・就業状況

- 現在は、未進学の子供の子育てをしながら生活を送っている。

(2) これまでの進学・就業状況の履歴

- 中学卒業後、夜間定時制高校に進学して4年間通い卒業した。推薦で大学に進学し心理学科で勉強したが、一年後に福祉学科へ編入した。
- 福祉学科への転入後は、在学中に社会福祉士の資格を取得し、卒業後、自宅に近い福祉施設を探して作業所で働いた。その後、ハローワークや福祉専門の仕事の斡旋をするところを経由して相談支援センターの事務員として働いた。ここでは、勤務態度がよいことが評価され、嘱託社員になった。

(3) これまでの進学・就業において、課題と感じたこと

- 高校については、学力が身に付いていなかったため、一から学べるところに行こうと思い、夜間定時制高校に進学した。
- また、人に相談する経験が不足していたこともあり、大学の進路選択の際に、心理学科で習う内容について十分に情報収集できておらず、入学してから期待していた内容とのギャップを感じた。心理学科では苦手な数学がかなり要求されたため、社会福祉士になることを志して福祉学科へ編入した。
- 仕事に関しては、最初の職場では、社長がそこで働く障害者をいじめていたため、退職した。辞める時に、忍耐力が不足していると言われた。当時は忍耐力がない原因を不登校だったからだと考えてしまうこともあったが、今は昔ほど不登校が原因だとは思わない。
- また、仕事に関して、自分がどれ程無理なく頑張れるかについて、知る機会がなく、新しいことを経験した際に、無理をし過ぎると感じる。最後に働いた職場の労働環境では、頑張ることを強要されていたため、無理をし過ぎてしまい体調不良になってしまった。
- 出産後、若者支援を行う団体の相談員になろうと考えていた。子育てもあって比較的柔軟に就業可能なオンラインでの仕事形態を希望していたが、オンサイトでの勤務しかできないということでその話は実現しなかった。

(4) これまでの進学・就業をふりかえり、あってよかったと思う支援内容

- 大学で編入学を検討した際に、大学教授から当時志していた職種に近い社会福祉士について教えてもらったことが良かった。その教授も資格を持っていたため具体的な内容を教えてもらえた。

(5) これまでの進学・就業をふりかえり、あればよかったと思う支援内容

- 現在行われているような若者向けの居場所支援があるとよかった。加えて、踏み込んだ個別相談についても提供して欲しいと考える。一方で、不登校支援団体に相談を受けに行っている人（不登校の人）が定着し、時間が経つと偉そうな感じになってしまい、新しく相談にしに来る人の妨げになってしまうという問題があると思うため、何かしらの対策は必要だと思う。
- また、当時はインターネットで十分に調べるといった環境があまりなかったため、不登校になった際の進学・就労に関しての選択肢について教えてほしかった。

(6) 不登校を経験したことについての思い

- 悪かった点は、コミュニケーション能力が高くないと思っていることである。現在では、コロナもあり不登校の方はよりコミュニケーション能力が落ちていることが危惧される。

- 良かった点は、視野が広がったことであると考えている。学校に行く以外の選択があることを知ることでもできた。不登校になって自殺する子供もいるが、それは親子ともに学校へ行く選択肢しかなかったことが原因だと思う。また、不登校になった経験によって、不登校の子供から相談を受けることがあり、適切な支援機関の提案ができるため、不登校の経験が役に立っていると思う。加えて、不登校になったという共通の経験をもつ人と、よい友達になることができた。
- 大人になってから考えると、学校に行かなかったときにどう生きたかが重要と思った。学校に行かなかったことでの不利益は、努力をする必要はあるが後で取り戻せると思う。不登校は中学校のすべてとしても3年間だけなので、不登校になったからといって、その後の人生について諦める必要はないと思う。反対に、不登校を言い訳にすると進学や社会に出にくくなると思う。
- 一方で、不登校になると、後で努力しなければならない量が増えるため、学校に通えるならば通ったほうがよいと思う。

Jさん

1. 不登校の理由や受けていた支援等

(1) 不登校の主なきっかけ

- 背景事情：
 - 小学校1年生の入学直後から中学3年生まで(約19～10年前)の不登校期間があった。
- 保育園の年中あたりから通園を渋ることがあり、原因は6歳上の兄から暴力をふるわれることがあったことが考えられる。年齢が離れていたため、当時は抵抗ができず我慢することが多かった。兄は発達障害の疑いがあり、衝動的な行動が多く、兄も不登校であった。
- また当時は外で嫌なことがあったときに状況がうまく説明できなかったため、ストレスが溜まり行きたくなくなっていたと思う。
- 小学校の入学式には出席したが、状況は変わらず、すぐに不登校となった。

(2) 不登校の主な継続理由

- 小学校入学直後に行かなくなったことで人間関係が形成できず、一方で同級生は人間関係ができていく状況になっていた。既に人間関係ができていくところに入ることができず、学校が怖い場所だと思えるようになった。学校内でいじめがあったわけではない。
- また兄との関係や家庭内の状況も変わらなかったため、不登校が継続したと考える。当時、親からは学校へ行きたくないのであれば、行かなくてもよいと言われていた。既に兄が不登校であったことも、そうした考えの背景にあったと思われる。
- 兄との関係が落ち着いてきた時期は、互いにある程度成長した高校生に入ってからである。

(3) 不登校である時に最も困っていた点

- 不登校当時ではないが、高校に通いはじめた時にそれまで学校に行くことがなかったため、授業の受け方やノートの取り方がわからなかった。また授業中、座り続けることが苦痛だった。
- 人間関係の構築については、小・中学校時代通っていた適応指導教室内で友人もできていたので苦手意識はなかった。勉強面についても、家庭教師がついていたので、置いて行かれる意識はなかった。
- 中学生まで学校に行けていないことによる自己肯定感の低さは、高校入学後も継続して感じていた。進学した高校にいる生徒は約8割が不登校経験者と言われていたが、不登校の期間が長かったこともあり、自己肯定感は低いままだった。

た。

(4) 不登校の状態である時に受けていた主な支援と支援を受けての感想

- 小学2年生の時、担任の先生の紹介で適応指導教室の存在を知り、小学2年生から中学卒業まで通っていた。頻度としては通いはじめた当初は週に2,3日であり、小学校5年生以降は週に4回以上通っていた。そこでは、卓球やビリヤード等のスポーツやトランプ等のカードゲーム、自習の時間には教科書を用いて自己学習をしていた。自習の時間は1日に午前と午後の2回、1回あたり30分~1時間あり、わからないところは職員や大学生のボランティアに教えてもらうこともあった。
- 適応指導教室には、週に一度は学校に行くという方針があり、この方針の存在は、学校に行けない自分はダメな存在であると言われているように感じていた。職員からも学校へ行くよう促されることがあり、同じように感じることもあった。
- 週に一度学校へ行ったときは、最初のうちは別室登校をしていたが、少しずつ同級生との交流が増え、給食を一緒に食べるなどをしていった。小学6年生の頃には一緒に授業を受けていたりしていたと思う。
- 別の支援として、小学4年生,5年生の頃、また中学2年生,3年生の頃は週に1回、家庭教師の先生に勉強やものの考え方を教えてもらっていた。

(5) 不登校の時にあればよかったと思う支援内容

—

2. 現在までの進路

(1) 調査時現在の進学・就業状況

- 現在は再入学した大学で心理学を専攻し、大学院に進学予定である。

(2) これまでの進学・就業状況の履歴

- 中学卒業後は単位制の高校に進学した。朝にはホームルームがあり、その後自分の選択した授業を受けに行くような形式だった。高校生活では不登校にならずに通学することができた。
- 高校卒業後は4年生大学の語学系学科に進学し、卒業した。
- 在学中、就職活動をするタイミングで自己分析をするうちに、父親との関係をなんとかしないと前に進めないという気持ちがあった。そして、就職活動をしていても自分が働いている姿やイメージを持てず、就職よりも父親との関係を

乗り越えることの方が大きな問題と感じ、就職はしなかった。その間、紹介してもらったカウンセラーのもとで、カウンセリングを3年ほど受けていた。

- 3年の間にアルバイトをしたこともあったが、正社員の人からパワーハラスメントを受けてやめてしまった。

(3) これまでの進学・就業において、課題と感じたこと

- 自己肯定感の低さが課題であった感じている。
- 幼少期の兄との関係が今も影響しているように感じており、上の立場の人間から強く言われると頭が真っ白になり、何も言えなくなってしまう点も課題だと感じる。

(4) これまでの進学・就業をふりかえり、あってよかったと思う支援内容

- 大学のキャリアサポートは使用していない。
- 大学卒業後に受けるようになったカウンセリングは、今も継続して受けている。カウンセリングを受けたことで、自分のことを振り返ることができたと思う。

(5) これまでの進学・就業をふりかえり、あればよかったと思う支援内容

- 不登校になるきっかけがいじめや両親からの暴力ではなく、家庭内環境が要因だった。このことを考えると、不登校の子供に対してだけではなく、家族全体へのサポートがあればよかったと思う。

(6) 不登校を経験したことについての思い

- 不登校の経験から心理系の進路へ進んだり、不登校の経験があるから、不登校の子供の気持ちやつらさを理解できるから支援をしたいという学生が多いと思うが、自分としては、それは傲慢な考え方だと思っている。他者の気持ちは容易にはわからないものだし、一人ひとり事情は違うわけで、私はあなたの気持ちがわかるという思いを持ちながら支援するのは驕りに近いのではないかと考えている。

K さん、L さん、M さん（グループインタビュー形式で実施した）

1. 不登校の理由や受けていた支援等

(1) 不登校の主なきっかけ

● K さん

- 高校2年の進級時に不登校になった。勉強を重視する学校であり、勉強についていけなくなった。また、将来の不安があり、孤立しているように感じたこともある。大学やどこの分野に進みたいということも決まっていなかったため、嫌気がさしていた。
- 高校の先生は、勉強できないと人生が終わると言っていた。その後、自分以外でもストレスを感じていた生徒がいて、その生徒が授業中に騒ぎを起こし、そうしたことも契機に高校の教育方針が変わったと聞いた。

● L さん

- 幼稚園の年中時に一年登園しなかったが、年長で戻った。また、小学校3年の時に不安定で行ったり行かなかったりし、その後嫌々通った。中学校1年の夏前から3年の卒業まで不登校になった。嫌々行っただが、親の強制ではなく、自分で行かなければならないと思っていた。
- 小3のときの不登校のきっかけは特にはないが、もともと集団の中に入るのが嫌だったことだと思う。
- 中1のときの不登校のきっかけは、複数の小学校からの生徒が合わさって大人数になったときに、大勢の人の中で過ごすことができなかったことである。

● M さん

- 小学校5年で行ったり行かなかったりした。その後私立の小学校に移り卒業した。中学校進学後は、中2の11月頃から学校に行けなくなった。その後、公立の中学校に移り、市が運営しているフリースクール（教育支援センター）に半年通ったが合わなかったため、他のフリースクールに移った。二つ目のフリースクールは自分で調べていった。
- 不登校期間を延ばさないように転校をした。中1、2までの勉強が分かればよいと両親が言ってくれた。
- きっかけは、寂しかったことが積み重なったためだと思う。当時、祖父、祖母は現役で働いていて、また母子家庭だったため、家に一人であることが多く、学校で嫌なことがあったときなどに、家でだれにも話ができなかったことが積み重なっていた。
- 不登校の時期は、学校に行かずに、フリースクールに通っていた。
- 転校後は、学力向上に取り組む公立校に入学した。それまで私立校に通っていて校則等が緩かったが、掃除よりも、勉強や、給食を残さないなど、

学力向上に取り組んでいたことからしっかりしなさいということを言われて、ギャップを感じて中学校で2回目の転校をした。

- 学校にはあまり行かなかったが、成績は悪くなかった。そこでもまた不登校になり、きっかけは母と二人暮らしを始めたことで、母親が朝、先に働きに出た後は家にだれもいなくなり、学校には行こうとしなかった。家事も自分がやらなければならなかった。
- その後、再度転校した。担任の先生は理解があり、フリースクールに行くなら学校に来なくてよいといってくれた。行きたいときに来ればよいと言ってくれたため、行きたくなかったから行かなかった。

(2) 不登校の主な継続理由

- Kさん
 - 高卒認定試験を受験することに決めたため、高校2年で退学した。退学前は、高卒認定試験の準備のため、単位を取る目的で学校へ行った。その際は、学校の先生がサポートしてくれた。
- Lさん
 - 大人数になったときに人の中で過ごすことが苦手であった。
- Mさん
 - 複数回の転校によって、新しい人と人間関係を作ることに疲れたため登校する意欲を失くした。中学校でもフリースクールへ通うことに理解があったため、不登校が継続した。また、行きたい高校があり、やりたいこともあったため、不登校であっても問題ないと思っていた。

(3) 不登校である時に最も困っていた点

- Kさん
 - 特に父親が、不登校になったことを心配していた。社会人として生きていけないぞと言われた。また、自分自身も罪悪感があった。
- Lさん
 - 下にきょうだいが二人いて、悪い影響を与えかねないと思っていた。父親がきびしかったため、なぜ通学できないのかで揉めた。
- Mさん
 - 母親が不登校を許してくれたため特に困ったことはなかった。

(4) 不登校の状態である時に受けていた主な支援と支援を受けての感想

- Kさん

- 高校在学時に、高卒認定試験のために、高校の先生に単位取得を手伝ってもらった。
- 母親がフリースクールを探してくれていて、自分は当時やることがなかったので行くようになった。高校を辞めてすぐに通いだした。
- 週に2、3回のペースで通い、そこでは考える機会を提供してくれたと思う。自分一人でいると変なことを考えすぎてしまうが、他の人がいることで自分自身を見つめ直すことに集中ができた。
- フリースクールでは、高卒認定を受けるための勉強を教えてもらえてとても助かった。
- Lさん
 - 一週間に一回程度、保健室登校はしていた。不登校をきっかけに父親と揉めたため、心療内科に通った。その結果、家族関係を改善することができた。
 - 通信制の高校卒業後にフリースクールへ行った。通信高校在籍時はひきこもりだったため、社会に出るための練習として通った。
- Mさん
 - 母親の勤務が終わって帰宅した後に一緒に買い物に出かけたりした。不登校時、日中は一人でいたり、母親の友達の家にいさせてもらったりした。
 - 中学3年時や高校在籍時に、フリースクールへ日々の悩みを相談しに行ったりした。

(5) 不登校の時にあればよかったと思う支援内容

- Kさん
 - 特にない。
- Lさん
 - 勉強した方がよかったと思うため、在宅でできる家庭教師などの支援があればよかった。
- Mさん
 - 母子家庭の支援があればよかったと思う。母子家庭は所得が少ないため、それを補うために母親はより働かなければならなかった。

2. 現在までの進路

(7) 調査時現在の進学・就業状況

- Kさん
 - デジタル系の作家として働いている。
- Lさん

- 海運系の会社の正社員として働いている。
- Mさん
 - 大学に通い福祉系の勉強をしている。

(8) これまでの進学・就業状況の履歴

- Kさん
 - 高卒認定後は、専門学校に進学して卒業した。その後東京に行き、工場へ就職したが、ブラック企業だったため退職した。その後、フリーターをして、実家に帰った。
 - 高卒認定を取得したのは高3にあたる頃であり、高校を卒業した同級生と同じタイミングで専門学校へ進学した。
- Lさん
 - 高校卒業後、1年程フリースクールへ通って、その後フリースクール経由で紹介されたアルバイトを1年経験した。その後、他のアルバイトを2年行い、正社員として実家の近くの会社で2年勤務した。
 - 2年間アルバイトをした先ではやりがいもあったのだが、扱う原材料類のおかげでアレルギーによる激しい蕁麻疹が出てしまい、現在の会社へ転職した。
- Mさん
 - 地元の通信高校へ1年通った後、全国区の通信学校へ転校し4年間通った。そのため、高校には計5年間通った。最初の通信学校は週2日通い、並行して週5日働いていた。
 - 最初の学校は、変な同級生が多かった。その後、通学の頻度が低い全国区の通信高校に入学した。一人暮らしをしていて、各地を転々としながら授業を受けていた。
 - 高校卒業後、結婚しパートとして1年働いた。
 - その後、キャリアアップのため大学へ進学した。コロナや社会情勢等に左右されにくい資格を活かした仕事に就きたいと考え、社会福祉士を取得しようと思っている。週4日くらい通学している。

(9) これまでの進学・就業において、課題と感じたこと

- Kさん
 - 就業する際に履歴書を書くことが困る。嘘は書けないが、複雑なため書きにくいと感じる。
- Lさん

- 人とコミュニケーションがとれないという課題があった。また、履歴書の記入の仕方に困った。一方で、アルバイトなどをしているうちに人とコミュニケーションが取れるようになった。好きな職種だったのでアルバイトも長期間できたと思う。
- Mさん
 - 特にない。

(10) これまでの進学・就業をふりかえり、あってよかったと思う支援内容

- Kさん
 - フリーターとなったときに、フリースペースのスタッフに職を相談した。その後、フリースペースで求人の機会を知ることができた。
 - 両親が助けてくれた。専門学校に進学した後に、特に母親が助けてくれた。
 - フリースクールの活動では、自然に触れる機会があり楽しかった。
- Lさん
 - 就業に関しては、フリースクールへの相談や、ハローワークを利用した。
 - フリースクールでは、自然に触れる機会があり楽しかった。
- Mさん
 - フリースクールに通いイベントに参加していたが、トラブルなどがあった際に、対応する力を身に付けることができた。

(11) これまでの進学・就業をふりかえり、あればよかったと思う支援内容

- Kさん
 - 特にない。
- Lさん
 - アルバイトや職業体験で仕事に関しての体験をする機会があればよかったと思う。自分は何ができるのだろうという悩みがあったため、機会が欲しかった。
- Mさん
 - 特にない。

(12) 不登校を経験したことについての思い

- Kさん
 - より広い視野で見られたら別の将来もあったのかと思うが、今は不登校の後悔を考えても前に進まないため、振り返らないようにしようと思っている。

- 今の職業が好きであるため、今の人生が合っていると感じる。
- Lさん
 - 不登校の時期に戻れないため、前を向いて生活をしている。不登校の子供が周りにいたらフリースクールという選択肢があるということを知らせたいと思う。
- Mさん
 - 不登校であってもその場で考えて最善の選択肢を取ってきたと思っている。今は楽しいため、過去に不登校であったことは気にしていない。

支援団体へのインタビュー結果

団体 A

1. 不登校の理由や有意義と考える支援内容等

(1) 支援対象者の不登校の主なきっかけ、及び継続理由として考えられる事項

- 人によってきっかけは様々である。学校のペースについていけない、クラスでのトラブル、友人関係、学習のつまずき、教員との関係、体調不良、事故・病休、長期休暇の影響、親子関係、発達面に関する事など様々である。
- 一つの理由ではなく、複数の理由が重なって不登校になることも多い。また、どうして学校へ行けないのか、自分でも分からない場合がある。そのため、理由によらず、その子供はどのように心と体を休める必要があるのかを考えている。不登校の理由を探したり聞き出したりするよりも、今の状態を理解することに努め、必要な支援を届けることが重要と感じる。
- 「なぜ学校へ行かないのか？」と聞いてもほとんどの子供が答えられない。本人も原因は分からず、だれに相談してよいかも分からない。そのため、「なぜ学校へ行かないのか？」という言葉が本人を追い詰めることにつながると考える。
- きっかけとしてきびしく注意されたり、分かってもらえなかったりということがある。そういった子供への働きかけとして、例えば、毎日電話を掛けることは追い詰めると思うが、学校が何も支援しない場合は見放された子供は感じてしまう。
- 見極めのポイントとしては、本人や家族から話をよく聞き、うまいタイミングを見逃さないのが理想。家庭訪問についても、本人が出てこないから訪問しないのではなく、本人もどこかで話を聞いていることがあるため、家族の方と会話することが重要。

(2) 支援を通して見たときに不登校である時に最も困っているであろう点

- 正確に自分の状態を答えられないこと、周囲の期待に応えられないことが困っていることだと思う。あとは、周囲の理解が得られないこと。学校へ行きたくても、体が動かず、気持ちも落ち込み、自信がもてない状態で、自分ではうまくいかないということは分かるが、次にどうすればよいのか分からない。親に迷惑をかけていると感じ、そのことを辛く思っていると思う。

(3) 支援を通して見たときに、不登校の状態である時に団体として提供するとよいと考える支援内容

- 団体としては、相談できる場所があるということを伝えている。また、社会や仲間との関わりを学べる場所、安心して過ごせる場所を提供することを行っている。
- 活動については、子供が体を動かして取り組めることや、興味のあることに力いっぱい取り組めるように支援している。また、ありのままを受け入れて寄り添ってくれる大人がいることが重要と考えている。学習の支援も行っており、わかったということを味わってもらうことが、自信を取り戻すきっかけになると感じている。
- 子供目線では、不登校になると自分だけがとってしまうことが多いが、自立支援教室があることで、自分に似た境遇の人がいることがわかり、安心につながる場合もある。
- 学校でも、学校に行きにくくて困っている子を受け入れてもらえる支援があるとよいと思う。学校の体制として、教育現場にゆとりがあるとよい。先生方の時間と気持ちの余裕がない。不登校になる前に、学校の支援が届くとよいと考える。
- 生徒は、学校経由で支援団体を知ることが多い。

2. 現在までの進路

(1) 支援を通して見たときに、支援対象者の進学・就業状況

- 通信制高校が非常に増えていて、進路の選択肢が増えていると感じる。通学時間や日数などを自分で選べること、不登校を経験した子への理解があり、手厚い支援が受けられることもある。そのため、通信制高校に進学する子も多い。また、公立高校に進学することもある。
- コロナ禍を経て、少人数のほうが居心地がよい、大人数は怖いという子供もいる。コロナ禍でオンライン授業をやっていて、急に学級に入った際に大人数に囲まれることになるため、やりにくい子供もいると思う。子供目線での学校への意識は感じられない。行かなくてもよいということを特別と思っているわけではない。一方で、支援人数に関しては増加傾向であり、現在も多い状態が継続している。

(2) 支援を通して見たときに、支援対象者が進学・就業において課題と感ずることが多いこと

- 就業については、基本的に追跡調査はしていないため、何とも言えない。一方で、自分が不登校を経験したため、今悩んでいる人に貢献したいという思いは職種によらず感じていることだと思う。
- 進学については、進路に関する情報不足がある。家族が全日制高校にこだわり、理解を得られず子供が辛い思いをすることもある。

(3) 支援を通して見たときに、進学・就業に際して団体として提供するとよいと考える支援内容

- 進路に関する情報提供として、学校での面談や、市で通信制高校の説明会をやっており、以前よりは情報の告知が進んでいると思う。
- 進学については、一般的には中学校2年生の終わるところから情報を調べはじめる。一方で、不登校の状態にあると、友人など横からの情報は入ってこない。自分でインターネットを使って調べたり、パンフレットを見たりしても、情報としては不足しており、生徒は不安に感じている。高校に関する進路情報を受けられる状態を作ることができるとよいと思う。

団体 B

1. 不登校の理由や有意義と考える支援内容等

(1) 支援対象者の不登校の主なきっかけ、及び継続理由として考えられる事項

- 不登校のきっかけは十人十色で様々である。本人への聞き取り調査の結果では、家庭環境、友人関係、学習面、学校や先生との関係、無気力、不安がきっかけとして挙げられる。その中でも友人関係、親子関係、学習面、無気力が多い傾向である。
- 継続理由は、きっかけとなった要因が改善されていないことが理由であることが多い。
- コロナ禍後に小学校低学年の通所の希望が増えたように思う。当センターとしてはコロナ禍前にはほとんど小学校低学年の通所の希望はなかった。小学校低学年のタイミングや幼稚園のタイミングでコロナによるケースもあるかもしれない。出席停止期間となり、それを契機に友人と会えなくなり、不登校になったのではないかと推測する。また世の中の傾向として、学校に無理して行く必要はないという風潮が出てきたこともそうした傾向を後押ししているように感じる。
- 市全体の取り組みとして、中学校の校内に、校内フリースクールのような居場所を設置するようになった。中学生に関する通所の希望は割合として減っているが、要因としてはそのこともあるのではないかと考える。

(2) 支援を通して見たときに不登校である時に最も困っているであろう点

- 勉強についていけない点や同年代の人と良好な関係を築くことができない、家庭内に落ち着くことができるような環境がないといった点で困っていると思う。
- 令和7年2月末現在で市内の同様の施設に登録されている人数は合計で800人余りである。全員が毎日通所しているわけではなく、あくまでも施設に登録されている人数である。この中には登録だけして学校に通っているような子供も含まれている。
- 不登校の子供への支援だけでなく、家庭への支援も実施している。適応指導教室と並行して、個別の保護者相談/子供相談を実施しており、2週間に一度、50分のカウンセリングをしている。カウンセリングで出た相談内容の集計はしていないため、傾向は分からない。相談を受けている中で福祉センターや児童相談所等の外部機関との連携が必要だと思われるケースがあった場合は、ケースによっては保護者の了承のもと連携をとることもある。通所の際に保護者が送り迎えをすることを要件の一つにしていることもあってか、ヤングケアラーのケースは確認できていない。

(3) 支援を通して見たときに、不登校の状態である時に団体として提供するとよいと考える支援内容

- 適応指導に関しては、安心できる居場所を確保してあげることが重要だと考える。相談員は子供を認めて自己肯定感が上がるような声かけを意識している。また、自分で決定し達成するような体験ができるように促している。
- 自身で活動を決定し好きなことができるコースの他、決まったスケジュールに合わせて活動するコースを用意している。ある程度、通所に慣れてきた子供については、決まったスケジュールで行動し、学ぶことができるようにしている。
- 相談があったときに、受理面接を丁寧に行い、子供が抱えている課題を把握し、心理士も参加して対応方針を検討するようにしている。見立ては、変更の必要性がないか、定期的に見直している。
- その他、支援において気を付けている点として、子供に対し、職員からは学校の話をしないようにしている。

2. 現在までの進路

(1) 支援を通して見たときに、支援対象者の進学・就業状況

- 定時制や通信制の高校に進学する子供が全体の7、8割を占めており、全日制の高校へ進学する子供は12、3%程である。
- 県には不登校等の長期欠席者のための入試制度があり、出席日数や通知表の評価を参考程度として高校受験を行う制度がある。生徒の中には、この制度を利用して全日制の高校に進学することがある。そのため、出席数が足りず内申が低いいため全日制に通うことができないわけではなく、基本的に進学先はそれぞれが希望した進学先に行っていると考えている。

(2) 支援を通して見たときに、支援対象者が進学・就業において課題と感ずることが多いこと

- 子供たちは進学後に毎日通うことができるかどうか不安に感じている。また、学習が原因で不登校になった子供については、進学後も学校のペースについていけるかどうか不安視しているように見える。
- 大学はクラスがなく、時間割の組み方等自身の裁量で決めることができるので、中学校、高校と比較すると通いやすいと考える子供が多いのではないかと感じる。
- 進路指導は中学校がやるべきという考えがあるため、当センターでは進路指導をしないこととしている。しかし、不登校状態の子供については、学校で十分な進路指導を受けることができていないこともあり、保護者からは当センターに進路指導をして欲しいという相談を受けることがある。この点については、ジレンマ

に感じている。当センターで過度な進路指導をしてしまうと、学校へ行く機会が損なわれてしまうため、進路指導等を目的に、学校へ少しの時間でも行って欲しいという思いもある。

(3) 支援を通して見たときに、進学・就業に際して団体として提供するとよいと考える支援内容

- 学校が進路指導を行えるよう、中学校 3 年生を対象に、10 月～12 月頃に学校へ子供たちに関する情報を共有する場を設定している。子供がどのように進路について考えているかなどの情報を、通っている中学校と共有することが目的である。このような情報をきっかけに、学校側から進路について働きかけるようなことがあるとよいと思う。
- 中学校卒業後に就職する場合は、1 月下旬に就職一斉選考があるためそこで選考が行われる。職場訪問は中学 3 年生の夏休み明け頃から実施される。
- センターの OBOG を呼んで、卒業後に社会でどのように活躍されているかといった体験談を共有してもらうようなイベントを毎年 2 月中旬頃に開催している。中学卒業後の追跡調査をしていないので、縁があって連絡が取れた方を中心に体験談を共有いただいている。このような機会は不登校の子供たちにとって将来が見通せる機会であり、有意義だと考える。

団体C

1. 不登校の理由や有意義と考える支援内容等

(1) 支援対象者の不登校の主なきっかけ、及び継続理由として考えられる事項

- 不登校に関しては例えば震災等があると、大きく影響を与える部分があると思う。
- 例えば、被災した子供の中には津波で父親が流されてしまった子供については、家族を盛り立てるため、勉強や部活を始め、様々なことに対して努力し、努力し過ぎてしまうケースもあった。大きな学校行事をこの子供はあるイベントの終わりを境に気力が途切れてしまい、不登校になってしまうこともあった。その他のケースでは、進学先も決まっていたが、津波で家が流されてしまい仮設住宅で過ごすことになった子供がいた。その子はそのような状況下でストレスを感じて進学がきびしくなってしまった。
- 不登校のきっかけは特定の一つのケースではなく、人によって様々である。学校内の人間関係や勉強についていけないこと、すごく頑張っている日、力尽きてしまうこともある。小学校低学年の子供からの相談もあり、小学校に入り、クラスの賑やかな雰囲気や先生の怒る声が嫌になったことがきっかけで不登校になってしまうこともある。いじめによる不登校よりも学校の雰囲気がきっかけで不登校になるケースも多く感じる。
- 小学校の低学年の相談については昨年くらいから増えてきている。それまでは高学年中高生の相談が主だった。相談については保護者から受けることが多い。また学校の先生からの紹介もしばしばある。

(2) 支援を通して見たときに不登校である時に最も困っているであろう点

- 初めてフリースクールに来た子供はほとんど何も言えず黙っている子供も多い。自己否定感でいっぱいのため、親や教師などまわりの大人に対して自分の本当の気持ちが言えなくなったり、苦しんでいる子供が多い。
- 学校に入学した当初は皆通学に対する意欲はあったと思う。そのような状況下で学校に行くことができないということが苦しそうに見える。ストレスから頭痛や腹痛を訴えるような子供も存在する。

(3) 支援を通して見たときに、不登校の状態である時に団体として提供するとよいと考える支援内容

- 子供たちには、いつも「あなたは悪くない」と伝え、学校に行けない自分を責める必要はないということを伝えている。罪悪感にとらわれずに、自分の気持ちをありのままに大事にして欲しいと伝えている。

- 一見、テレビゲームばかりして楽しんで遊んでいるように見えても心の中では学校に行けない自分を責めていてその苦しさを忘れたいためにゲームに逃げている可能性が高い。学校は休んでいても、心は休めていない。心からゆっくり休んでいいんだよと子供の気持ちを受け止めてあげることによって安心できる。周囲がそこを理解できると子供はしっかり睡眠をとって心身ともに休むことができ、回復も早い。
- しっかり休んで元気になってくると子供は自ら動きだしたくなってくる。子供が興味のあること、やりたいことを積極的にすることでさらに元気になる。それを受け止めて、実行できるよう環境を用意してあげることが大切である。
- フリースペース内では週に一度、子供たちが興味のあることを共有する場を設定している。また、お昼ごはんを一緒に作るタイミングで子供たちが食べたいものを用意し皆で食べたりしている。
- 興味があることを実現し、その喜びを感じることで、さらに元気になることができる。また、このような形で様々な経験を積むことができると自信がつき、最終的には社会へ歩みはじめる基礎の力をつけることができる。
- フリースクールには、現在は小学校低学年の子供から 20 代の若者まで通っている。登録人数自体は 20 名を超えており、毎日来る子供や、月に一度のイベント時だけ来るような子供・若者もいる。毎日少なくとも 7、8 人、多くて 14、15 人くらい子供たちがきている。
- 幅広い年代の子供たちがいることで、下の年代の子供が上の年代のふるまいを見て中学後の進路について知ることができ、様々なことを学ぶことができる。スタッフが直接教えるよりも説得力があることもあるので、縦割りのよさを感じている。

2. 現在までの進路

(1) 支援を通して見たときに、支援対象者の進学・就業状況

- 中学校卒業後、全日制の高校に通う子供もいれば、定時制や通信制の高校に通う子供もいる。一方で中学校の先生は通信制の高校についてあまり知らないことが多い。
- あるケースでは不登校の子供たちが元気になってきて、全日制の高校への進学を志望することがあり、一方で不安から全日制と通信制を併願することがあった。当県だけかもしれないが、全日制の高校に合格した場合、必ず全日制の高校に行かないといけないという慣習が中学校の進路指導で行われている。
- 全日制と通信制の高校を併願したその子供は双方の高校に合格した。どちらの高校に進学するか悩んでいるときに、中学校の先生から早く進学先を決めるよう催促の電話を受けて生徒が傷つくことがあった。可否発表の 2 時間後の出来事である。

- 就業については、不登校経験のある子供は、すぐに社会に出るという点に関しては自信がないところもあると思う。そのような状況下で週5日しっかり働くことは難しいと考える。週1日、週2日の勤務から始めるなど、段階的に社会に出られるような仕組みがあるとよいと思う。

(2) 支援を通して見たときに、支援対象者が進学・就業において課題と感じることが多いこと

- 先述のとおり、就業時に早速週5日勤務を開始することは課題を感じる。多様な働き方の選択肢があるとよい。
- よりよい進学/就業状況にするためには、子供たちの自己否定感を取り除いてあげることが重要だと考える。
- 不登校になって早くにフリースクールとつながることができた子供の進学/就業状況は、よい傾向にある。一方でなかなかつながることができず不登校の期間が長かった子供は自己否定感も強くなってしまい、自信が持てないまま成長し、失敗を恐れる傾向にある。
- 不登校の子供と親との良好な関係も重要だと考える。親からきびしい声をかけられてしまうと、子供は自分に自信が持てないまま大人になってしまうためである。
- 子供が不登校になってしまった際は、親が気持ちを切り替えて子供の状況を受け入れたり、学校外の居場所・親の会を紹介したりするようにしてあげることで、子供は回復が早くなる傾向にあると思う。
- そのような対応を実現するためにも、不登校の子供をもつ親同士でコミュニケーションをとり、情報交換することも重要だと考える。例えば「本当に難しい場合は登校を無理強いする必要はない」など、過去の他の親の体験から得られる情報もあり、それが将来への希望へつながることもある。

(3) 支援を通して見たときに、進学・就業に際して団体として提供するとよいと考える支援内容

- 進学については、色々な進学先があることを示すためにパンフレットを取り寄せたり、進路ガイダンスを年に一度実施したりしており、将来やりたい職業が思い浮かんだ時に、その職業に就くためにどのような進路を選択するとよいかを説明する機会となっている。これにより子供たちにとってこれからどのような勉強をすべきかなどが明確になる。
- 学校の先生の中には全日制の高校に行かなければいけないという考えを持つ人もいるため、子供たちには通信制の高校に行って成功している人の話などをしてあげることがよいと思う。

- 月に一度、不登校の子供をもつ親のための会を開催しているが、その中で孤独感を感じている親がいた。国や県が子供を支援してくれているような実感がなく、自分の子供のことはだれが見てくれているのだろうか和孤独感を感じて寂しく感じていると伺った。
- このあたりの支援については学校の先生方をお願いするのは業務量から大変だと思うので、子供の所属先を教育委員会とするなど、別の支援の方法があったらありがたい。

団体D

1. 不登校の理由や有意義と考える支援内容等

(1) 支援対象者の不登校の主なきっかけ、及び継続理由として考えられる事項

- 不登校の原因は多様であり、一つの理由ではなく、いくつかの理由が複合している。学校や家庭環境の要因が大きいと思われる。
- 近年の動向としては、小学校低学年の児童の支援や相談が増えている。中でも、困窮世帯、経済的な負担の大きい多子世帯やひとり親世帯の不登校が増えてきているように思う。これらの世帯では、母親を支える父親がいないことや、兄弟がいる中で自分だけ不登校ということの疎外感が、子供にとって家庭の中での居心地の悪さを招いている。
- きっかけとして特徴的なのは、成績がよい児童が偏差値の高い学校に行き、普通の成績になって成績が落ちていくと、自己否定してしまい不登校になる生徒がいる。その後、ひきこもりになるなど長引くことが多いと思う。そうではないような子供は、フリースクールにきて次の進路に向かいやすいと思う。
- 10 年程前から、いじめの傍観者が不登校になるケースも目立ってきた。次は自分がいじめの対象になると思うことや、いじめを止められない罪悪感から、不登校になってしまうようである。大人からは、いじめられていないのに何でと思ってしまうが、優しい子でそうなることがある。
- また、多動的でにぎやかな子がいる学級では、その子が不登校になるかどうかは、学級内で受け入れられるかが重要だと思う。学級が多様性を認められるかが重要だが、学校の中では未だに多様性は認められていない。18 歳未満の子供からの電話相談を受け付けているが、同性婚や不登校に関して両親が理解をしていないことで、子供が両親に相談ができないケースがある。学校を休むというと親の機嫌が悪くなるといった話もよくある。
- 学校へ行きたくないが、両親が許さないから登校する、苦登校という現象がある。苦登校をしている児童は、自殺につながりやすいと考えている。

(2) 支援を通して見たときに不登校である時に最も困っているであろう点

- 経済的に困窮している家庭が多い。不登校離職というものがある。親は家に一人でいさせるのが不安で、母親が仕事に行けず家庭の収入は減り、不登校児童の昼ご飯が出ないので出費が嵩む。
- また、経済的困窮により、フリースクールに通えない子がいる。多子世帯の全員を入れるわけにもいかないが、どの子供を入れるかということで葛藤がある。減免をしてばかりいるとフリースクールとしても成り立たない。そのため、食事関

連のイベントなどに招待している。継続的に来てくれればと思うが、通うための交通費の捻出も難しいという家庭もある。

- 子供や親が不登校のイメージに囚われていて困っていることも課題の一つだと思う。不登校になったらキャリアに傷がつくのでフリースクールに行けないと思う子供もいる。自分で不登校に関するレッテルで苦しんでいる。
- 不登校から脱却できている当事者は、社会に出てからは困っていない印象。一方で、脱却できていない子供は成人になってからフリースクールに来ることもある。

(3) 支援を通して見たときに、不登校の状態である時に団体として提供するとよいと考える支援内容

- 大人であるスタッフが一緒に楽しむようにしている。大人が楽しいと感じるものでないと、不登校当事者も楽しめないだろうという考えである。子供にとってのロールモデルを見つけることが重要だと思う。両親や学校の先生などの教える立場にいる人だけではなく、一緒に笑って過ごしている大人を見ると将来楽しいと思えると思う。
- 子供に教えるということではなく、子供の主体性を重要だと思っているため、意欲を伸ばすことを重要視している。最近、子供の傾向として、今日何するかを聞いてくる子供が多い。することを与えられすぎているから主体性がないように思う。そのため、今週何をしたいかや行きたいところがあるかなどを尋ねる。子供のしたいことを楽しい気分で実行させることを心がけている。
- また、地域の方とのつながりが多いため、ボランティア活動に参加することを行っている。特に水害に関してのボランティアは、フリースクールの文化となっている。ボランティアに参加することで、地域の方から感謝される。これは、不登校で自分たちは何もできないと思っている子供にとって重要な体験である。
- また、定期的に子供たちが自分でやりたいことを共有する会議を開いている。ボランティアに参加したことで、人の役に立てるということを発見したことで、人助けに対して主体的になる子供もいる。

2. 現在までの進路

(1) 支援を通して見たときに、支援対象者の進学・就業状況

- 今年は、中学3年生が5人いて、全員が高校進学した。通信制は1人であり、他の子供は私立の高校に行った。高校進学した際に、しんどくなって、フリースクールへ戻ってくることもあったが、その後、学校へ再登校するということがあった。セイフティネットとして機能していると思う。私立の学校側も受け入れていた。

- 高校へ進学した後の進路としては、大学進学や就職している。20 年間スクールを運営していて、卒業生のうち社会的に自立が難しいのは5、6人程度である。

(2) 支援を通して見たときに、支援対象者が進学・就業において課題と感
ることが多いこと

- 不登校経験があったが、その後何とかなっている子供たちは、順調に進んでいった子供たちよりもひきこもりになりにくいのではないかと思う。順調に進学したが、就職した先がブラックでひきこもる人もいると思う。一方で、ひきこもりのうち、不登校経験者は少ないように思う。
- 20歳で相談に来るケースもあるが、課題であると思う。通信制高校を出た後に社会とのつながりがなくなる子供がいるように思う。通信制高校へ行くと、親は安心する。子供にとっては、親が言うから通っている。高校に行っても人に接する機会がなく、高校を出てから社会に出ることが難しくなる。高校進学によって、コミュニケーション能力を身に付けられないという問題を先送りにしているように思う。
- コミュニケーション能力は重要であると思う。子供食堂は、色々な人がいて声をかけてもらえるため、コミュニケーションが取れるよい場所だと思う。

(3) 支援を通して見たときに、進学・就業に際して団体として提供するとよ
いと考ええる支援内容

- 自分のやりたいことが分かるような体験を提供できればよいと思う。農業体験を提供したおかげで、大学進学で農業関連を選択するという子供いた。
- もう一つは、セイフティネットとして、時々遊びに来てよいと伝えている。辛いときに頼ってもらえる。
- 高校進学については、学校と連携しているため、進学に関しての情報は子供にとって得やすいと思う。また、OB とのつながりがあるため、OB が模範になっている。また、高校のオープンスクールにスタッフも同行するという支援も行っている。

有識者名簿

(敬称略、五十音順、令和7年3月末時点)

氏名	所属等
足立 匡基	明治学院大学 心理学部 准教授
伊藤 美奈子	奈良女子大学 研究院生活環境科学系臨床心理学領域 教授
栗原 慎二	広島大学 人間社会科学研究科 教授
野田 正人	立命館大学 人間科学研究科 教授
斎藤 環	筑波大学 医学医療系社会精神保健学 教授